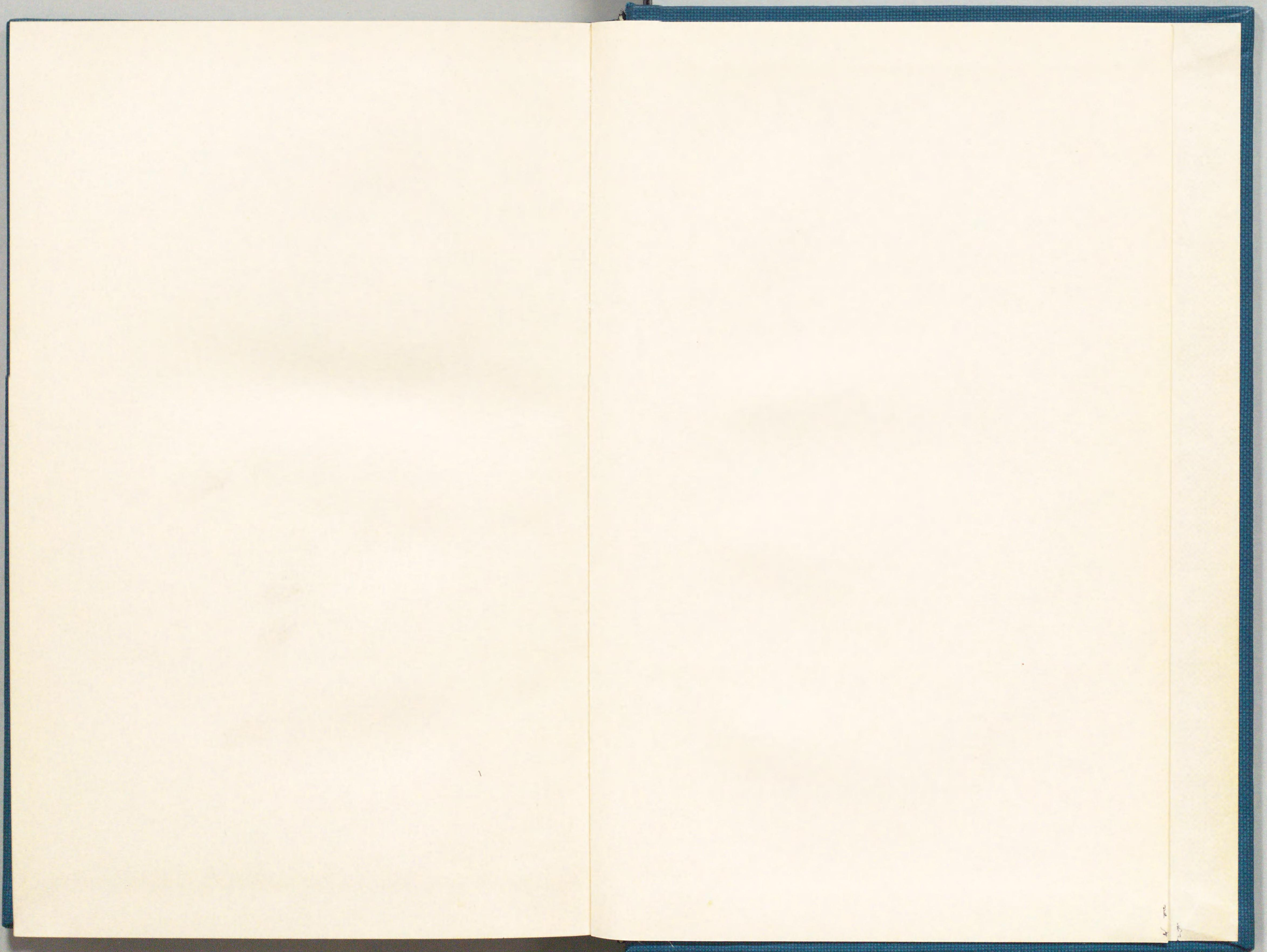




081
Si571
K
00112679

X
複写

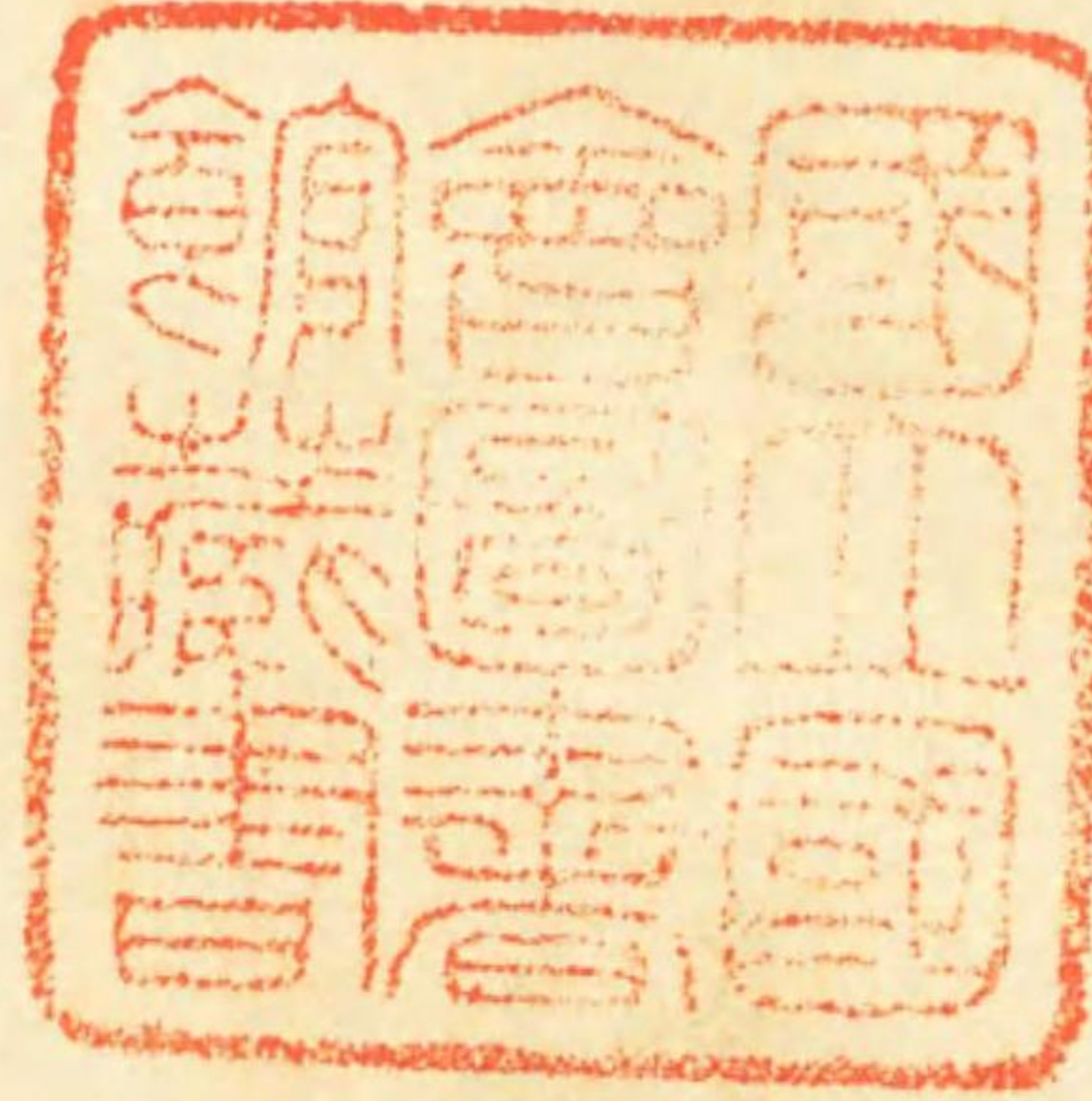




J4

史籍雜纂 第二

08/S1571KII



112679

史籍雜纂第二

緒言

一、本冊には當代記、駿府記、有斐錄、松のさかへの四種を收めたり。

一、當代記 本書の記者は、伊勢龜山城主松平忠明なりとの説あれども、詳ならず。始めに天文弘治永祿年間の事を略記し、元龜元年より慶長二十年正月に至る四十六年間の事は、年序を逐ひて較詳細に記せり。書中當時の政治上に於ける裏面の事情を記述したる處多きが故に、駿府記と相待ちて、江戸初代史の表裏兩方面を研究すべき唯一の根本史料なり。今史料編纂掛所藏の原本に據りて謄寫採收したり。

一、駿府記 本書の記者も亦詳ならず。世に後藤庄三郎とも林道春

緒言

とも傳ふれど、確證なし。徳川家康が將軍職を秀忠に譲り駿河國府中に隱居したる間の日記にして、慶長十六年八月に起り、元和元年十二月に止まる。當時の政治外交に關する重要な事件は勿論、其他宗教文學醫術等の事に至るまで、精細に之を記述せるを以て、江戸時代史研究に闕くべからざる根本史料なり。今史料編纂掛所藏の原本影寫本に據りて謄寫採收したり。

一、有斐錄 寛延の頃、池田侯の家人三村永忠の編纂に係る。藩主少將新太郎光政の嘉言善行、領内に關する法令等を蒐集したる者にして、備前藩史の研究には缺くべからざる書なり。今史料編纂掛所藏の寫本に據りて茲に收めたり。

一、松のさかへ 編者詳ならず。徳川家康を始め本多忠勝、黒田長政、井伊直孝、水戸光圀、白川樂翁、松平慶永等の嘉言善行法令訓誡を集めたるものにして、以て古名將古名君の事蹟の一斑を知るに

足るべし。今内閣藏本によりて謄寫採收したり。

明治四十四年十一月

校訂者識

史籍雜纂第二

目次

當代記……………一

駿府記……………二一五

有斐錄……………三一九

松のさかへ……………四四一

史籍雜纂第二

當代記卷一

三好修理大夫息男孫四郎、後筑前守と改名、廿三歳

にして病死、(傍注)天文年中より二十年天下主。

舍弟豊前守、後日休、阿波國主、

二男左京大夫、

同十川、修理大夫内、悉皆出頭、後天下所司代、元

來は和州五百住一僕者也、

同安宅、松永彈正忠久秀、

三好修理大夫元來細川家侍頭、住國は四國也、天文年

中より頻開、武運、成、大身、保、天下、事二十年餘、

(頭注)大永年中より永祿十一

戊辰迄保、天下、事四十餘年、常歌道被、好、連歌專數奇也、

此兄弟衆何も連歌好士、修大を始當世之器用也、畿内

丹波播磨但馬淡路四國、都合十三ヶ國之主也、

筑前守(傍注)修理大夫嫡男、萬端器用者也、然とも若氣の間行跡

荒々したり、松永彈正此比修理大夫家を、任、我意

振舞間、存、後日難、歟、永祿五壬戌年、以、鳩毒、令、害、
 之、修理大夫弟十川與、松永、間柄常に不、快、此十川
 唐瘡令、煩、爲、養生、攝州有馬、永祿九丙寅年被、湯
 治、溫泉神葦毛馬登山を令、嫌給、人皆此旨を十川に
 告けれ共、押て葦毛馬に乗て登山也、應而蒙、神罰、飯
 國後無、幾程、令、病死、其比修理大夫河内國飯盛に
 被、在城、松永讒言安宅事して云、左京大夫を家督に
 守間敷由、安宅所存由言上、修大可、爲、虚言、由曰、松
 永重曰く、方々に觸狀爲、歴然、さらは可、見之由修大
 曰處、致、謀書、差上、修大是を眞實の狀と思、此上は不
 及、是非、由曰條、安宅を召寄、松永以、計略、令、生
 害、かゝる得、折、河内國古主高山高政并紀州湯川根
 來衆を相語、飯盛に押寄る、日休聞、此事、阿波國帥、
 人數、打出處、於、陣中、根來衆忍寄、鐵炮にて討、之、
 暫時に滅亡、彼國士卒悉敗北也、さて飯盛城を緊く相
 攻、事躰甚急也、松永對、修理大夫、曰く、城中を相廻、
 士卒に被、付、力尤之由言上、修大曰、近年萬事汝に任
 置間、兎も角も可、走廻、とて歌書披見していと驚ぬ
 體也、一兩日相過、又松永曰く、我に暇を可、給、城を
 去て可、及、後詰行、修大尤と同心也、扱松永城中を

出、之より工夫才覺第一者たる間、方々の一揆を相語、令後詰及合戰、寄手則敗北、島山高政は希有にして堺へ被引入、紀州湯川は河内國譽田迄退しを、追詰討之、根來衆武將岩本坊をば、大和の信貴にて討捕之、其外六千餘討之令開運一畢、近江國六角佐佐木義治、去比より打出、飯盛寄衆と令一味、三井寺上勝軍地藏山構陣城被居、此時江州衆四萬有之、先勢日野蒲生一萬人數にて、攝津表に打出令居陣、八幡には義輝將軍御動座、是は三好御一味也、京中には松永人數少相殘置、江州衆洛中を奪取事最可安を、素武篇ぬるかりければ、徒に勝軍地藏山に陣所守居たり、かゝりける處に、飯盛寄手敗軍し、周章不斜して、江州へ引入間、天下無事して三好被任我意、其後松永所存に、先手筑前守并安宅、或は鳩毒或は以謀計令生害事、修理大夫於及後聞、難遁罪科とや思劍、修大をも以鳩毒令害と云々、又其後修理大夫家中三好日向守、同下野守、岩成主税介、四國人數相語打出る、其比松永奈良の多門在城、天下は右三好三人衆有調談、萬事令異見保天下、さて多門に相動對陣す、此時奈良大佛堂不慮燒失、敵味方入

亂火を滅んとしけれども不叶と云々、其以後一兩年中に、松永美濃國岐阜に相下、信長公に可屬條、早速可有動搖由申、終に信長成天下、其後三好日向守同下野は、堺に令隱居、老病にて相果、左京大夫は始は松永同心間、信長にも出仕し、爲一味しか、終に佐久間右衛門家老以計略被誅、松永も後は信長に謀反、被攻害一畢、岩成は淀の城にて、爲信長被攻害、後代爲物語注之、
永祿十一辰 信長公京入、家康公遠州入、武田信玄駿河入、
十二巳 六條崩、懸川落、
十三庚(傍注)元 江州小谷合戰、金崎崩、淺井敵之事、
信玄小田原動、
元龜二辛 叡山對治、
三壬 信玄遠江出張、濱松合戰、
天正元西 武田信玄死去、朝倉義景討死、義秋將軍京落、
長篠家康公被攻こと、作手屬家康こと、
二戊甲 武田四郎東美濃出張、高天神屬武田こと、尾州長島落去のこと、但志磨國か、
三亥 長篠後詰合戰のこと、小山表に武田四郎出張

のこと、

四丙 信長安土に御移のこと、天王寺に信長後詰のこ、信長居鷹爲叡覽禁中御庭まで參給こと、義元三川表に發向之時、奇特の夢想在之、夢中に花倉對義元云、此度の出張可被相止と也、義元曰、貴邊は爲我敵心也、不可用之と答、花倉又云、今川の家可廢ことを争か不愁乎と云、夢覺了、其後駿河の國藤枝を被通ける時、花倉町中に被立けると義元見て、刀に手を懸らる、前後の者一圓不見之、奇特云々、
應仁文明比、今川として足利尊氏家來、駿河遠江國主有之、號氏親當此時三河國相從と云々、此先祖雖有之、分明不知之間、不書載之、彼用山被薨て後、其弟花倉善徳寺兩所に出家にて被有ける、互に用山之遺跡を心に懸及干戈、然而善徳寺に居住之仁治部大夫終討花倉、續用山之跡、此義元駿遠三之三國の以人數尾州に打越、後は天下を可取との依有企、永祿三庚申年、三州岡崎を打過、向清須發向之處、織田上總介平信長後任右大將天下主、時尾州國主清須在城とて有勇將、聞此事、尾三之境に日向、桶はさまと云處にて及合

戰、討義元、年四十四、依之士卒敗趨畢、彼義元男上總介氏眞繼其塵、駿遠三之主とす、彼信長永祿七子八月朔、取濃州井口、爲尾濃之太守と、さて井口に居住、之を改、岐阜山、此國争に、大小合戰及數度云々、此比、源尊氏より十一代之後胤義輝將軍、號光此時天下之執權松永、是は三好修理大夫代官三好山城守、同下野守、同日向守、岩成主税介等相談して、永祿八丑年五月十九日、奉討義輝、爾來彼等爲天下執事、是は先年越後景虎令上洛、三好并松永於奉輕義輝者、御迎に相上、越後令供奉、重而以義兵可奉入天下之由言上す、松永素工夫第一之者たる間、存後日難、遮而及此儀、此松永は奈良之大佛を燒失する者也、其比松永多聞に在城之處、敵對陣して籠彼堂、每度鬪諍之比、下臈の者放火如斯云云、此大佛は治承四年十二月廿八日、平相國清盛被燒失しを、後白河法皇仰頼朝、被建立し佛堂也、依之其舍弟義昭子時奈真之、乘院也、憑江州佐々木入御之處、無情奉追出之間、越前に有御下降、朝倉亦不申御請、然間岐阜に有御下、賴信長可有御入洛との儀也、信長奉之、永祿十一戊辰九月有出馬、先近江國主攻破佐々木、則令上洛給、自是天正十年壬

午年まで、信長天下之主也、其間纔十五年也、彼源義昭將軍者、五六年中に牢籠給、其故は忘、信長勳功、武田信玄と有、内通、信長を可討之由、隱謀露顯して退天下、中國下國給、然處天正十年壬午六月二日、明智と云逆臣信長年四并一男信忠年廿を奉討、此信長一代國、則施人給事、羽柴筑前守秀吉、後改太政大臣關白、是は信長取敵前代未聞と云々、素依器長取立之人也、成孤小身一僕之人也、并堀久太郎自中國上り、於攝州及合戦、同月十三日討明智、自是秀吉天下主也、信長二男信雄于時勢州主、後尾州主、暫雖奉仰、天正十八庚寅年、下野國那須に牢籠也、其後秀吉公慶長三戊戌八月十八日被薨了、年六十二、天下を持こと十七年也、其間秀吉息三歳にして早世之間、甥之孫七郎秀次後右大臣、爲關白を、天正十九年辛卯京都の聚樂を相讓、我身は關大坂に居住也、其以後秀吉に又息出來之間、秀次を内々不長久一様にとの心中有けるに、秀次行跡常篇に絶たる際、有逆心之由披露し、文祿四未七月八日に、京都を令退散、於高野山令生害給、彼秀次息一二歳之孩兒、同近習之女房三十餘輩、渡洛中被一切棄、哀也し事とも也、秀次家中之侍、或は生害或は改易也、元來大闇秀吉公心操勝人、金銀に不限、諸寶物

施人給こと不可勝計、只人の嫌事とは、餘好普請給間、上下爲之迷惑す、雖然此普請に付、日本國中上下の人、伏見大坂に居住之間、京堺井之町人賣買に得利事、超過近代せりと云々、甲斐國之主武田大膳大夫晴信と云人有、入道之後號信玄、是は源新羅三郎義光伊豫守頼義三男之後胤也、此人若輩之時、父信虎不快而、晴信弟左馬頭に、信虎可讓遺跡之由、内々思立之間、晴信遮而信虎を被追出、信玄廿一歳、此時晴信信州西上州を取て、其後爲大勢之間、可取天下有内心、先永祿十一年戊辰十二月十三日に、駿州に發向、于時當國之主氏真不及一戰、遠州懸川に退去了、彼氏真是信玄甥也、此比間柄常不快、自氏真被企慮外之間、稱無據出馬、此時氏真舅關東之主氏康、同息氏政爲加勢、駿州雖被進陣を、終以信玄駿河を被靜謐、以此意趣、元龜元年庚午、信玄關東に相動、氏康氏政居城小田原惣門迄押詰放火し、臨退散之期、敵相慕之間、築井之近所みませ時にて、信玄人數返し合及一戰、小田原衆敗軍、數百人討捕、甲州に飯陣、然而氏康逝去之後、氏政與信玄令和睦、此氏政は信玄雖爲智、父氏康

の命に従、近年は鉾楯、其後元龜三壬申、信玄遠州に發向之砌及加勢、十二月廿二日、於濱松野德河家康合戦、信甲衆乘勝、又先年信玄の嫡男武田太郎幸信をも生害し給き、其故は幸信討父可取家督之由隱謀之處、信玄聞之、遮而幸信を行籠者、終以鴆毒被相果、然は父を追出し子を殺、甥の氏真國を奪取之條、爲大悪行之由思之歟、何者の支態にや、落書有、

子を殺し親に添てそ追出するか、る心を武田とや云又信玄後は及三十年、精進潔齋し、自叡山申下袈裟衣、號法性院阿闍梨、常に看經三昧也、其故にや、其比所々於陣中不思議瑞も有とかや、

三川國有松平家康公と云人、新田徳川三郎後胤也、後天下之主、改征夷大將軍右大臣、此祖父松平二郎清康に三河國漸隨順と云々、天文四乙未冬、尾州森山に相動、同十二月四日、於彼陣中不慮に爲臣下被横死、年卅清康一男相繼爲岡崎主、廿五而逝去、是を號道閑、去々年一男家康公于時四歳、號竹千代、信州に爲人質、被差越一腹舍弟有けれども、二歳にして何も早世、處、田原の主戸田彈正少弼、一男孫四郎竹千代主を押置、尾州熱田の神主圖書に百貫文に被

賣、其比清須に竹千代主御座す、竹主六歳之時、父道閑卒去し給、其後自駿河氏親西三川に有出張、安條の城を取詰被攻之、城主は彈正忠二男、信長弟也、是に竹千代主を替取て、駿河へ令同道、駿府に令居住給、漸成人之間、義元氏親遺跡一族關口刑部少輔以女嫁之給、此腹に男女の息有之、義元於尾三境討死之後、家康公岡崎に令移給、時妻女息女は三川岡崎に被移、一男是を竹千代主と云、後號三郎信康、は駿府に爲人質居住也、扱尾州信長と有入魂、駿府に敵對し給、其後三川西の郡鶴殿城を攻落、城主于共に竹千代主を被替、岡崎に引取給、其比西三川に本願寺門徒一揆蜂起して、片時も安事なし、家康公近習之輩、昨日も五人、今日も十人一揆令同意、如此之間、岡崎之體安否不定、此時蒔屋水野下野守是は御袋之弟、家康公之伯父也、岡崎如手衆被相持、家康公素勇將也、竟に被平一揆、又永祿七甲子、吉田の城を取詰、所々付城有之、翌年二月落去、城主大原肥前守三浦右衛門大夫父、江州甲賀の者、依懇望東に被送遣、自是東三川も大概以隨順す、昔年右田原之彈正少息女を道閑娶之給、家康公之御母臺被離別、此田原腹に道閑息女二人有之、又竹千

代御袋は西三川あくいへ被移、久松佐渡守と嫁し給、男子女子多有之、あくいは前腹の息の讓、佐州も後は岡崎へ引越居住し給き、又先年田原と吉田の城主牧野古伯是は牛久保城主牧野間柄甚不快、兩所共に駿州を頼、殊に古伯は駿州氏親と歌道之朋なり、古伯永正二年、駿河の下之時、初時雨の發句にて、連歌有興行し、加様の間柄成けれども、田原は本身、古伯は小身成間、大に付小を捨る故か、田原之爲荷擔、翌年氏親三河の令出張、吉田を取詰、緊く被攻之間、古伯終に腹を被切、城は田原に被出、彈正二男金七是に令在城、彼籠城中、去年駿河に會の日時雨たりしに、今又時雨したりければ、古伯一首の歌を詠、氏親に獻、

あいにあいの去年も昨日の初時雨定のなきは人の世の中

古伯素無過受罪、城知行をこそ田原に被出と云とも、感此歌命計被助たらんは、末代迄の物語たるへき物をと、時の人申けると也、

此古伯宗長とも別而被相談ける間、宗長此歌を後聞して、時雨は定有世成けりと被詠なは、猶以可然

をと被判けると也、

永正三丙寅、古伯被相果一砌、一男傳藏于時富田と云臣下、桶に入川向下地の伴、彼郷百姓を相頼、臆も百姓請取、尾州智多郡大埜の送、其後田原の城を孫四郎代物に賣、馬中引入閉口、傳三又成人之條、吉田の本意して、數ヶ年吉田城主とす、然而岡崎と鋒楯之間、清康令相働給、傳藏可有合戰とて、川を越打出、此時益岡に在城の牧野傳兵衛、爲傳藏親類也、此已前より有調略、清康の令一味之間、傳三人數敗北、傳三兄弟則討死、享祿二己丑五月廿八日の事也、自是吉田城には牧野傳兵衛在城、其後天文六丁、田原より令計略、傳兵衛家中戸田新一郎、同宗兵衛屬田原、傳兵衛退城也、自是吉田城は、天文十五丙午迄、田原戸田金七在城也、此年、又自駿州吉田城責落、是より永祿八乙丑年迄、駿河より持之、

永祿十一戊辰、武田信玄駿府の發向之刻、氏真退、遠州懸川の城に被籠、于時家康公も遠州に有出張、懸川城廻に陣取被攻之間、翌年の春落去し、今川氏真をば相州小田原の令送、自此遠州平均也、見付國府に有普請在城也、かゝる處に信長公令異見給

間、翌年春、濱松の令移在城也、因之遠三之國人令在濱松、武田信玄駿河の發軍之時分、人數自信州遠州の秋山伯耆守爲物主、雖打入、家康公於當國輝權威之間、秋山無其詮、駿州信玄旗本を行、然處元龜三壬申、信玄遠州の發向、此時信長公歴々の衆家康公に有加勢、彼信玄女與信長息、雖有縁邊之契約、年來家康別而信長と子弟同前之間、爲最負之沙汰如斯、信長眞實之心底者、家康被滅亡は、定而信玄討信長、可取天下、企可有之の由、兼て令推察給之之間、猶以如斯、

永祿十一戊辰年、義昭任征夷將軍、京都伊勢守一族之内早雲と云人、駿河國に相下、今川用山氏親之父氏輝を頼望關東、先伊豆國に打入、以計略取小田原、自是氏綱氏康氏直五代相續、關東輝權威、于時是を號北條家、右五代之内、纔及九十六年、小田原繁榮云々、然處天正十八年庚寅三月、關白秀吉有動座、同四月小田原に打寄、七月城中落去し、此躰氏直背父命、秀吉陣中に走入之間助身命、父氏政同弟陸奥守者、於城中生害也、此氏直之消息、專岩付之十郎依仕立如斯、此氏直并十郎

仕立、見者惡之、聞者彈指之、彼岩付十郎は氏直弟氏政之二男也、氏政弟阿房守、美濃守、左衛門助、右衛門介、氏直、岩付十郎以下令上洛、自關白秀吉國々之大名に被預置、氏直并十郎は翌年病死、氏政弟衆何も三ヶ年中に無殘病死畢、先祖宗雲爲子孫繁昌、被撞無間鐘けると言傳へし、可謂奇特一歟、此氏直は爲家康公聲、此女後嫁池田三左衛門、是池田庄入二男也、此氏政好酒事超人たり、常に長座して大酒也、酒の中に立座事は爲法度之間、大小便も不自由、毎度見苦敷事多し、氏政是を見て快氣云々、越後國主有長尾景虎云人、後號上杉照虎謙信、半俗之躰也、常病者他人對面不輒、然其于時爲猛將、信州村上を相拘、常武田信玄と對陣、永祿三庚午九月廿一日、於信州川中島合戰、双方さして無勝劣、退陣之時分故、謙信者越後の飯國と也、其後景虎河中島に不出、然とも彼表は爲荒野、此景虎於關東振威、小田原城門外迄、數度雖相動、終氏康父子不遂合戰、雖然景虎仕置不正之間、越後の飯陣之後、小田原の關東之諸士一味すること及度々、終氏康父子關東を平均し玉ふ、彼謙信始信長と入魂、天正三乙亥、於

三州長篠、武田四郎敗軍之後、往々は我身の上とや思
劔、背信長命、北國能登の發向し、彼國平均せは、天
下可上之由企之處に、天正六戊寅、俄に年四十九
而病死、其比氏康息雖養子、謙信甥爲景勝、被討、
越後國景勝平均し、後秀吉公に從ひ、近年在伏見、其
後慶長三戊戌春、奥州之會津の國替也、

永祿十一戊辰、去年より氏直躍を被好、一門衆同家老衆、一手々々
に令風流、躍の間に能有之衆もあり、此費不可勝
計、

永祿十一戊辰、源義昭一兩年越前在國、頼信長有入
洛一度之由、以使者曰、細川兵部大輔、則信長御請被
申、御使に私の使不破河、相添進上、七月廿五日、義昭
着御美濃國、間、岐阜近所西庄立政寺と云淨土寺に
御座す、廿七日義昭へ信長出仕、進上之物被盡美、
供奉之衆へも、取々に有引出物、八月八日、信長近江
國佐和山迄被上、佐々木父子吾と有一味、義昭上洛
を可有馳走之由被盡懇詞、佐々木曾て無諸應、
廿日信長自江州被飯美濃、九月七日、信長立美
濃被上、淺井備前守信長と同參陣、佐々木和田山に

構要害、究竟の兵共籠置、信長和田山之城へ不
寄、箕作の城へ押寄、二百計討捕、城中より令悵望
間助身命、城被請取、其夜觀音寺山佐々木承禎并和田
山之城打捨、敵退散之間、一日二日之中、江州之中十
八ヶ所城屬信長、信長被移觀音寺城、美濃爲御
迎不破河内守を進上之間、義昭廿一日有出御、廿三
日義昭着守山玉ふ、諸勢乗船、廿五日信長着三井
寺給、同九月廿八日、信長東福寺移給、京中之者彼所
へ馳參、廿九日青龍寺岩成主稅助有之間、森三左衛
門坂井右近相働、岩成令降參、攝州へ被遣、則攝州
へ發向、芥川城細川六郎、三好日向守、十月朔日城を
捨退散、小清水瀧山兩城同退散、義昭公小清水移給、
芥川へは信長被相移、池田の城主筑後守屬味方、近
江山城攝津和泉河内五ヶ國、悉尾濃之衆へ被下、大
津草津是兩所に被置代官、諸軍莫不美談、松永
彈正忠作物かみを奉、同十五日自攝州、義昭公御上
洛、信長同入洛、

十二月、武田信玄駿州の出張、當國之主氏真近親葛山
并朝比奈右兵衛大夫信玄の屬す、氏真不及一戰、遠
州懸川へ被退、懸川城主朝比奈備中守氏真爲臣下、

遠江國爲郡代、氏真を本城に引入籠城、翌春迄、上下
の人数に酒肴以下迄、無懈怠もてなしける、奇特と
云々、其後小田原の氏真被退ける時相伴、氏康氏政
曰けるは、爲臣下主人の氏真を相抱籠城、人臣の名
譽之由曰、懇志致されけると也、遠州へも自信玄、秋
山伯耆守に伊奈郡人数相添、遠州へ被出、然處山家
三方衆屬信玄、秋山に伴遠州の出張也、引間の人數三
方原へ出合戰、三川の山家三方衆及合戰、引間衆敗
北、數多討捕、さて引間衆令懇望、秋山令一味、氏真
懸川へ籠城し給、其勢三千餘、
家康此冬遠州へ出張し給、同月三浦右衛門大夫、是は
氏真別て寵仁也、懸川へ可籠處に、日來城主朝比奈
備中守と間柄不快之間、城へ不入、馬伏塚を賴行、彼
地之主小笠原美作守日來之違契盟を、右衛門大夫
首を切て家康公へ奉る、翌年之春、小笠原は令病死、
于時人口專惡之、又駿府氏真居城をば、岡部二郎右
衛門相籠之間、殘黨從之、
永祿十二巳年正月、家康向遠州懸河出馬、寄衆少々
手負失氣、廿日於懸河天王山少合戰、城衆隨分之
者數多討死、家康快氣し給、

三好山城守笑岩、同下野守釣閑、同日向守、同爲三、齋
藤右兵衛大夫龍興已下相談して、正月朔日、堺近所家
原の城責落、同五日京都へ押上、六條本國寺義昭公御
所取卷責之、其勢一萬餘、本國寺に籠勢僅二千也、此
中に野村越中守專戰功、自攝州高槻赤座七郎右衛
門、同弟助六郎、木村彌五郎、奥村平六左衛門、渡邊庄
左衛門、坂井與右衛門是皆美濃の字夜中相籠、義昭被
下御土器、彼等出門外一度々及防戰、此時自攝
州三好左京大夫三千、池田八郎勝政、伊丹兵庫頭、
荒木攝津守、和田伊賀守終夜相上致後卷、本國寺
籠衆得力及合戰、敵敗北之間、追々討之、首數二千
七百餘也、三好左京大夫義次者、昨日五日、三好日向
守、岩成主稅助と及一戰、打負て嵯峨へ引退、此時鼓
打高安權守道前養子與兵衛討死仕、信長聞注進給、
不移時日出馬、九日に京着、合戰已爲無事、戰功
之衆被行賞、二月下旬より石を引、室町御所有普
請、此時細川左馬介屋敷有之し藤戸の石を引給、石
を虎皮花にて飾、二月秋山伯耆守遠州に在陣、無其
詮之間、駿州へ通、三川三方衆は屬家康公、遠州に
在陣す、同廿日比、懸河に付城有之、かな丸山二藤山

青田山等也、三月懸川城令落去、氏真爲迎自相摸國一北條美濃守^{弟氏政}參向之間、氏真小田原被退、此比迄、駿府氏眞屋敷岡部二郎右衛門相拘處、爲少身一如此儀神妙之由、信玄曰、知行を被_レ出間、二郎右衛門屬_二信玄、四月遠州漸平均付て、家康公三河の飯馬之處に、則遠州一揆蜂起して、通路不_レ輒、家康公十七八騎にて、堀川を被_レ通けるを、雜兵と心得一揆不_レ出、是討留は、家康の被_レ通間敷際、朴に相通、家康公を爲_レ可_レ度の由と云々、然處に家康公早速被_二相通_一けるを、後聞して一揆後悔しける也、此時堀川にて近習隨分之者共被_レ討、家康公則廻_レ與、堀川一揆を被_二責崩_一、不_レ殘被_二討果_一、同所に一揆成敗也、室町御所石垣家屋出來して、卯月六日、義昭徒移し給、五月十一日、信長被_レ下_二美濃_一、去年義秋御所の六條本國寺々中坊共、不_レ殘近衛の御所被_二運送_一、義秋家屋并近習之衆爲_二私宅_一、義秋暫此寺に令_二居住_一給間、可_レ被_レ加_二懇詞_一之旨、寺僧思を成之處、還て及_二此儀_一、爲_二比興_一之由、京師の上下歌_レ之、家康公、此秋より翌春中迄、遠州見付城普請在_レ之、

八月廿日、伊勢國へ信長出馬あり、淺香城令_二惘望_一間、城を被_二請取_一、廿八日、大河内被_二取詰_一、此城に國司父子被_レ籠、是も有_二無事_一、城を請取出、城之衆無_二異儀_一被_二相送_一、此時關役所被_二停止_一、往還者莫_レ不_レ悅_レ之、大河内城に信雄^{信長}被_レ令_二居城_一、領_二十萬石_一、此比竿入、上野城に上野介^{信長}被_レ令_二居城_一、領_二五百石_一、神戸の城に三七主^{信長}被_レ置、領_二知五萬石_一、十一月十日、千種を經、信長上洛、伊勢國早速平均之事、義昭感悅し給、此比信長馬廻之中、戰功之衆廿人、母衣衆被_二定_一、佐々内藏介、毛利新左衛門、河尻肥前守、^{與兵衛}生駒勝介、水野帶刀左衛門、津田左馬介、蜂屋兵庫頭、中河八郎左衛門、中島主水、松岡九郎次郎、是黑纒之衆也、織田越前守、前田又左衛門、飯尾隱岐守、福富平左衛門、原田備中守、^{堀九郎左衛門}黑田次右衛門、毛利河内守、野々村三十郎、猪子内匠助、此九人赤纒也、廿人に一人不_レ足、元龜^{元庚午}年二月廿五日、信長上洛し給、於_二江州_一相撲取を集有_二見物_一、其中鯉江の又一、青地與右衛門上手たる間、のし付脇指被_レ下、京都に被_二召具_一、四月、堺數奇者道具可有_二御覽_一之由日間、南北の名

譽の道具共持參、其中に天王寺屋宗汲か菓子^{の繪}、藥師寺の小松島、油屋の常祐か柑子口、是等を被_二留置_一、則其價過分被_レ報、右二人の者令_二畏悅_一、松永彈正忠鐘の繪令_二進上_一、十四日、於_二義昭御所室町_一能有_レ之、觀世と今春とかはる_レに仕、脇の能觀世大夫也、然は終の祝言に、觀世大夫融を仕、信長甚不快、さて姫小松と云香爐を義昭_二自_一信長_二被_二進上_一、卯月廿日、信長越前へ出馬、其日佐柿の栗屋越中守所に被_二止宿_一、去比家康も有_二上洛_一、同越前へ令_二出張_一給、信長美濃へ下降時、同遠州へ被_レ下、廿五日、越前國手筒山城被_二責崩_一、敵千三百七十被_二討捕_一、廿六日、金崎城へ被_レ寄、城主朝倉中務令_二惘望_一、退散、城者則令_二破却_一給、近江國淺井備前守別心致之由、注進及_二度々_一、信長曰、先彼を可_二退治_一とて被_二引返_一、金崎に誰をか可_レ被_レ殘との儀也、茲に木下藤吉郎吾を可_レ被_レ殘之由言上、信長快氣也、各莫_レ不_二美談_一、然間一手一手より弓鐵炮、或は三十或は五十、爲_二合力_一被_二付殘_一、此時敵一圓不_レ出、信長朽木越を經、同月卅日に京着し給、藤吉郎秀吉も無_二異儀_一、令_二京着_一、近江國無_レ殘所一揆令_二蜂起_一之間、稻葉伊豫守を守山へ被_二指置_一

處、一揆押寄す、稻葉素武篇の達者及_二合戰_一、一揆の者共千二百餘討捕、信長感悅不_レ斜、近國仕置堅固に仰付、義昭公へ暇を申、信長五月九日美濃へ被_レ下、志賀宇佐山兩城に森三左衛門、永原に佐久間右衛門、長光寺に柴田修理亮、安土に中河八郎右衛門、長濱に木下藤吉郎被_二指置_一、佐々木承禎之殘黨愛智郡鯉江城楯籠、留_二通路_一間、信長經_二千種越_一下給處に、於_二山路_一鐵炮にて信長を十間之中にて奉_レ打、運命や強かりけん、不_レ中_二貴體_一中_二小袖脇_一、是は杉谷善住坊と云者を、自_二承禎_一深被_レ頼如此也、同月廿一日、至_二岐阜_一、信長被_二飯城_一、六月四日、佐々木承禎於_二野洲郡_一、與_二佐久間柴田_一被_レ及_二合戰_一、則佐々木敗北、七百八十餘、兩人の手へ討捕、信長喜悅し給、彼三人被_レ下_二知行_一、堀二郎并家子三郎兵衛屬_二信長_一、是かまのはの城主、武篇者也、堀二郎年十五、悉皆樋口取立、十九日、信長北近江へ進發、小谷町中悉放火、敵防戰及_二度々_一、淺井人數八千有_レ之、此時退口を被_レ掛_二大事_一、左右に土手を築、佐々内藏助築田出羽守中條將監に仰付、各大身の者可_レ爲_二殿之由_一雖_二言上_一、無_二承引_一、此小身之衆殿也、諸手より鐵炮五百挺、信長之弓之衆五十人被_二相添_一、敵

緊相慕之間、度々及合戰、無異儀被引取、築田少手負、信長横山城被取卷、越前より淺井爲加勢、朝倉孫三郎義景甥、又賀也、爲大將一萬の人数指立る、淺井父子同六月廿六日、大寄山に陣取、信長龍鼻に陣取給、其間五十町也、家康依信長仰出馬し給、廿四日に、彼所に着給、信長快悦不斜、廿七日、北敵野村三田村に移、終夜相催、未明に打出、於姊川及合戰、初合戦信長家康之方被押立、左は家康自旗本押直之間、越前衆敗北、右は信長幡本へ相合へきところに、稻葉伊豫守よこ鍵に懸、淺井敗北、敵數多被討捕、茲に越前の侍に眞柄十郎左衛門と云者、大力剛者、大太刀を以無類に働、家康家中勾坂式部、并息六郎五郎得之、横山城退散之間、被移木下藤吉磯丹波、自合戦場直に佐和山へ移相籠之間、丹羽五郎左衛門、百百か屋敷に被指置、彦根山に川尻與兵衛、北の山に市橋、南山に水野下野守被置、信長家康有上洛、義昭賀し被申、さて美濃へ被相下、此姊川合戦之悦として、信長より家康へ長光の刀被進、是を後三川長篠の城開運し時、家康より奥平九八郎信昌へ被下、此刀は元三好下野守刀、其後光源院殿の御物なりし

を、信長御手へ入、八月廿日、信長攝州へ出馬、三好笑岩、同日向守、同備中、同爲三、同新右衛門、東條紀伊守、篠原玄蕃、奈良但馬、岩成主税助、其勢三千餘、野田要害楯籠、福島に安宅甚太郎、細川六郎、同右馬頭、齋藤右兵衛龍興、同長井隼人佐、已上五千餘騎籠之間、可被打果ため如此、同廿九日、野田福島被取詰、義昭九月十二日、野田へ被押寄、根來雜賀衆一萬餘同參陣、此内鐵炮二千挺有之、九月十三日、大坂門跡顯敵對色、櫻岸河口へ相働之由注進、然共信長敢て不驚給、十四日、大坂一揆打出森口邊及蒔田、佐々内藏介自河口、此旨言上、信長則打出給、佐々内藏助、林新三郎、井上才助、福富平左衛門、野々村三十郎、土肥助二郎打出、大坂衆と及合戦、各令高名、野村越中守懸付討死、金松又四郎は高名す、味方已失氣處、前田又左衛門返合鍵合、毛利河内已下續之間、無異儀引付畢、同九月十六日、朝倉の義景淺井備前守比叡辻八王子邊陣取、其勢二萬餘、十九日、宇佐山へ相働處、森三左衛門及合戦討死、織田九郎同討死、然共武藤五郎右

衛門、肥田玄蕃、同彦左衛門楯籠、城中堅固、廿日、敵大津を放火、廿一日、醍醐山科放火、此旨信長へ注進、然間先野田福島を被指置、京都へ被相上、此時南敵雖相慕無指儀、廿四日、信長立京都給、北敵聞此事、攀鉢峯青山坪笠山陣取、廿五日、信長叡山麓に押寄、香取屋敷に人数被置、志賀宇佐兩城に馬廻衆陣取、此中夜々に遣加勢、端々寺社を燒、法師原の頸二三十充毎夜取來、義昭公將軍塚に被居陣、佐久間右衛門、稻葉伊豫守相招衆徒、此度於被致忠儀者、諸國之叡山領、如本可奉附之由雖言合、敢無領掌、信長不及了簡、さあらは根本中堂山王至迄悉燒拂、僧侶兒童已下不殘可誅戮之由及諫言と云とも、尙以無承引、剩義景淺井女人を山へ召上せ、魚鳥を食、大師の掟を破る、信長菅屋九右衛門、佐佐内藏介を爲使敵陣へ被曰遣、双方對陣、士卒疲勞無其詮、定約日及合戦、可決勝負と也、北敵不返答、木下藤吉、丹羽五郎左衛門、小谷佐和山爲押有けるか、參幡本、剩於路次、一揆數百討捕、殊照光坊四十九院の僧、其外物主數多討捕、信長御感甚、佐々木承禎信長へ被悵望、三雲豐左衛門、三上伊豫守を爲使

者被指越、信長承引し給、十一月廿五日、堅田の猪飼甚介、馬場孫三郎、居初又二郎屬信長、哀大將を給候へとて獻人質、堅田へ可參事、各辭退の氣有之處、坂井右近拙者可罷向由申、信長喜悅し給、能人数相添被遣、北敵聞之、不移時刻、以大勢責之、右近討死畢、猪飼は希有にして舟に乗、信長陣所へ遁參、素町人成間、先志を感、知行拜領して、往々信長へ奉公申也、寒氣彌甚、北敵難儀、義昭へ無事之儀令悵望之間、信長陣所へ有御成、被仰扱一條信長令和睦給、さて義昭公は直に御飯洛、義景淺井は北國に、信長は美濃へ令飯馬給、去六月、姊川合戦時、淺井備前守家中に遠藤喜右衛門と云者有、此合戦味方失利者、味方の首を取、敵陣に可懸入、信長是を可見給所を、可奉討之由也、然而江北衆敗軍之時、三田村市左衛門と云者の首を持、信長陣所に馳參、彼頸を直に可奉之由申處、各押置、終に遠藤を誅伐す、喜右衛門心指神妙と云々、殊身上宜者也、此春武田信玄駿河花澤城被攻崩、去々年より大原肥前守相抱在城す、此二三ヶ年中、小田原より駿河に少々人数被出間、信玄不得隙、又は家康公よ

り大原肥前の内々依被懇詞、當年迄居城、今信玄駿州平均の條如_レ此也、城塀一重之體にして懇望之條、大原助_ニ身命、遠州_ニ被_レ送、此六月、從_ニ見付_一濱松の家康公移給、先古飯尾豊前か古城に在城、本城有_ニ普請、惣廻石垣、其上何も長屋被_レ立、見付普請被_ニ相止_一也、是信長依_ニ異見_一給_ニ如_レ此、遠_ニ三之輩、何も在濱松す、九月十二日、本城の家康公令_ニ移給_一、

武田信玄_{信甲駿西上州主}、小田原惣門際荷池まで相動か火、先甲州より武州_{信甲駿西上州主}に出、歸陣には築井より都留郡筋を可_レ通之由の玉ふ處に、小田原衆相慕之間、信玄人數返合せ、みませ峠にて合戦、相州衆敗北、數多討取、無_ニ異儀_一甲州の飯陣也、

元龜二辛未二月、磯丹波守屬_ニ信長_一、佐和山城を渡、高島へ相移、佐和山城丹羽五郎左衛門被_レ置、知行五萬石、但未卒入、五月六日、淺井備前守箕浦城へ相働、横山に在城之木下藤吉郎聞_ニ付之_一、經_ニ閑路_一敵勢に先立て箕浦被_レ移人數五百計及_ニ合戦_一、敵百五十討捕、城主堀二郎悦_レ之、五月十日、信長長島へ出馬、多氣口より働衆、退口に柴田修理、安藤伊賀手負、其外手負不_レ知_レ數、其後尙以無_ニ臘次_一引_ニ取大垣_一、卜全討死、夜中之儀、家中之者不_レ知

之、柴田此働にさし物敵へ被_レ取けるを、柴田小性水野次右衛門取返、柴田に上、此時小稻葉城に有_レ之太田甚右衛門謀叛す、弓削修理と云者、卜全小性也、年十八、於_ニ其場_一追腹を切、八月十六日、信長江州へ出張、小谷近邊放火、廿二日、着_ニ佐和山_一給、新村の城に相籠一揆共被_ニ責落_一、六百七十餘被_ニ討捕_一、小川城令_ニ懇望_一、奉_レ渡_ニ金_一か森城主、則屬_ニ幕下_一令_ニ參陣_一、此比、二頭の龜出、

信長九月十一日、勢田山岡玉林齋_{後號對馬守}所に止宿し給、明日叡山を可_ニ責崩_一之由曰、佐久間右衛門并夕庵入道、達て及_ニ諫言_一、信長曰、去年汝等を以雖_ニ盡_一懇詞、無_ニ承引_一上は不_レ及_レ力と、理を盡し曰間、不_レ及_ニ了簡_一、各未明罷立、

同年九月十二日、信長叡山を退治、近年朝倉義景と有_ニ内通_一、特に去年越前衆彼山に屯陣を、信長に敵對故如_レ斯、其時之消息、衆徒兒童子に到まで、或刎首、或焼死、適遁去者、剝_ニ取衣類_一、堂舍佛閣一字も不_レ殘、燒拂、哀なりし事共なり、是は偏に近年背_ニ大師之掟_一、衆徒亂行、殊には去年越前衆出_ニ張陣_一之比、於_ニ伽藍佛前_一、服用魚鳥、男女攀登亂_ニ觸次_一之間、自業得果の

道理歟、依_レ爲_ニ三王使者_一、此亂之時迄は、猿無_ニ際限_一充滿したり、亂以後猿曾て無_レ之、奇特云々、信長曰、後代に若當世之衆知_ニ天下_一と云共、叡山を建立有_レ之間敷段、各捧_ニ起請文_一、

八月廿一日夜大風、六十年已來に無_レ之と云々、同廿六日、於_ニ遠州濱松_一、觀世宗雪入道、同左近大夫能仕、家康公も同能し給、同廿八日、又能右同前、初日は九番、後日十五番有_レ之、此時は岡崎三郎信康主能し給、是家康公一男也、年十、此年、小田原北條の氏康病死、年五十七、父氏綱も_ニにして逝去_一、

此年、二頭の龜出、元龜三_{申壬}三月五日、信長北近江へ出馬、小谷近邊不_レ殘放火、十一日、志賀郡へ出給、木戸田中兩城取出を被_レ取、明智十兵衛光秀、中川八郎右衛門、丹羽五郎左衛門被_レ置、十二日上洛し給、細川六郎、岩成主税助も幕下令_ニ伺候_一、大坂門跡より萬里江山と云掛物、白天眼信長へ進獻、爲_ニ和睦_一歟と云々、三好左京大夫、松永彈正、河内國高屋城に人數を置、是を被_レ責處、風雨の夜城主退散、其比左京大夫は若

江の城、松永は信貴の城、男右衛門多門城に有_レ之、信長五月十九日美濃下向、七月十九日、信長父子江北へ發向、此時奇妙、具足始也、小谷城三丸迄押入、二百餘被_ニ討捕_一、廿二日、山本山へ木下藤吉郎相働、阿閉淡路守出合遂_ニ一戰_一、敵五六十討捕、信長父子快氣、廿七日、虎後前山取出を被_レ取、朝倉義景出張及_ニ對陣_一、八月十日、越前衆前波九郎兵衛、富田孫六郎、戸田與二郎、毛屋猪介、屬_ニ信長_一、此四人の者日比義景失_ニ面目_一候者也、虎後前山には木下藤吉郎を被_レ置、宮部の城に宮部の善祥坊を被_レ置、信長父子被_レ移_ニ横山_一、十一月三日、敵宮部の相働、木下懸合、二百餘討捕、

此冬、信長十七ヶ條之以_ニ書付_一、義昭へ被_レ送_ニ諫言_一、此諫言の書、信長記に有_レ之、右何も忠言也、後武田信玄是を見て、信長をた_レ人ならずと云れけると也、八月十二日、於_ニ遠州濱松_一能有_レ之、觀世太夫同駿河に先年居住のを觀世十郎兩人行_レ之、晚より十四日迄雨ふる、同十六日に又能有_レ之、家康公能し給、此をち觀世十郎向_ニ家康公_一申けるは、駿河の亂之時、鉢の木のを仕し、又只今仕之由申けるを、鈍なる者として人笑ける、此時も初日九番、後日十五番在_レ之、九月之

比、武田信玄遠州に可_レ有_二發向_一之沙汰無_レ隱、依_レ之信長公より使者を以、武田へ可_レ有_二無事_一之由度々宣、十月、武田信玄遠州發向、高天神表を通、見付國府に被_二打出_一、見付には自_二濱松_一入數雖_レ被_レ置、無勢之間引退、信甲衆見付之古城普請之躰を見て夥_二こと、云々、信玄二俣に押寄被_レ攻、

十月、山縣三郎兵衛、秋山伯耆三千餘、三川に打出、三川之山家三方屬信玄長篠に陣取、野田に相働放火、遠州之山家井平に打出陣取、日々ほう田に打出相備、是二俣へ敵人數出す間敷の計也、此時家康公井平の人數を被_二打果_一事可_レ安處に、信玄と合戰可_レ有_二之内存にて、不_レ被_レ及_二此儀_一歟、家康公已來後悔し給、十月、岩村城屬信玄之間、自_二井平陣中_一、信州衆下條伊豆守東美濃に遣、岩村に在城す、信甲衆井平に在陣の儀は、十月山縣三郎兵衛秋山伯耆守自_二信州_一三川山中に出、三方之主作手與平道波入道、長篠伊豆守、同新九郎、田嶺新三郎屬信玄、爲_二案内者_一令_二先登之間_一、長篠に在陣して、野田に相働令_二放火_一、さて遠州井平に相移在陣也、
十二月、二俣城落居之間、令_二普請_一入_二番手_一、同廿二

日、信玄都田打越味方か原に打上、濱松衆爲_二物見_一十騎廿騎つゝ懸來取合之間、是を可_レ引取_二之由_一曰、家康公出馬之處、不慮に及_二合戰_一、濱松衆敗北、千餘討死、信玄人數二萬、濱松衆八千計なり、濱松近邊放火、但町中へは不_二押入_一、則可_レ取_二詰_一か_二の旨_一有_二評議_一、然共家康公居城也、無_二左_一右_二難_一落居_二由_一令_二談合_一、徒に及_二二十日_一、彼野に在陣也、此時自_二信長_一加勢の衆佐久間右衛門、平手、水野下野守等也、平手は討死也、下野守は三河岡崎迄通行、比與成躰也、大方信玄と可_レ有_二一味_一企也と云々、經_二一_一兩年、水野下野守は於_二三川岡崎_一生害、是菊屋小川の主也、爲_二家康母方之伯父_一也、下野守在所菊屋を、弟水野宗兵衛召寄被_レ下、近年宗兵衛は家康へ奉公之人也、家康依_レ爲_二伯父_一、家康の懇志として、信長被_レ及_二此儀_一、小川は佐久間右衛門介法也、
元龜四癸酉正月十日、松永降參、岐阜へ參上、不動國行刀、藥研藤四郎の脇指令_二進上_一、は何も天下無双之名物也、是佐久間右衛門取扱を以也、多門の城相渡間、山岡對馬守を被_レ置、此比義昭將軍、信長を可_レ亡_二旨思_一召立、是は去年之冬、諫言の書逆_二御耳_一故とを聞し、二月廿日、信長人數被_レ立、則山岡光淨院道阿令_二味方_一

則參陣、堅田の城を被_二責落_一、三百餘被_二討捕_一、坂本に明智十兵衛を被_二指置_一、三月二日に、各美濃に被_レ飯、三月廿五日、信長出馬、廿七日、着_二大津_一給、細川兵部大夫藤孝、荒木信濃守爲_二御迎_一參上、此間義昭御謀叛之次第、具被_二相尋_一、廿八日、義昭種々令_二惘望_一給間、公臣の禮として無事姿也、

四月七日、信長出_レ京下給、丹羽五郎左衛門に舟を可_レ造旨被_二仰付_一、〔頭注〕元龜四年四月於_二宿_一州駒場、武田信玄病死、七月朔、義昭重て御謀叛、二條の御所には日野大納言、藤宰相被_二殘置_一、義昭は眞木島楯籠給、信長同五日出馬、去四月、丹羽五郎左衛門に仰付、揃給十艘舟に乗て、湖を越給、翌日六日、洛中洛外邊土百八里、民屋堂社佛閣、一字も不_レ殘放火、此時上京を可_レ有_二放火_一哉否と暫思案し給處、三井寺の鐘汗をかき申之由聞給、さては鐘さへ京の火事を存哉とて則燒給と云々、七日二條室町御所被_二取卷_一、色々令_二懇望_一らる、條被_レ助_二身命_一、十六日、信長眞木島發向、梶川彌三郎望_二先陣_一、一番に川を越、さて稻葉伊豫守越_レ河、眞木島責入、義昭種々令_二懇望_一給間、河内國若江城退け申、此比迄相公などを奉_レ討事如何之由、信長思慮し給、後には不_レ奉_レ討事

後悔し給けると云々、梶川一番に河を可_レ越事、義昭は從_二若江_一紀州由良に御退、それより中國に移給、此時攝州の池田勝政、伊丹兵庫被_二退治_一、義昭は藝州に在國在しか、太閤秀吉の時、有_二出仕_一入道し給、庶人の如窄人、其後天正十八庚寅の年三月、秀吉關東發向之時伴給、又在_二大坂_一一兩年已後令_二病死_一給、
上京炎上不便思給、可_レ還住_二之旨_一曰、被_レ下_二條目書_一、

定

- 一 京中地子錢、永代令_二赦免_一畢、若從_二公家寺社方_一地子錢之内收納有來る分者、相_二計替地_一を以可_レ致_二沙汰_一事、
- 一 諸役免許之事、
- 一 一鰥寡孤獨の者見計、扶持方可_レ令_二下行_一之事、
- 一 一天下一號を取者、何の道にても大切なる事也、但京中諸名人として、内評議有て可_二相定_一事、
- 一 儒道之學に心を碎き、國家を正さんと深く志を勵す者、或忠孝烈之者、尤大切なる事候條、下行等他に異て可_二相計_一、又其器の廣狹能尋問可_二告知_一之事、
- 一 右條々相計可_二申付_一者也、

元龜四年七月吉日

信長

村井長門守

下京者義昭の不服御下知間不_レ被_レ放火、此年三好左京大夫於_二河内國若江_一、從_二信長_一被_レ生害、是佐久間右衛門依_二計策_一也、

畿内置目、百姓等撫育し給、七月廿六日、信長下給、江州田中木戸兩城被_二取懸_一處、城主令_二惴望_一、城を相渡間、明智十兵衛に被_レ下、同廿七日、長岡兵部大夫藤孝淀に相働、岩成主税助五百餘之人數にて相戰、番頭大炊助、諏訪飛驒守、岩成をたて出屬_二信長_一、是藤吉秀吉以調略之儀也、兵部大夫内下津權内討_二岩成_一、則江州に首を持參、信長感悦し給、金子百兩相添感狀被_レ下、八月八日、岐阜へ信長著給、此時江北の阿閉淡路守屬_二味方_一之由有_二注進_一、則出馬、各無_二休足_一出陣也、人質於小谷_一男生害、年十才、阿閉か實子也、八月十日夜、月か瀬の城_{淺井}の敵退散、佐久間、柴田、大嶽の北山田山に相移て、越前へ留_二通路_一、朝倉の義景聞_レ之、則出張して田邊山近邊に屯_レ陣、高月里信長宗徒之衆陣取、淺見對馬守屬_二味方_一、大つくの城丁野山城令_二降參_一成_二味方_一、爲_二案内者_一令_二先登_一、高月に陣取、柴田、佐久間、織田市介、稻葉伊豫、瀧川、蜂屋、丹羽、氏家、伊賀、蒲生其

の覺有_レ之間、可_レ被_二助命_一之旨曰_レれとも、申請て被_レ誅、各美談、金松又四郎能首取て參上、生足に成て忽

出、信長太刀に緒付給、是半を被_レ下、忝次第也、信長敦賀に三日御座、十八日府中へ移給、義景大野山田庄六坊へ遁入、稻葉を被_レ遣處、朝倉式部大夫討_二義景首_一、稻葉手へ渡、義景の侍鳥井高橋追腹を切、越前國爲_二守護_一、前波播磨守を假に被_レ置、同廿六日、江北虎後前山の城被_二取卷_一、廿八日、下野守_{備前守}城被_二責落_一、則切腹、鶴松大夫と云舞々、介錯して腹を切、廿九日、信長京極つふらの嵩へ上り給、淺井備前守腹を切、淺井石見守赤生美作を生捕、さて被_二生害_一、淺井か跡職添_二感狀_一、木下藤吉に被_レ下、淺井備前守妻女は信長妹也、然間無_二異儀_一被_二引取_一、後柴田に嫁し給、十年餘以後、於_二越前柴田滅亡之時_一、同焼死給、此腹に淺井息女二人有_レ之、於_二越前_一希有にして逃_二此難_一出玉、姉公は後秀吉公に嫁玉い、八幡殿并秀頼御袋是也、妹は爲_二秀吉御計_一、江戸秀忠に嫁玉い、男女の君達誕生し玉ふ、備前守嫡子萬福と云有_レ之、越前を爲_二人質_一指越、越前平均之後加賀國へ行て隠たりしか、盲人と成間、母又は祖母公_{信長}を頼て出たりしを、近江國木本

外之衆へ、從_二信長_一有_二使者_一、敵大略夜中に可_レ退、各不_レ可_レ有_二油斷_一之儀也、夜中に北敵陣に火の手見ゆ、信長すはやと思打出給、如_レ案義景退散、從_二信長_一先に出る衆有_レ之、夜中之事誰々と有_二御尋_一、前田又左衛門、佐々内藏助、戸田半右衛門、下方左近、岡田助右衛門、同子助三郎、赤座七郎右衛門、高木左吉、福富平左衛門、土肥助二郎と答申、信長喜悦し給、右之衆諫言、夜中に御魁可_レ有_二如何_一との儀也、無_二承引_一被_二相進_一、然處一里先の高月に陣取、歴々の衆不_レ知_レ之休居たり、北敵山崎七郎左衛門殿成間、刀根山峠にて暫及_二防戰_一、之、此内朝倉治部大夫、同掃部助、同權守、同土佐守、三田崎六郎、河合安藝守、青木隼人助、鳥井與七、窪田將監、侘美越後守、山崎新左衛門、同七郎左衛門、同肥後守、其弟朱本坊、細木治部少輔、伊藤九郎兵衛、中村五郎右衛門、同三郎兵衛、同新兵衛、長崎大乗坊、和田九郎右衛門、同清左衛門、引_二檀六郎三郎、小泉四郎左衛門、齋藤右兵衛大輔龍興、美濃國半人、都合廿四人歟、是宗徒の者共也、龍興をば、氏家左京内宮川但馬討之、原加左衛門と云者、不破河内印牧彌六左衛門を生捕、此者右首能見知言上、是武篇

にて從_二信長_一被_レ誅、

淺井日來の存念は、越前平均せは、江北肝要の巻たる間、淺井も可_レ被_二追立_一かの旨及_二嫌疑_一、先年敵對しけるとかや、惣別信長公大心第一之將たる間、左様之儀有_レ之間敷處、如_レ此疑、淺井運の所窮乎、九月四日、餘江城主佐々木右衛門督種々被_二懇望_一間、被_二助命_一則退散、同六日、信長岐阜へ被_レ下、先年千種峠にて信長を鐵炮にて奉_レ打し杉谷善住坊、高島に深隠て居たりしを、磯野丹波守搜出擲取、同十日岐阜へ進上、信長不_レ斜悦給、竹鋸を以首を被_レ引、四五日之程に命絶たり、伊勢國西別所と云所に、長島門徒構あり、人數を被_レ遣悉被_二切捨_一、同片岡籠一揆、同被_二切捨_一、廿五日御飯之砌、從_二長島_一相慕、手負數多出來、林新三郎討死、新三郎内加茂二郎左衛門兄弟追腹切、天正元癸酉_同正月、武田信玄於_二濱松野_一越年、同三日井平を通、三川野田に押寄被_二相攻_一、彼城三月十八日落居、城主同人數引連長篠に被_二引入_一、其後三方人質相替、城主同河原吉田に被_二送遣_一、舊冬濱松合戰之儀を、無_二注進_一事不審之由、自_二越前_一

以使者信玄陣相尋、朝倉喜悅と云々、

三月、信玄長篠に在陣、彼城普請有之、

四月、信州通飯陣、長篠在陣中、作平へも人數を遣有普請、被入番手、

同四月、信州於駒庭、武田信玄卒、年五十三、及二十ヶ年精進齋たりと云共、自去二月、依頼魚鳥被服用、

信玄病死を相隠し、三ヶ年不露顯、信玄三男四郎勝頼繼其跡、信甲駿西上州の主たり、信玄嫡子は先年依謀反被生害二男は盲目なり

此夏中、如鐵炮天鳴、

七月廿日、三川長篠の家康公御働、火矢を被爲射之處、城中同丸共悉焼失間、則取詰被攻之、

同八月中旬、爲長篠後詰、信甲駿西上野人數、三川遠江兩方に出、武田勝頼は、此度自身は不出

先鳳來寺筋へ馬場美濃守伴五千餘人の人數を、長篠近所内か野邊まで足輕を出、二つ山に陣取、黒瀬に陣取衆武田左馬介、信玄甥、土屋右衛門已下八千餘也、彼衆

作手へ相移、さて設樂へ出、節所を前に當、東西より留通路は、定て家康公吉河筋に可有退散間、可打果之旨相議する處、作手主與平美作守貞能男九八

懸拔不得討、頗可謂無念、此謀昔年有し事也、後輩爲令知書之、但馬場美濃守甲州衆云、烟白く見る間非陣拂乎、壯年之士不可聊爾、由令下知云々、彼美濃歳此時六十一

九月八日、長篠城落去、城主室賀一葉軒信州衆、勇者也、并長篠

主管沼伊豆守、同新九郎令懇望之間、助身命鳳來寺筋へ被送、長篠城には三川衆を被置、家康公遠州へ早速に有歸馬、是は遠州表へ在陣之敵を爲可討

果也、遠州うかり山梨に陣取、穴山左衛門大夫、山縣三郎兵衛、家康公濱松へ聞歸馬の儀、周章不斜、仍陣屋に紙小幡を張、成居陣の粧、夜中に令退散、

此時長篠城落去して、家康公歸馬之由を無注進事、穴山山縣爲遺恨之由、左馬介馬場美濃守へ述懐也、

此長篠主新九郎は、籠城中より屬家康公可申之由也、然共先山中に退城之處に、此儀露顯して、信州小室へ遣令籠者こと十ヶ年、武田滅亡之後、遠州へ參

けれ共無合力、徒に牧野右衛門丞に被預置、同九月廿一日、信甲人數五千餘、作手より宮崎に相働、與平

父子人數、折節所々知行に令入部、纔に二百餘相殘、右の加勢の衆、何も歸宅して、味方小勢たる間、所々

郎信昌、屬家康公令忠節間、信甲衆迷十方空手、此度與平忠節、須彌山は九牛一毛の由時人云之、與平忠節の時、作手城には

信州衆令在番、美作父道汝、同二男を始數多武田一味して、城中に楯籠、未家中の者共へも令隱密間、與

平人數甚少也、事難儀なりけれども、竟に遂本意、翌朝家中の者漸集るなり、翌日及午刻、自家康公加

勢衆本多豊後守、同男彦二郎、松平主殿介作手へ參着也、此衆長篠を夜前被出けれども、節所と云、無案内と云、旁以如此、又翌日平岩七之介、佐藤金一郎作手へ被着、

廿六日、黒瀬に陣取甲信人數、作手城に爲後詰、土屋右衛門を始三千餘相移、于時相談て云、敵は多勢と云、城廓と云、旁以堅固也、味方者無人數にして野原に在陣、可有如何とて宮崎に引退、

八月廿八日、大風、作手忠節之後、甲信衆失氣體を見及、家康公陣中に松葉を積み付、火、陣拂之まねをし、路次に置人數、自鳳來寺筋、敵於馳來者可討捕之由、被相構之處、如案見此烟、陣拂と心得、五騎三騎つ、懸來入依坪、然處被置伏兵人數、少し早く立出之際、敵

令放火、與平父子瀧山に令居、未解も無之、敵山の麓迄雖攻上、緊令防戦之間引退處、與平頻相慕の間、田原坂に於て敵數度返合、再三鍵合、于時助次郎を始、甲信衆隨一の者數多討捕、敵棄諸道具、敗軍也、

天正二甲戌正月、武田四郎岩村表の發向、かう野串原以下小城共攻落す、信長則大井中津河まで有出馬、

けれ共、人數未相揃、殊に爲節所之間、不被單合戦、三川の人數移足助小原、此時越後謙信與信長一味之間、至上州沼田出張之條、武田則引入、

謙信存念之處に、自信長無禮謝事、謙信爲遺恨之由、以狀啓之、

此度武田東美濃の出しより、不亡武田可爲天下大事之由、信長彌思玉ふ、

正月元日、於岐阜、信長公に各々出仕、其時酒宴有て、肴としてはケ物一つ被出、各開て見之、古き頸を

三つ被入たり、薄にて濃たりけり、各節を被付、越前の左京大夫義景、并近州の淺井下野守と備前守頼

也、臣以戰功如此、敵令退辭之間、被出之由曰、さて各へ有引出物、

二十一

當代記卷一

二十一

二十一

二十一

二十一

二十一

二十一

二十一

二十一

二十一

二十一

二十一

二十一

二十一

二十一

二十一

二十一

二十一

二十一

二月八日辰刻、家康公若君誕生、後號三河守秀康

遠江國今切る兵糧船寄、是を可被押取とて、濱松より人數を被遣、小船にて取まき被攻之しか、彼は大船にして鐵放多かりければ、敢て難近付、令下知之とて、物主寺島斧丞當鐵炮討死す、さて船は漕出走ける、

同五月、高天神の四郎出張、信長爲後詰御出馬、吉田の御着之處、高天神落去之由告之間、信長自吉田御歸馬、家康自濱松有參向、被遂面上、此時種種信長公對家康諫言し給、遠州所々不農之間、家康の爲御合力黄金一駄被進、此比如斯之金子無其類、時人夥事に念之、御立の期に蒞て、信長より亭主酒井左衛門尉に上作之脇指被下、作鎌倉の貞宗也、此高天神落居之模様、城主小笠原與八郎武田の一味、家老之者共同心中は屬之歟云々、雖然家康公へ人質を進置之間、無疎略之由披露之、濱松へ參上、歴日數後、彼隱謀之旨漏聞之間、終に令生害玉ふ、彼小笠原與八郎は、天正十年壬午の春、武田滅亡の時、小田原へ打越隱居之處、家康公より信長公に言上し給之間、其旨小田原へ有信長之命生害し、首を濱

松へ自小田原被指越、

此秋、三川恩馬の浦の磯際の蛸多よる、人取之、常此浦に無蛸、

此七月十四日信長尾州の河内へ、後號長島被取懸、是一向宗之寺内也、大河四方に有之、人馬行歩不安之處也、此夏秋旱天之間、如貴意被相攻、九月晦日落居、其模様寺内家依惘望、人質を被遣、舟にて相退處を、無理に悉打果玉ふ、是近年敵對遺恨、殊には信長舍弟其外歴々の衆、於彼處打死するの間、猶以如斯、三月信長上洛、廿七日南都に出御、翌廿八日蘭奢待を被爲切、日野大納言、飛鳥井大納言爲勅使被參、自信長佐久間右衛門、菅屋九右衛門、塙九郎左衛門、蜂屋伯耆、武井夕庵、松井友閑爲奉行、一寸八分截之、三分にして其一分を被召置、殘所各へ被下、五月岐阜へ下給、此夏、武田四郎向濱松相働、まこめ川向迄相働、所々放火、然共天龍川東の麥を令刈、高天神の兵糧過分に入置、さて歸陣の砌、諏訪原之城を取立、普請令丈夫歸國也、

九月廿九日、尾州長島落去、一揆舟にて退處を、堤に弓鐵炮數千挺置たまひ被爲打之、逆不可遁と思

切、すはたに成隨一之衆へ切て懸、其時討死之衆、信長公御一族十餘人也、津田大隅、同弟半左衛門、同市令介、同弟仙、同又六、同孫十郎、赤見左衛門、大野佐渡、佐渡民部、坂井七郎左衛門等也、市令介信成乳母入津田九右衛門尉兄小瀬三郎二郎長清、無比類儀仕死す、長島には被置瀧川左近、十月五日、岐阜の令歸馬給、

此年、近江國かまのの城主堀二郎、同樋口御改易、其子細木下筑前守秀吉同心たりしか、小谷落去以前は、秀吉は五萬石、堀二郎は十萬石の領主たるに依て、不服秀吉異見一條、間柄不快、近年淺井へ内通仕候由、秀吉依言上如此、

天正三乙亥正月、三月、信長上洛し玉ふ、此比、駿河國古主今川氏眞從、遠州濱松有上洛、千鳥香爐宗祇香爐を被奉信長、此氏眞は去巳の年春より、小田原被居しか、氏康死去の後、氏政以外の相白たるに依て、去年濱松へ忍て參向、

三月、近州鎌の羽の八木二千俵、家康へ自信長被進、境目城々へ可被入置之由曰間、三百俵長篠へ

來、此度用籠城、二月廿八日、奥平九八郎信昌三川國長篠の相移、宮崎には日下與の依無城也、去々年の九月より至于今、番持之間、城破損見苦敷體也、今九八郎相移、普請相持無油斷之間、家康公快氣也、此春、諸國道路を作、是信長公依仰也、同公家衆知行如前代被返付、近年買取、主其價自信長被返辨、各莫不美談、

四月、武田勝頼三川國足助表の出張、所々令放火、自其作手筋の相移、野田へ押寄可相果之旨相議す、彼地は去々年信甲衆令破却之後、普請無之、只任古郷立歸居住之間、則河向の退散之處、信甲衆追詰、野田衆數多討死、自其吉田の相働、二連木を始、所々放火、吉田には家康公御移令居玉ふ、町中へは敵不押入引退、

五月朔日、武田四郎長篠を取詰、竹たはを以仕寄、所より金鑿を入、不舎晝夜責之、六日、從長篠陣中敵惣人數押出、牛久保表の相働、所々放火、及歸陣の期、橋尾の井を切、是は東二河へ周せきかくる田地用水也、依之此年彼表令早損云々、城を責之時、如此の働無之物之由云々、

十一日、長篠城寄手、渡合の南の門際、竹たはを付しよりきふく責之間、自城中一切て出、敵道具を捨、谷河下に敗北の條、竹たはを燒棄了、然處に翌日より又竹たはにて仕寄、

十三日の夜子尅、ふくへ丸を敵無理に乗んとす、其夜空曇て月不明、此丸は澤の岸の上に、た、塀計構、土居は無之、然其堅固に相拘之間、數度塀へ鹿の角を掛引と云へとも、内に繩を付、引へ柱を堅構之間、敵不_レ得_レ乘、殊横矢を以射之間、敵手負不_レ知_レ數、此丸へ行道の狹所、誠にふくへのことし、塀岩の上に立間、鹿の角にて引落之條、夜明なは通路不_レ可_レ輒とて、九八郎令_三下知、ふくへの丸の人數を升方の丸へ引入る、此時敵わくを持來、それに竹たはを早速に付、せいろを可_レ上之企にて柱を立る、茲にせいろ上なは、大手の門の通路可_レ及_三難儀とて、鐵炮數箇丁を以打_レ之、自_三本丸_一大鐵炮を以、右の竹たはを擊之間、せいろ上んことを不_レ得、徒に夜明畢、此時信甲衆手負死人七八百在_レ之と云々、又本丸の西の角へ敵仕寄、土居に金鑿を入、大石を掘崩谷へ落す、然處土居の角の内に掘崩さは、又是にて相抱經_レ日、後詰を可

奉_レ待として普請す、此時城中に手負死人多出來す、後運を開、此處を見るに、元來岩にて掘ん事を不_レ得、城中へ氣を可_レ失として、大石を夜中に外より持來、掘崩まねをして、下の谷に落しける也、于_レ時九八郎父美作、又自_三家康公_一石河伯耆守を相添、岐阜に被_レ遣、此趣信長公に被_レ告申、後詰被_三相催_一、信長公貴意之趣、三川滅亡せは、手前難儀可_レ近之旨、兼て思設給間、早速に相催、中旬有_三出馬_一、十九廿日に被_三押寄_一、陣の面に緊く柵を振、堅固相備、家康公の臣下酒井左衛門尉、本多豊後守、奥平美作定能、其外五千餘、夜中に河を越し吉河へ相移、終夜越_三深山_一、廿一日未明に、城の向嶋の巢久間兩地、敵の付城へ押懸打_三破之_一、而城と一手になる、敵見_レ之無理に信長家康之陣所へ押か、るへき體にて寄來處に、素兩將の陣所にさくをふり、向の原へ鐵炮の者數千丁指遣、敵の備へ打入の間、毎度中_レ之、敵手負不_レ知_レ數之間引退、加様にする事及_三度々_一、勝頼の内馬場美濃守、山縣、土屋、内藤修理、真田安房守、仁科_{信玄}末子、海野、望月、那輪無理助以下、宗との者悉保死畢、因_レ茲勝頼敗軍の間、信州境まで追々擊_レ之、幾千と云數を不_レ知、作手田嶺風來寺岩

小屋何も、信甲衆番手令_三惘望_一之間、信濃迄相送、城無_三異儀_一、奥平九八郎信昌手_レ請取也、此時直に信甲に被_三打入_一は、誠に少の手間も入間敷處に、信長は濃州へ歸馬、家康公は遠州に歸馬し給間、信甲敗軍の者共、暫氣を休けると也、是も甲州を強敵と思給故歟、

此七月、城介信忠_{信長}男岩村に發向し被_レ責_レ之、十月爲_三後詰_一、勝頼人數夜打の行あり、寄手の陣城堅固之間、信甲衆夜中に又敗北す、此比、佐久間右衛門尉信長公依_レ仰、三川國武節へ取懸、奥平父子一手になつて攻之間、聽て落城、右衛門は岩村へ參陣、城は奥平手_レ請取置_三人數_一、

此度長篠合戦之事、是非共遂_三一戰_一、可_三討死_一と思定之由、勝頼曰、馬場美濃守、内藤修理、山縣三郎兵衛、武田左衛門大夫、同左馬頭申云、敵軍は四萬、吾軍は一萬也、此度は被_三引入_一、信長歸陣之上、來秋令_三出張_一、所々不_レ殘放火し、其上蒞田已_レ下於_レ被_三申付_一は、三州可_レ成_三亡國_一間、一兩年中に可_レ爲_三存分_一旨、達而雖_レ令_三諫言_一、勝頼無_三承引_一、殊長坂釣閑被_三遂_一合戦_一尤之由言上之間、彌々此儀に相定けると云々、此釣閑は依

爲_三工夫人_一、信玄大細を被_三談合_一し者也、殊に辨舌明也、于_レ時年六十三、

七月、家康公遠州諏方原御取詰、竹たはを付、もつこう龜の甲を以堀をうめ、晝夜攻_レ之給、此陣中に毎日爲_三蒞田_一、小山表へ雜人共被_レ出、爲_三其奉行_一人數七八百計宛被_三付遣_一、駿河に在番之甲州衆、關邊鞠子田中江尻人數二千餘打出、右之蒞田之人足を、或は誅伐或は追拂、依_レ之彼奉行の衆雖_三相向_一、彼は多勢也、及_三難儀_一之所、諏方原陣中より一騎懸に打出、暫時に參着之條、敵河東へ越、大井川の中島に相備、家康公も野崎迄懸出見之給、敵爲_三小勢_一間、可_レ被_三打果_一處、一騎懸の體、諸道具不足之由思給歟、則諏方原陣中へ御歸、已來は不_レ被_三打果_一事を後悔也、八月、奥平九八郎信昌岐阜へ參、信長へ出仕、酒井左衛門尉忠次同道、信長則在_三對面_一曰、今度武田敗北、信長天下譽取給こと、偏に九八郎覺悟以也、一段器用之男の由各言上、彌可_三相嗜_一由御誼也、さて御さし刀_{文字}、御めしの御帷子_{御門}、珍物の唐物御筒服被_レ下、酒井へも御長刀御皮袴御皮衣被_レ下、八月廿四日、諏方原城落居、在番の城主依_三惘望_一、助_三身命_一大井河を送越給、

廿八日、小山城を被_レ取詰、家老の衆諫云、重て自_レ信長_レ請_レ加勢_レ被_レ攻_レ之尤之由、異見雖_レ區々、無_レ承引_レ被_レ進_レ陣、

自_レ信長公_レ九八郎拜領の刀、目貫かうかいは、去々年後藤光乗仰付、於_レ京都_レ被_レ爲_レ彫、昔弘法大師の玉造と云双紙を繪に被_レ書置、女は靴_レ色者なれども、老年になれば、面は猿に似て手にあしかを持、其中にくはる蕨なと入、肘にかけ後に袋を負、まる打ひろけて腰をかけて居たる躰被_レ書、信長見_レ之給、如_レ此圖を可_レ寫と依_レ御誼、ほりたる目貫かうかひ也、さて謠に今の世に周く用間、三方論議の僧、數珠を持たる所を學たり、其比此圖を明智日向守狩野繪像にうつさせしに、悉出來して、眼に點入までにて有しに、一夜の内此繪くさりたり、此由明智にかの申ければ、權者の筆跡を凡夫として寫しけるに依て如_レ此歎奇特と云云、

弘法御作十住心論に、念佛無間禪天魔、無間地獄へ落るをは、念佛てならては難_レ救、天魔の荒るをは、禪てならては不_レ治ら、

九月七日、武田四郎小山城爲_レ後詰、大井河邊に押出

九月下旬、信長被_レ令_レ歸馬、此比丹後國一色左京大夫に被_レ下、丹波國桑田舟井兩郡長岡兵部大夫被_レ下、十月十五日、信長美濃に御下、山岡美作守、森二郎左衛門に、勢田の橋破損の間、可_レ再興_レ之旨被_レ仰付、此冬、木下藤吉郎號_レ羽柴筑前守、丹羽五郎左衛門惟住、築田左衛門太郎は別喜右近、友閑は宮内卿、夕庵は二位の法印、増九郎左衛門は原田備中、河尻與兵衛は肥前守、明智は惟任日向守、各如_レ此號、十二月、岩村城落去、城代秋山伯耆守信州岐阜に引連張付に被_レ掛、是は信長與_レ信玄_レ入魂の時、爲_レ使_レ年來令_レ言上_レし儀、悉爲_レ謀計_レ問、惡_レ之給故如_レ此、城主者女姓、信長の姨母也、自_レ去_レ申歲_レ敵對し玉ふ間、爲_レ散_レ近年鬱憤、岐阜引連、信長自身切_レ之給處に、刀不_レ切死かねられけるところかや、此刀もとよりわざものなり、今如_レ此不_レ切事者、ふぢし歟と云物かの由人皆云、

天正四丙正月上旬より、安土普請始、丹羽五郎左衛門爲_レ奉行、二月廿三日、信長安土移給、普請精入之由曰、周光茶碗五郎左衛門に被_レ下、四月朔日より、各石を被_レ引、四月十四日、大坂へ遣_レ人數_レ被_レ相動_レ處、三好笑岩根比衆已_レ下、自_レ難波三家_レ取出、鐵放_レに被_レ打

す、其勢一萬三千餘也、去五月、於_レ長篠_レ敗軍の後、無_レ幾程_レ如_レ此之出張、武道所_レ感也、素信玄名將也、名下不_レ虚謂乎、同日、家康公諫方原へ被_レ引入、八日、武田鎌東原へ出張、自_レ諫方原陣_レ中谷の向迄物見を被_レ出、惣人數は諫方原陣中柵の中に有_レ之、及_レ晚武田人數小山へ相移、敵小山城令_レ普請、高天神城へ兵糧を入、九月下旬に引入、家康公も諫方原有_レ普請_レ歸馬し玉ふ、

八月十二日、信長信忠越前國進發、當國之一揆、所々城を構榎籠、河野龍門寺兩城攻落、悉討捕、自餘之城見_レ之何も退散、朝倉孫三郎去姊川合戰之時の大將也、隱_レ山林_レ處、下間筑後守、同和泉守、伐_レ孫三郎首_レ持參、信長無_レ舉用、比興者也とて則令_レ成敗_レ給、越前國知行配當之事、大野郡金森五郎八、一原彦二郎兩人に被_レ下、敦賀は武藤宗右衛門、府中郡は前田又左衛門、佐々内藏介不破彦三被_レ下、其外は柴田修理亮に被_レ下、加賀國へ人數被_レ遣、大方屬_レ當手、然共一揆未_レ服、彼國溝口大炊介、小黒西光寺蒙_レ赦免、加賀國より引口に一揆相慕處、羽柴筑前守返合及_レ合戰、數百人被_レ討害、大正寺檜屋兩城有_レ普請、別喜右近被_レ置、此時信長對_レ右近種々令_レ諫言_レ給

立_レ引退、後陣原田備中守無理に押立けるか、節所成間進退不_レ任_レ存分、備中討死畢、最前備中を天王寺に可_レ被_レ置と曰處、何やらん備中守信長の御前惡して相止、然は備中此度可_レ討死_レ旨存定けると也、一揆共乘_レ勝、天王寺之付城相責、城中に佐久間甚九郎、筒井順慶、惟任日向守、猪子兵介、大津傳十郎相籠、梶川彌三郎、佐久間久右衛門、奈良清六等、於_レ城中_レ走廻、一日之中に二三度鍵を合_レこと也、堀も未_レ懸之間、古壘なと堀に用、牛馬を楯にして答、信長在京也、此旨聞給、則出馬五月五日、同六日、信長旗并先勢を天王寺へは不_レ懸、直に大坂へ懸間、天王寺を責ける一揆、あはや大坂を被_レ棄として、則引取處を、横懸に懸付る、又天王寺に籠城之衆則懸出、兩口より押合、追討に討間、數千討_レ留之、信長御身にも中_レ鐵炮_レけれとも、裏を不_レ懸、大坂一揆鐵炮數千丁にて相支間、天王寺へ懸給は、可_レ有_レ如何_レ處、名將之擬各感_レ之、殊此度は諸勢不_レ相調、俄事たる間、以_レ少勢之儀_レ也、奇特と云々、六月七日、安土へ令_レ歸城_レ給、於_レ天王寺に_レ戰功之衆へ、不_レ殘褒美被_レ行、七月朔日より、安土普請有_レ之、此比、自_レ中國_レ大坂へ入_レ兵糧、兵庫尼崎より舟にて

襲之と云とも、敵船は七八百艘の大船なれば、還て兵庫尼崎之者共多令討死、其後住吉濱に構要害、佐久間右衛門を被置、安土殿守は二重石垣也、高さ十二間、上の廣さ南北は二十間、東西は十七間有之、石垣の中を被用藏、七重の殿守也、同年十一月四日、信長上洛、妙覺寺宿し給、廿日に被任内大臣、去年十二月、可被任右大臣、旨有宣下けれども辭し被申、此度は被任勅定、廿三日參内也、進上物夥、公家中へも知行被充行、廿六日安土へ歸城也、十二月十日、信長安土を出御、三川國吉良にて鷹被遣、同晦日岐阜迄御歸、於彼地有越年、越前加賀兩國一揆多數致誅伐之由、自柴田修理方令言上、信長快氣也、加賀國は、去年別喜右近に被下、大正寺に令居城、然處に國不別喜、不靜謐之間致上表、信長内々不可然之由思給、依之尾張國の九坪へ古引籠、無程令病死、其後より加州をも被下柴田、八月、家康公到駿州山西御動、人足共如思令、新田、武田聞之、彼表に出張之間、遠州中郡に令歸馬給、さて武田は小山陣取、

三川國岡崎、此一兩年郷村々より躍有之、三郎信康依數奇也、若不快のをとりをは、弓を以射之給、九月、さはせ甚五郎と云者有之、是は元來三川岡崎三郎信康小姓也、傍輩の金作の刀大小を盜捕事露顯之間欠落し、此二三年中在甲州、彼國の住甘利三郎次郎を於小山陣中令生害、家康公陣中へ來、彼甘利と日來令知音、別て懇志之間、聊無隔心之儀、甘利寢入たる處を刺殺す、我刀を棄て、甘利か大小を取て指來、年來彼さは瀨甘利に令戀慕芳契、前代未聞、無物取諭、家康公へは令出仕、乍去さして舉用はなし、三郎信康主惡之給間、一兩年の中に他國へ又欠落す、此甘利年十七歳、武田家老也、人數三百餘備也、此年十一月、信長公爲叡覽内裡に鷹を居、庭上迄參内し給、各供奉之衆裝束竭結構、退出之以後、常の狩出立にて、東山鷹野有之處、雪甚、秘藏之鷹被見失、信長是を無本意事に思玉ふ、是を居來ん者、急度可有褒美との札を被立ける程に、有二兩日自大和國居來、信長甚悅給、

當代記卷二

天正五丁 信長岡崎にて越年し玉ふ事、松永滅亡のこと、荒木敵のこと、有岡城落去のこと、於安土淨土宗法華宗論のこと、三郎信康滅亡のこと、馬揃のこと、大坂本願寺退散のこと、高天神落去のこと、信濃入のこと、信長滅亡のこと、同武田滅亡のこと、明知滅、於甲州家康公氏直對陣の事、柴田崩、越前平均のこと、三七主滅亡のこと、家康與秀吉於尾州合戰、同無事のこと、佐々木陸奥守のこと、聚樂普請始のこと、根比滅亡のこと、秀吉公關白成喜申のこと、四國入のこと、越中入のこと、多武峯滅亡、大地震の事、石河伯耆尾州へ退のこと、家康公御祝言、秀吉公御妹嫁給事、家康公上洛し玉ふ事、

十五丁 駿河普請の事、秀吉公九州御動座事、十六丁 聚樂行幸事、金賦こと、大佛普請始事、十七丁 秀吉若君八幡殿誕生事、十八丁 小田原御動座、北條滅亡こと、家康公關東國替事、尾州主織田信雄下野那須に被移こと、十九丁 奥州一揆依蜂起、秀次出張の事、秀吉公若君八幡殿被薨事、歳三才、秀吉三川國爲鷹野御下こと、大和美濃守秀吉舍弟死去のこと、文祿元年 高麗入事、武州江戸普請事、二丁 秀吉御袋薨給事、各自九州歸陣事、三丁 伏見普請始事、同諸國知行高并普請役事、天正五丁 正月二日、正二位内大臣兼右大將信長卿自岐阜安土に歸城、同十四日上洛し給、庶人出仕被停止、深慮智化之老臣召集、未服國々可屬當手旨可言上之由曰、夕庵被殘置、廿五日安土へ令歸給、此春の比、觀世左近太夫當時能、於三川吉田病死す、此大夫は義昭將軍御牢籠之後遠州に下、家康公令扶助給、專酒井左衛門尉介法也、彼大夫女房於京都一兩年已前死去しけるか、吉田之大夫屋敷に蘆毛の

馬に乗來、馬取荷物を庭へをろし置と人の目に見へける、無_レ程大夫伏_レ病床_一相果畢、奇特成し事共也、此女房此以前大夫間柄依_レ不_レ憚、遺恨千萬云々、此女者觀世小二郎と云謠并脇の上手女、鬼若か母是也、二月二日、信忠雜賀出馬、是根來杉坊雜賀の三緘上洛して、可_レ致_レ忠節_一由依_レ言上_一也、信長出張給、小雜賀口にて堀久太郎人數百餘討死、谷輪口にて敵敗北、長岡兵部大夫手百五十討捕、三月朔日、鈴木孫一居城を被_レ責、竹たは棲樓を以緊攻_レ之間、孫一令_レ降參、所々不_レ殘放火、男女切捨、鈴木孫一岡崎三郎大夫大坂をかつき可_レ進間、可_レ被_レ助_レ身命_一之旨言上、信長令_レ承引_一給、佐野城に津田太郎左衛門杉坊相添被_レ置、紀州仕置仰付、廿七日到_レ安土_一令_レ歸城_一給、八月上旬、雜賀之中、又は紀州未_レ屬_レ當家_一所々、秋毛爲_レ可_レ蒞捨_一、佐久間右衛門父子被_レ遣、彼歸陣迄天王寺に羽柴筑前守爲_レ在番、松永彈正忠父子大坂取出に被_レ置けるか、八月十七日夜、大和國信貴城へ楯籠、信長より宮内法印被_レ遣、被_レ宥けれとも不_レ能_レ尊答、九月廿七日、信忠發向し給、十月被_レ攻落、是城中に有_レ調略故也、松永家に火を掛焼死、去永祿十年十月十日、南都大佛殿焼たりし日に

相あたる云々、松永從類森海老名、河内國片岡城に籠、長岡惟任筒井を被_レ遣被_レ責崩、此時長岡嫡子越中守_五弟五郎_四能動して、自_レ信長_一被_レ下_レ感狀_一、子右衛門者松永依_レ下知、庶人に相紛城を出たりしか、或者見付て討捕、此時信忠被_レ任_レ三位中將_一、廿三日、羽柴筑前守播州入、此次に中國一州望之由言上、楠長庵令_レ披露、其時は信長不快の氣色也、暫思案し給、任_レ申旨_一、朱印可_レ被_レ遣由曰、長庵如何思けん不_レ認_レ朱印、其後筑前守但馬國へ相動、敵城數多責落之由有_レ注進、信長御感甚也、此時楠中國一州可_レ拜領_一、朱印を認遣、信長快然也、十一月廿七日、秀吉福岡城被_レ取詰、攻口には小寺官兵衛、竹中半兵衛指置、我身は可有_レ後詰_一方へ打出被_レ陣取、如_レ案宇喜多和泉寺襲來及_レ合戰、和泉守敗北之間、二百餘討捕、則上月城被_レ責處、城中有_レ調略、上月十郎か首を切て奉_レ秀吉_一、然共自餘之者をも皆被_レ打果、山中鹿助被_レ籠置、敵の頸五百餘安土へ進上、信長悅給、十二月十日、信長爲_レ鷹野_一三川出御、廿一日安土御歸城、下旬に信忠爲_レ越年_一安土へ御參、自_レ信長_一數奇道具十一種被_レ進、初花、松花、鷹繪、竹の花入、鎖、藤流繪、道三茶碗、内赤

益、周徳か茶杓、肩衝、古市播磨守か高麗火筋等也、信忠令_レ畏悅_一給、

此年多門城の家屋をこほち、信長より京都二條に有_レ造作、親王に被_レ奉、此秋客星未申に在_レ之、是を時人號_レ松永星、同春越後景虎能登國に出張、七尾の城相攻、自_レ信長公_一人數被_レ出けれとも、七尾已令_レ落去_一之間、頓て右の衆歸陣也、

此年三川國侍衆の躍風流して可_レ來之由、岡崎信康曰間、各一手々々に被_レ躍、家康公不_レ可_レ然之由雖_レ思給、不_レ被_レ任_レ異見_一間、達て無_レ諫言_一之儀、

天正六_寅正月朔早旦に、御茶の會也、已上十一人、信忠公、羽柴筑前守、二位法印、長岡兵部大輔、林佐渡守、長谷川丹波、惟任五郎左衛門、瀧川左近、荒木攝津守、市橋九郎左衛門、長谷川宗仁等也、御座敷構六疊敷に、四尺縁、床波岸繪、中に萬歳大海、右に松島、左に三ヶ月、かへり花之水さし、周光茶碗、壺口釜、竹筒の花入也、信長迎に出給、膳を自身すへ給、日來各依_レ勵_一戰功、今靜謐之由曰、甚御感也、其後各有_レ出仕_一、同四日、信忠舊冬令_レ拜領_一給數奇道具被_レ開、萬見仙千代宿所也、右之衆參上、夕庵此比信長被_レ申_レ諫言_一、

節會并禮樂之事也、同月廿日、安土へ妻子未_レ引越_一者被_レ付_レ着到_一、凡百八十人也、爲_レ過怠_一道路を被_レ爲_レ瀧川被_レ遣、中旬之比、毛利輝元播州上月城を圍、羽柴筑前守荒木攝津守爲_レ後詰_一被_レ遣、此春越後景虎卒_去、_{十九}大虫と云々、及_レ死後_一辭世頌云、一期榮華有_レ一盃、四十九年一炊夢、三四句は不_レ繼して相果、北條三郎_{景虎}相州氏政弟也、喜平二景勝_{景虎}、鏑楯數度及_レ合戰、竟に討_レ三郎_一を、景勝爲_レ越後國主、上月爲_レ後詰、信長五月朔日可_レ有_レ發向_一之由曰、各諫言して云、彼地殊外の節所、殊敵陣隔_レ深谷_一熊見川あり、其上陣城を構_レ丈夫_一、兵糧已下三箇年致_レ支宅_一之由也、先我罷向見計可_レ言上_一之間、其中延引可_レ然之由也、さて各四月廿八日より出陣、五月七日信忠公出馬し玉ふ、六月三日、自_レ播磨_一飛脚到來、信長發向之儀必可_レ延引旨也、同十日、筑前守參上、尙以右之通言上、則播州へ被_レ歸、十二日、信忠神吉志方兩城被_レ取詰、始神吉にて味方手負死人多、後竹たはを付せいろを被_レ揚、兩城終に被_レ責落、三木城へ被_レ取懸、附城餘多有_レ普請_一、是も筑前守へ被_レ相渡、八月六日、信忠令_レ歸馬_一給、藝

州之毛利は昔鎌倉の因幡守廣元末孫と也、代々の名
 信長記十一卷有之、九鬼右馬允依仰、去六月廿六
 日、於伊勢雜賀浦々より賊船共多出、度々及合戦、
 毎度討捕、七月下旬に、大船數十艘にて着堺浦、九月
 廿三日信長御上洛、越中國一揆令蜂起之由注進也、
 齋藤新五被立遣、廿七日、九鬼船を可有御覽とて、
 住吉の信長御出、廿九日、於阿部鷹遣給、此夜彗星
 出、坤方、逾月不消、十月朔日快晴、九鬼船共并近邊
 浦々舟指物旗已下飾立、舟軍様子可學申、由信長曰、
 幸汝此度雜賀浦にて得勝利たる體を學へきと也、
 九鬼畏旨言上、信長見之給有御感黃金三百兩小袖十
 重被下、其上酒肴數多被下、舟祝可申旨仰也、さて
 堺宗久御茶上可申旨曰、御成有、其次而に宗易宗汲道
 叱座敷有御覽、翌日佐久間甚九郎御茶上被申、三日御
 歸洛、信長曰、甚九郎數奇殊外上手也、乍去武士たる
 者不可羨、夕庵申云、爲士者強好此道は武道は
 可廢、果町人職人之業也、信長令承諾於越中國齋藤
 新五所々放火、其上河田豊前稚名小四郎給相籠、今泉
 城へ相動及合戦、敵五百六十討捕、國中人質取、固神
 保安藝守渡置候由有注進、信長喜悅し給、十月十日、

安土へ令歸城給、荒木攝津守反逆之由從方々注進
 あり、信長聞給、是如何様人の可爲申妨、然は可被
 宥旨思召、友閑惟任萬見仙千代を十月下旬に被遣、
 荒木對面仕、聽而出仕可申旨也、家老者諫言、此度之
 儀、往々不可適其科間、此儘被止出仕尤之由也、
 荒木も内々存其旨、同此儀、右之三使の申切、露
 敵對之色、信長以厚恩成人者也、殊攝州被一國
 之間、逆心之儀有之間敷所、信長自愛之小性谷河藤
 五郎頼に企慮外、去年三川國岡崎へ御出之時、荒木
 門に立居たりしに、二階より長谷川尿をしかけたり、
 傍の人は是を荒木に告申、荒木不苦とて不立去、如
 此故に違心と云々、十一月三日、爲荒木退治、信長
 出馬し玉ふ、十一日高山右近屬味方、黃金三百兩小
 袖三重被下、茨木へ有付城、前田又左衛門、不破河
 内、佐々内藏助、原彦二郎、金森五郎八、日根野被入
 置、十四日伊丹へ被相動、貝野江附城に蒲生忠三郎、
 惟任五郎左衛門、蜂屋兵庫被置、信長信雄小野に被
 陣取、十五日、信長郡山へ被移陣、高山此所へ出仕、
 早鹿毛の逸馬、吉則の刀被下、當國芥川郡令拜領、信
 忠信雄より右近に有送物、十八日惣持寺付城普請之

間、茨木に被置衆を被移、茨木へは被移伊勢衆、
 廿四日、中川瀨兵衛屬當手、翌朝出仕、自信長金子
 三百兩、重郷脇指、鹿毛の駿馬被下、從信忠銀子千
 兩、小袖十重被下、廿八日、昆陽野へ信長信忠被移
 陣、花熊兵庫放火、下民數百人被切捨、十二月八日、
 伊丹城中有調略、人數を被寄所、露顯して相違、此
 時萬見仙千代討死、伊丹へ之取出堀口、原田、池田、一
 屋、大矢田、已上五箇所普請令出來、廿二日信長信忠
 令歸馬給、

天正七卯九鬼安土へ參上、長々堺浦に有て、苦勞之由
 曰、金二百兩、小袖三重被下、歸勢州暫可休息之
 旨曰、二月十八日、信長上洛し玉ふ、此春信長公在京
 之砌、從若狹國丹羽五郎左衛門、獻人魚を、面手足
 人に不違、長五尺計在之、彼魚岩の上へ登り寝るこ
 と良久、其所を見付取之と云々、此在京中に三條の
 宗運と云町人、老父に至孝の由を信長聞給、諸役を免
 許し、米百石被下、三月二日、信忠信雄信孝、上
 洛、五日信長攝州へ發向、伊丹取出在番衆被盡懇
 詞、廿日箕尾瀧有見、四月七日申刻、家康公若君誕
 生、後征夷將軍、秀忠公是也、四月七日、常陸國多賀屋修理亮より星

河原の四き七分の逸馬令進上、一日に五十里充通候
 旨言上、信長悅善し玉ふ、則金子五十兩、小袖三重、縮
 三十端被遣、使者銀子百兩被下、廿日多田、鹽川、森
 の亂を爲使者、銀子千兩被遣、政道淳路之由民言上
 之儀付而如此、五月中旬、靈譽と云浄土の上人、於
 安土有法談、建部紹知、大脇傳介、其場、問不
 審、靈譽の云、對大俗法論無益之儀也、日蓮の僧を
 令同道可來、依之京都法花上人堺の不傳、其外多
 集、信長曰、是無詮儀也、各令異見可相止者、然
 共日蓮宗曾て不承引之、た、天魔波旬の業成とて、
 信長甚不快、然共定日限南禪寺秀長老爲判者、因果
 居士已下有傍、若及喧嘩、なは如何とて、織田七兵
 衛、菅屋、長谷川、堀久太郎等令警固、日蓮宗の構夥、
 出世の僧百人餘被出、浄土宗者靈譽、貞安兩上人迄
 也、貞安問曰、法花八軸の中に念佛有哉、法花答云、念
 佛有、貞安云、有念佛は何ぞ無間に落る念佛を法華
 に説哉、法花云、法花の彌陀と浄土の彌陀は一體歟、
 別體歟、貞安云、彌陀は何くに有も一體よ、法花云、何
 を浄土門に法花彌陀を捨閉閣抛と捨哉、貞安云、念佛
 を捨よと云には非ず、念佛を修する機の前に、念佛の

外を捨閉閣抛と云也、法花云、念佛を修する機の前に、法花を捨よと云經文有哉、貞安云、法花を捨よと云證文こそあれ、淨土經に云、善立方便、顯爾三乘と云々、亦一向專念、無量壽佛と云々、法花云、以前の無量義經に、以方便力、四十餘年、未顯眞實と云り、貞安云、四十餘年の以法門、彌前を捨は、方座第四の妙の一字は捨る乎不捨乎、法花云、四十餘年四妙中には何の妙そや、貞安云、法花の妙よ、汝不知哉、日蓮宗此返答に不能閉口、貞安亦云、捨る乎不捨乎、扇を以扣と云へとも、猶擬議す、其時判者を始滿座一同に唾と笑、袈裟を剝取しかは、經箱已下取捨退散す、不傳不限此度、倭僧成として引張切にせられける、紹知傳介則被刎首、丹波國八上城、去年三月より惟任取詰間糧絶、城中之者共波多野兄弟三人擲て出間、六月四日安土へ具進上、則被刎首、此比伊丹取出に在陣之衆へ、鶴三聯帷廿充被送遣、七月三日武藤彌平兵衛越前敦賀の主攝州陣中病死、信長甚惜給、遺領男令拜領、十八日出羽の國從大寶寺、逸馬五疋、逸鷹十一聯上り、其中白の鷹一足有之、信長大に悦玉ふ、則黃金二百兩、純子廿端、虎皮五枚被下、使者に銀二百兩

被下、奥州の遠野白鷹進上、千福の前田令上洛、大鷹三進上、去五月宗論に勝たるとて、靈譽貞安に銀子被下、八月二日信忠攝州出馬、八月五日岡崎三郎信康主家康公一男令牽人一給ふ、是信長之雖爲聲、父家康公の命を常違背し、信長公をも被奉輕、被官以下に無情被行非道間如此、此旨を去月酒井左衛門尉を以信長へ被得内證所、左様に父臣下に被見限ぬる上は不及是非、家康存分次第之由有返答、家康岡崎へ御越、三郎主を大濱に退被下、岡崎城へは本多作左衛門を被移、三郎主當座の事と心へ玉ふ、家康公は西尾の城へ被移、三郎主遠州堀江へ移、又二股に移給ふ、九月十五日、於彼地生害し給、三郎主母公も於濱松被生害、九月廿二日、荒木攝津守伊丹城を忍出女房一人侍一人、尼か崎落行、兵庫の町人常見檢校中へ千貫文出、其身成檢校てをり物を取、座頭共信長へ令直訴之間、爲過怠、金子二千兩出、是を以被掛宇治橋、村井長春は此金被召上、事不可然と内々存と云々、菅屋九右衛門、長谷川竹も二百兩出、是は座頭を檢校にせられけると也、廿一日攝州へ信長出馬し玉ふ、去十七日信長伊賀國被

相動、失利、柘植三郎左衛門尉討死之由有注進、是悉皆の出頭人、信長大に令腹立玉ふ、廿七日信長伊丹の取出也、共有御覽、各引出物被下、十一月十六日、中西新八郎と云者、瀧川人數を伊丹城の上臘塚へ引入る、鶴塚の丸に雜賀の者共籠けるを、過半討捕、本丸に籠者共荒木久左衛門を始申けるは、尼崎へ參荒木に令異見、花熊尼崎同時に渡可奉間、妻子を其間被助置、よかしと申各承引、さて籠城之者共三百人、尼崎へ參へきとすれば、荒木鐵放を以防之、近邊へ不寄付、伊丹城へは織田七兵衛被移、無詮方散々に成行、さて荒木一類の妻子三十餘、京都へ被引上、相殘池田久左衛門其外宗徒の妻子二百人共、尼崎七本松にして皆張付被掛、尼か崎に籠者共の心中可察之、十二月十六日、荒木一類者共妻子、一條より車一兩に二人充乗て引せらる、佐々内藏助、前田又左衛門、金森五郎八、不破河内已下兵具して令警固、一番荒木弟吹田、廿一歳、是は荒木妹、二番隼人介妻、十五歳、荒木妾出し、三番荒木娘、十三歳、吹田妻、四番渡邊四郎、廿一歳、是は荒木志摩守嫡子也、同弟新丞、五番伊丹安太夫、年十、同子松千代、八歳、北河原與作妻、六番荒木與兵

衛妻、十八歳、池田和泉守、廿八歳、此二人は出しか妹也、八番伯々部、五十六歳、荒木久左衛門嫡子自然、十四歳、其外は不及記、此者共最後何も神妙也、丹後國へ長岡兵部大輔、丹波國へは惟任を去年被遣、兩國已平均、安土へ參上、進物不_レ知其數、北條氏政豆州砥籠へ出張、甲州と及_レ牟榑、是信長家康へ爲_レ入魂也、武田勝頼駿州沼津に在陣、然所に家康駿河へ被_レ相動、氏政被_レ押出者、武田定而可_レ引入、此度可_レ遂_レ會面との内々支宅也、武田少も不_レ引入、剩氏政陣中へ以_レ使者_レ申けるは、家康駿河山西へ被_レ相動之間、彼面へ可_レ向、合戰於望者、明日歟明後日、何之所へ成共返答次第可_レ出之旨也、北條不_レ能_レ返答、さて武田山西へ急罷向之條、家康早速に被_レ引入、十一月三日、二條の新造出來、則親王御移徙、其後信長參内、進上物夥、其比近習之輩に卷物二千端被_レ下、八幡宮へ去月信長御參詣之砌、樋をからかねにて鑄可_レ申旨被_レ仰付、鶴左衛門か所持の周光香爐被_レ召上、則銀子五百兩被_レ下、十七日能有_レ與行、近年より長陣仕、大名共各棧敷に折_レ廿合充、柳五十充、四日之間賄可_レ申旨、京中へ充課、京中へは黃金二百兩被_レ下、其外見物之上下有_レ送物、京中町へ

八木千石、安土の町へ三百石被下、是何も荒木成敗し給悦の心也、爰に安土山の記を策彦に被仰付しを、南化幸岐阜に被居申之間仰付尤之由策彦曰、依て南化是を被書、信長記に具有之、此比大名小名暇給て於在所令越年、

天正八庚辰正月、安土には近習の輩迄令伺候、六日播州三木城落去、別所兄弟腹切て、士卒皆被助命、此比無邊と云僧有之、吾は生所も無父母もなし、吾得秘法たり、之を得受する人は、現世來世如願と曰、依之貴賤信仰不斜、丑の刻の受法と也、米錢持來れとも曾て不納、安土へ參或寺に宿す、三月廿日、信長聞之玉い、其僧可對面、日間、楠長庵以稱之、信長厩へ出給有御覽、無邊と云は汝か、生國は何ぞ、無邊と答、信長曰、無邊と云は天竺か唐土か、答云、天にも非ず地にも非ず、信長曰、天地を離ては何の所に安身、此時無邊赤面す、さては汝は變化の物か、いて試んとて、馬に灸をする鐵を燒て面にあてんとし給へは、是は出羽國羽黒山之者成と、ふるひく申、汝此程弘法大師の再誕とて奇特を人に見せけると也、吾にも見せよと曰は、いらへをも不申得、か様の賣

子國の費也とて、引はらせ引刀にし玉ふ、五月攝州花熊城へ池田勝三郎相動所、自城中ふたくと出間空引しければ、敵尙以追來間、わきより城へ乘入て、則勝三郎城へ移、信長悦給、攝州一國勝三郎令拜領、剩正宗の脇指被下、男勝九郎十七、弟幸新三左衛門、十五、に名馬被下、

大坂を信長へ渡可、遂無事之由有勅使、門跡被應勅定、信長へも被立勅使、畏奉之、十二月從大坂下間刑部卿并少進安土へ參上、御赦面忝之由言上、從下野國宇都宮眞貞林方一駿馬壹疋進上、自信長色々被遣、江州之住人布施藤九郎度々有武功、才藝兼備間、信長近習に被成、六月廿六日、土佐國長曾我部方より青鷹十六疋、砂糖三千斤進上、砂糖は則被施人、七月廿日、大坂城被請取、矢部善七郎奉行とす、門跡へ從信長金五百兩、其外色々被遣、北の方へも金百兩其外被遣、按察法橋金二百兩、刑部卿へも二百兩、少進へも同二百兩充被遣、門跡は去月雜賀へ移玉ふ、自餘の衆今日退散、自門跡安土へ以使者被遣、禮、八月十日、近衛殿勸修寺殿庭田殿有同道、信忠へ可、遂禮之由信長日間、任貴意、

盛國太刀一腰、馬代銀千兩、卷物百端也、八月十二日、信長爲見物大坂に御越、自宇治舟にて下給、近年大坂に佐久間右衛門父子被指向、天王寺に在城之所、か程の小敵長袖を、長々敷相守こと不、及是非とて被勘發、十三箇條の以書付叱給、別なる儀無之、徒に無調略長々敷との事也、則天王寺を被出ける、侍小姓皆退散、た、三人高野山迄したかい行、此内も二人は懸而退散と聞ゆ、高野の辰巳之方に當て相江とて、纒にして所有、此所に被居、金子も十枚ほと希有にして持參せられけると也、或時山岡八郎左衛門道阿思立ち被尋、平井阿波入道安齋を被同道、佐久間對面して、涙を流感悦不斜、右の兩人尋けるを、其比各感しけると也、十七日信長自大坂歸洛し玉ふ、林佐渡守を被所、遠流、是昔年三十年以前、於尾州名護屋企謀叛、依其科也、又安藤伊賀守父子被所、遠流、是は先年武田信玄に致内通ける事有とて如、此、兩人終に無赦免、十一月十七日、備前國宇喜多屬味方之由、從秀吉有注進、廿日柴田修理亮於加賀國一揆の大將十九人、其外數多誅戮由注進、彼首共安土へ進上之間、被掛松原町に、

加賀國は別喜右近上表後柴田拜領也、

天正九年正月元日、御馬廻之衆出仕、從西門東門へ可通、可有御覽と也、諸大名は近年致長傳之間、於其所可令越年、由信長依下知也、然而未明より申刻迄不引切罷通、二日御鷹の鶴雁安土町人へ被下、町人致畏悦、於佐々木宮能を令興行、さて彼鶴雁を致調味、二月十八日、信長信忠信雄上洛し給、同廿四日自越前國柴田修理上洛、伊賀守召具、遂御禮、柴田進物太刀國光、馬代銀千兩、蠟燭千挺、奉書の紙千束、綿千、絹五百疋、翌朝御茶被下時、柴田直訴に姫口の釜奉望、則直に取出玉いしみの中の姫口を人に吸せん事をしと思ふ、此釜は古備後主より相傳の釜也、去正月廿二日被相觸ける馬揃、二月廿八日有之、各盡美色々の出立也、馬上已及百騎、一番に明知日向守皆紅の出立也、其次々不、及書載、甚結構の體也、信長は右之馬上の跡に乗給、先馬の前に夕菴法印を被通、其體小袖をつほをり、白髪をかつきの出立也、鞍にとり付、誠の老女の馬に乗たるか、危き様に見へたり、此夕菴は信長右筆、年七十餘之入道也、信

長公出立は、ほ、眉にほうこうをし給、牡丹作花を腰に指し、冠物にも作花をさし給たり、馬先に乗替十疋、種々無量之仕立、或は唐織、或は染縫薄猩々皮已下にて泥障をし、縦へき様もなき結構也、信長の馬の廻に小人衆紅梅の袷、上に黄衣、立烏帽子、のし付脇指、金の鼻ねち、紅のうてはしりにて、思々にのる、池田庄九郎は惣金之出立、其身の事は不_レ及_レ申、馬の毛爪等迄何も金也、馬の毛には、ふのりを以薄を置けると也、主上御棧敷にて御見物、馬場は内裏の東に壁三町横二町計に構たり、廻に柳を植る、椶はなし、又昨日の馬揃殘多とて、翌日はをり頭巾にて馬を被_レ乘、此時猩々皮はをり、各右之馬上衆一夜中にしたてけると也、何者のしわざにや落書有_レ之、金銀を遺捨たる馬揃、象碁に似たる王の見物、此馬揃に越前越中加賀國之衆は不_レ相上、其故は長尾景勝彼表へ出張、加賀越中之一揆爲_二手合_一ふとふけの城を取巻、賀州尾山に在城之佐久間玄蕃令_二後詰_一所、一揆早速に乘崩、城中之者皆以討死、玄蕃於_二途中_一聞_レ之急懸付、即時に乘返、右之一揆共一人も不_レ殘切捨る、

三月九日安土へ飛脚到來、信長甚快氣也、同十二日佐内藏助神保越中守安土へ參上、翌日出仕進物夥、然所長尾喜平次景勝出張して、越中國小井平の城を圍之由注進到來、信長曰、久々に而相上門[○]於_二京都_一一興可_二仰付_一旨思設玉ふと云とも、急罷下後詰可_レ仕由也、佐々神保夜を日次て下る、廿四日に越中の中郡に打出、長尾聞_二此事_一未明に引退、四五里か程追_レ之、敵曾て不_レ見、此間籠城之者對談して感悅す、此比長尾兵部大夫に丹波國被_レ下、此比城介信忠能を被_レ好、自身行_レ之給、手前見事之由、上下云々、信長聞_レ之給、武將たる者強不_レ可_レ好之由曰、甚無_レ興、則城介能道具悉召_二寄之_一を、丹波猿樂梅若大夫に被_レ下、舍弟伊勢國主信雄同北伊勢かんへの三七主も此道雖_レ被_レ好_レ之、信長不_レ知_レ之給、三月廿二日、高天神落去、兵糧斷絶之間、不_レ及_二了簡_一、城中より出たり、然間所々の堀柵きわにて討_レ之、但隨分の者共少々切抜けると也、六月若州逸見駿河守病死、實子無し、遺領八千石有_レ之、此内三千石武田孫八郎、五千石溝口伯耆に被_レ下、廿四日高麗鷹六連竹進上、此日相州民政より駿馬三

疋進上、廿五日羽柴筑前守秀吉因幡國取鳥城取巻、七月十日柴田修理亮方より青鷹六連、切石、其外色々進上、廿日秋田より青鷹五連、生白鳥十進上、廿一日信忠信雄信孝^{三七}安土へ着給ふ、信忠へ正宗脇指被_レ進、八月六日奥州會津の森高より馬三疋、蠟燭千疋進上、十四日馬三疋、黄金千兩、羽柴秀吉の方被_レ遣、今因州在陣也、八月十七日、高野聖方々にて擲捕上げ可_レ申旨被_二仰出_一、其子細は攝州伊丹守人内一兩人彼山に在と聞召て、急き出し可_レ申旨使者を以被_二仰遣_一ける所、返事さへ不_レ申、剩使者上下共廿餘人討果之條、不_レ相屈_一旨御腹立有て、方々被_二仰觸_一ければ、高野聖を數千人擲捕引來る、其誅罰の有さま哀也、自_レ昔高野山聖諸國へ下時、我と宿取ることなし、於_二路巷_一宿かやくと呼る、心ある人は不_レ寄_二上下_一宿をかす、若宿なければ、其ま、路頭に明す、信長今年聖殺害し給より此事なし、信長果給て後も、是より已來如_レ元呼る事なし、た、如_二旅人_一宿をとる、殊_に今は如_二商人_一衣類已下色々之たる聖は、笈をも不_レ持馬上にて國物を持來て令_二活劫_一少の坊をも令_二上下_一何も遠_二大師_一の控_二乎_一、九月八日小袖被_レ下、^{近習六}十月十日、取鳥城落去之由自_二因州_一注進、十一月朔、

皆川山城守方より名馬三疋進上、則純子十卷、縮百段、虎皮五枚被_レ遣、使者にも引出物、十月廿日、家康公高天神の出馬、是於_二遠江_一も肝要之地也、即構_二陣城_一、其間々堀柵三三重付緊被_レ留_二通路_一、家康は依_二信長_一異見_レ給、馬伏塚の城令_レ居玉ふ、自_二甲斐國御坊_一、^{信長}奉_レ返、は無事之儀雖_二言上_一、信長曾て用不_レ給、先是を奉_レ返、彼以_二助言_一可_二相調策_一也、此御坊は信長末子、去永祿三年に、東美濃岩村の養子、然を元龜三年に、城主^{女性、信長}の伯母也、武田信玄へ一味、其時御坊を甲州へ連申、御坊暫犬山に置被_レ申、其後安土に依_レ召被_二參上_一、則有_二元服_一、號_二源三郎_一、其時大名小名色々奉_二送物_一、其中に殊に勝たるは自_二羽柴筑前守_一銀子三千兩、小袖二百進上、此年春夏、大疫人多死、去六月十五日夜、星貫_二月_一、天正^{壬午}年正月元日、信長裝束し給、各可_レ被_レ見_二せ殿守_一間可_二罷通_一由御誼、其後於_二臺所_一大名小名に不_レ限、樽代拾疋充直に奉_レ捧、式法は重く禮儀は輕し、十六日佐久間右衛門紀州熊野之奥にて令_二病死_一、信長不_レ便之由曰、則男甚九郎を被_二召直_一、信忠に奉_レ公可_レ仕由曰、廿七日備前守喜多和泉守死去、吉光の脇指、金

三千兩進上、是遺言之由也羽柴筑前守被取持一聞、跡目無別條一幼息に被下、廿五日伊勢大神宮遷宮三百年無之旨言上、信長其賄を有御尋、千貫文被下行は、其外は以神力可成就之由神主申上、是は餘に輕き申様として三千貫被下、信濃國木曾の主伊豫守義政昌可致忠節之由、東美濃の苗木久兵衛を以信忠へ言上、此旨信長へ被得内儀、則信忠令出張給、又下條に伊豆守か一族下條九兵衛と云者、川尻與兵衛岩村家中有好屬味方、依之二月二日、武田諏訪上原の出張、其後鹽尻迄打出防、鳥井峠、又駿河國江尻に令在城、武田陸奥守穴山屬家康、可服信長幕下、由言上之間、則家康駿河に令出馬給、陸奥守妻信玄頼、并息勝千代を自甲斐忍出、江尻に引取、就其甲州上下周章不斜、勝頼陣中無正體之間、則自鹽尻甲州へ引退、此間信忠伊奈郡へ打入給、飯田大島兩城明て退、則高遠城へ取懸、無理乘給、城主保科彈正自裏口退間、則責入落去、諏訪祝降參、信忠少も無用捨甲州へ打入給、武田四郎同太郎大か原を退て都留郡天目山邊田子里へ楯籠、此時甲州男女之有様可察之三月十一日、先勢瀧川左近入數押入、勝頼同太郎切て出相闘

て討死、年三十九、土屋宗三郎無比類打死す、年廿七也、此は勝頼自愛の小性土屋右衛門弟也、此時勝頼の召具せられし女性四十四人、皆土屋さし殺、相從侍は五十餘人遂討死、勝頼討し侍に、自信忠吉光のわきさし、馬一疋、金五百兩被下、三月七日、信忠甲州着給、古府に御在陣、家康甲州市川へ被打入、彼地に在陣之間、同九日に古府へ參給、信忠有對面、又市川に被歸、三月五日、信長安土を立給、翌日濃州六の渡へ飛脚來、甲信駿三箇國無異儀被打果之由也、仁科勝頼首此所へ持參、信長大に悅給、十三日信長着根羽給、此所へ勝頼并太郎首來、信長甚喜悅、狂歌を讀給、かつよりとなる武田之かいてもなくいくさにまけてしななければ、此兩使信忠御馬一疋充、金百兩充被下、信忠あら波と云刀、いたや鹿毛の馬、帷百相添被進、勝頼の首飯田に二三日被掛、其後被掛獄門、武田左馬助は信州へ打越、關東へ可遁と内存所、於小室生害、此首同被掛獄門、年三十四十九日、信長上の諏訪へ御着陣、廿日、木曾義政此所へ始而出仕、太刀一腰、馬二疋、金二百兩進上、自信長金千兩、筑摩安曇兩郡を被下、家康昨日市川を出、今日廿

日出仕、信長曰、此度早速被達本意事、先年於長篠、甲信隨分之者共、被打果一故との御誑也、與平九八郎信長致出仕、信長此事思召出歟、殊外御懇也、廿一日、武田穴山陸奥守入道梅雪出仕、家康取持給、太刀一腰國久、金三百兩進上、自信長半俗の脇指の三つ刀を被下、彼仕合を信長被爲譽、甲斐駿河の本領致安堵、信州松尾小笠原掃部大夫同出仕、太刀馬進上、令本領安堵、相州の北條氏政より太刀馬金千兩、江河の酒十柳、白鳥十、漆桶二千進上、廿三日、瀧川左近に上野國并信州之内二郡相添被下、上州厩橋え移、又御腰物被下、深志之城に有之兵糧、陣中之衆へ被下、上野國の小幡上總介、信忠え出仕、貞宗の脇指、金五百兩進上、自信忠左文字脇指被下、自北條氏政白米二千石進上、家康よりも兵糧有進上、是は陣中にて諸士へ充課らる、諸士及難儀と云共、色々に相調上る、信忠此度不經數日、早速に甲信被納事、信長感給、此冬可被讓天下之由曰、其驗として秘藏の脇指被進、信忠畏悅不斜、但天下御讓之儀は、未若輩之間、不寄存之旨被奉返答、廿八日、信忠諏訪へ參向し給、有國割、此日寒氣甚、信忠の中間かる

き出立仕間、廿八日寒死、駿河國家康へ被下、甲斐國に諏訪一郡相添河尻肥前守、與兵衛上野國佐久郡小縣相添瀧川左近に被下、瀧川厩橋へ移、此時壁書を被遣、高井水内埴科更級四郡森勝藏後武藏守と改拜領、則海津に在城、河中島一揆起て大藏城に相籠、勝藏則責落、悉切捨る、惣別此度於信州先陣仕、度々之戰功感思召、伊奈郡毛利河内守、濃州岩村城に五萬石相添森亂丸に被下、此度自相州小田原、北條陸奥守爲氏政代官出仕有けれ共、信長無對面、信忠へ遂禮被歸、甲州之國侍、又は武田家之家老共、駿河信州の侍小山田山縣を始、悉被誅戮、三川國菅沼伊豆守父子、同菅沼新三郎、去元龜三年より屬信玄、天正三長篠合戰より信州に在國、此度降參し、頼河尻肥前守被陣中に居たりしを、自家康信長へ有言上、則生害せらる、諏訪の祝女は新三郎妻たりしか、聞此事、則子共指殺し、其身も令自害、素此女房大力也、此伯母も去比高遠にをいて無比類相動死したりしか、相似たる女也と皆人誦之、卯月二日、信長諏訪御立、翌二日、甲州の新府を被爲御覽、其より古府へ御移、暫く御座す、翌三日、江州佐々木二郎甲州惠林寺に隠て居た

る由風聞、信長聞給、早速に出可申旨、以檢使再三
 曰けれ共、全不實の由及返答、忍て令他出、信長甚
 腹立し給、津田九郎二郎、長谷川丹波、關小十郎右衛
 門、赤座七郎右門仰付、惠林寺に火を掛、澤川國師長
 禪寺の高山和尚を始、大綱陸庵兩人單寮也、悉被燒
 害、其中に未宗と云單寮自山門、飛落遁出らる、下法
 師若僧などは躍上り飛上り死たる有様絶言語哀
 也、東光寺藍田和尚は、其場をは遁出られけるか、於
 途中尾州の者行合及強問、被ける金を有のま、
 奪取て、後令生害也、十一日、信長甲府を立、元巢に
 着給、此間山路の茂りを伐拂間々に、家康より物主を
 被置、奥平九八郎信昌御迎に出けるに、信長殊外の
 御懇、中々申も愚也、先年於長篠、甲信隨分之者依
 討果、此度早速相治之由曰、甚御快氣也、十二日、駿州
 大宮へ着給、路次中富士山見物し玉ふ、於此所家康
 へ吉光脇指、一文字刀、馬三疋被進、十三日江尻に着
 給、翌日駿河府中、今川の代々の舊跡心閑に有、一見、
 藤枝田中城に御泊、さて遠州懸川御泊也、家康より天
 龍川舟橋かけ給、一日先立て上給、十七日三川國吉田
 に御泊、於何方も無御逗留、夜を籠て出御也、十八

日岡崎、何の於御泊も、惟任は老人成とて、廿一日に至安
 土歸城し玉ふ、信忠は信長甲府へ移給し時、信州上
 諏訪へ被移、信州より東美濃筋を上給、安土へ自諸
 國、東國平均賀し申事夥、三七主四國拜領し給、一萬
 五千餘集人數、五月十一日、至住吉下着し給、五月
 十五日、家康安土へ着給、廳而可被相上旨、於東
 に一信長依被命也、宿所は大寶坊也、金三千兩並馬
 鎧三百走進上、見之給、馬鎧者納給、金千兩をは被返
 進、在京中可被用之と仰也、路次中泊々從信長
 可馳走旨依仰付專之、惟任日向守於安土馳走
 被仰付、筑前守秀吉三月下旬に、備中國へ打入、すく
 も塚城責落、數多被討捕、則るつたか城へ被押寄、
 茲に自藝州、爲後詰輝元出張、同吉河駿河守元春、
 小早川左衛門尉隆景、數多以人數及對陣、信長聞
 之給、願所の幸、毛利を可打果旨曰、十九日、於安
 土に幸若八郎九郎舞仕、丹波の梅若太夫能仕、是家康
 爲御懇詞也、梅若大夫目暗沙汰と云能仕、信長甚不
 快、重而か様に無心得にをいては、可有誅戮と
 の儀也、八郎九郎今一番可申上旨曰、此舞尙以聞事
 也、信長快氣、金子百兩、帷廿被下、梅若太夫にも金

子同前に被下、廿日家康を高雲寺の御殿へ被稱、酒
 井左衛門尉を始家老之衆、并武田陸奥守^{穴山}被召寄、
 殿守見物仕、さて元の殿へ歸膳を被下、夜半迄色々
 被盡美、廿一日、家康上洛し給、從信長、長谷川
 竹を被付遣、在京中令馳走給、惟任日向守備中國
 可致出陣之由被仰付間、爲用意、丹波國龜山へ
 打越、愛宕山へ令登山、於社頭二三度鬪を取、廿八
 日、於西坊連歌興行、其發句に云、
 時も今天下知る五月哉 光秀、水上まさる庭の松山
 西坊、花をつる流の末を關留て 紹巴、百韻終て
 歸龜山、信長上洛し給、御供之衆纔に小性衆百五六
 十騎被召具、自餘之衆致陣用意、一左右次第中國
 へ可罷立之旨曰、安土本丸御番津田源十郎、遠山新
 九郎已上七八人、二の丸御番蒲生右兵衛太夫、森二郎
 左衛門、山岡對馬守已下以上十一人も、六月朔日、惟
 任日向守召寄明知左馬介、同次右門、藤田傳五、齋藤
 内藏助、溝尾勝兵衛、行之様子令調談、彼五人之者
 起請文をか、せ人質を取、明日中國へ可打立、人數
 を信長に可懸御目と披露、戊刻立龜山大江山を
 越、京へ急速に着、二日の曙、信長の宿所本能寺取卷、

弓鐵炮打込、信長聞之給、謀叛か何者ぞと問給、森の
 亂走出、惟任反逆由言上、不及是非儀と曰、弓を取
 矢數射させ給、屋代勝助已下厩より出、相戰て討死
 す、^{此勝助馬の段の目}近習の輩、同小性衆無比類、相動
 間、暫支けれ共、寄手大勢故、皆以令討死、信長御弓
 の弦切れれば、鎧を以戰はせ玉ふ時に、右の肘を被
 突れさせ給、内へ入給、向女房達曰けるは、女は不
 苦、急退き出よと三度まで曰、角て奥の間へ入給て
 後焼死玉ふか、終に御死骸見へ不給、惟任も不審存、
 色々相尋けれとも無其甲斐、^{年四十九}信忠此旨聞給、本
 能寺へ可有御籠として出給所、村井春長親子三人參
 上して、本能寺ははや火懸て事終て候、妙覺寺へは御
 歸不可有、二條の新御所へ被爲籠尤と言上、則二
 條に御移、親王若宮をは内裏へ移し奉、然共寄手も未
 襲間、安土へ移給、惟任有御退辭可然由各言上、
 信忠曰、か程の企謀反奴原か、なとか口々へ手を廻
 さて可有、於途中相果んこと可有爲無念、徒此所
 不可退、毛利新左衛門、福富平左衛門、菅屋九右衛
 門尤之御諍と申間、定此儀に、惟任深隱密しける間、
 路次へ其擬不成間、安土へ於御移は不可有別

條一所、御運の末と覺たり、及三午刻一惟任一萬計にて押寄、二條に相籠人々坂井越中守、團平八、齋藤新五、野々村三十郎、赤座七郎右衛門、猪子兵介、増傳三郎、飯尾茂介、村井長春親子三人、菅屋九右衛門親子三人、毛利新左衛門、織田源三郎主^{御坊}の事を始、究竟の衆六十五人、素不^レ惜^レ身命^レ被^レ相戰^レ間、輒可^レ相果^レ様なし、其後寄手上^レ隣家^レ以^レ弓鐵炮^レ責^レ之間、信忠御腹切給、鎌田五左衛門介錯仕、御死骸は任^レ御遺言^レ、焰の中へ奉^レ入、年廿六、此鎌田追腹可^レ切旨申けるか、何とかしたりけん終に不^レ切、右之六十五人之内、討死衆六十三人也、織田源五^{信長弟有}被^レ遁出^レける、時人令^レ惡、水野宗兵衛^{菊屋}此度は遁て菊屋へ被^レ歸、其後令^レ入道、岡崎へ被^レ參しか、家康公無^レ參會^{此宗兵衛は日比}、梶原左衛門か續子松千代煩て町屋に居、然共起上、二條へ可^レ相籠^{旨申所}、松千代内同名又右衛門と云者、爲^レ名代^{二條}へ相籠、信忠感悅し給、長刀被^レ下、能相戰て討死す、松野平介と云者、其日他出して信長御最^レ後不^レ知、後來て惟任をねらいけるか、中々傍へも不^レ寄せ付^レ間、經^レ日數^レて後追腹仕死、是は安藤伊賀か侍也しを、武篇の者也し故に、信長被^レ召上^レ、知行被

下ける、其恩可^レ報とて如此、明知日向守光秀は、信長信忠を心之儘奉^レ討、其日及^レ申刻^レ着^レ勢多、山岡美作守、同對馬守被^レ味方^レよかしと使を以^レ云、山岡兄弟彼使か首伐て、勢多橋を燒て、山中へ引籠、明知は歸^レ坂本、此日未刻計、此事聞^レゆ安土に、さて可^レ有^レ如何^レと密々に成^レ疑心^レ所、蒲生右兵衛大輔家中之者、自^レ京都^レしかくと云、同二日、山崎源太左衛門己か家火を掛、山崎引籠、蒲生右兵衛屹と思案して、信長の公達女房達、皆日野へ退申さんと呼^レ迎馬^レ翌朝三日各同道申、古郷日野の谷へ引退、女房達被^レ申けるは、色々の寶物敵物にならんこと無念也、蒲生取給て後火を被^レ掛候へとの儀也、蒲生答云、其は欲に耽けるかなと後難如何とて一色も不^レ取、家屋をも不^レ燒、森の二郎左衛門に能々可^レ守と云置、爰迄は清潔後日には少心違けるか、又は策か、明知へも無音にはなかりけるか、後には其事を布瀬藤九郎か科にして、藤九郎を窄人させられける、此藤九郎は蒲生右兵衛聲也、又尾張國の水野監物は則從^レ明知^レ翌日明知安土殿守へ上りし時も伴ける、時の人非人として惡^レ之、明知果て後、終に監物は窄人也、抑明知日向守光秀は

一僕の者、朝夕の飲食さへ乏かりし身を、信長取立給、坂本の主として、其上丹波國一圓被^レ下、かゝる不思議存立事不^レ及^レ是非^レ次第也、忽蒙^レ天責^レ、同十三日に相果、跡方なく成^レ、^{子時明知歳六十七}信長近年被^レ行^レ政務^レ儀、無道も無^レ之所に、如此横死し給事、偏に弘法大師之當^レ法罰^レ給云々、家康於^レ堺聞^レ此事、大和路へかゝり、高田の城へ被^レ寄、城主へ刀并金二千兩被^レ下、其日に被^レ相立、六月四日、三川國大濱へ舟にて下着し給、明知を可^レ討之旨被^レ相催、先鳴海迄出張也、此比秀吉公於^レ美作國高倉、森輝元^{中國}と對陣之處、信長没死之由有^レ告、先令^レ隱密^{、森と有^レ一和、攝州表に打出、山崎寶寺上の高山へ人數を揚給處、明知彼表に押出し、同六月十三日合戰、明知則敗北、坂本之城に可^レ引入^レ之旨存歟、遁^レ來於山科、百姓等に被^レ打殺^{、歳六}、此時安土に指置左馬介聞^レ此事、坂本に懸來、明知男の十五郎一所而城に火を懸切腹となり、齋藤内藏助を虜、京都へ牽上せ渡^レ大路、於^レ六條河原^レ刎首^レ、被^レ掛^レ獄門、此内藏介は信長勘當の者なりしを、近年明知隠して抱置、家康公鳴海居陣の處、秀吉より如^レ此様體委細有^レ注}

進^レ之間、則令^レ歸馬^レ給、六月廿八日、甲州出馬也、此先六月十日比、自^レ家康^レ本多百助を甲州へ被^レ遣、彼國は此春自^レ信長^レ被^レ置^レ河尻與兵衛、然處に信長聞^レ他界之由、國中庶民不^レ相隨、百助に可^レ相從^レ體也、先起^レ一揆^レ河尻居處に押寄、百助拵^レ之、河尻を上^レ方^レ可^レ相上^レ之旨相擬處に、河尻無^レ左右^レ百助を令^レ生害我身も自害了、相從^レ河尻^レ士上口に相上る、自^レ是甲斐國は家康令^レ押領^レ給、信濃口には與平九八郎信昌を自^レ家康^レ被^レ指向^レ伊奈郡令^レ隨順、至^レ于諏方^レ着陣、又自^レ甲州^レ酒井左衛門尉を信州に被^レ遣、彼國可^レ令^レ領納^レ由、家康下知給、酒井諸事仕置不^レ然哉、國中の民不^レ思付^レ之處に、關東氏直卒^レ多勢^レ信州を通、海の口若みこえ打出令^レ陣取、家康自^レ甲府^レ出向令^レ對陣^レ給、酒井左衛門尉も自^レ諏訪^レ此所に來、此比又自^レ小田原^レ都留郡黒駒筋へ相動處に、自^レ家康^レ甲府に被^レ殘置^レ衆懸向處、不^レ及^レ一戰、小田原衆令^レ敗北^レ間、追々討^レ之、又與平九八郎深志可^レ相移^レ之旨、酒井相談處、深志之城主小笠原左近大夫貞吉小田原へ一^レ味して逆心の間、鹽尻に居陣、酒井自^レ諏方^レ甲州へ被^レ引入^レ之間、至^レ于飯田^レ是も引入也、此比所々一揆

あり、高遠へは保科彈正自關東一氏直と来て令入
 城、此小笠原貞吉は二歳の時、深志を牢人して、
 此六月家康公以下知、被入深志一人也、
 十一月、家康氏直無事、家康女可嫁氏直之由有諾
 應、翌年小田原へ興入る、信州城々深志諏方高遠
 屬家康、自此信濃平均、但河中島は越後主長尾景勝
 被相納、又去五月、四國入可有とて、三七主信長大
 坂迄被打出處、依信長他界、大坂在陣也、是に相伴
 衆丹場カ五郎左衛門、何も自大坂攝州へ出、秀吉公
 と一手になる、織田七兵衛信長大坂爲留守居、自信
 長被指置處に、明知爲聲之間、於大坂三七主
 五郎左衛門有談合、押寄討之、自此年中、秀吉公
 爲天下主、此秋柴田越前主、於京都、佐々陸奥守越中、秀吉公
 各有談合、可治天下之由にて、各歸本國、此冬
 叡山かつく建立、正覺院僧正諸國勸進、
 又去四月、自甲州瀧川左近河内城主、并
 北伊勢主也、關東へ被遣、
 小田原の儀は奉從信長と云へとも、關東の士瀧河
 へ思付は誅戮小田原、關東可令取給有存念、瀧
 河拜領上野、厩橋に在城す、然處に信長聞他界之
 由、小田原氏直率多勢、彼衆を發向す、瀧河聞此事、
 武州之内てし河原の出向合戦、此時迄は西上野人數

瀧川衆也、始は瀧川打勝て、本庄原まで追詰、數多討
 捕、後は瀧川負色になつて、厩橋を引退、聽而厩橋を
 棄て、經信濃路尾州之歸長島、路次中無異儀、人
 數引連相通云々、
 去五月、武田左衛門大夫甲州穴
 山ことも、家康公に相伴上洛
 之處、信長被薨時、於大和國に一揆起て打果、息子
 勝千代武田信繼
 玄孫其塵、駿州江尻に在城す、是も一兩年
 中に令病死畢、さて穴山遺跡は絶果たり、惣別甲斐
 信濃諸士、去四月大概以滅亡也、此左衛門大夫を、此比は
 于時年
 四十二
 此八月、大洪水、駿州富士河かん原の町の東を流れけ
 るか、俄に無水河原と成、吉原に此河付たり、平家物
 語にも、此富士河はかん原の町の東と在之、
 天正十一癸未、去年より信雄信長
 二男爲尾州主、專秀吉公
 被馳走之、三七主信長息、信雄と同年、
 但別腹月弟也、岐阜に在、柴田
 馳走之、自此比天下の事、秀吉任我意被執行
 間、三七主柴田一味、而秀吉公に可有鉾楯之由也、
 四月岐阜へ信雄秀吉押寄、三七主を被攻處に、北國
 衆柴田前田又左衛門後改羽柴筑前、
 爲北國主、丹場五郎左衛門出
 江北、自秀吉構陣城被置置人數、志津か嶽を相攻、

因茲秀吉公自岐阜被表向、此比瀧川左近尾州
 城主、并北
 伊勢主也、柴田と一味之間、岐阜三七主と瀧川左近を
 爲相抑、信雄主彼表に令居陣、
 四月廿一日、於江北兩陣相向、柴田志津嶽を攻落
 し、所籠の人數打果、于時可企合戦之處、丹場五
 郎左衛門前田又左衛門屬秀吉へ、柴田備の出手之
 間、則敗北、秀吉追之、越前へ打入、柴田居城へ押懸
 らる、敗北の士卒未城に不入の間、柴田城に懸
 火、同廿四日自害之間、越前則平均、柴田妻女不出
 城燒死給、是信長の妹、淺井備前守後室也、此腹に淺
 井息女二人有之、乳母才覺故、無異儀令出城給、
 大坂秀頼の御袋并江戶將軍の御臺所是也、近年柴田
 家中に佐久間玄蕃伊賀但幼少名也、玄蕃は是柴田
 甥、伊賀は柴田養子也、とて兩人
 あり、彼伊賀去正月、秀吉に令一味、自去年江北長
 濱に柴田指置之處、於彼地如此一兩月之間令病
 死、養父恩重之處、令謀反之間、天の攻雖遁謂乎、
 玄蕃は專執行武邊、此度成生虜、自秀吉渡洛中
 刎首、被掛獄門、三七主岐阜を有退城、尾州の野
 間にて腹を被切、
 秀吉公瀧川左近居城河内被相動、瀧川上方牢籠、而

秀吉公に從身上爲不肖、
 此年出一身二頭子、
 四月、家康公甲州に下給、暫甲府に令逗留給、去年
 令謀反信州之小笠原右近大夫貞吉、諏方の祝、眞田
 阿房守、保科彈正、其外何も令出仕、此時信州置目體
 ならば、可爲平均物を、何の掟もなく、其儘被指
 置間、翌年秀吉公と鉾楯之時、小笠原右近眞田阿房
 守已下令敵對、
 琉球國使入貢、
 八月大水、近年無比類、
 天正十二甲申、此比信雄爲臣下者も、頼秀吉公を
 奉輕信雄を之間、一兩輩令成敗給ふ、其中に岡
 田助三郎と云者、別而秀吉公機愛之人也、是尾州尾崎
 城主也、如
 此之間、信雄秀吉内々不快由と云々、
 三月尾州主信雄憑家康公を、秀吉公へ敵對給、則家
 康公尾州に出馬、先北伊勢表に信雄可相動之由に
 て、河内まで今は長
 島也、被移之處、犬山の城を令調略、森
 武藏取之移之由依有告、北伊勢の動を延引、
 家康公清須に令在城給、星崎の城には助三郎弟并
 山口子令居、彼地爲肝要之巷之間令計略、山

口を引付、自_二信雄_一知行を被_レ遣る、城へ家康人數被_二入置_一、三月十七日、家康公羽黒表の出馬、森武藏守羽黒古き屋敷に柵を付、三千餘令居陣を不_レ知而、彼郷を以_二少人數可_二燒拂_一之由宣之間、奥平九八郎信昌一千計の以_二入數を_二爲_二先登_一押入處に、武藏屋敷表に打出、折敷て相答、隔_二小河_一互に以_二鐵炮を_二打_レ之、奥平衆鐵炮の上手也、憑_レ茲敵手負數多出來て、可_レ漏樣依_レ無_レ之令_二敗北_一、犬山近邊まで追々打_レ之を、此後相互動體を見に、武藏備不_二堅固_一、素武篇を嗜主也、是を無念に存、可_二討死_一之由思定歟、遺跡の_二脱カ_一を書置をして硯箱に置けるを、四月九日、於_二岩崎_一表_二討死之時見_レ之、誠に士の本意、哀なりし事共也、同廿八日、秀吉公小牧表の出張給、家康公對陣也、秀吉陣之面柵を付被_二相備_一、其勢十萬、家康信雄勢一萬六七千可_レ有_レ之歟の由云々、四月二日、池田庄入入道、同男庄九郎、森武藏爲_二先勢_一、三萬餘以_二入數_一、孫七郎秀次_{公甥}岩崎より岡崎邊に可_レ動之旨令_二擬被_二打出_一、家康公合戰可_レ有_レ之にて、六七八三日相續、小幡筋に被_二打出_一と云へ共、敵不_二相見_一、九日に又被_二打出_一處に、敵先勢池田庄入攻崩岩崎の城を、軍兵數多討捕

休居、家康公先勢秀次并堀久太郎人數を追崩、數多討捕、池田聞_二之_一を出向之間、右之衆退散、家康公押出、直に合戰、庄入并武藏守討死之間、士卒令_二敗北_一、二萬餘討取、秀吉公聞給則出馬、龍泉寺山に打上り給、于時家康公朝之合戰に、士卒相勞の間、先刻早小幡の城に令_二移給_一、其晚に及暮小牧山に歸陣、但路次被_二相廻_一也、秀吉公は其夜龍泉寺に陣取、翌日本陣に被_レ歸、此度被_二打負_一合戰謂乎、此比さばせ甚五郎又可_レ來歟の由家康公曰處に、如_レ案此陣へ來、家康公の出仕は有_レけれども、無_二舉容_一之間、又頓て逐電、高山に揚_二入數_一令_二用心_一、恐怖給しと見たり、然處伊勢筋之手當に被_二指置_一、美濃守_{舍弟}并筒井順慶、其外二萬餘、秀吉公の陣所につく、これによつて士卒快氣と見えたり、五月朔日、秀吉公小牧表の對陣を退給、先出備を漸々に陣拂をし給、其體神妙に見へたり、置目奇特云々、家康此體を見給、人數一騎も不_レ被_レ出、是も名譽の仕置也、秀吉公竹かはなを取詰、水攻にし給、同月下旬に落去、堤きれて水攻成就有_レ之間敷處、堤不_レ切以前に拵相濟の間、違背如何可_レ有_レしとて令_二出城_一となり、秀吉公是に氣を直令_二歸馬_一給、家康公清須に令_二在城_一

給、小牧は酒井左衛門尉令_二在城_一、斯比信雄長島に在城、

緯已爲_二以後_一之間無_二其詮_一、極月信雄濱松に來臨有_レ之て、當年家康公尾州に長陣を禮謝給、一兩日有_二逗留_一歸國也、

六月蟹江城主心替而瀧河左近を引入る、暫時に家康公有_二出馬_一被_二取詰_一、折節早天の間、足立輒して如_レ思被_レ責_レ之、瀧河令_二降參_一、出城之間、城主同退散也、秀吉自_レ是疑_二疑心_一、瀧河彌身上成_二不肖_一、其年の暮、瀧河親子共令_二病死_一、八月秀吉公尾州中通奈良表に出張、取出を五三箇所有_二普請_一、家康公自_二清須_一出向、しげいに令_二居陣_一給、信雄同_レ之、懸て秀吉令_二歸陣_一し給間、家康も清須へ入馬給、此度秀吉公人數八萬六千之着到云々、又見及體も如此、信雄家康の衆纔一萬之不足に見へたり、十月十六日家康遠州に歸陣給、同月下旬に、秀吉公又北伊勢表に出張、因_レ茲家康公十一月又出馬之處、未尾州に無_二着馬_一以前に、信雄秀吉令_二一和_一給間、家康公獨非_レ可_レ被_レ及_二干戈儀_一條、同無_レ事給、十一月十六日に歸馬也、斯時家康息を秀吉公可_レ被_二養子_一にて懸而被_二相上_一、秀吉公令_二擇悅_一玉ふ、是を號_二三川守秀康_一と、在大坂也、於_二河内_一國一知行一萬石拜領也、去十月佐々陸奥守_{長取立}、信雄家康令_二一味_一、能登に打入之由有_レ告、然其

同十二月、佐々陸奥守濱松に下、于_レ時信雄吉良鷹野し玉ふ間、於_二彼地_一佐々有_二對面_一、さて懸而歸國、上下信州を通、去二月、北條氏直下野國宇都宮に相動、外廻輪并町放火、及_二歸陣期_一、佐竹_{當陸}出張、宇都宮彌三郎、皆川山城守、みぶ、たがや、結城、是等は皆小田原へ敵對之間、毎度與_二佐竹_一、下野國富田近所於_二沼島_一、北條氏直と對陣、同四月、當座無事の姿にて、双方歸陣、天正十三乙酉正月、下野國佐野に付城在番之小田原衆、馬足輕之動有_レ之處に、城主打出る、小田原衆歸し合相戰、佐野城主を討捕、然其城は殘者共堅固に相抱、右之旨自_二小田原_一家康公へ令_二注進_一、彼首を三川に持來、此春より京都聚樂普請始、是後醍醐天王大内裡之舊跡云々、然故歟古鐘其外家屋之具掘出しけると也、四月、秀吉根比に出張、彼寺則滅亡、是は去年秀吉公

小牧表へ在陣之時、屬信雄家康大坂表に相動、所々令放火、故に如斯、其比中村式部少大坂爲留守居、被指置之間、出合戦、根比衆則敗北也、七月十三日、秀吉關白成之御參内御悅、

親王 若宮 近衛大御所のこと 龍山 九條殿 一條殿 二條殿
是は近衛殿と座論にて則御立候 伏見殿 宮 宮 宮

花山院 久我殿 大炊御門 西運寺

一初獻 のし 秀吉公の事也 關白 菊亭殿 徳大寺 西運寺

二 かちくり そき物 御盃 御かわらけ

三 はむ 御ちん 御すい物たい

さしみ とり 御すい物鮒

四 はまくり けつり物 御さうに

五 むしむき 御そゑ物れうさし

六 はひ うけいり

七 たこ からすみ くしら

御本膳 しほ引 やき鳥 さんせうはむ

あへませ 食 金銀繪あり

二 かうの物 ふくめ あつめ汁

三 からすみ すし 鯛の汁

金のきそく にし 白鳥汁

たまなかつほ 白鳥汁

御菓子九色

うすかわ からはな やうひ りんこ まめあめ
こぶ うちくり ものり

以上つくりはな色々あり

七月、美濃守 秀吉公 舍弟 四國に相動、則四國平均す、

閏八月、秀吉公越中の發向給、信雄從之出陣、以彼拵無事、佐々木越中國を大目上表して從秀吉公、

八月、信濃國眞田阿房守居城に依家康公仰、甲信人數相動、寄手少々敗軍の體也、此眞田は去年、家康公に隨、自去去年秀吉公に奉從、于今家康公に不從之間如斯、

同八月、大和國替國主筒井順慶、去六月死去、彼遺跡被移、伊賀、則號伊賀守、大和の國者美濃守被領納、

十月、多武峯に自秀吉公、人數を被指立、則多武峰滅亡、

十一月十三日、石川伯耆守 家康公 臣下 尾州に退、是は秀吉公與家康公間柄爲使、然處家康公可有上洛之由

秀吉宣、家康又無左右、有上洛間敷由也、此上は定可被及、及鉢楯、歎之由、依兼知、如此、特に又爲三人質、三男を秀吉公に指置之間、猶以右之通也、去秋

越中の發向時より越後景勝屬秀吉公に、京都聚樂大名屋敷普請專也、此比叡山いよ、建立、正覺院之僧正諸國を勸進、自此相續坊々追々立、然共去辛未年、此山滅亡の後、猿共一圓無之奇特と云々、同十一月廿九日、子刻大地震、此時諸國山崩地裂、中にも北國如斯人馬多倒死す、尾州長島 當時織田 信雄居城 百八里多以成川、城中家倒令燒失、關東は此地震無之、十月信濃國深志小笠原右近大夫貞吉高遠に動、高遠城 主保科 彈正 不_レ及_二一戰_一之間、所々放火、此小笠原自去去年家康公へ敵對、延譽上人と云淨土知者有也、此僧先年大和國三輪の山に九年山居せられしに、其間山犬三疋來草庵口に、毎夜居たりしと被語ける、又其後山城國高尾山に三年被籠し時、僧を可奉慰とて、毎夜をとりをしける、定て狐のわさかと曰けるとなり、さて京都に居住有しに、餘人民物を持運ける間、已後は悪心も出來んするかと、此春頸をく、り被死ける、有難かりし事共也、天正十四丙戌正月廿七日、秀吉公家康公爲入魂、信雄岡崎まで來臨、家康自濱松、出向對面給、双方快

然、而廿九日に尾州に歸給、三月九日、於三島に家康公與氏政對面、入魂の體也、十一日、又於沼津對面也、五月秀吉公妹家康公に嫁、濱松に輿を被入、七月廿四日、親王崩御、此親王は正親町の一宮陽光院の御事今上の父也、七月十日十一兩日、三州於新城觀世大夫有能、亭主與平九八郎信昌擊鼓快然、自吉田酒井左衛門尉父子來臨而鼓を擊、九十兩月、家康公以下知、駿河甲斐三川吉田有勸進能、十月家康公御上洛也、若上レ給は、妹を返し給て、可被及三千戈之由一途に宣、殊秀吉公御袋の大政所を岡崎迄可有下向之條、無疑心上洛し給有對面、彌可有入魂之由也、因茲如此、家康公北の方自濱松岡崎有御出、御袋對面し悅給、秀吉公家康公之上洛を快悅し給、刀脇指并數寄道具何も直千金の物也被進覽云々、家康應而令下向給間、大政所も則上給、秀吉家康入魂し給を、小田原の氏政父子心底不快と云云、

十一月廿九日、今上即位、天正十五丁亥二月、駿河府中石垣の有普請、自去々年雖有事始、上方不快之間、指て事不行、今秀吉

公令入魂給、普請且々出來之間、自濱松北の方をも引越給、三日朔日、秀吉公九州御動座、筑紫不殘屬當手之間、七月御歸洛也、八月、家康公自駿河上洛給、九州平均を賀給、家康公應而令下向給、閏十一月十三日、碁打の本因坊新城の下、亭主九八郎信昌、此夏於京都爲碁の弟子の間如此、則令同心駿河に被下、家康公圍碁を數寄給間、日夜有碁、翌春令歸京、此春筑紫陣留守、秀吉公の甥孫七郎秀次手時中納言也聚樂在城、而普請爲專、九州には佐陸奧守を被指置處、一揆所々に起、陸奧守方々の相動無比類相靜る、其後召上彼陸奧守を被生害、時の人は是を令不審、是は先年秀吉公家康公鋒楯の時、秀吉公に敵對之間及此儀歟、翌年有圍碁勝負、自餘の上手に先強く、本因坊を天下一し給、此五三ヶ年、三川遠江駿河有拾二座云事、諸商人之儀は不及言に、少之賣物にも有役、中にも三川國は淺井六之助と云者爲奉行、取分緊く行之間、庶民

爲之惱亂無止時、又誰人之雖知行、百姓を彼六之助遣之を、然間爲通當座之難、自在々民屋相應したる土産捧之事無隙、各の書曰、三月朔日、秀吉公九州御進發之砌、諸士出陣日限人數積之事、

- 正月廿五日 本役一羽柴備前少將八郎事 萬五千
- 二月一日 四千宮部中務法印坊事
- 同日南條勘兵衛尉伯耆
- 同日木下平大夫
- 二月五日 本役八百明石左近播磨衆
- 本役別所主水正 二百
- 本役中川右衛門大夫衛兵 三千
- 本役羽柴丹後侍從長岡越中事 三千
- 二月十日 本役一萬羽柴中納言美濃守殿の事 五千五百
- 本役千羽柴伊賀侍從筒井四郎事 五百
- 二月十五日 本役千羽柴若狹侍從五郎左子 五百
- 本役千羽柴丹波少輔秀吉公御甥 五千
- 半役生駒雅樂頭甚助 八百

- 二月廿日 三分一役 羽柴東郷侍從 千七百
- 三分一 木村常陸介準人 役千
- 三分一 村上次郎右衛門 役千
- 三分一 山田喜左衛門 役百卅
- 二月廿五日 三分一役 織田三郎上野殿 千三百
- 三分一役 岡本下野守太郎右衛門尉事 百五十
- 半役千林長兵衛武藏 森右近弟
- 三月一日 御馬廻衆
- 千尾州大納言殿衆
- 二百水野宗兵衛尉
- 四分一役 羽柴陸奥侍從佐々 役五百
- 前備 五百羽柴河内侍從毛利
- 十五 市橋下總守
- 三千羽柴越中侍從前田又左
- 三分一 羽柴北庄侍從堀久
- 三分一 青山助兵衛尉 役三百
- 三分一 溝口近右衛門 役七百
- 三分一 太田小源五 役百
- 三分一役 羽柴松島侍從蒲生忠三 千七百
- 舟にて人數 九鬼大隅守 あり次第
- 同千羽柴岐阜侍從池田三左衛門
- 三分一 羽柴曾禰侍從稻葉 役五百
- 關白殿 御小性衆
- 三分一 羽柴敦賀侍從蜂屋 役五百
- 五百石川出雲守
- 四百羽柴左衛門侍從
- 二百蜂屋大膳大夫子
- 十五 生駒主殿佐

百五 有馬刑部卿法印 百 矢部善七郎
 二百稻葉兵庫頭 百 三田左太郎
 五百津田隼人正四郎左 三百瀧川儀大夫
 五百牧村兵部大夫長兵衛 百廿勢田掃部頭
 九十池田久左衛門 百廿古田織部頭
 百 稻葉右近 百廿柘植左京亮與八
 脇備 千二 淺野彈正少輔
 千 木下式部大夫 百六 山崎志摩守
 百六 戸田民部少輔三郎四郎 七十 戸田半右衛門
 七十 長谷川勘兵衛尉 五百富田左近將監
 後備 百廿津田大炊頭
 百五 早河主馬尉 百五 大鹽與一郎
 二百寺西次郎助 百五 加須屋内膳
 片桐市正 百廿河尻肥前守典兵衛子
 四百池田備中守三左弟藤三郎 百五 吉田兵部少輔
 百七 加藤主計頭 百 丸毛三郎兵衛尉
 百 間島彦太郎

ひの殿馬、駿河大納言殿家康公馬、諸大夫十二人、
 くわんむ四人、布衣四人、しらはり着十二人、
 烏帽子すわう着廿人、大和大納言殿秀吉公舍弟美濃守の事馬、
 諸大夫十六人、くわんむ四人、布衣四人、白張
 着十二人、烏帽子すわう着廿人、公家衆各、淨
 妙院殿馬、各公家衆、こわた殿馬、各公家衆、
 法淨寺殿馬、中納言秀次のこと秀吉公甥馬、諸大夫十二人、
 くわんむ六人、布衣四人、白張着十六人、烏
 帽子すわう着十二人、公家衆各馬、牛二疋御車引
 替、牛飼一人、こしきぬに桐のとうのもんあり、
 くつ紅絲いれふね一、關白秀吉公車、牛角耳別につ
 くり付色金也、しりかい紅絲を以組之、諸大夫百
 廿人、くわんむ六十人、布衣卅六人、白張着五
 十人、烏帽子すわう着百人、長谷河藤五郎馬、
 羽柴筑前守能登加賀越中主馬、諸大夫、くわんむ、布
 衣、白張着、烏帽子すわう着何も有之、織田上
 野守信長舍弟馬、丹波少將馬、岐阜主城介殿一男馬、長岡
 越中守馬、豊後大友馬、武衛馬、ひの蒲生飛驒守
 馬、三吉馬、毛利河内守馬、たのしほかう馬、
 池田三左衛門庄入男馬、金吾主政所甥吉養子馬、長曾我

部土佐馬、大和大納言養子馬、右公家諸士、各唐織
 を着、太刀を帶、同沓を着、十五日、京都の地子内裏
 に向後可被納之由、秀吉公奏給、御感不斜此近代武家納之
 至子自今以後、此時衆中雖知天下、於此地子者、
 不可有改變、由各獻起請文、是秀吉公依仰也、
 十六十七御逗留中、進物不可勝計、初十五日に有
 九獻御祝、一獻々々に進物有焉、十八日還御、
 五月、雷聚樂の落、二人悶絶、
 自三此春、京都に大佛始、
 此年於三聚樂、關白秀吉公金賦りあり、内裡に金千枚、
 其外銀進上也、諸大名に金五百枚、三百枚、二百枚、其
 上銀を相添被遣、前代未聞之儀也、夥共無云量、其
 體城の門外於廣地に、秀吉公束帶し給、將器に腰を
 かけ令居給、各も裝束し、謹拜領之、大名小名不殘
 如此也、非楊震賢、各拃躍不斜、
 天正十七己丑正月、
 四月、於淀秀吉公若君誕生、是號八幡太郎、大名小
 名は金銀、京堺を始、所々の町人進物不可勝計、
 是進物大概以紅の褶也、頃のはやり物也、此年、三
 遠駿信甲、自家康公有繩打、去年諸給人之知行

成物の内、五十分一を被_レ召上_ニ、五千餘の成物にて、百餘也、其成物高を以て、被_レ充_ニ行本主、其上の出目之儀は被_レ召上_ニ、伊奈備前專執_ニ行之、四月大政所赤痢を御煩、大閤秀吉公大社何も有_ニ立願、米穀有_ニ寄進、中にも伊勢春日へは八木一萬石充也、其故にや雖_ニ大病一本復也、六月、大藏道知入道駿河_ニ下、是鼓打至_ニ于當世_ニ無双之上手也、

七月、家康公能し玉ふ、道知鼓を打、奥平美作信昌去、亥夏より於_ニ奈良_ニ傳_ニ此道、伊井兵部少直政同秋習_レ此之間、今於_ニ駿府_ニ猶以相傳す、

此年、延曆寺再興也、但諸國勸進、此事雖_レ被_レ得_ニ秀吉公命、古信長の御時、至_ニ自今以後、誰々雖_レ知_ニ天下、不可_レ有_ニ叡山再興之旨、被_レ書_ニ起請文、依_レ之急度秀吉公不_レ及_ニ助成、以_ニ法力_ニ建立尤之由有_レ仰、八月、京都東山大佛之柱を、自_ニ富士山_ニ可_レ出由、自_ニ秀吉公_ニ依_レ仰、家康公之衆各引_レ之、天正十八庚寅正月、家康公妻室秀吉公妹於_ニ京都_ニ病死給、小田原爲_ニ出勢_ニ比之間、令_ニ隱密_ニ露顯し不_レ給、此春、信州淺間山焼上、焰東の方_ニころふと云々、

此二三箇年中、有_ニ氏直上洛_ニ可_レ入魂給_ニ之由、秀吉公雖_レ有_レ命、氏政不_レ及_ニ承引_ニ、氏直爲_ニ家康公望_ニ

三月朔日、關白秀吉公關東_ニ御動座、先孫七郎秀次先_ニ秀吉公_ニ駿豆境惣か原に着給、秀吉公彼地_ニ令_ニ着馬_ニ給、此時つくり鬚を、大なるのし付を指玉ふ、三日の内_ニ令_ニ出馬_ニ、山中の城を卒爾_ニに攻崩、則小田原_ニ押寄給、其勢卅萬と云云、城惣廻及_ニ三二里、手攻口に堀々を被_レ付、敵城にも人數三萬餘、雜兵共六萬と云々、然共敵兼て自_レ城不_レ出、先秀吉公湯本の寺に令_レ居給、

自_ニ五月_ニ城の向の高山に石垣を築、被_レ立_ニ家門_ニ、敵城を直下給、敵是に氣を屈、又豆州葦山_ニ分_ニ人數_ニ被_レ攻_レ之、城主北條美濃守氏政弟と云者也、此時搦手は羽柴筑前守北國主前田の爲_ニ大將_ニ、其勢三萬餘、歷_ニ木曾路_ニ上野松依田城を取捲攻_レ之、四月下旬落去、城主小田原譜代の臣下大道寺令_ニ惘望_ニ、從_ニ筑州_ニ爲_ニ案内者_ニ八形_ニ押寄、彼城主阿房守氏政弟美濃守と同年、但一腹云々、此阿房守は兄弟中にて、年來專爲_ニ武將_ニ、入數被_レ付、知行已下任_ニ存分_ニ之處、今不_レ及_ニ五日_ニ滞留_ニ、如此事、不_レ及_ニ是非_ニ次第也と云、則令_ニ懇望_ニ從_ニ筑州_ニ、依_レ此筑州武藏國_ニ進陣、此時秀吉公自_ニ陣中_ニ、淺野彈正木村常陸守被_レ遣、家康公より本多中務平岩主計被_レ相副、各筑州成一手關東中之

城を攻落、素關東士卒悉小田原城に相籠之間、右の城城無人たる故、其程落去す、敵の輩妻子以下悉奪捕の間、小田原に所籠の士卒迷惑す、小田原籠城中松田尾張守是は氏直代々、臣下家老なり、秀吉公_ニ令_ニ忠信_ニ、人數を城中_ニ引入、氏政父子を可_レ令_ニ生害_ニと也、松田一男は父在_ニ一所に、二男左馬介は氏直爲_ニ近臣_ニ之間、此旨を召寄相談處に、左馬助氏政氏直_ニ直令_ニ言上_ニ、但爲_ニ此勳功_ニ父之命を可_レ助給_ニ之由申條、則松田を被_レ押籠、

七月中旬、氏直背_ニ父命_ニ、寄手陣中_ニ走入、被_ニ惘望_ニ之間、被_レ助_ニ身命_ニ、此模様專岩村十郎以_ニ覺悟_ニ也、是氏政、二男也、氏政同弟陸奥守於_ニ城中_ニ腹を切、委序に書載たり、自_ニ秀吉公_ニ松田を早速_ニ被_レ斬罪、是は爲_ニ譜代臣下_ニ、主人_ニ令_ニ謀反_ニ、剩不_レ遂_ニ本意_ニ之間、無_ニ云甲斐_ニとの貴命歟、左馬助は氏直高野山_ニ令_レ伴居す、氏直病死之後、北國の主前田肥前守被_ニ相拘_ニ云々、又松田末子十三の僮、同令_ニ生害_ニ給、是多能_ニにして殊美麗、人僉莫_レ不_レ惜_レ之、見聞之衆拭_ニ悲涙_ニ、又松依田城主大道寺をも令_ニ誅戮_ニ給、是も久臣として令_ニ惘望_ニこと、爲_ニ比興_ニ之由思給故か、葦山城主美濃守氏政弟小田原如_レ此成行間、城を渡家康陣中_ニ馳來、兄の生害之時介酌す、是は去

去年爲_ニ氏直名代_ニ令_ニ上洛_ニ之間、秀吉公有_ニ憐愍_ニ之意、大坂_ニ被_レ爲_レ上、於_ニ河内國_ニ知行一萬石被_レ充行、奥州の伊達政宗、去六月小田原陣中_ニ參、是秀吉公_ニ爲_ニ出仕_ニ也、近年は小田原と入魂之間、秀吉公暫無_ニ對面_ニ、然共國替已_ニ下何篇にも可_レ奉_レ任_ニ貴意_ニ之由、強て令_ニ言上_ニ之際對面給、尾州主信雄_ニ可_レ有_ニ國替_ニ之由、秀吉公雖_レ有_レ仰、令_ニ難澁_ニ給、依_レ之秀吉公有_ニ腹立、尾州を召上、下野國那須_ニ被_レ移、於_ニ彼地_ニ二萬石拜領也、翌年又自_ニ那須_ニ伊豫國_ニ被_レ移、北條氏直則伏見_ニ被_レ上、氏政弟共何も同伏見大坂_ニ被_レ爲_レ上、

八月家康公關東_ニ國替あり、伊豆相摸武藏上總下總上野下野家康公爲_ニ分國_ニ、但下野は半國也、是近年、小田原領分の國々也、同月、秀吉公自_ニ小田原_ニ直_ニ奥州會津迄_ニ令_ニ出馬_ニ給、依_レ之奥州平均す、會津には蒲生飛騨守被_ニ指置_ニ、知行九十萬石拜領、政宗は岩手山に在城して、六十二萬石拜領、此月中、秀吉公御歸落、此冬奥州一揆少々雖_ニ蜂起_ニ、飛州隨分被_ニ相靜_ニ、又此年中、秀吉公_ニ爲_ニ音信_ニ高麗人渡る、此度關東城共、從_ニ家康公_ニ被_レ指置_ニ衆惟多之間、不_レ能_ニ書載_ニ、結城には三川守秀康家康公二男在

城、知行十萬石後越前主也、忍には福松丸家康公四男、在城、知行十萬石後號下野守、尾州清須に在城、

此比關東中知行取先私に竿をあて、員數を可_レ言上_レ之由也、翌春立_レ檢使、或は四割、或は五割六割を懸て高の内に封す、假令十萬石之高にて、十五萬十六萬石に成也、小給之知行は、家康公より被_レ當_レ竿を_レ之間無_レ別事、

天正十九辛卯正月廿一日、大和大納言秀吉弟、美濃守事、死去、此春中、淺間山夥く焼上、此春夏、奥州九のへい一揆蜂起、

七月、中納言秀次奥州有_レ出勢、家康同先_レ之に出陣給、九のへいの城主虜て召連、於_レ一の關_レ伐_レ之、則靜謐して、十一月秀次令_レ上給、

同七月、秀吉若君八幡太郎殿逝去、年三歳、秀吉公愁嘆し給事不_レ斜、依_レ之秀次は聚樂并關白之官を相渡し給ふへきの由也、果而如此、自_レ是秀吉公を大闇と申也、

十二月、秀吉公三川國爲_レ鷹野_レ下向給、至_レ于禽獸三萬之物數持せ御歸洛也、京堺并大坂町人、素公家武家從_レ其人々_レ普被_レ配當、大和大納言死去已後、多武嶺

狸々之由答_レ之、

武州江戸普請專也、家公康雖_レ爲_レ留守、息男中納言秀忠公在城也、

此年より三井寺鐘不_レ鳴、

文祿二癸巳正月五日、太上皇崩、去年冬、少々九州迄歸朝する間、此春重高麗の遣_レ人數、赤國を被_レ責傾、去年八月、御袋依_レ薨給、秀吉公自_レ名護屋_レ上給ひ、葬禮之儀式夥事也、秀吉公廳而又名小屋_レ下向給、此秋迄在陣御、八月自_レ築紫_レ御歸洛、各同歸國、但高麗には人數多被_レ指置、同年中、武州江戸普請專也、此年中、關東旱損、大鷹於_レ江戸_レ多死、先年丑之春如_レ此、自_レ去年比、奈良町人金借と云事をし出し、指せる無_レ證據、只切手にて黄金を借引す、然間貧者利分に迷惑して相倒間、入_レ德政_レ可_レ給之由訴_レ之、然者爲_レ禮儀_レ金子貳千枚可_レ進上_レとなり、秀吉公聞_レ之給、知行も不_レ持者、日本國之寶を何とて猥に執行哉、甚曲事之由宣、則被_レ入_レ德政、其後又金を借損失したる事不便之間、可_レ書上_レ之由依_レ仰、十枚費したる者は廿枚と書付、廿枚損したる者は卅枚四十枚と書上處、又此三箇一秀吉公可_レ奉_レ借之由宣被_レ召上、

且々寺僧還住、但寺領は前々の十物一也、是は此度大納言逝去の事、蒙_レ大織冠之罰_レ之由、時之人云_レ之間如_レ此と云々、

此夏、三川吉田の城門の邊に新き首を落す、其日同時に同國武節と云所にて人の首をねち切けると云々、去六月、大雹降、

文祿元十一月改元、壬辰三月廿八日、大闇秀吉九州に御進發、名護屋に構_レ陣城_レ令_レ居給、高麗の人數を被_レ指立、彼國過半擊碎、高麗人花之都を棄て退散す、日本人移_レ之、名護屋には家康公羽柴筑前相殘、諸大名

高麗の渡海す、中納言秀次聚樂に在城、同冬、唐人以_レ多勢_レ高麗の出之間、日本人花之都を退散して、釜山海に退、高麗人は半弓并鐵砲之様なるを持、刀は齒

ひきの様なり、後には日本人道具を學て拵ける、肥後國一揆、少々雖_レ蜂起_レ則平均、

於_レ名護屋陣中、專能繁多、是四座之猿樂被_レ召下_レ如_レ此、自_レ此年_レ猿樂何も相分、大名衆に被_レ預、被_レ加_レ扶持、

自_レ高麗_レ歸朝之衆云、山に似_レ猿物有_レ之き、其色赤事甚、但常に無_レ之、自然見_レ之たり、百姓等に問_レ事由、

奈良上下迷惑相窮也、此金借大名衆も入けるか、秀吉公に奉_レ隱_レ其名_レ云々、

八月三日巳時、大闇秀吉公若君誕生、後號秀賴、天坂に在城也、此比、於_レ京都聚樂_レ關白秀次、謠不_レ審耳多_レ之とて、五山の知者并足利學校に曰_レ被_レ付_レ抄を、是末代の重寶也、

但二人靜にさこくは花、朝顔にいうしはくやう、富士太鼓にしうこうか手を出、是等は不_レ知之由にて無_レ註、

九月、大藏道知入道江戸に下、自_レ上州_レ小幡來儀、暫逗留、亭主與平美作守信昌彌傳_レ與儀、是鼓の上手猿樂道名人也、歳七十七、但尋常の六十歳程の體也

來年者伏見山有_レ普請、秀吉公彼地に可_レ有_レ居所_レ之由曰間、此比より各大名内々屋敷有_レ普請、

此比、諸國博士可_レ有_レ成敗_レ之由曰間、山林に隱遁、其子細は先年大闇召遣給青女、闕落して不_レ相見_レことあり、此度見物の事有ける處に、見_レ出_レ之_レ搦捕、日來有様を被_レ相尋_レに、博士隱置之由令_レ言上_レ之間如_レ此、

去正月、正親町院崩御、時諒闇中、關白秀次鹿狩をし王ふに付有_レ落書、院の御所菩提の爲の狩なれば、是を攝政關白の家、此落書の主を堅改られける、其後露

顯しけれ共、公家の業なれば何の沙汰に及はず、
文祿三甲午、自春伏見普請として、日本國之衆上洛、
但奥州衆依爲遠國、被除普請、

自此春中五月五日迄、關東は早天、翌日六日より雨
降、七月廿六日夜、俄に大風、諸國損亡不可勝計、
秀吉公八月之比、聚樂秀次可御成、之由に

て、度々延引、十月廿日比に御成也、十月自中旬、
普請衆あかる、去八月之風雨に木曾之梯落る、
此比、東山之大佛漸出來之間、足代をも取、佛體をも
塗、築山をも引、同冬中、越後景勝會津蒲生飛騨常
陸佐竹何も御成也、

此春、るすんへ渡商人壺多持來、直輒之間上下取之、
然處に此冬大閣秀吉聞之御、日本國之爲寶物を爭
與下直哉と有仰、悉く被召上、翌年右之價一倍金
子被納、壺は本主に被返置、
此春、或女面二つの生男子、洛中を渡、京同邊土の町
人見之、

此春、吉野に爲花見出御、則有能、高野山へも佛詣
し給、同有能、衆徒悉被充八木壹石、昔年白河院高
野山行幸之時如此と云々、

此春、大閣秀吉公於内裏能し玉ふ、内府家康公加賀
大納言も能し玉ふ、自禁中爲御引出物、鵝眼三百
貫文被出、此大閣如此左禮ことを時々すき給如
斯、大閣并家康公加賀大納言も狂言をもし玉ふ、
此春、奈良近所に不思議神子出來、或時伊勢御
被笠の上落かゝると覺てより、狂氣して垢離を日
中に百桶計つかかりける、さて井垣をゆいしめを
はり、其身は高き所に居たり、さて詣くる者の出來、
病立處に平癒し、痛所などは、神子の手を以さすりけ
れば、そのまゝなをりける、貴賤群集不斜、問者の心
に思事を、則先立てありのまゝ、彼神子申に少も不違
と也、其比懷妊しけるか、其年冬果て誕生しけるに狐
なりける間、是を見て彼神子則死ける、
去五月、藝州の主毛利輝元依興行、紹巴昌叱兩吟に
有千句、是は此春、於安藝國被行萬句、爲其供
養と也、則兩人註をせらる、五日中に成就と也、
此比諸國知行之高帳之事

貳十貳萬五千貳百六拾六石
卅五萬六千六十九石壹斗

八郡 山城國
十三郡 攝津國

廿四萬貳千五百五斛貳斗
十四萬千五百拾壹斛七斗
四十四萬八千九百四十五石五斗
十四萬三千五百五十石
十萬斛
七十七萬五千三百七十九石
貳十六萬三千八百八十七石
卅五萬八千五百卅四斛
六萬貳千四百石
廿萬三千三百八十八石
一萬八千三百七十四石
十八萬六千拾七斛七斗
十七萬六千九百二十九石
十一萬四千二百卅五斛
八萬八千五百石
十萬九百四十七石
十九萬四千五百五十石

十五郡 河内國
三郡 和泉國
十五郡 大和國
七郡 紀伊國
四郡 伊賀國
十二郡 近江國
六郡 丹波國
十六郡 播磨國
二郡 淡路國
八郡 備前國
七郡 備中國
六郡 美作國
七郡 但馬國
八郡 因幡國
六郡 伯耆國
八郡 安藝國

十八萬六千五百五十斛
十八萬六千六百五十石
十一萬千七百七十斛
十六萬七千八百二十石
十三萬六千六百六十斛
四十九百八十石
十四萬斛
四十一萬八千三百十三石
卅二萬五千六百九十五石
貳十六萬五千九百九十八石
卅萬九千九百卅五斛
卅四萬二千二百二十石
二十八萬三千四百八十八石七斗四升
十七萬五千五十七石二斗三升
十二萬百八十七石四斗四升
十一萬七百八十四斛
八萬五千斛

十四郡 備後國
十郡 出雲國
六郡 石見國
六郡 周防國
八郡 長門國
四郡 隱岐國
八郡 豐前國
八郡 豐後國
十郡 筑前國
十郡 筑後國
十一郡 肥前國
十四郡 肥後國
十四郡 薩摩國
八郡 大隅國
五郡 日向國
六郡 丹後國
三郡 若狹國

四十九萬四千四百一十石
 卅五萬五千五百七十石
 廿一萬斛
 卅八萬二千九百八十八石二斗八升
 卅九萬七百七十斛
 一萬七千卅石
 卅壹萬八千九百五十五斛
 百六十七萬二千四百六十石
 四十萬八千三百五十八石
 二十二萬七千六百十六石
 五十四萬斛
 五十七萬七千七百卅七石四斗
 二十九萬七百五十斛
 二十五萬五千六百六十石
 十五萬石
 六萬千八百卅二石
 十九萬四千二百四石

十二郡 越前國
 四郡 加賀國
 四郡 能登國
 七郡 越中國
 三郡 越後國
 三郡 佐渡國
 十二郡 出羽國
 五郡 陸奥國
 十郡 信濃國
 四郡 甲斐國
 十八郡 美濃國
 八郡 尾張國
 八郡 三河國
 十四郡 遠江國
 七郡 駿河國
 三郡 伊豆國
 八郡 相模國

六十六萬七千六百廿六石
 四十九萬六千三百七十七石
 卅七萬四千八百八十八石
 卅九萬三千二百五十五斛
 卅七萬八千八百九十二石
 五十三萬石
 四萬五千四十五石
 五十六萬七千五百一十石
 一萬七千八百五十三石九斗一升
 十八萬三千五百斛
 十二萬六千二百石
 卅三萬六千二百石
 九萬八千二百石
 三萬八千石
 都合千八百卅五萬三千九百四十二石
 但壹岐對馬は爲三此外一也
 惟時伏見普請役之帳

廿一郡 武藏國
 十三郡 上野國
 九郡 下野國
 十一郡 下總國
 十一郡 上總國
 十一郡 常陸國
 四郡 安房國
 十三郡 伊勢國
 二郡 志摩國
 九郡 阿波國
 十二郡 讚岐國
 十四郡 伊豫國
 七郡 土佐國
 三郡 飛驒國

貳百四十萬貳千石
 十萬千石
 五十三萬斛
 五萬石
 六萬二千石
 三萬九千石
 四萬石
 九十一萬九千石
 六十一萬四千石
 十三萬石
 五十五萬千斛
 貳十三萬五千石
 卅二萬石
 二十一萬石
 四萬三千石
 十六萬斛
 六萬六千石

家康公のこと
 三川守 江戸内府
 結城宰相
 佐竹
 常陸侍從
 彌三郎
 宇都宮侍從
 那須衆寄合
 富田左近子
 佐野修理
 里見
 安房侍從
 蒲生飛騨
 會津侍從
 伊達政宗
 大崎少將
 最上
 出羽侍從
 景勝
 越後中納言
 柴前守
 加賀大納言
 前田肥前
 但羽築息
 越中宰相
 羽筑二男孫四郎
 能登侍從
 松任宰相
 北庄侍從
 村上周防

四萬四千石
 十萬斛
 二萬石
 八萬斛
 五萬石
 十三萬三千石
 一萬三千石
 七萬斛
 四萬石
 三萬斛
 三萬三千石
 四萬斛
 廿萬石
 壹萬石
 三萬石
 二萬斛
 三萬石
 十萬石
 二萬斛
 三萬五千石

溝口伯耆
 東江侍從
 青山修理
 青木紀伊守
 大谷刑部少輔
 岐阜中納言
 兩遠藤
 金山侍從
 郡山侍從
 伊藤長門守
 金森法印
 加藤作十郎
 羽柴左衛門大夫
 福島掃部
 德長法印
 木下美作
 原隱岐
 田中兵部少輔
 水野和泉
 一柳監物

壹萬六千石
 貳萬石
 拾五萬二千石
 五萬千斛
 十一萬二千石
 壹萬貳千石
 三萬五千斛
 十四萬五千石
 廿一萬七千石

日根埜法印
 西尾豐後
 吉田侍從
 山内對馬
 堀尾帶刀
 松下右兵衛
 有馬玄蕃
 中村式部少輔
 淺野彈正
 同左京大夫
 伊那侍從
 仙石越前
 日根野織部
 石川玄蕃
 真田安房
 羽柴下總
 岡本下野
 氏家内膳
 古田兵部少
 稻葉藏人

三萬五千石
 五萬石
 十九萬四千石
 六萬石
 五萬石
 五萬石
 八萬千斛
 二十萬石
 一萬二千斛
 一萬二千石
 五萬石
 二萬石
 四萬五千石
 四十七萬四千石
 百十二萬五千石
 六萬千石
 六萬千石
 十七萬三千石

九鬼大隅
 富田左近
 同信濃守
 石田治部少輔
 大津宰相
 長東大藏
 德善院
 宮部法印
 增田右衛門
 新庄駿河
 同越前
 羽柴伊賀侍從
 同美作
 大野宰相
 同常心
 備前中納言
 安藝中納言
 生駒雅樂
 同讚岐
 蜂須賀阿波

九萬八千石
 七萬石
 七萬石
 六萬二千石
 一萬四千石
 三萬石
 二萬石
 五萬三千石
 貳萬二千石
 五萬石
 貳萬石
 壹萬斛
 一萬石
 十一萬石
 六萬二千石
 二萬石
 一萬四千石
 三萬石
 三萬石
 三萬石

土佐侍從
 池田伊豫
 藤堂佐渡
 加藤左馬
 村上出雲
 脇坂中書
 木下右衛門大夫
 小出大和
 齋村左兵衛
 宮部兵部
 木下備中
 龜井武藏
 增屋隱岐
 羽柴丹後宰相
 羽柴若狹少將
 木下宮内
 木村伊勢
 戶源澤九郎
 小野寺孫十郎
 津輕右京

十萬石
 五萬石
 一萬七千石
 一萬五千石
 壹萬三千石
 六萬六千石
 一萬貳千石
 一萬三千石
 壹萬千石
 貳萬石
 一萬石
 一萬千石
 壹萬石
 一萬六千斛
 一萬石
 貳萬二千石
 三萬千石
 二萬石
 一萬石
 一萬石

南部大膳大夫
 秋田藤太郎
 早川主馬
 大田飛驒
 竹中源介
 中河修理
 稻葉兵庫
 津田長門
 奥山雅樂
 山岐左馬
 池田備中
 市橋下總
 戶田武藏
 谷出羽
 赤松上總介
 土方勘兵衛
 大小野木縫介
 福原右馬介
 長谷川右兵衛
 山崎右京

一萬石	蔭田權佐
一萬石	中江式部大夫
一萬石	別所豊後
一萬三千石	山口右京介
一萬二千石	石川備後
一萬石	松浦伊豫
一萬二千石	加須屋内膳
一萬二千石	片桐市正
一萬五千石	氏家志摩
一萬石	寺西備中
一萬石	同次郎介
一萬石	池田セシ
一萬六千石	織田三十郎
一萬三千石	桑山修理
貳萬七千石	宇田下野
二萬石	堀田 ^内 安房
一萬五千石	多賀出雲
一萬九千石	本田因幡
一萬二千石	杉若越後
一萬二千石	小川土佐

一萬石	峯田伯耆
一萬石	大野修理
一萬七千石	横口民部
壹萬五千石	石川肥後
三萬石	小出播磨
三萬斛	木下肥後
一萬六千石	桑山法印
壹萬石	有馬法印
一萬五千石	石田木工頭

都合千三百貳十九萬三千石、此外内裏御領并公家門跡寺社、又無役等有之、

當代記卷三

文祿四^{乙未} 秀吉公家康公へ御成事、秀次滅亡事、慶長元^{丙申} 大地震事、三井寺違^二太閤命^一事、^二西^一 信州淺間山夥燒事、善光寺如來東山大佛へ入院の事、

三^{戊戌} 太閤薨給事、善光寺如來信州へ歸玉ふ事、高麗陣の衆歸朝事、三井寺衆徒還住の事、^四己^亥 淺間山夥燒事、諸國飢饉の事、古太閤を奉^レ崇^レ神事、^五庚^子 關原合戦の事、^六辛^丑 あとりの事、高野衆徒與^二行人^一相論事、^七壬^寅 佐竹滅亡之事、^八癸^卯 家康公被^レ任^二征夷將軍^一事、^九甲^辰 京町人豊國の風流之事、十二月諸國浦々變易事、^十乙^巳 江戸秀忠公上洛し給、被^レ任^二征夷將軍^一事、^{十一}丙^午 諸國町々失火の事、江戸石垣普請の事、京伏見光物の事、文祿四^{乙未} 正月

三月廿八日、太閤秀吉公家康公に於^二聚樂^一御成、自家康公に進上物銀三千枚、小袖百^{此内唐織色}、綿千把、八丈島五百端、褶三百端、太刀^長、御腰物^光、御脇指^光、御馬一疋、^{黒毛鞍}、家康公御息中納言秀忠進上物銀五百枚、小袖五十、越後布百端、御太刀一腰、御馬一疋^{鹿毛}、家康公御袋進上物小袖十、黄金十枚、同御息三河守より小袖卅、其外十萬貫以上の衆小袖廿、三萬貫二萬貫と

をり衆小袖五つ、五千貫二千貫とをり迄小袖、或は三或は二進上也、即還御也、四月廿三日寅日未の刻、西上野氷降、間に大なる天目程なる氷あり、麥麻一圓に損亡也、武州東上野も少少損亡、其夜龍の毛とを馬の毛之様なる物、雨に交り降、同五月廿四日申日、又氷ふる、關白秀次太閤に頃日御謀反の企露之由あつて、七月八日關白秀次聚樂退出、即出^二家於高野山^一、同十五日腹を切御、秀次若君二人、^一二歳^二孩兒^一、并近習女房卅餘輩、渡^二洛中^一切捨らる、誠は秀次逆心之儀虚言と云へ共、行跡不^二穩便^一故、治部少依^二讒言^一如^レ此、聚樂城并諸侍之家門伏見に被^レ引移、去五月、於^二京都^一江戸中納言秀忠屋敷に雷^二三所^一の落、家人何も無^二異儀^一、其時尅京中六所へ落、此比京都領城共被^レ召上、五人太閤被^レ召遣、江戸内府公加賀大納言にも一人宛被^レ召遣候へとして被^レ遣、其外の人にも被^レ下ける衆多し、右之傾城其の中に、歌舞躍を令^レ難澁^二美女一人有^レ之、其子細を被^レ相尋^二に、不^レ賤之親類多之、外分を思之由言上、依^レ之彼兄弟に問給へは、此已前兩度相請召直す所に、兩度なから又

傾城屋へ走入之間、不及是非之由言上、然は則は
 り付に被_レ掛、
 自_二去年_一關白秀次依_レ仰、謠百二十番抄出來、是五山
 文字智者被_レ致_レ之、
 慶長元丙申、伏見御普請として、二月諸國衆上、河
 内國堤關東衆築_レ之、
 同年春、太閤以の外御惱、三月俄御平愈、諸人成_二安堵_一の
 思、惣別末年より常御惱氣、自_二三月_一御息災奇特々々、
 同春中雨細々降、五月中旬より六月廿六日迄露にい
 る、此春雪節々降、四月四日にも雪降、五月九日尾濃洪
 水、六月十九廿三日、信甲關東洪水、百年以來の大水
 と云々、知行損亡不_レ知_レ數、武州之内葛井淺草にて、
 人三四百人溺死、其外牛馬數を不_レ知死、此時節も上
 方は指せる事なし、六月廿七日より七月七日迄早、翌
 八日より又雨降、六月十四五日比彗星出、七月廿八日
 より閏七月二日まで早、翌三日より同九日まで降、同
 九日に方今俄水、山崩人死、此水は所による、閏七
 月十二日の夜子の刻に、上方大地震、京中は三條よ
 り下伏見迄家損人死、上京は不_レ苦、伏見御城中にて、
 女孺七十三人、中居下女迄五百人死、一の門二門の番

衆、門崩悉死、折節太閤中のまるに御座、御身無_レ恙、
 諸大名の家々倒る、人死事無_レ限、大坂々井も同前、伏
 見城殿主石かけは一も不_レ殘崩る、大佛堂は不_レ苦、佛
 は損也、愛宕山坊中も倒、所々よりあかる眞壺過半
 損、此六七月間にも、上方は雨降、五穀豐なり、此地
 震關東駿遠何も東は不_レ動、此春家康公を被_レ任_二内
 大臣_一、自_二是_一内府公と申也、
 前の七月の如_二淺間燒上_一、西の方へ焰ころふ、此故か
 近江京伏見其比灰細々降、其故にや秋毛少々凶と云
 云、信濃などは此灰一寸計たまる、關東は不_レ降、但是
 も同秋凶云々、
 去夏爲_二音信_一唐使渡海、則可有_二對面_一處、武者揃し
 て可_レ被_レ見_二之旨_一にて、自_二諸國_一士卒被_レ召上_二之
 處、右之地震にて諸道具擊摧之間、被_レ止_二此儀_一、此費
 不_レ可_レ勝計、然は九月旦日、彼唐使に於_二大坂_一御對
 面、唐使進上物段錦_卷、白絲_千、自_二太閤_一被_レ下物かな
 かいの物彼國に有_レ好由如_レ此、同二日に歸唐す、
 木幡山を本丸に可_レ被_レ取立_二にて、七月十五日有_二事
 始_一、十月十日日本丸之分普請出來、
 此比江戸に住の米津清右衛門_{家康公}、
 近習人妻女夢想に云、さ

かりなる都の花は散はて、東の主か世をは次へし、

(此女歌道聊不_レ辨、奇特云々、)

此夏秋度々大水、百年以來無_レ比類、

八月五日、入_レ夜大風、諸國損亡す、

此年中高麗より歸朝之衆雉子持來、日本の齋に似た

此比三井寺可有_二退轉_一之由太閤有_レ命、是は勸當之
 者道具を、彼寺に依_二隱置過_一に也、依_レ此衆徒何も退
 散、此寺鐘近年不_レ鳴、示_二此儀_一兆歟、奇特云々、又寺
 領は被_レ寄_二叡山_一、此寺之鐘自_レ此以來彌不_レ鳴、

慶長二丁酉正月自_二下旬_一、伏見爲_二普請_一なり、此近年之
 普請人の退屈不_レ及_二是非_一、餘緊く相持間、及_二晩_一にて
 は目不_レ見、或當_レ石殘_二身を_一、又は煩に付不_レ出_二普請_一
 者、其主人不_レ出_二飯米_一を_二之間_一、成_二乞食_一と_二京中_一に充
 滿せり、此太閤秀吉公日本小國には不相應才人たり、
 然所に如_レ此不_レ顧_二人_一の苦勞_二給_一事、時人不_レ審と云
 云、(中國西國衆は、重而高麗の渡海、)

三月朔戌之刻、信濃國淺間山夥く燒上る、其焰之中に
 如_レ雷光無_レ間ひかる、火の色青し、其山下へは大石を
 幾等と云不_レ知_レ數推出、西上野茶臼天目程なる石多

降、常陸國迄如_レ此と云々、

唐より象來、其毛の色如_レ猪、象遣共に渡、長は六騎之
 馬に長計也、ふとくなり合たり、飲合は以_レ鼻用_レ之、
 象つかいの騎時は、折_二膝_一を_二乗_一する、此年又象來、自_二
 右象_一長高し、年も増す、始之象は六七歳也、廿六七歳
 迄も長高く成と云々、

夏の比、大佛之去々年之地震に破しを、秀吉公御覽
 し、か様に我身をさへ保不_レ得佛體なれば、衆生濟度
 は中々不_レ思寄_一として、善光寺の如來を可_レ移給_一と也、
 同七月十八日、如來入院給、其行粧夥體也、武士は辻
 堅、諸宗之僧侶同法花宗被_レ供_二奉_一如來、貴賤奉_二圍繞_一
 渴仰事不_レ斜、

自_二此春中_一、四條に太閤新構有_二普請_一けるか、地利狹
 して又白川出口に有_二普請_一、町人壞_二家_一を_二迷惑_一す、

九月宇都宮彌三郎背_二太閤之命_一に、高麗に可_レ被_レ遣と
 て、卒爾に備前國迄被_二相下_一、さて宇都宮領被_二當_一竿、
 奉行爲_二淺野彈正_一、

十一月廿日の夜大雪、
 自_二此年中_一、畿内京伏見大坂堺諸賣物不_レ嫌_二大小_一を、
 五分一の役被_レ召上、庶民爲_レ之迷惑す、

此比伏見屋作大儀之由有仰、黄金并八木各被下、慶長三戊戌正月七日大雪降、去年酉之十二月、高麗面日本より相抱たる城うるさんと云地に、高麗衆四十七八萬にて推詰攻る、但彼城竟に持こたへ畢、日本人數千計討る、此說正月中旬京着、

二月會津より蒲生藤三郎移宇都宮、知行十九萬石拜領、去甲午之年、父飛騨守相果、然其今年まで在會津之處に、爲幼少之間、遠國之境目、在國可有如何之由にて如斯、此藤三郎は爲家康賀、會津へは越後景勝爲國替被移、則越後國有繩打、伏見御普請、近國衆は二月朔日、關東の衆三月旦より始也、四月八日、淺間山の參詣衆八百人程焼死云々、昨日大小之違にて、今日は不縁日之由、山巔にて呼ると云へ共、只人間の所謂也と心得不用之參詣處如此、三月江戸大風、高棟之家損、城之北門吹倒、此時自關東上り船、或は荷物をはね、或は破船、五百餘艘之内百艘計無異儀云々、太閤秀吉公六月二日より御不例、御腰不立、八月十八日薨給、病中に爲形見、送金銀を男女上下不殘、隨其人々被相賦、此

多少之割、病中に自身し玉ふ、奇特云々、七月廿七日、夜半より大風洪水、五穀損亡不可勝計、

八月十六日、善光寺如來俄下向、町傳に信州本善光寺に送之、路次中にて脇佛は散々の體也、此善光寺如來上り給て後、太閤無程病氣之間、不吉之兆として如斯、八月十九日、中納言秀忠公出京、九月二日江戸下着御、九月十六日、景勝立會津を上洛、此春、奥州平泉中尊寺一切經伏見に被召上、如來堂に被置、是清衡基衡秀衡三代之中に所書寫之經有三部、十月本國に被返下、十月孔雀自伏見江戸下る、但尾はなし、九月之比、自日本相抱る高麗之城々、大明并高麗衆都合百萬計にて押寄攻之、十月十日比、島津兵庫居城に取懸之所及合戦、二萬七千餘計捕之間、大明衆敗北、二三日路追詰、追々四五萬程討捕、依之自餘之城々取詰、大明衆退散、則有無事之扱、十一月無異儀九州迄何も歸朝、此秋、諸國凶年云々、此冬、三井寺僧衆還住、寺領如本、

此春、下京の神明堂にて、人ならば二三十人聲にて、卅日餘躍けるか、後には泣けると也、又八月十日時分に、將軍塚鳴動不斜、是等は太閤の凶兆也、慶長四己亥正月自中旬、於伏見各有物言、是亡家康公を一度との企、專石田治部少輔執行、折節内府公衆歴々自關東上着伏見、又大谷刑部少内府公に荷擔之間、彼組之衆多以同之、然而二月無爲、内府家康公與羽柴筑前北國和平、

二月廿日午の刻、淺間鳴事夥し、去酉三月如此鳴、雖然此度之鳴様、酉の春よりも超過せり、又其夜寅の刻淺間鳴動甚、近年無比類之由、年老之者云焉、二月廿九日、筑州自大坂伏見家康公來臨、彌可有入魂之儀也、内府公有應諾、三月十一日、内府公大坂筑州宿所に入御、筑州病惱危急之間、子息肥前に不替可有入魂之趣、家康公誓紙を被乞請、畏悦云々、さて三月二日の曉、筑州卒去、三月十九日、家康公伏見之向島に假に移徙、依爲吉日也、同廿六日より向島に令居給、此比、諸大名思々に荷擔の用意あり、依之京伏見騒動無止事、諸大名家康公に依異見、閏三月十三日午刻、伏見城

御移、

閏三月七日、石田治部江州佐和山彼居城に移閉口す、此間之就言事、令氣遣之間、三川守秀康被送路次を、是依内府公の仰也、此石田治部は、太閤之時無類之出頭人也四月十九日、阿彌陀か峰新八幡堂に各社參、是太閤秀吉公を奉崇神に、號八幡大菩薩堂也、併依彼遺言如斯、然而有遷宮、翌日能あり、四座の猿樂行之、大菩薩は可有如何とて、其後改豐國大明神、此春中諸國に糧乏云々、閏三月廿四日、四月四日、伊豆國妻良崎を出る上船、多以或は荷物をはね、或は破損云々、六七月、下總上總武藏切々大風吹、夏秋凶、遠州此夏中三千人餓死、關東中も餓死あり、此秋中、在伏見之衆佐竹、會津景勝、安藝毛利輝元、國々下、羽柴肥前守も北國に被下、八月十四日、内府公御參内、供奉之衆は肩衣袴也、同十八日、豐國大明神有祭禮、翌日、金剛今春二座行能を、觀世實生は、來年可行となり、九月七日、内府公大坂に御下、其儘翌年六月迄、大坂西之丸に居住御、

十一月廿八日より十二月十日まで、淺間鳴動、此故か灰無三際限二小幡筋降、此寒中暖氣也、兩三度雨雪少降、

十二月廿三日立春、三更の比より巳刻まで雪降、

慶長五年庚子、此春中加賀羽柴肥前守利長與内府公〔傍注〕家康間から不快、大坂諸大名拵○あり、肥前守公の事也、金澤城に廿萬斛の城領を添、内府公息を養子し可レ讓之由也、扱も無レ事了、肥前母儀并家老の人質江戸へ被レ下、依レ之内府公心悅、右之金澤城領も無レ抑留、子息養子も止了、此三月の比より、會津長尾景勝と内府公不快、六月十六日、景勝爲三成敗、内府公大坂を御出、七月二日江戸へ御着、同十九日庚申江戸を中納言秀忠公出馬、内府公は廿一日也、然處に大谷刑部石田治部於三江州、敵對、依レ之大坂奉行を始上方衆悉内府公に謀反、此已前會津へ出張之上方衆、宇都宮より歸上る、内府公へ聊不可レ有三逆意之旨有二應諾、如此之間、内府公同八月四日、自三小山、江戸へ歸馬、中納言公は暫く宇都宮に有三逗留、所々普請あり、此七月爲三手合、伊達政宗奥州白石の城を攻崩、外曲輪の者共悉討捕、本城は依三惘望、助二身命、大將分

四人虜、伏見城内府公人數有レ之、此時迄は堅固也、八月朔日巳刻、伏見城落居、其體有三逆心の者、敵を引入、火箭を射る間、城中燒崩、尾州清須城主福島左衛門大輔内府公へ依三一味、番手として内府公より彼城へ人數を入らる、此外岡崎吉田濱松懸川横須賀駿府興國寺三枚橋、此城々へ同番手入る、荊屋水野和泉守内府公御弟、内府公に先立て參陣の處、上方衆か、の江の彌八と云者、不慮に令三口論、伐三和泉守、相互死す、其座中に堀尾帶刀被レ居ける、是をも數刀切、然其何もかす手なる間不レ苦、

此春、於三武州、江戸松平十三郎へ云人の馬の尾に、鼠巢を喰い子を産、是其身の惡事か、家を焼けると也、又兄之主殿介於三伏見、討死す、凶事を告か、又武州忍に山伏あり、正月雲を見て、吉凶を卜とあり、此春、北國の鉾楯は無事になるへきと、始終申けると也、於三東筋、凶事可有の由を申、奇特と云々、此以前も、彼山伏關白秀次太閤秀吉公逝去可レ有事をも兼て申之由也、此四月、天王寺御堂建立大善事あり、貴賤群集、聖德太子の朱印、各奉レ拜之、卅三間之御堂も修理あり、大佛をも佛體を再興あり、是何も

内府公就三異見、八歳之秀頼より興行也、此夏中、善光寺河中島御堂建立、木曾の棧去々年より人不レ通、是も去年之夏より事始て出来、伊那河橋も同前、八月廿二日、岐阜城主織田中納言信長孫幸田の渡へ出、尾州衆と合戦、即岐阜へ推こみ、町中放火、翌廿三日稻葉山乗崩、數輩討取、中納言を虜、是は信長孫、右の信忠一男也、右の内府方之衆至三赤坂、進レ陣之處、大梯居陣する石田治部島津兵庫人數かう戸渡にをいて行合、則大梯衆北、又數輩討捕、關東方衆至三赤坂、陣取了、九月旦丑、三日より九月節、九月朔丑、内府公江戸を出馬、十五日濃州至三赤坂、着馬之處、夜半に敵關ヶ原わ自三大梯、相廻、於三先陣、企三合戦、此日雨降霧深、而行先不二分明、伊勢筋へ相廻西國衆二萬五千餘、こづ駒野に居陣す、關ヶ原には石田治部浮田中納言大谷刑部島津兵庫小西攝津守將陣の處に、金吾中納言政所の甥、太閤之養子也、内府公屬三味方、之間、敵敗北、數百討取、此時脇坂中務小川左馬介俄屬三内府、翌十六日江州佐和山押寄、佐和山は治部依三留守、則落城、於三城中、奎治部同父自害、十七日休息、十八日八幡、十九日草津、廿日大津少有三逗留、廿六日淀、廿七日大坂入城也、此

時迄森輝元與増田右衛門大坂令居也、秀頼は依レ爲三幼稚、内府公無三遺恨、之間、本丸に居城也、信州眞田此度大谷刑部と令三一味、之間、秀忠公宇都宮より直に被レ押寄、所、先上方に可レ被三相上、之由、依三内府公仰、抛三細事を、自三眞田、急被レ進、陣、此時伴之衆馬勞行歩不レ安、廿三日草津迄着陣、廿七日内府公同日に大坂へ入城也、同廿三日石田治部於三江北に、虜、小西攝津守十九日生虜、此九月廿日、奥平美作守信昌爲三京都の仕置、上洛、廿三日於三京都、安國寺森輝元歸、但携武を美作手へ生捕、安國寺伴之者數輩討取、右石田治部小西安國寺大坂堺井より京都へ、同卅日被三指上、十月朔日大路を渡し、於三六條川原、刎レ首掛、獄門、浮田中納言打死之由、其時巷説、長東大藏於三江州、刎レ首掛、獄門、増田右衛門高野登山、金千九百枚、銀五千枚出し、身命計相助らる、森輝元は七箇國上表、一箇國領納、防州長、是は内府公へ味方の衆人質大坂に有レ之を、森居城廣島に遣間、無三異儀、爲三返取也、其儘大坂下屋敷居住、此陣留守中會津景勝少の行に不レ及、此時國配當あり、安藝備中兩國を羽柴左衛門大夫、播磨羽柴三左衛門、備前美作金吾中納言、

出雲隱岐堀尾帶刀、紀伊國淺野左京、但何も本領分は則被_レ上表、伊豫は藤堂佐渡加藤左馬介、筑前黒田甲斐守、若狹京極宰相、丹後京極修理拜領也、此衆何も本領上表也、但此内黒甲藤佐加左其國に本領依_レ有_レ之、其領共如_レ此、肥後の國は加藤主計頭、讃州は山内對馬、北國の主羽柴肥前江州へ出合也、是は自_レ大坂一暇を請、十月歸國なり、十一月十六日、自_レ大坂江戶中納言公御上洛、十八日御參内、十九日歸洛、同廿七八日比内府公病惱、十二月九日同廿六日、京都大雪、十二月十三日、信州眞田城を渡し、親子共に高野に上る、九月十月十一月三箇月打つ、き大也、來年も又如_レ此九十一大也、珍事と云々、但三箇月大つ、けは、亂逆の兆と京童部云也、十二月廿九日大雪、十月自_レ會津出羽のちかみへ動、もかみ家中之城主二三人會津へ一味、依_レ之もかみ城廻まで放火、此時上方悉平均之由、陣中の相聞る間、右に會津へ一味のちかみ方の城主等、又もかみへ同心す、依_レ之敵敗軍之際及_レ合戰、會津之人數二三千も被_レ討、此十一月十二月明る正二三月迄、於_レ大坂ふんとうふんとうと呼る、非_レ人音、虚空にて如_レ此呼、

此九月より翌年二月中旬迄、京都爲_レ置目、奥平美作在京、二月美濃國之拜領へ下る、其後暫京都之守護無_レ之故、京童部吐_レ放言、又盜賊徘徊不可_レ勝計、京境并愛宕其外所々、此度敵對之衆、金銀不_レ知_レ數有_レ之、悉内府公へ納、十一月十二月内府公不例、自_レ去る年大谷刑部少内府公に別して忠信、然而此度謀叛之事如何となれば、去比浮田中納言備前主家老之衆と爲_レ主從間、有_レ云事、大谷者中納言理を專被_レ云立、内府公彼家老之者被_レ介法、此儀に付て大谷批據を申之由依_レ宣如_レ此、

去春船堺浦に寄、是はイギリスと云鳥船、黒船の敵也と云々、然間船中に具足大鐵砲數多有_レ之、具足は腰より上計也、内府公見物し給、上下見_レ之を、さて狸々皮以下令_レ賣買、無_レ異儀、令_レ歸國、彼船爲_レ唐船の敵、間、可_レ令_レ誅罰、物をと人皆云_レ之、

去七月上旬衆内府公に謀叛時大坂惣構口々番手事

一濱の橋	毛利民部大輔	一高麗橋	高田河内守
一平野町橋	宮木丹後守	一淡路町橋	藤懸三河守
一備後橋	生駒修理	一本町筋橋	早川主馬
一久太郎町橋	同主殿	一久法寺町橋	竹中伊豆守
	蜂須賀阿波守		

一かんとうし 服部土佐守 一うなき谷町 小野木縫殿助
 一町橋 横濱民部 一甲津口 上田主水
 一天王寺口 奥山雅樂助 一平野口新屋 小出大和守
 一南方ほりつ 一玉作口 杉若主殿
 一京口小橋 谷 出羽守 一中の渡 山崎左馬助
 一福島口 山崎右京進 一天王寺より 石川備後守
 一天王寺より 赤松上總介 一水所 木下左京
 一平野口 福島川口の 脇坂中務
 一大和口 川尻肥前守 一番 同右衛門八

右手前々々に番所を被_レ立、番衆髓に在_レ之而、妻子なと出る事をは堅可_レ被_レ停止一候、往還は無_レ滞可_レ被_レ通候、以上、

慶長五年庚子七月十五日

長束大藏 増田右衛門尉 德善院

慶長六辛丑正月、内府公舊冬之病氣故、諸國衆無_レ出仕、同月十五日有_レ出仕、内府公病惱依_レ本復_レ也、薩摩島津于_レ今無_レ上洛、佐竹無_レ上洛、去年亂逆之砌、事の體を見合、不_レ出_レ己か國を_レ之間、今恐_レ身の科を_レ歟、内府公二月廿三日辛酉、自_レ大坂一伏見の御移、其日甚雨、翌廿四日、秀忠公同從_レ大坂一伏見の御

移、是日も大雨也、廿八日丙寅、中納言秀忠公上洛、翌廿九日丁卯、參内、被_レ任_レ大納言、

去二月城々有_レ定、井兵部少輔直政江州佐和山、本多中務大輔勢州桑名、松平下野守内府公三男長吉、尾州清須、奥平美作守信昌濃州加納、石川長門守同大柵、本多豊後守三州岡崎、松平玄蕃同吉田、松平内膳遠州濱松、同三郎四郎同懸川、是は内府公弟、但父は別、洒井與七郎同田中、内藤三左衛門駿府、天野三郎兵衛駿河興國寺、大久保次衛門同三枚橋、本多縫介三川吉良、江州大津を勢多に移し、戸田左門可_レ被_レ置と也、大坂には秀頼公有_レ城給之間、内府公人數不_レ被_レ置、

四月十日、大納言公關東に下向、内々會津立の有_レ陣用意、十五日當佐竹父義重上洛伏見に着、

去年自_レ愛宕一眞壺二百餘上る、是此度敵對輩之壺也、依_レ人被_レ施_レ之、

此年正月之比、西上野箕輪小幡其許近邊に、あとりと云小鳥無_レ際限_レ有_レ之、とりもちなくして、藪などにてさ_レ網を以_レ二十卅つ、取、夜中には手にて多くとらゆる也、去年の十二月廿日比より有_レけれ共、中にも正月十日比さかりなりける也、

此春疫病關東に流布して人多死ける、在所によつて八人九人住む家には、一人二人残りける所も有とかや、信濃も同前、

四月十日、鼓打大藏二介入道々知死、年八十去年の五月、於難波有勸進能、其時鼓を打ける奇特云々、五月廿七日甲子雨、此春夏惣て雨也、六月十九日廿日大水、此夏中あつき事なし、十七日より廿三日まで七日打續大雨、廿二日尙以大水、

此比會津無爲、曩勝悃望に付て有寛宥、近々令上洛、内府公に可有出仕之由也、六月下旬之比彦坂小刑部御折檻、則閉口也、是は内府公知行方三日代之其一也、同月前々崎普請、大津之家門并石共被移彼地、

七月朔日會津を長尾景勝立、同廿四日伏見に着、會津則上表、米澤信夫郡にて知行二十萬斛給、會津は蒲生藤三郎拜領、七月廿日、美濃北方にて蛙鷲を取、丙辰未の時珍事也、同月十四日五日より、内府公瘧病、同廿七日日本復之所、又甚病惱、八月三日四日より本復、

此秋諸國凶年、九月の比、於江州近習之輩十二三人知行被充行、同月、北國之主羽柴肥前息の大納言

院非分の由也、依之公事無利、此故衆徒與行人内内間柄不快甚也、

慶長七壬寅正月朔、朝雪降、十九日壬午、内府家康公江戸を出御、二月十四日伏見着城、伊勢路を通御、

北國主羽柴肥前守關東下、内府公逗留中、於江戸可有出仕との内心歎、正月廿一二日比、江戸に可被着之由、先立て雖有其告、上方諸衆關東下向無用之由依仰、肥前主にも無對面、上洛し給、肥前者於江戸大納言秀忠公に出仕有之、肥前は則伊勢筋上洛、於伏見内府公に有出仕、於江戸大納言公に金百枚、銀千枚、小袖百領、脇指正宗進物也、大納言公より肥前に金子百枚、馬、鷹并鍋、藤四郎の脇指被遣了、

正月、大納言に於關東中に廿萬石被渡、但此内二三萬石不足之由也、則小性并小馬廻以下不殘、大納言公より配當也、

二月、佐和山城主井兵部直政病死、年四十一一男左近大夫年十繼其塵、佐和山に住す、

三月十三日、内府公爲年頭之禮、大坂に下向、秀頼へ對面也、則十五日還御、同廿七八日比、島津使者相

秀忠公之息女を有祝言、年三彼肥前無男の息、以養子を如斯、但別腹の弟也、去年關ヶ原合戦之砌、俄に屬味方に、小川左馬助、于今新本知行聊無拜領、是は何時も捨弱附強之由、諸人依訴歎、

内府公十月十二日丙子、關東下降、其日長原泊給、十三日佐和山、十四日大垣、十五日岐阜、十六日之朝、加納城場廻見給、十一月五日、内府公江戸に下着、閏十一月二日、江戸町不殘大火事、此後も數箇所度々町町火事、同十日京都雨にまじり土ふる、喩へはかわらけの粉の様なると云々、又十五日如斯、近江邊ふる、十一月九日、江戸より忍河越内府公爲鷹野出御、廿八日歸城、十二月四日岩付邊所々又鷹野、此正月於江戸内府公越年也、十二月廿八日、宇都宮の奥平大膳大夫家綱に被充知行十萬石、是美作守信昌一男也、

此秋叡山の三千石、豐國に二萬石被寄知行を、又内裡御領并公家領方々に有しを、被寄京邊土、此比高野行人與衆徒有言事、去年木食は石田治部令三味、方々敵城を被拵し依罪被牢籠なり、此文殊院は木食弟子也、是内府公氣相歎、木食遺跡彼文殊行人たる間、素爲荷擔衆徒意趣爲理之間、文殊

上る、

四月十三日、濃州大水、みつや堤千間餘相きれ、町之者多分死、家流牛馬同死、此時中野塘もきれや、此年濃州別而凶年、同廿八庚申、内府公上洛、一日休息、五月朔日參内、二日於院御所、今春能仕、當世の上手也、晚に雨、見物の衆ぬれけり、三日相國寺佛詣、此免長老内府公氣相なり、四日又今春能有之、此能未終に、内府公伏見へ還御、

五月八日、常陸佐竹國替之儀也、折節在伏見、右之旨以使宣ける、兎角之意趣無之、賢意次第之由返答了、則十二日常陸在國之父義重并家中へ、此使有之、愛田砥澤邊にて廿萬斛、佐竹に可被下となり、六月十四日、佐竹城城請取、薩摩の島津龍白近々上洛仕之由言上すと云共、終に無上洛、内府公起請文申請と云共、事延引す、今の分計略歎、

六月朔日より伏見普請あり、上方諸大名在伏見す、同月十日比、南都蘭麝臺、從内府公、以使被爲見、同勅使被遣、此比彼蘭麝臺を被切度由、頻雖有内存、是を切ぬれば、餘命不幾之由云傳によつて被止也、蘭麝臺と云はをふらんと云沈香也、蘭麝臺と云ふ

は無_レ之事を云ならはしたり、をうらんに并て紅塵と云沈香有_レ之、是何も勅封藏にあり、

此五六月黒船着て、舟人千二百人在_レ之、かう地_交より内府公に有_二音信、生虎、象、孔雀、但虎者不_三京着、七月朔日、美濃加納普請始、同三日大雨、此水無_二指儀、但尾州しの木柏井の川出、彼國所塘切、八月十日比、加納普請衆上る、普請の様子遅出来之由、内府公宣に依て、如何にも危相なる儀也、去六月、秀頼公爲_二所願、於_二住吉、萬句始、其發句、

住吉の松の幾世の下涼み

昌叱

此八月廿八日の風雨、關東は夥して、所々水入、大凶年也、内府公十月二日關東下御、四日市場より舟にて熱田宮上給、薩摩主又八龍伯養子、十月十日比爲_二出仕上る、内府公依_二留守在大坂す、龍白可_二上洛_一之由内府公雖_レ有_レ命、去年弟兵庫頭就_二謀反、危む心歟、甥の又八を被_二相上、此取持之人藝州之主羽柴左衛門大夫、路錢又は有_二大坂_一之糧を被_二運送、同十八日、備前美作兩國主金吾中納言被_二相果、此人常に大酒之故歟、狂氣人之體なるにより、侍數人成敗之條、此十月上旬の比、可_レ被_二改易_一之處に如_レ斯、時人

若自害にてもや有らんと、下臈疑をなす、九月松平下總守、美作守信昌息、三州作手拜領、是は奥平代々弓立所に付て如_レ此、十月廿七日夜半、下野國宇都宮町悉焼亡、侍屋敷も所類火、同此比、江戸町も二三町火事之由也、十一月始之比、加賀金澤城爲_二天火_一焼、人馬道具已下不_レ殘焼失云々、同廿二三日比より俄暖氣、十一月小廿六日寒に入、廿九日晚より雨、此寒中節々雪ふる、雨も切々降、然共寒前寒し、寒中暖氣也、十二月四日、東山之大佛焼、銅をはかし佛體へかけ、る時、火もへ出、

十一月廿六日内府公江戸を出御、十二月廿一日、熱田宮に着御、路次中鷹野故上着遅々、少々不例也、諏方の海水、此寒中うすくして馬不_レ通、御渡は有_レ之故、かち渡は有_レ之、來年日てるへき由と云々、北國は此年雪深き故、來年水可_レ出と申けるとなり、諏方の御渡りの馬の足跡に見様あり、來年は亂逆可_レ有_レ之歟の由と云々、去子年より浮田八郎薩摩島津所々隱居之處に、内府公儀次第可_レ有_二成敗_一歟之由、島津又八言上、是は於_二伏見、十二月下旬出仕之砌如_レ此言上云々、又八則

九州へ歸國、

去春叡山東谷に入_二盜人_一しか、此比露顯して、妻子共成敗也、此比より佐渡國に銀倍増して、一萬貫目餘上_レ被_レ納、先代越後景勝彼國領納之時分は、わつかなりしと云々、又石見國金山も倍増して、四五千貫目被_レ納、是も先代森輝元の時は僅の義也、家康公分國になりしより如_レ此、右之兩國大久保石見守拜領也、但金山之義は彼人爲_二代官、銀は上_レ右之通被_レ收、毎年石見守三月佐渡に相下、八月伏見へ上、九月十月者石見國に下、是金山相改、彌銀多分爲_レ可_レ被_レ納也、去秋土佐國に唐船寄、彼國主山内對馬守日本船にて取_二卷之_一番を付る、唐人も對馬守に、卷物以下以_レ使令_二音信、伏見にも急度の可_レ遂_レ禮之由宣之條、對馬守使被船に乘移る、さて伏見に可_レ給_レ檢使_一由令_二言上_一間、使を被_二相下、然處風能折を得、帆柱引上、鐵砲のことくなる物三つ放し、鐘鼓打鳴し番に付、小船共乗たをし走ける、對馬守使も同有_二彼船_一間、引連行、其比人の嘲_二弄此事_一也、唐人も二三人殘留、是は對馬守に音信の使也、此船より惣別如_レ此船を押る時は、帆柱を取物なりけるを、油斷にて不_レ取事不覺也と云

云、

慶長八癸卯正月、伏見出仕之儀、元日は先秀頼公へ可有_二出仕之由、卅日に内府公仰有間、夜中に上方大名衆大坂へ下着、朔有_二出仕、元日未申刻伏見歸着、翌二日内府公に_レ出仕也、備前美作兩國主金吾中納言被_レ果後、各内々企望之由云々、廿七日鳳來寺護摩堂炎上、又天狗倒し有て、二王堂の角を擊碎、惣別彼山ある、と云々、此年中に、衆徒數多病死也、二月六日、池田三左衛門備前國被_レ下之由朱印被_レ出、美作國は信州河中島主森右近國替有て彼國に移、此比内府公可有_二將軍成_一云々、然而二月十二日、征夷將軍有_二勅使、同四日内府公大坂に下給、翌五日歸城、秀頼公に爲_二年禮_一也、遠州久野居住の松下右兵衛爲_二國替_一常州へ下、此比自_二諸國_一武州江戸へ、千斛に一人つ、役人下る、町に國々名付有て、町場可有_二普請_一と也、十九日朝雨ふる、未刻止、酉刻日蝕あり、其色あかき事甚、亥刻の終時分月蝕あり、兩蝕同日に有事珍事か、遠州久野舊主久野三郎左衛門入道七千石被_レ下、還住可有_二野也、此息先年於_二京都_一喧嘩故果、終に不_二跡立_一三郎

左千石被下、關東に近年在、三月廿一日寅日、内府公上洛、廿五日家康公御參内、被任征夷大將軍、氏長者、并學院淳和院兩院別當、牛車兵仗、從一位右大臣源朝臣、行列之次第

一番 御物 同朋 二御出奉行板倉伊賀守 三雜色 御物

右本多藤四郎 渡邊半藏 左山上彌國郎 島田清左衛

鶴殿善六 横田彌五左衛門

高木九介 近藤平右衛門 五白張七人 六諸大夫 步行

竹中采女 森左兵衛 三好助三郎 三好久三郎

佐々木勝九郎 近藤七郎太郎 松平五左衛門 戸田采女

内藤四郎左衛門 秋本茂兵衛 松平右衛門 近藤登助 布衣

大久保宗十郎 酒井主水 永井右近 七番 諸大夫 三浦監物

布衣 米澤清右衛門 右中山左介 柴田左近

御車 家康公

布衣 成瀬小吉 左安藤彦兵衛 榊原甚五兵衛

横田甚右衛門 日下部五郎八 長谷川久五郎

阿部左馬助 豊島主膳 林 藤五郎

花井勝右衛門 伊那熊藏 加藤吉左衛門

高木善三郎 朝比奈彌太郎 石川半三郎

鳥井九郎左衛門 里見讚岐守

八騎馬諸大夫 本多縫殿助

都築與右衛門 井伊右近大夫

松平甲斐守 松平出羽守 本多上野介 石川長門守

松平飛彈守 松平玄蕃頭 本多豊後守 本多中務大輔

與三川守秀康事 同 豊前宰相 同京極事 同池田三左衛門事 九越前宰相 若狹宰相 播磨少將

同福島左衛門事 安藝少將

此日參内之節より相曇、還御の比雨也、四月十六日伏見の歸城也、

此比かふき躍と云事有、是は出雲國神子女名は國、但仕非好女出、京都に上る、縦は異風なる男のまねをして、刀脇指衣装以下殊異相、彼男茶屋の女と戯る體有難したり、京中の上下賞翫する事不斜、伏見城にも參上し度々躍る、其後學之かふきの座いくらも有て諸國へ下る、但江戸右大將秀忠公は終不見給、

七月三日、將軍家康公上洛、同十五日伏見へ還御、同七月廿八日、大坂秀頼へ將軍孫女祝言也、是者將軍息大納言秀忠公息女也、自伏見一船にて大坂へ被移、年七秀頼十一歳、常之十三四計之比也、

此春上方諸大名關東へ下向、秀忠へ有出仕、去五月五日午刻、雪雹、三川之山中降、中にも名藏山山多降、木の葉悉打落す、くちなわ多死之由也、八月浮田八郎后九州上る、是は去る子之秋、於關ヶ原に討死之由人皆誦之、然處其合戰場より薩摩へ落行、近年隱居之處、彼國主右府家康公へ屬之間指上せ、父子伊豆國大島へ被指流、將軍家康公息御滿、

此春常州みとへ被相移之處、九月死去畢之由、伏見へ注進也、年廿一八月昌叱死去、是は連歌之達者也、去年四月紹巴死去之後、京都之爲宗匠と、觀世大夫六月關東へ下、七月七日、於江戸能有之、九月二日、觀世大夫濃州加納へ着、同五日の夜、飛驒夜能有之、同本まる於作州信昌終日有能、岐阜近邊の者爲見物、七月廿五日、前々か崎城主左門櫓より落死す、息采女跡を繼、

十月十八日庚子、右府家康公關東下向、其日長原迄可有下着之由被相定之處、少年の息二歳頻に被逐跡之間、可有同道之由付て、晚より俄に前々か崎迄下着給、此若君兄四歳、同關東へ同道御、去七月祝言之時、上方諸侍秀頼公へ疎略有之間敷之由誓紙之由風聞、專羽柴左衛門大夫藝州備中主取行云々、

十月九日、相摸國ばにうの渡より大磯平塚迄氷ふる、其大なる事天日程也、他所一圓不降、十二月三日、淺間山三四ヶ度鳴、此響三川美濃へ聞ける、同七日寒に入、此冬殊暖氣、寒中雨雪節々降、中にも廿三日の夜大雨水出、十二月廿五日より明る正月八日九日迄寒し、其後俄に暖氣、此冬、關東は節々大

雪、寒事超_三過近年に_二せり、十二月上旬の比、於_二伯者に_一國主中村一角_四十_四臣下の横田内膳_{是悉皆用人、併を將軍依氣相}直に生害_{此儀將軍甚不快}、内膳一男構に_二楯籠之間、卒爾に難_一遂_三成敗、出雲之主堀尾より人數相加責_二之、寄衆數百人没死、其後有_レ扱、令_二楯籠一處之上下可_二相助_一令_二諾應、城主切腹、十二月五郎太郎主_{將軍息男、被_レ定_二甲斐主、主計從_レ之、於_二常陸國_一廿萬石長福主_{年四歲、將軍息男、是は去秋逝去之御滿遺跡也、河中島を竹主拜領也、是も將軍息男、年十二歲}、}

此冬、山岡道阿彌於_二伏見_一相果、_{年六}將軍別而氣相也、此年京都町人を十人組と云事あり、依_二將軍仰_一也、洛中上下迷惑す、十人之中一人犯_二惡事_一は、九人の者可_二與同罪_一之由也、是は京伏見其外邊土に、盜賊令_二亂行_一之間、爲_二政道_一如此、然其福人は貧人に組事を愁、財寶を他所に令_二運送_一置_レ之、此政於_二洛中_一先代不_レ聞之由云々、此比、江戸の大納言秀忠公任_二右大將_一給、

十二月廿三日、京都三條之比丘尼御所どんげん院失火、

慶長九_{甲辰}正月朔日曇、夜半以後大雪、元日より八日九

日まで寒、其後暖氣、二月十日之夜丑刻に、魂打歎、とんくと五六度鳴、其後はたくと云事夥し、此比、關東中神社堂宮自家康公_二有_二建立_一、

三月朔日、將軍立_二江戸_一御上、先一七日熱海に湯治、三月廿九日庚辰、伏見に着給、少年息男兩所同_レ之、三月廿九日及_二酉刻_一、日のまわりより雲四方に飛事夥し、珍事也、去年二月十五日朝、當年正月朝も、大方似_レ之云々、三月前々か崎に伊勢大神宮飛移給とて人參詣す、

此年、或女頭二ある孩兒を生、先年も如此之子を生けるか、洛中を渡しける、其年何して凶事有_レ之し程にとて、此度は不_レ渡則害しける、此比有_二怪異_一、内裏之庭中に從_レ何共なく、長持二枝あり、之をあけて見に、一には生頸多有_レ之、一はあくれ共蓋不明、其上に葉のすんくと切たるを置、不思議なりし事共也、又近江國横關に怪異あり、巳の刻迄は水もなき所に、及_二午刻_一毎日血池出來たりと云々、

四月五日、於_二伏見_一上方大身衆有_二年頭禮_一、同小身輩六日に有_レ禮、兩日の禮諸大夫分九十八人、小袖一重宛、自_二將軍_一被_レ出、

三月廿七日、於_二院御所_一、觀世大夫能仕、三月盜賊自_二山崎_一擄來則成敗、是は京町人子共養子之由令_二約束_一、代物衣類已下を取、其子を淵河に沈けると也、三條どんげん院從_二秀賴_一可有_二建立_一之由也、

卯月廿日、越前之秀康關東下向、右大將爲_二見廻_一也、_{是は右大將兄、當年廿一也、兩故廿一日、淺野左京大夫九日清須に着玉ふ、唐瘡病者なり、}卯月廿一日、淺野左京大夫所へ將軍有_二御成_一、去十日時分可有_レ之由之處、延引にて如_レ此、廿三日、關東大風雨洪水、上方はさして不_レ降、五月三日、松平飛驒關東へ下向、_{美作守信昌息、猿橋爲_二節所_一之間皆下馬、于_レ時豐田久兵衛と云者之馬、主の脇指をくわへ拔、久兵衛是を取んとする所に、馬口をふる、彼脇指にて久兵衛手をつく、不思議なりし事共也、_{此二三ヶ年、國々伽藍從_二秀賴公_一建立し玉ふ事甚也、定て心中に有_二立願之儀_一歟、此夏人魚伏見町に有_レ之、人見_レ之、從_二北國海_一上ると云々、}}

五月七日、清須下野主但馬へ湯治、

六月朔日より、武州江戸普請、六月二日、羽柴左衛門大夫_{藝州備中主}關東下、是右大將秀忠爲_二見廻_一也、同五日宰相秀康從_二關東_一歸上、此日岐阜に被_レ泊、同八日伏見_{濃州の伏見か}に被_レ着、福島左衛門大夫も、此日河手に

泊、互に無_レ見廻之儀、六月十日丑、將軍上洛、十六日參内し可_レ給之處、雨故延引、翌十七日甚霍亂し給、但則本復、廿二日丑參内也、廿四五日、於_二京都_一能有_二七月一日伏見へ歸城_一、

七月朔日より佐和山城を彦山へ被_レ移普請あり、七月五日、神島左衛門大夫關東より上、此日濃州河戸に泊、此日夕立甚、佐和山普請場へ雷落、隨分之者伊勢衆三人、其外十八人死、五三十も手負在_レ之由也、此頃伏見も右普請あり、西國衆悉相上令_二普請_一、七月十七日未刻、武州右大將秀忠公若君誕生、十箇月に雖_レ不_レ滿平産、同廿五夜、俄大雨、六七月旱魃、國民令_二迷惑_一、同十七日於_二伏見_一宰相秀康公_{將軍右府息、將軍御成相撲あり、同廿一日、秀康大名衆有_二振舞_一能あり、同廿一日に、清須の主下野主自_二伏見_一歸國、此中於_二伏見_一不_レ斷煩也、同廿二三日比、三州鳳來寺山移動搖、衆徒彼山滅亡歟之由を存、本堂へ打寄居す、同廿五日甲戌、戌刻夕立甚、近年如此急雨無_レ之、夥雨也、}

八月四日壬午、酉の時より大風、誰ぞ時迄は雨少降時も在_レ之、戌刻より雨不_レ降、風計也、諸國失毛不_レ可_二勝計_一、八月十四日壬辰、八月節也、伊勢尾州近江

美濃者大風、山城大和畿内此風不吹、三川もさして不吹、尾州長島高波にて、堤崩水入、同五日申之時終より雨降、八月十日比、自佐渡國大久保十兵衛上る、銀子山繁昌之由悦玉ふ、佐渡國を十兵衛に被下、但銀山は八月十五日、豊國爲三神事諸大名馬を出し、賀茂の社人務之、其馬の裝束追繩沓已下、何も紅の唐絲也、鞍籠以下結構の儀也、同四座猿樂能有之、十八日、同豊國神事、京町人風流あり、其體六組にしてをとる、見物の上下幾千萬と云不知數、但在伏見の大名小名見物無之、當年太閤秀吉第七周忌に依て如、此、同廿日京都町人伏見の風流來、同八月之比、出雲之國主堀尾信濃守死去、此比京中又邊土盜賊多之、當月中、關東從右大將秀忠公諸國道路可作之由使相上、廣さ五間也、一里塚五間四方也、關東奥州迄右之通也、木曾路同如、此、
閏八月小、十四日壬戌、將軍家康公關東下向、又去五日美濃尾張伊勢大風、然共至て無失毛之儀、長島伊勢浦近邊は、鹽風に付て損毛也、此秋關東凶年、此秋木津川橋從秀賴公被掛、其長二町餘と云々、十一月十八日寒に入、翌朝少雪ふる、廿日夜廿一朝迄大

雪、此寒中諏方湖水不凍、人馬一圓不相通、今年程暖氣之儀此已前無之由云々、五年以前庚子之冬程寒しける事無之由、何も諏方の住民云之、十一月廿九日晚より大雨、十一月十二月之比、將軍大鷹多落る、大方六七十居もをつるか、尾州新屋邊の鷹も同前、十二月十一日夜より日々十六日迄雪ふる、但積事はさしてなし、同十六日戌刻、丑寅之方に魂打三度、同地震、其夜自關東上者、今切之東舞坂に泊、右之魂打と聞へければ、俄に大波來て、橋本に家百間程有所に、八十間計潮引て行、纔に十間計殘ける、人多死、折節舟に乗合ける者は荷物をはね、舟は山際へ打上ける、其時釣に出ける舟廿艘計行末不知、此時伊勢國浦々潮數町たりける事一時計也、漁人共魚鮑已下心の儘に取處に、潮俄に來て、大石共浦々へ打上ける間、生て歸者なし、其内に年老之者は、如何様不審に思、急陸へ上者は、少々生て歸も有ける、右の波の打上ける石共に、鮑已下或は五十或は卅有ける、島々に人屋又兵糧の藏以下船網、無殘所潮に流行、行衛不知、關東も此波同前云云、二百四十四年先、康安元年辛丑七月廿四日、攝州

難波浦に如斯之儀有ける由、太平記に在之、右之大波之比、伊勢山田岡本町七百間餘燒失、人馬多死、依之暫神前に社參を被留、紀伊國四國西國何も此波同前、地震は所により大小あり、關東も同前、上總國小喜田^{喜カ}領海邊取分大波來て、人馬數百死、中にも七村跡なしと云々、諸國內の海は不苦、攝州兵庫の浦は一圓不苦、是は先年丙申の地震、他所に超過しける故かと所の者申也、六月干魃、攝州小屋之池の鯉鮒悉干死す、彼所の者は、昔年行基の魚を被放けると云傳、依て是を不取、あたりの村より彼魚をぬすみ取けるとなり、如、此の干魃の様しも、此已前兩度有けると云々、
此年、京都知恩院立、從右府家康公建立、當時無双之寺院也、
此夏自高麗爲使淨雲大師と云僧來、家康公關東下向し給已後京着す、依之翌年春迄在京、家康公曰旨を得高麗の歸朝、彼使之様子は、先年秀吉公高麗の人數被渡已來、自明朝高麗人數を置、彼番手之衆狼藉不可勝計、爲之迷惑す、日本無事於相究者、明朝衆相返、如前々有度之由と云々、

慶長十乙巳正月九日甲申、將軍爲上洛江戸を御立、淋病氣故駿府に暫有滞留、二月五日庚戌立給、同十九日伏見御着、
正月十五日、於大坂左義長在之、見物の者多し、然處に大藏平三知道子、當時鼓の上手、人にをされ胸を打血を吐、三月十一日没死す、上下無不惜之、
正月末は暖氣、二月三旬共寒す、中にも二十三日比打つ、き、三度大霜、草木爲之凋、二月中雨節々降、廿五日戊の刻雷少動、但當春初、其夜半に玉うち、十九日甲子雨、廿二日三日雨、廿八日九日雨、二月廿四日己右大將立江戸上洛、十八日可有出張之處に、打續大雨故如此、國々大河船橋を掛、其行粧、
先陣館林の 榊原式部大夫 佐野修理大夫
の 信州小室 仙石越前守 同深志の石川立蕃頭
二番 奥州住伊 羽柴越前守
三番 達政宗也 羽柴左衛門督
四番 甲州府中 平岩主計頭
同國 諏訪因幡守 同 溝口伯耆守
甲州都留 鳥居彦右衛門 信州飯田 小笠原信濃守
郡の 同高遠 保科修理頭

依三合力也、三月廿一日乙未、右大將伏見に御着、先陣後陣之衆同之、廿九日、右大將秀忠公御參内、是は去々年之冬、被_レ任_二右大將_一を賀し被_レ申儀也、四月上旬羽柴肥前守_{北國}の主上洛、養子犬丸を同道、則前將軍家康公へ出仕、犬丸進上物金子卅枚、加賀羽二重三百端、小袖五十也、自_二家康公_一刀脇指被_レ下、右大將秀忠公へ犬丸出仕、進物金子五拾枚、加賀羽二重五百端、小袖百也、同肥前主進物黄金卅枚、加賀羽二重三百端也、自_二右大將_一犬丸へ刀脇指被_レ下也、肥州家老何も右大將へ有_レ禮、進物各小袖也、此犬丸は秀忠公聲也、肥前守は則有_二歸國_一、犬丸在_二伏見_一也、四月九日、右大將金森法印へ御成、此法印于_レ時家康公の氣相の人也、其晩古田織部所へ有_二數寄會_一、此織部于_レ時數寄者也、去二月より雨繁し、大方三日に二日はふる也、同八日壬子、前將軍御上洛、十日御參内、十五日己未、雨、此日伏見へ御歸、十六日庚申、右大將秀忠公有_二將軍宣下_一、十七日自_二伏見_一上洛し給、廿日廿一二雨、五月節々雷二三度、風あらく寒し、廿四日比、遠州駿河大水、島田茶屋をし流す、自_二此時_一町河に成

間、町計東に島田町立、廿六日庚午、當將軍御參内、征夷大將軍の悦申也、去廿日甲子、可有_二參内_一之由の處、打繼雨故及_二此日_一、此度官位内大臣正二位淳和院別當牛車之宣旨也、新將軍進物、銀子千枚也、其外公家衆へ何も小袖馬以下被_レ送、廿七日、公家衆新將軍へ參入、及_レ晚伏見へ御歸、五月朔日、新將軍へ大名小名有_レ禮、上方大名、或銀子或小袖也、本よりの衆は太刀折紙也、馬代うす錢三百疋也、五月三日四日五日、於_二伏見_一能在_レ之、初日四座立合、後日三日目は觀世今春迄也、此比當將軍秀忠公在伏見し給し中、秀忠公之衆の小者共と、御所家康公の衆の小者共及_二喧嘩_一、双方二三千つゝの人數也、手負死人兩方に數多有_レ之、是は江戸にての有_二意趣_一如_レ是と云々、七八日比、大坂下民荷物運送し、人の心不_二相定_一、是は此比秀賴公伏見へ上給、其上々洛し給ふ尤の由、右府家康公有_二内存_一、此旨從_二京都之大政所_一、是は太閤之北政所也、大坂宣處に、秀賴公母臺是非共其儀有_レ之間敷、若達而於_二其儀_一者、秀賴公を令_二生害_一、其身も可有_二自害_一の由頻宣間、聞_レ之下民周章不_レ斜、秀賴公伏見へ上給事無_二勿體_一の由、上方大名

共の中より、大坂へ有_二内通_一之由云々、依_レ之秀賴公上洛延引也、十一日爲_二新將軍名代_一竹主、右府末子十四才、大坂へ被_レ越、則伏見へ被_レ歸、秀賴快氣と云云、此比今度上洛之關東衆依_二將軍仰_一、先立て思々下國、十五日、將軍家關東下向、甚雨、然間前々か崎に泊給、十六日諸國洪水、同日雨然共港口、十七日龜山、十八日桑名、十九日有_二逗留_一、廿日至_二清須_一着御、清須三日逗留有て、廿四日に立給、今日より快晴、廿三日雨ふる、能在_レ之、廿六日清須に有_二喧嘩_一、一兩月以前に、小者を打擲せられけるに、爲_レ雪_二其耻_一と也、甲賀左馬介と云者也、小者被_レ打ける者は、少身の者、名字分明不_レ知、六人在けるか、彼左馬介津島へ行ける歸路を待請て、六人の者打出、左馬介を討、左馬介供の者共二三人、跡より來て戰處に、侍四人中間一人被_レ討、六人の者の中一人ふかく手負ける間、五人之者不_レ捨_レ之、家へ取籠腹を切けるとかや、一人の手負を捨て落行は、不_レ可有_二異儀_一處に、日來賢_カ堅云合ける故に如此、六人の者何も覺悟しける間、女房被官小者以下、悉其已前に其好々へをとしけると也、時の人上下莫_レ不_レ美_二談_一之、五月下旬、伊勢安濃津城主富田

信濃守と浮田の左京云事あり、左京妹は信濃爲_二妻女_一、去比左京小姓を成敗しけるに、彼小姓の知音の者爲_レ散_二鬱憤_一、小姓を伐ける侍を剪害しけると也、是は浮田左京親類たる間、左京親父狀をそへ、信州へ遣間、相抱けるに、度々成敗可有_レ之由、自_二左京_一信州へ云送、然共信州妻女にも親類たる間、于_レ今抱置、其後是非共可有_二成敗_一之由云送處、何方へ哉覽闕落之由返答了、依_レ之左京腹立甚也、自身勢州津へ參可_二相果_一之旨思立行處、折節信州爲_二留守_一、然處に家の年寄出合、何として御來儀御太儀之由申處に、無_二是非_一令_二同道_一相上り、於_二大津邊_一腰の刀を取、如_二囚人_一にして伏見へ召連、於_二彼地_一互可_レ覃_二干戈_一之處に、各令_二異見_一、右府家康公へ令_二言上_一、右府相公は隱居同前の間、當將軍に可_二言上_一の由曰間、六月十五日、伏見を立關東に兩人共に下向也、六月四日、將軍秀忠公武州江戸に着玉ふ、去五月廿四日より雨不_レ降、早魃、下民悉迷惑相極也、當春日本國の船、ルスン、トキン、シヤムロへ爲_二賣買_一渡海の處に、如何したりけん一艘も不_レ歸、右の船或當_レ岩破損、或喧嘩をして被_レ殺害けると云々、又爲_レ取_二財寶_一、彼島々の輩打殺しけ

る共云、又去年エゲレンと云處の者共、黒船を押取り
る處に、日本の商船參令、商買、過分得、利歸朝の船在
レ之、ルスン、西シンチウと云所にての事也、是はたち
うりの桔梗屋の道圓と云者也、京町人羨レ之、當春船
を多遣けると云々、十四日晚、伏見夕立雨甚、京都は
不降、此年も干魃付て、攝州小屋の池水干魚共死、但
去年の程には無レ之、去月廿三日之已後雨不降、諸
國旱魃甚也、

六月廿八日夜甘雨ふる、少の間の夕立也、七月朔日
未申刻夕立雨甚、二日酉の刻より夕立、子丑の刻ま
て降、三川國はさして無干損之儀、五日晩、右府
家康公伏見西の丸に御移、本丸屋作に付て如斯、
七月八日九日能在レ之、初二日は觀世太夫行レ之、後一
日は日吉梅若八太夫仕レ之、此三人は丹波猿樂也、九
日の晩より終夜甚雨、但村立のことく也、夏攝州小
屋の池、去年干鯉共又死す、七月廿日、美濃尾張伊
勢近江三川大水、伏見京はさして水不_レ出、關東も此
水不_レ出、ろく川の堤西も二箇所、東も二箇所切、大柿
へ水入、大柿の下も塘切、高須の水入、三十年已來の
水の由云々、但木曾川はさして不_レ出、三川ねふの木

淺井堤切、所々水入、廿一日、右府家康公御上洛、伏見
屋形造作之間、其中可有_レ在京と也、廿二三日比よ
り、三川矢作川を可_レ被_レ通とて、米津に堀をほらる
る、是右府家康公の依_レ仰也、彼國の知行役、并其知行
百姓人足令_レ普請、士は百石に二人、百姓は百斛に一
人也、八月十日、關東大風大水、老人不_レ覺洪水と云
云、去夏中干魃、此年大凶年と云々、此水は關東中
迄也、上方は不_レ出、十二日右府家康公伏見に歸城、
九月小十五日_丁亥、右府伏見を立關東下向、例式少年之
息男兩所伴_レ之給、十六日佐和山、雨故兩日逗留、十九
日赤坂、廿日岐阜、廿一日稻葉山狩有_レ之、鹿七十七留
る、翌日手負鹿二留る、廿二日朝、加納へ右府打寄給、
城普請出來の間快氣し給、及_レ未刻立給、清須に御
通、兩日有_レ逗留、廿五日未明に、岡崎へ御通、十月朔
日、遠州中泉に着御、同十五日中泉立給、十七日駿州
田中に着給、廿二日田中立給、十月廿四日、長島_{尾河内}
城主菅沼志摩守日來煩の間、爲_レ養生令_レ上洛_{尾河内}之處、
不慮に頓死、此父織部、去年八月死了、志摩守女房も、
去々年春死去也、同廿八日に江戸へ御着、
十月小、上旬より清須下野主腫物煩、其後腫氣、

十一月十七日、右府家康公爲_レ鷹野川越をし_レ出御、
廿二日京都は雪降事二寸程、廿五日於_レ北野童部喧
嘩在_レ之、是兵法の論故也、將軍秀忠公爲_レ鷹野鴻
の巢出御、十二月廿日比迄有_レ逗留、

十二月小、中旬下野主煩甚危急、自_レ辰刻至_レ午刻、偏
如_レ死人、然午の刻終に樂を口中へ押入る處、さて蘇
生成、奇特と云々、十五日俄滅、さて追日平愈也、二日
於_レ江戸服部石見守改易、其故は夜行して、於_レ町中
害_レ人、于_レ時誰人不_レ知_レ侵、然間辻切敷の由訴之間、
自_レ將軍家町に金被_レ掛、可_レ申出_レの由被_レ立札、其後
右の仁しわさの由露顯の間如_レ此、廿一日夜雪ふる、
此日より打繼大雪降、中にも江州大雪、深さ八尺計と
云々、北國之儀は云に不_レ及、廿六日、右府自_レ忍川越
江戸に還御、此日酉戌刻、伏見火事出來、有馬玄蕃長
屋より出て、淺野彈正、會津飛騨、松平飛騨、彦坂平
介、大久保主殿助、同石見守、板倉伊賀守、眞田隱岐、
遠山民部家失火、其外たちうり町通焼失、
此夏爲_レ先王追善、叡山三井寺南都衆徒、於_レ内裡御
はんこう在_レ之、御經始を互望_レ之、從_レ禁中、學問器量
次第可_レ相始_レ之由有_レ宣下、先例も如_レ此云々、山衆

含_レ鬱憤留_レ出仕、依_レ之右府家康公へ令_レ申之處に、
右府も又如_レ此曰、向後可_レ守_レ此式と云々、
十一月下旬より、信州淺間山燒事多之、然て午の正月
末より不_レ燒、
十二月廿一日より甚寒、雪風也、十二月十五日、南海
洪波、此時八丈島の邊、大山一夜の中に涌出、
此夏高麗より爲_レ音信三使來朝、專調_レ無事と云々、
慶長十一年正月大、朔日立春、丑刻雨、卯辰刻雪、巳刻
より終日雨、二日快晴、伊豆國金山に銀子多可_レ出と
云々、大方は佐渡國より出る程も可_レ有_レ之と云也、此
已前代官彦坂小刑部たりしを引替、向後大久保石見
守可_レ爲_レ代官と也、大方は土百目にて銀百目の積に
なる、是は金子と銀とまじり出と也、

同正月、所々失火、京邊土の吉田、奈良、てんがい、上
坂本、江州の野洲、武佐、三川國吉田、赤坂、遠江の白
すか、橋本、下野國館林町失火也、自_レ關東上る者云、
所々町々無_レ失火處は大方無_レ之云々、
舊冬より正月十二日迄風雪降甚寒、十五日殊風烈し、
同正月中旬、於_レ江戸守都宮之與平大膳大夫屋敷の
庭に生首有_レ之、同比宇都宮城旗竿の上にとつ鳩子

を十二産、何も羽戩已成就し、翱翔す、同廿日比、當時筑後國主田中兵部息子主膳、計廿召遣小姓を令切めんとす、小姓却而主膳を切殺す、惣別此主膳心中違亂にして、人を手打にする事を好む、はや五十三人切けると云々、同下旬、於江戶青山常陸守、同男伯耆守、内藤修理、大御所家康公、背命甚不快、是は當將軍秀忠殊用人也、公の昵近、當時依之自將軍令勸當給、同正月、江戶爲普請、諸國衆自身下、二月上旬に各江戶に着、物主は何も令在江戶、人數は石爲運送、伊豆國に有之、石積船以上三千艘有之、一艘に百人持之石二宛入る、一箇月に兩度江戶へ有往還、江戶城石垣分七百間、高さ或十二間、或十三間有之と云々、此くり石は、去年米にてかい被置けるを、今金に被替ける、但去年被賣時は下直、今は高直也、於江戶此賣買の石あり、百人持の石一を銀二口充也、ころたの石は一間四方の箱一を、小判之金三兩宛之價也、關東在國之衆は、去年將軍上洛し給、依造作普請赦免、但去年爲留守居不_レ上洛之衆、千石に一人つ、人夫を出す、同正月、於江戶彦坂小刑部代官所の百姓と云事有之、各奉行衆被聞之處、小刑爲_レ非分、

其上公方勘定前引負多之、依之則改易、其身を被_レ推籠、一男有_レ別事過、親兄如此間、二男も同被_レ押籠、二月八日大雨、去正月十三日以後雨始て降、舊冬廿一日より于_レ今寒事甚、此日關東は雨不_レ降、大御所於江戶伊達政宗へ有_レ御成、終日可有_レ遊興とて、圍碁之上手、本因坊、利玄、道石同象碁之上手宗桂已下令_レ祇候之處、風特烈して、ほこり座中吹入事甚し、依之膳部終て後頓て令_レ還御給、此外無_レ御成、將軍家は所々有_レ御成、同二月、宇都宮山に旗出現、冬見之、同廿五日甲子、細雨、夜に入大雨、廿七日俄に風あらし、夜前戌刻、南に珍黒雲有之、三月四日、大水降雷鳴、當時肥後國主加藤主計頭息女、年九關東へ下向、榊原式部大夫息に爲_レ可_レ嫁也、正月七日九州を出、同廿六日至_レ大坂着船、此間在京、三月九日岐阜に着與、四十五丁、但十丁は人不_レ乘、馬上之女八十三人也、相伴物頭三人か、長柄の鍔五十本餘、鐵砲七十丁餘有之、主計頭は此日今須に泊、直に清須へ通、三月十五日申、右府家康公江戶を出御、一昨日可_レ立

給之由宣と云共、雨故及_レ今日、同廿日至_レ駿府着御、來年彼地可有_レ普請とて、其様子順見し給、同廿五日午駿府を御立、廿六日中泉、廿七八兩日大雨大水故、天龍河船橋落る、廿九日吉田迄御出、其日雨降と云共至_レ岡崎着給、同日於_レ鎌倉井を堀とて、銀の茶の湯釜并小壺を掘出す、大御所江戶を御出之日路次に持來、關東の事たる間、當將軍持參可_レ申の由曰、江戶へ被_レ遣、四月、駿府在城の内藤豊前江州長濱へ移、駿府には家康公來年より、彼地御座所にし依_レ可_レ給也、今春親大夫_{當時能之}江戶へ可_レ下とて、座の者共引連下處に、於_レ駿府大御所曰、江戶は普請最中也、自_レ是可_レ歸上之由也者、則從_レ駿府歸上る、大夫旅中之造作、其費徒になし失_レ氣云々、此春、關東中炎旱、麥毛一圓凶、但四月四日より雨降、駿河より西へは麥毛吉也云々、四月廿八日、御所家康公御參内、其日伏見へ還御、二條之御座所へも上下無_レ御寄、伏見有_レ石垣普請、但一萬石取より内の衆勤_レ之、一萬石より上の衆は、駿河爲_レ普請可_レ下間、被_レ除_レ此普

請、羽柴肥前守息筑前守_{於大}江戶被_レ下、四月出_レ國、五月三日濃州岐阜被_レ泊、相國寺三門建立、是は去_王備前國金吾果給ひ、已後改易之時、餘米二萬石、羽柴三左衛門借用之通を、今相國寺に從_レ家康公直に令_レ寄進給ふ、是を以此三門立也、五月朔日快晴、二日三日風あらし、四日晚より五日同雨、十二十三雨、十八九より露に入、長雨也、同六日、下野國館林城主榊原式大夫煩_レ腫物、瘵也、同十四日巳刻死去、此兄七郎右衛門近年隱居す、此春大御所被_レ召出、知行三千石被_レ宛行、駿河久能可_レ令_レ在城之旨被_レ定處に、當月朔日死去、又於_レ伏見西郡殿、十四日午刻頓死、是播州池田三左衛門御内_{大御所}息女、母儀也、榊式太は三左の子息之舅也、同日凶事不思議云云、廿五日夜に入大風、三川國關東箒麻爲_レ之損、同大水、上方は廿年以來洪水、美濃尾張は此水無_レ指儀、三川は所々堤切る、關東も水は無_レ指儀、午五月廿五日之大風に、自_レ伊豆國江戶石運送之船數百艘破損、其

内鍋島信濃守九州、石舟百廿艘、加藤左馬之介豫州、四十
 六艘、黒田筑州筑前、舟卅艘也、其外五艘三艘不可勝
 計、同廿五日酉刻終、伏見有光物、縦は唐笠程之光
 物自城出、豊後橋の通と見へて落たり、其跡をちい
 さき光物如く右出て、右の通へ落、又同月十三日に、伏
 見古宮より挑灯程の光物出て、是も右之通へ行落、又
 加藤主計頭屋敷より、行燈程之光物出頓て落、愛宕山
 にも唐笠程の光物有之由京町人云之、又やふれ車
 と云變化の物京中に在之、縦は車の通音する間、見
 之所に、目にも不見、昔年兩度如此怪異有之き、
 二度共に凶兆と云々、
 去比松の丸番衆松平若狹守子年於伏見に死す、五左衛門子、女事に付
 て改易也、

六月朔日巳刻終地震、同申刻終又地震、四日、去比
 より駿府普請、七月朔日に可始之由、美濃尾張飛驒
 遠江三川へ被相觸之處、此日又來正月迄延引の由
 有觸、三日辰時少地震、

江戸石垣、去四月末に早普請之衆出來、則石通にうめ
 られし堀を又ほり、五月末に出來、六月十日比、伏見
 歸上衆も有之、是は福島左衛門大夫組也、左衛門太

も六月十五日に、清須まで被上、廿日比に伏見へ可
 被着と也、自餘の衆普請出來、追々上らる、但各人
 數は未被殘置、

當代記卷四

是は慶長十一年丙午の年之事也、年號此以前に書付る、
 去比、江戸普請中に、福島左衛門太夫安藝備後與兩國之主、池田三左
 衛門尉播磨備前兩國之主、云事あらんとす、其故者、左衛門太下
 女闕落して三左に居、左衛門太中間、三左衛門外を通
 りけるか、見付て臺所之前に押付捕之、侍中間出合、
 狼藉者成とて、彼中間擲置、左衛門太聞之云、國を出
 し時、家中の上下被相觸様、此度江戸普請中、不可
 致喧嘩、人にあたまはられ於令堪忍輩、可有
 寝美、人を打擲し、喧嘩仕懸たる者は、一族妻子等迄、
 可同行同罪之由令下知一處、如此儀不及是非、三
 左屋敷に被擲置中間并女、則可返給、以使被伸
 條、則被返遣、則列首を、右之中間擲ける三左中間

共、相構不可有折檻之由、左衛門太より被申所
 也、三左も神妙の御存分承之由被申、左衛門太宿所
 被參向、被及禮謝、又左衛門太も翌朝三左宿所
 被參入、昨日之御出忝之由被伸之間、云事相濟
 畢、此三左衛門太夫正則短慮荒々敷して、被官以下常
 に戰栗之處、此度か、る神妙成存分奇特之由、于時
 皆感之、或者之云、時分を被相待かと云々、

自江戸被上於伏見に、加藤主計頭、各に被相語、
 御普請出來之後、一萬石に百人持之石貳つ宛上可
 申、其外儀は氣次第之由被相觸之間、各及此儀
 に、或は百二百、或は五十三十石を進上也、又始石を
 二三萬各に借し給、是は去年將軍上洛し給時、關東に
 被殘衆に宛課、被聚處の石也、各石不寄以前に可
 被遣之由にて如此、さて普請出來の上、此石を被
 返上處、大小に付何角奉行中六ヶ敷儀有て、及迷
 惑之由被語、

東三川國花井山會下傳藏主と云僧、於鳳來寺法花
 經三千部令讀誦、さて花井の寺に歸、七日斷食して、
 十月十日に入定也、年七十八、當世の奇特と云々、
 六月廿七日、安藝國嚴島の祀也、彼所代官山本小兵衛

と云者、此祭の場より狂氣して、七日物に狂頓滅す、
 彼社領、毛利輝元の時三千石被寄附けるか、去子年
 福島左衛門太夫被拜領しより、悉被取放一圓不
 被寄附、其祟として下民申あへる、福島左衛門太夫
 息男被死けるも、此神罰とて、此年より纔五十人扶
 持被寄附けるとかや、其上末社之堂宇并鳥井一被
 建立、

六月、此比、京町人北野賀茂邊に出行之砌は、かぶき
 當世異相、衆出合たはふれ、爲之惱る、其上耽女色、
 覺外之儀多之、大御所之を聞給以外逆鱗也、此事於
 虛言者、罷出可申分之旨曰處、分明の不及、諍論
 之間、則改易也、謂津田長門守、稻葉甲斐守、天野周防
 守、澤半左衛門、苑田久六等也、此後又大島雲八、阿部
 右京、矢部善七郎、野間猪介、浮田才壽改易也、未同類
 甚在之と云共、重而不及沙汰、

七月、江州長濱爲普請、美濃國先方之衆、又飛驒國
 衆、并江州人足被遣、此比院之御所有普請、越前秀
 康主人數を以務之、同七八日比、清須の小笠原監
 物他國也、寄子就改易之儀、少々奉恨下野主を
 如此、是於彼地無双の出頭人也、又此比、長崎へ黒

船着、相摸國三浦にも小黑船着、此船にも糸一萬斤在之と云々、薩摩國にも白船貳艘着、又紀伊國にも小黑船着、近代如此唐舟多來事無之、
 同七月廿七日、自伏見大御所家康公上洛し給、
 八月二日三日兩日、於京都二條御構に能有、初日觀世協の能行之、後日協能今春也、去年大藏平三相果し後、大つ、みの上手一圓無之と云々、八月七日八日兩日、於院御所能行之、初日式三番、脇能觀世左近行之、後日式三番、脇の能今春行之、同十一日、家康公幼息五郎太主長福主參内、被任少將、五郎太主は右兵衛佐、長福主は常陸介、廿日比、少有喧嘩、同廿七日、大御所伏見に還御、
 此春比より、奥丹波の舟を可入として、淀川を掘けるか、此程成就して舟往來有ける、是兵糧可運送之支度也、嵯峨の角の藏智是を取行、奇特と云々、又甲斐國にも川舟を可入匠有けると也、同八月廿一日、午巳刻より申刻迄大風、此比、加藤肥後守能行之、觀世太夫行之、是者去年今春太夫に能させられけるを、大御所觀世太夫に能させられざる事を不快と聞ければ、今年及此儀、觀世太夫に銀子廿枚、から

織の小袖一重、むす子に銀子十枚小袖一重、唐織、其外座中の面々及引出物、又此能見物快然之由有て、唐織のよるの物十、大御所に進上也、
 同廿九日之夜より、翌る朔日巳刻迄大風、美濃近江伊勢大風也、尾州より東は少之儀也、四國中國は大風、濱邊は鹽所々々入、北伊勢も鹽所々々入、長島へ鹽不入、大島へは鹽入、九月秋も不熟、兩度の風故歟、關東猶以凶年と云々、
 此比、院御所築地普請、越前主秀康公の衆務之、
 九月廿一日、亥日、大御所伏見を出御、關東に下向し給、十九日に出可給之處、大雨故及此日、
 此度は、越前の中納言秀康主在伏見し可給之由、大御所下知し給之間、被任其儀、
 江戸本丸普請、屋形已下出來、廿三日に將軍秀忠公移徙也、
 同卅日、亥子兩刻雪甚、大雨風烈、此比雪影事近年無比類、此日雨故、大御所白須加に御宿、
 今月中旬には、未菊替て不開、及下旬少々開、今年程遲事無之、
 十月六日、大御所至駿河府中に着給、城場の事、今

の城より南河野邊と云所被移、來年可有普請と也、廿六日、駿府を大御所御立御下、
 十一月四日、已至江戸大御所御着、
 十一月六日亥刻、伊勢國桑名火事、魚町油町しよく人町本町片葉町京町は一方、以上三百間餘失火、
 高麗與日本有入魂は、明朝の番手可引取之由付て、自高麗使者可有渡海由、從對馬以使者江戸に被申、自大御所刀銀、其上九州にて米千石彼使に被下、自將軍同刀銀子被下歸國也、
 駿府城場之事、此間之有増相替、此以前の居城可有普請に被相定、但南東北は少々可被取出と也、十五日、安房國主里見の梅鶴、於將軍被致三元服、父は去々年死去せられける、安房國に奇特の梅木在之、初春に梅花咲、三月櫻の花咲、梅花は紅の八重にして香深し、櫻は一重にして白し、梅の實は尋常之梅よりもちいさく、一木にして如此儀、無其類事歟、
 廿一日、大御所從江戸川越に出御、
 十二月、將軍秀忠公自江戸、爲鷹野東筋へ御出、古河下妻佐竹筋有廻見、是大御所依異見給、如此、

十日巳、寒に入、俄に五六日さむし、此以前甚暖氣也、此比、院の御所築地越前衆あがる、京町人仰付、始は二千人程宛出、後は五百人程也、來年中にも難出來と云々、此とき町人ふれなかしもの者、禮錢を取令依怙之間、何者のしわざにや、目安を上問露顯と也、さて京中家を日記に付、三萬貳千間餘有之、但公家門跡方、六條本願寺神社方、寺方は此外也、されとも何共成敗の事無之、
 此比、伊豆國金山の行金可鑿之由、京中に札立、同諸國より下事不知其數、
 廿二日丁巳之夜より、あくる廿三日巳刻迄大雨、其日終日曇、廿二日に快晴、
 此冬中暖氣故、地さして不氷、來年早魃の兆と云々、然者五日三日宛兩度大きに寒する故歟、諸木いたみ、蜜柑などは枯たり、
 廿三日、於江戸伊達の正宗息女を、上總守大御所嫁し給、伊賀國主筒井在所上野の城焼も、其侍町人家悉不遁此災を、兵糧過分に失火と云々、志摩國長島の城主菅沼新八、去年十月、於京都死去、其遺跡を第三の弟左近相繼、是は近年令在江戸、將軍に令

長老并元學校於三京都直されしを、今披見して、文字違之由在てかきなきをさるゝ、

二月十三日、美濃國加納飛驒守康唐犬岐阜山へ入、鹿をながら川へをい入喰客、害その鹿いかにも大なり、角珍きなり、縦は袋角の如し、但尋常の角の長さにして大なり、小刀を以てけつりみれば血出る、或人の云、是本々の袋角と云物也と云々、當世如此之角無之、

廿日、國と云かふき女、於三江戸に二をとる、先度の能のありつる場にて勸進をす、

舊冬より正月迄暖氣、二月始中終甚寒氣、從高麗無事扱の使隨分の人來の由、對馬より在三其告の間、路次中泊々屋形を作り、可有馳走と也、此寒氣故、海上ある、か、于今無渡海と云々、

廿九日、大御所江戸を御立、相摸國中原に爲鷹野逗留し玉ふ處に、金の茶具、釜、天目、水さし、ひしやく、同柄杓置、茶酌已下、悉く紛失、是近衆の輩の仕わざかとて、供の衆上下、其夜の泊所之宿を被改と云とも、分明の儀無之、其夜番之衆あいは勝七、落合長作、岡部藤十郎、是三人を方々城に被預、勝七はか

け川、長作田中、藤十は沼津なり、翌朝右之釜のふたを藪にをとし置か、是を見出言上す、爲其褒美、金三枚引出物なり、

此比、たはこと云事あり、各行之、但後はたゝるとて嫌之者もあり、是は南蠻より渡と云々、去年の比より京中に有、

清須主薩摩守、此中令煩給ひつるか、少得減を、廿六日、將軍へ出仕あり、直に大御所へも可有出仕之由言上之處、大御所駿府へ御立前取籠の由曰ふ間延引、薩摩主は、此日より大久保加賀守宿所に逗留、

廿八日大御所加賀守所へ入御、薩摩守と在對面、廿九日、大御所江戸を御立、駿河へ出御、

三月朔日、雨、越前中納言秀康越前へ下向、人數は駿河普請として相下間、在伏見無其全との分別か、煩不可然間、越前へ罷下之旨、駿河へ飛脚を以令言上如此、三月板倉伊賀居所へ、虚空より礫を打、色々の祈禱をしけるとなり、

此日より江戸普請あり、關東衆務之、先一萬石役にくり石二十坪也、船を以可運送とて、一萬石に五艘宛かし預る、上野國中瀬邊より運之、一坪と

云は、一間四方の箱に一つ也、中瀬より一箇月に兩度、此舟江戸へ上下す、

三日、晩に少曇といへとも雨不降風吹、

五日、佐和山城主右近大輔今兵部少母儀、關東へ被下、先上野國安中に可居住の由、大御所令下知玉ふ、

彼地爲私領故也、五日戌の刻、清須薩摩守忠吉、於三江戸芝に逝去、此中煩の中、尾張へ歸國有度之由曰、一昨日三日江戸を立、於芝に果玉ふなり、年廿九歳、大御所男將軍秀忠公指次一腹の弟也、秀忠公一腹の兄弟は、此忠吉計也、

六日、古薩摩守の内石川主馬、稻垣將監追腹を切、薩摩守の令供、

九日、夜前より雨、今朝殊に風烈して大雨也、城の扉亦は下民家破損、

近年駿河興國寺の城被置、天野三郎兵衛與三井手甚之助云事あり、富士の下野原田の百姓與三郎兵衛侍與及鬪諍に、百姓蒙疵を、於三島目安を上る條、双方召出及對決、百姓口上の旨無相違、其上百姓脊五六十箇所之刀疵あり、百姓退處を追付伐之事狼藉至極せり、依之三郎兵衛を被改易、是久き奉公者、年及八旬仁也、

薩摩主逝去之事、從三江戸以三土井大炊を被申、於三小田原可言上處に、右之茶具相失に付、大御所逆鱗之間不申之、於三三島令言上、薩摩主日來煩之體を被及見故歎、さして無愁傷と云々、

十一日、大御所至駿府着給、薩摩主家中、爲駿府普請在府、薩摩主於三江戸死去之間、相下無用之由大御所下知あり、内々江戸より依仰、將軍清須へ歸上處、請取所之普請可出來之由、大御所曰間、自途中又駿河へ歸令普請、

十六日、小笠原監物薩摩主自愛小姓たりしか、役、去年薩摩主取立、近年悉皆之出頭人也、去少有三述懷、奥州に下松島居住、自父和泉守告之處、則松島を出相上、今日江戸に着、十七日、薩摩主葬禮寺於三增長寺に、小笠原監物腹切令自害、其體殊神妙、見人流双涙を、(監物小性有佐々木清九郎と云者、同腹切監物令供、是は去年喧嘩にて人殺害、其砌可有成敗を相助、依難忘恩賞如此、)同廿日、

薩摩主葬禮被執行、不知末代、前代未聞之結構也、監物、將監、主馬、清九郎、同慇懃之吊也、龜合五、同墓も五、是不吉之兆と云々、

同三月廿五日、五百石之知行に壹人宛人夫配課、駿府

普請として可相下一由也、先伏見に上三荷物、長持以下駿府に運送すへき由被相觸、是畿内五箇國、丹波備中近江伊勢美濃當給人知行、并藏入合十箇國之人夫也、去年爲三江戸普請下る衆、并近習輩知行は除之、此五百石夫、大坂秀頼公領分へも同前被三相配相下也、此度下三荷物之内、金銀百五拾駄有之、是は町々傳馬也、一駄に金は六百枚付と云々、

此荷物相下付、京畿之者共、何角謳歌之説也、此比、古薩摩衆駿府普請指置、尾州清須へ被返、

廿六日之晩雷なる、北山邊夕立、廿七日、晩雷鳴、東美濃よりまめと邊迄氷降、此氷大にして小鳥など打害す、麻麥損亡、去乙未之年四月も、上野國如此氷兩度降、其時も村々に降しか、此度も其體にして、東美濃にも不降筋有之、

卯月朔日、未刻より亥刻迄雨、去月九日以後是初也、下民悦此事也、但翌日風荒して、柿の木若枝など皆吹切、(四月之比、梅津の僧愛宕に參詣之時、山伏出合書物を誂、京都伊賀守所へ遣すと也、)

去年堀し丹波國の川舟通事、日照時は瀬淺して難通、大水時者三箇所瀧水強して難通、今年甲斐國の

舟路を又堀也、

四日、甘雨降、但小雨也、十四日十五日同雨大雨、十五日丁未四月節也、廿日八專に入、廿一日雨、廿二日より快晴、八專二日目に雨降は永雨也と云事相違歟、

駿河普請衆中、濱松懸川吉田岡崎衆、高麗爲馳走一本國に被返、

此比、京都長吏爲見廻駿河江戸に下、同下旬、大坂町數百間焼亡、

廿七日、朝大霧降、廿八九兩日細雨、閏卯月二日甲子雨、

此比、自伏見金銀又百五拾駄駿河へ下、四日快晴、

此比、大御所近習衆以下、伏見家を少々こほち、或は疊或は戸沾脚族も有之由風聞、

於三京伏見、何者しわさにや狼藉不可勝計、及暮は通路不輒、

當月朔日より江戸普請、關八州并安房信濃越後奥州出羽衆行之、關東衆百萬石を二十萬石宛五年に分、八十萬石にて石をよせ、廿萬石にて殿守之石垣被築、奥州衆伊達正宗、米澤長尾景勝、會津蒲生飛驒、

最上山縣出羽守、今愛^秋田に住の佐竹、越後の堀久太郎、同國溝口伯耆、同村上周防守、右之衆は百萬石之外、何も堀普請務之、

此比、關東普請衆に扶持被下、二月の勘定に出也、去年之石垣高さ八間也、六間は常の石、二間は切石也、此切石をのけ、又二間築上、其上に右之切石を積、合十間殿守也、惣土井も二間あけられ、合八間の石垣也、殿守臺は二十間四方也、

後卯月六日、高麗人去月廿一日に京着、此間在京、今六日に出京關東に下、勅使三人、貳人上々官人、二十六人中官、又其次八十四人、下百五拾四人、合貳百六十九人歟、右之二百七拾人之内、日本人少々在之、是は先年彼國に打入し時、殘留居住の者歟、泊々事、守山、佐和山、大垣、清須、岡崎、濱松、掛川、藤枝、清見寺、三島、小田原、藤澤、神奈川、何も路次中、宿朝夕の餉、御分領代官衆行之、鞍置馬百四五拾、小荷駄馬貳百疋餘、人足三百人計也、鞍馬は路次中城々より出、并所々船橋以下馳走也、大鷹五十本居下、是も城々より鷹師出す、但近江美濃衆之鷹師江戸迄相下、鷹は何も尾羽を切、舟にて渡故歟、

此渡海之衆、何も衣裝きらひやかならず、不審と云々、勅使三人乗物、其内先一人、乗物之内に書物を左に置、右に人形を作、作花をもたせたり、朱にして置、是指南車の古事の木人か、此三つ之乗物は、高麗よりの乗物也、上々官人と右之貳人は、日本之乗物也、馬に乘事一段上手也、跡へもをり、先なる馬へ飛移乗る、かん能馬にも鞭をあて、走共早道共なくのる、食物は庭鳥上々同雛ふた上々、鳩上、鴨同、鶉雀同、鯛同、鯰、かまほこ、鯉、鮒同、雲雀、鮑以下上の食物也、賤者共はにんにくを好也、茶も上々、酒を好、何も鹽物はさして無之、菓子以下迄大方此分也、甘き物を別而好と也、勅使三人は、路次にても左右を見事無之、形儀神妙也、何時も宿を出入時、如鐵炮なる物を三つ放、鐘鼓を打鳴す、

高麗人間、卯月廿六日江戸に着、此度、高麗人進上大鷹、京都を四十八出けれ共、於三路次一過半をちて、二十二羽江戸に參着、此内も煩鷹多し、後に聞は、八羽をちすして有けると云々、先年、大閤秀吉公に、高麗より如之進上の大鷹有、九州にて何も鳥屋へ入來、秋の末に鳥屋を被出し間鷹無恙、

此度は長路を下故歟、右之通損たり、
 閏卯月八日、午刻、越前中納言秀康主逝去、年三十日來
 唐瘡相煩、其上虛也、京都より盛法印、驢庵、道三、此三
 人之醫者相下、被_レ用_二藥_一を_レけ_レれ共_レ不_レ叶、翌日古秀康
 公内長見右衛門追腹を切_二年二十_一、かいしやくの侍同自
 害す、十一日、古秀康内土屋左馬介腹を切、是は生國
 は甲斐國也、武田滅亡之後、家康公小性して有ける
 か、先年令_二喧嘩_一、結城_レ行秀康に奉_レ付、去辛丑年、秀
 康越前へ被_レ移、知行四萬石被_レ宛行、大野に令_二在城_一、
 子共_二三人_一有けるか、曾不_レ及_二遺言_一、萬事一圓不_レ構
 と云々、最後殊神妙と云々、かいしやくの者同令_二自
 害_一、同秀康主内本多伊豆守、是も可_二自害_一、旨思立處、
 自_二大御所_一被_レ下知_二被_レ留畢_一、是萬端之用人也、
 十九日、金銀八十駄、自_二伏見_一、駿河へ下、
 廿日、炎千良久、土民失_レ耕_二作業_一、此以前折雖_レ降_二細
 雨_一、只土地しめる計也、
 關東は麥毛一圓不熟、駿河より西へは吉、
 廿四日大雨、廿五日終夜又大雨、
 當年は、子_レ今黒船不_レ渡、是は通子去年唐船頭に告て
 云、船多渡海之間、糸日本に多し、今年又猶着_レ船は、糸

可_レ爲_二下直_一と云々、依_レ之不_レ來歟、但大御所より印
 子壹萬御詔と云々、印子一つと云は、或は百目或百五
 文目有_レ之と也、印子壹つを銀壹貫四百匁程の直と
 也、然は印子壹萬は銀壹萬四千貫目の價歟、もとより
 唐人は銀を吹直し、銅夾を皆吹捨、本々の銀迄を取、
 此度大御所命には、不_レ吹して丁銀を可_レ取由曰、是唐
 船の者共不快と云々、
 同閏四月廿六日、尾州古薩摩守遺跡に、右兵衛主を被
 定、年八歳、大御所九男也、依_レ之平岩主計頭先清須に可_二在城_一由、
 大御所仰之間、平岩主計自_二甲州_一駿府へ參上して、貴
 意之旨奉_レ之、則甲州_レ歸、廿九日朝大霧、
 遠江懸川に被_レ居城、松平隱岐守、是家康一腹の舍伏見に弟、父は別也、
 可_二在城_一之由、大御所同將軍令_二下知_一給、懸川城同
 本領、息男に被_レ相讓、
 五月二日、午の終より大雨水、
 此比、大久保石見守佐渡_レ下、銀山仕置可_レ仕之由依
 仰駿州を立、伊豆之金山銀、しかく此比は不_レ出と
 也、
 六日、於_二江戸_一高麗人出仕、進物、人參貳百斤、虎の皮
 五十枚、毛氈廿枚、唐筵五十枚、むりやう百卷、大鷹五

十羽、此鷹過半失す、此青皮廿枚也、又對馬守進物、段子
以前に注之也、
 五十卷、油布五十端也、
 越前古秀康息男三川守_{年十}、此近年在江戸也、去月秀康
 死去付、去廿二日江戸を立、五月十日に越前_レ被_レ着、
 翌日則秀康葬禮被_レ執行、其體夥體也、大方三月於_二江
 戸_一被_レ執行、清須薩摩守葬禮に相同、是も土屋左馬
 介、長見右衛門、其かいしやくの者兩人、合て龜五墓
 も五也、去三月薩摩守葬禮の時も五人、是凶兆歟の由
 下民歌_レ之と云々、
 導師知恩院長老也、布施長老に銀五百枚、此外_{十人計有}長者
 是に銀廿枚宛、平僧の役者に五枚つ、也、此五枚之内
 を、導師長老より或は廿目或は卅目へきとられける、
 又萬事付入間、敷物をも是を爲_レ可_レ取、何角好み、短
 き物をも長く被_レ好、京中の上下惡口、其比無_二止時_一、
 惣別此長老は氣遣爲_二比興人_一として、町人檀那皆引切、
 他坊之僧を歸依しける間、其後は知恩院_レ倅して、人跡
 絶たる體也、
 同五月十日比、相國寺の免長老從_二關東_一被_レ上げる
 に、被_レ持金子を於_二箱根_一取闕落す、是は於_二江戸_一從_二
 將軍_一相國寺造作に令_二合力_一給金也、

五月十四日_乙、高麗人江戸を立、從_二將軍_一引出物被
 出、勅使三人に銀子三百枚宛、上之しや官貳人百枚
 宛、惣人貳十六人中上官、其下八十四人_レを_レし入五百
 枚被_レ出なり、
 同日駿府宮か崎町火事出來、四五町失火、夜るの四つ
 時なれば、無_レ膺次入亂財寶を奪取、
 惣て此比人を猥伐取、依_レ之金を札に被_レ掛けれ共、誰
 か仕宅共未_レ申出、
 廿日、高麗人自_二江戸_一歸上、今日於_二駿府_一大御所有_二
 對面、進物不_レ覺悟_一間、當座卷物などの體也、城中未
 家屋不_レ出來_一之間、座中不_レ久則退出、本多上野所に
 て振舞有_レ之て、其日に藤枝迄相通、先年太閤秀吉彼
 國へ人數を被_レ遣し時取來男女、此度召連上る、彼者
 共高麗_レ歸朝を悦事無_レ限、高麗人路次中行時、常に
 馬を急に責ける間、馬病事無_二際限_一、
 廿三日、駿府殿守の根石置始也、
 伊豆國に山籠りの者有_レ之、有難念佛を申ける、人皆
 歸依しける、此比は小田原山_レ來、身より光を放なと
 沙汰有ける間、上下馳走此事也、
 同廿六日、平岩主計頭從_二甲州_一來て、清須北之丸に在

城、本城には古薩摩守主の御前方、煩付て今在城故也、

五月廿八日、土用に入、

去月廿八日より六月三日迄、取分稠旱、あつき事不_レ斜、人民皆霍亂を煩、

六月四日丑日、此日より涼氣也、土用の丑の日より秋風吹と申事封_カ符合之、誠奇特也、

六月始之比、越中の外山に恠異有、縦は頭長く頸は鶴頸の様也、腹如何にも大きに、足の指も三つ宛有ける、細々出ける間、鐵炮を以打ければ、玉を手に取て捨けると也、弓にて射ければ、則矢を取てをりけると也、其繪圖從_ニ北國_一京都へ持來、此はけもの岩田傳左衛門屋敷より出、傳左衛門他所へ行は、自然付て行事も有とかや、

京都將基さし共、此比駿府江戸に下、此時の上手名は宗桂と云者也、是京都町人也、是に角行弱さし手春知、觀乗坊、宗古_{是は宗桂子}等也、此宗桂は、信長代よりのさして也、今年五十三歳なり、

遠江國懸川の城主松平隱岐守伏見に被_レ上、西之丸可_レ被_ニ在城_一となり、

六月十三日、未刻より大雨也、此以前夕立雨折々なれ共催計にて、惟のぬる、かぬれぬ程の體也、惣而當年春夏程の旱魃、近年無_レ之、庶民迷惑此事也、今此雨上下の人民喜悅不_レ斜、此雨より三川東國はさしての事なし、少之雨也、旱魃損亡不可_ニ勝計_一、

此日、駿府は地震、
此度奈良猿澤の池水干たり、少殘水に魚共いきつき居たる間、水常に濁ける、此池の水濁ければ凶事となり、

宇都宮の主從_ニ奥平大膳大夫家綱、善知鳥と云鳥を、父美濃國加納與平美作守信昌に進獻、此鳥謠に在_レ之間、日來有_ニ一見_一度との依_ニ存分_一如此、松前より鹽に付來、彼鳥の體、箸は鳥のはしものちいさき者也、頭は猪のしかりけのことし、とさか_ニ在_レ之_一、足は水鳥のことし、水かきあり、但かけつめなし、鳥の大きはあぢと云水鳥のちと長き者也、生きたる時鳴聲、千鳥の聲の高きもの也と云々、子を平砂に生捨けるか、我とそたちけると也、生立ければ親餌を養けると也、此うとう四月五月六月七月在_レ之而、八月より三月迄はなし、

十四日、尾張國津島の祭、宵のしかくの時夕立來て挑灯雨にきゆる、翌朝の拍子物の時も雨也、此近年の祭は天氣よし、

此春、伏見の城中に有ける金銀段子金欄以下諸財寶共、速駿州に被_レ下、依_レ之近習之侍、内々家壘以下迄駿府に運送之間、京童嘲哂不_レ斜、京童に不_レ限、心有人不思議の仕置の由風聞也と云々、

駿府江戸普請于_レ今緊き事不_レ斜、下々の者共、及_ニ晩_一には一圓眼不_レ見と云々、

此比九州島津使者駿河へ下、彼在府中に、船に乗遊君を召連遊ける、酒興の餘見苦敷事も有けるか、普請衆見て人嘲哂、薩摩國之習かたくちにして戲事を不_レ知、被_レ咲けるを恥辱と思、令_ニ喧嘩_一及_ニ鬪諍_一、方々の小者共退去、池田三左衛門家中者殘留て相戰、島津使者擲置けるか、爲_ニ後日_一存追放、彼者及_ニ恥辱_一間、腹を切可_レ申條、相手を御成敗可_レ有之由奉行衆へ相届、此儀爲_レ私難_レ治間被_ニ言上_一、さて池田三左衛門家中、于_レ時普請物主と、島津使兩人成敗畢、
去六月十三日の雨以後、又旱魃、
此比於_ニ京都_一に大御所朱印をまね、板倉伊賀守所ね

持來、傳馬をあつる、伊賀守は不_レ寄_レ思、され共彼官の者見改ては盗人也、印判をほりたる者は洛中の者也、朱印持來者は非_ニ京都_一の者に、兩人なから則令_ニ成_一敗、

七月三日_甲駿府城家屋漸出來の間、今日大御所移徙也、多武峯大織冠の木像身體腫けるか、うみて血くさし、七十年以前も如此の事有ける、是天下凶事と也、何時も如此の事は、大和國丹波市と云所より青蓮院に注進し、さて奏聞有ける作法也と云々、此度も勅使を可_レ被_レ立と也、然共勅使立て無_ニ相驗_一れば、二度無_ニ歸京_一作法とて、各辭退有ける、

又奥山にて、夜々に城を攻る粧あり、是天狗の所爲と云々、

十三日、駿河清水の津に、賣買の米船一統四百艘着す、駿河沓谷筋船入を、五百石夫に被_レ爲_レ堀處、水多して被_レ堀間敷とて、只一日堀之、其後被_レ止、

七月廿五日、掃星戌刻西方に出現、光五尺計、但薄し、曉方又掃星北方に出現、是は宵の星の光に増たり、掃二間計、掃星二つ出現珍事と云々、
又邊土西の岡青塚に矢根生出たりとて見物す、縦は

古き剃刀などのことくなるか三つあり、此以前凶事之様と云々、

廿七日、西美濃大垣城主石川長門守死去、年五十四去月廿六日大方死去に相定しか、夜半より不慮得減、此間

は殿守可有普請として、材木等被用意けるか、終に保死也、幼息九不替大垣に令居城、

八月四日甲子少曇、六日大雨、七日朝大水、

十一日、大垣長門守葬禮也、知恩院長老爲導師、是は所家康公浄土宗にて被引立ける間構之布施物導師長老銀五十枚、わき長老に五枚宛、平僧之役者二枚宛也、此時も知恩院長老何角施物に構、萬端付比興心中迄の由、京中に風聞、

惣而此近年、當家臣下之損死其數多し、去寅の春佐和山井兵部少、翌癸之年前々か崎之戸田左門、去年丙午榊原式部兄弟并息男、今年越前主清須主、又横須加出羽守已下、其外少身之輩不可勝計、

十二日清須古薩摩守女中、上野國安中被下、母儀と一所に可有在住、由、大御所依下知に也、

十四日の夜風雨、十五日朝大水、美濃國米野と云所、去夏旱魃之比、爲可取用水を、入戸をして木曾川を懸入たり、此度の大水に、入口四百間程切れ水押

入、加納城堀の水と入相兼て、水入之所は不及申、其外何も如海、又川戸河無際限出、川上より家流堤切たり、尾州三河も同前、矢作川橋落、所々堤切る、中にも米津水押入、暫不引、

西美濃より近江畿内は、さして此水不出と云々、關東も此水不出、

去十日比より、主上御惱、但聽而御本復、

十五日、駿府普請衆、太刀請取の町場出來して被上、但二の丸は半分此時出來、半分は西國衆の人數築之、九月中に可爲出來歟と云々、

石垣之事、駿府本丸百二十間四方、高さ九間、殿守の臺十三間也、二の丸八百五十間程也、其外内外之入廉合て千間程也と云々、二の丸高さ七間、間中本丸の内石垣高さ或は七間、或は五間之所もあり、

此二三箇年中、九州中國四國衆、何も城普請專也、亂世不遠との分別歟と云々、

京都町人已下、種々恠異に付如、此歟、閻巷説と云云、

九月五日乙亥刻終、洛中光物あり、叡山の方より南に飛、駿河も同前、大方諸國如此、十日比、愛宕山に

て見之は、京中繼松夥有と見たり、此比より北野社社、從大坂秀頼公被造改、不限北野惣而寺社佛閣、此近年造營也、秀頼公幼稚にまします、御袋の發願歎奇特と云々、故吉兆靈夢度々ありと、京中に風聞、此夜遠江國新坂町悉失火、

十一日、遠江國横須加の城主大須加出羽守長々煩に付、爲養生春中より在京、於三條夜半に死去、年廿五幼息五不替横須加の主也、

十月四日甲子大御所家康公駿府より江戸に下給、伏見居住の近習の輩、何も暇給て伏見へ上る、自關東駿府に令歸城給はん比可致參上由也、

同日卯刻、江戸將軍姫君誕生、十四日甲戌、大御所江戸に御着、江戸將軍に從御所金子三萬枚、銀壹萬三千貫目御渡、西の丸より本丸へ運之、

十八日、信濃國飯田の城主小笠原兵部大輔も信濃守、去年改名妻室瘡癩被相果、年三十是は大御所孫女、古三郎信康公之息女也、是は信長にも孫也、

去比隱岐守伏見に被相上、其跡に小笠原左衛門佐岡部内膳、其外自將軍番手の衆相上る、彼衆伏見城中に有之道具を相改む、是大御所依仰に也、

於江戸大御所に數寄に將軍御出、茶の會有、相伴の衆長尾景勝、元越後佐渡主、今伊達正宗、主、今大崎岩手山の主也、但在佐竹元常陸國の主、是三人と云々、江戶、今愛田の主也、

五百石夫、十月切に普請相務、駿河より上る、同廿八日、大御所將軍茶之會にて御成、十一月朔日、大御所爲鷹野武藏國浦半川越忍所々御出、

此五三年中、蒙勸氣衆七八人有之、依小過に知行改易之沙汰なかりしに、此比如何有けん知行を被改、近年の所務可被召上、由代官中の仰也、彼知行者、於關東大方五百石石宛也、

在江戸丹波五郎左衛門先太閤之御時、加賀國松任主、今宇籠在江戶也家失火、類火一間、此火飛てたやす口の門燒畢、十一月十九日、申刻より終夜大雪、廿一日寒に入、今年は五百石夫、駿河爲普請相下付、右之十箇國之百姓相詰り、年貢辨濟不成、此冬福島左衛門太夫備後兩國息男亂行之間被押籠、日來道行人鐵炮にて放懸、人屋に同放入、狼藉不可勝計、其上父死たるとして、葬禮のまねをし、種々様々不思議共多之間、父駿府に以使者此旨言上し被殺害、

廿日より同卅日迄、寒きこと甚、近年に無類雪、日々夜々に降、地氷る事不斜、於大坂本丸一本因坊利玄有圍碁、秀頼公見物し給、利玄先にて貳番、始利玄勝、後同、利玄先に將碁、三番日本因坊先にて本因勝、

十二月小朔日、洛中大雪也、五日甲雪降、壽命院古道三弟子、醫者上手也、當時文宗達者也、出家落也、十一日相煩、十四日死去、是犬枕双紙作者也、

相國寺兌長老當時大御所無類氣相也、洛中洛外寺方公事專被取行、其上金閣已下數箇寺押領、去秋始より發病、此比死去、惣別僧方無形儀にして、成人の息有なんと於京中嘲哂す、金銀貯甚多と云々、遠江國原川町悉焼る、

十二日辛未大御所家康公、從關東至駿河に着給、廿一日、立春、

廿二日巳丑刻駿府城中失火、女房衆夜の物置所之局に手燭臺を置、其火張付に移、家屋不殘燒亡、大御所并若君姫君、何も女房衆無恙、こちやと云御末之女房、當時爲出頭しか、門之所にて人に踏害さる、其外男女少々死す、

一の刀箱に三十四五在之間、是は取出す、二の箱に

七十貳在之間、をもくして取出事不叶、箱を打わり刀を取出し、泉水に投入る、後是を取上、京都本阿彌召下、さひたるをば或はとき、或はぬくいける、其中に一圓さびたる多分在之、

此度火事に焼る物之事、白雲の壺是は先年自太閤秀吉公拜領し給つる名譽の壺也、腰に白き藥廻りければ、白雲と號す、白雲は似帶廻山腰之心也、其外眞壺七つ八つ、正宗の脇指、三原の脇指等也、其外常の居所に有ける物は、不殘燒畢、不違枚擧、されとも數奇の道具、各名物有文庫に一通火難を、城中金銀以奉行を、燒跡を改被取置、其數を不_レ知、又駿府南海邊に久能と云有山、彼地四方岩にて、如立屏風、金銀專取置、是彼番衆は榊原七郎右衛門息子也、去年父相果し後在城し有之、然其未知行不拜領、

右之外獅子笛燒失、二十年以前より、春日市右衛門と云觀世座笛吹に預けられ吹けるか、去々年相果し後、男も笛達者に吹ければ、如親被預、毎年親時より冬は返上げる間、此度も如此、大黒の笛は、十八年以前寅三月、太閤關東御動座之砌、武州瀧山城落居時、笛主押折討死しけると也、此笛主は古彦兵衛笛上手の

男、今又是を彦兵衛と云しなり、大黒獅子として、二の笛、今の世の名物也、大黒獅子を金にて鑿、笛の頭に入れけるにより如此號、

廿三日、大御所小傳次と云小性の屋敷に令移給、是は先年家康公駿府に在城の時、伊井兵部少輔屋敷也、其時は二の丸の外たりしか、今年之普請に被取出ける間、今二の丸内なり、此小傳次は計、右兵衛主の母臺、未大御所奉公以前の子也、廿四日、大御所本多上野守屋敷に御移、是も二の丸之内也、日々本丸に御出、燒跡廻見也、

女房衆私之金銀燒る事、金卅枚あちやの局、金千五百枚龜の局、是は右兵衛其外ちやあの局、是上總主まんの母、或は五百枚或は三百枚也、まんの局の金六十枚、火事之砌人奪取、何も銀子は此外也、駿府城火事付、諸國大名小名參上之事、無用之由被相觸、

圍碁之上手本因坊、法花宗清僧也、自京都駿河に下、去廿日に府中に着、廿二日碁一番大御所見物之處、右之火事に付則江戸へ下、同碁打道石を始隨之、此度は利玄は不下有_レ碁、此比圍碁手相之事、本因坊利玄

に半石強し、利玄年四十道石年廿七、五三箇年以前より、利玄と手相同事也、

十三の上手事、仙也老人鹿鹽仙角是仙也子、當春於筑紫喧嘩して死す、壽齋年五十、是算年廿二、是も門入六藏等也、並の上手と云は、本因坊に先の碁也、松平隱岐守伏見西の丸に、去夏より在城有けれ共、知行子今相渡るへき沙汰なければ、彼家中の上下疲勞不斜、本丸は此以前よりの留守居衆定番也、其外松丸を始、丸々番衆關東衆有之、

此冬寒する事、廿箇年不覺之由皆誦之、未年は凶年歟、卅七年以前之辛未には、叡山滅亡、廿五年以前の未には、織田三七信長次男、并柴田修理子時越、滅亡、十三年以前の未には、關白秀次太閤秀吉公甥滅亡、今年丁には、越前中納言秀康公二男清須侍從、薩摩守忠吉逝去、今又駿府城火災、何も爲大凶歟、當年京田舎に人多病死す、播磨國池田三左衛門家中、此三箇年中に知行取輩大略相果、今は若輩之者迄之由云々、

此比、大御所近習の衆、萬事今日今日と云事を專云被_レ戲、依之江戸將軍近習の衆も如此と云々、

慶長十三戊申年

四月朔日^巳朝少曇、未申刻日蝕也、曆には辰巳刻と出しけるか、時は違也、昔年建久九年^午正月朔日、日蝕、是凶兆と云々、其年頼朝姉婿二品能保父子、暫時薨と吾妻鏡に有、

駿府の材木爲^二運送、諸國浦々舟船相改、日記に被^レ載、兵糧賣買之不可^レ致渡海之由、堅被^二相觸、舊冬駿府火事に付、女房衆五人に、諸國大名小名不^レ殘令^二音信、皆金銀小袖等也、

江戸將軍に各出仕、元日也、

自^二江戸爲^二使者安藤對馬守駿府に來る、江戸材木所々有^レ之、駿府造作可^レ被^レ用^レ之と云々、

於^二駿府大御所に出仕、二日也、大坂秀頼公より使者、并自^二江戸使者酒井左衛門尉を以、被^レ遂^二年頭之禮を、此日江戸謠初、

正月四日、伊勢國朝熊坊中燒亡、た、一坊殘と云々、八日、於^二駿府淺間、城女房衆より湯を被^二參せけるに、詫宣に云、火を惡しくしけかすの間、十日丑刻に、又火事有^レき由被^レ示、依^レ之下々女房衆周章して、荷物を門外に出し、驚入計也、神子うつけたる事

北野社出來間有^二遷宮、御輿を松梅院遷さんとせられけれとも、曾て不^レ動、然而古例を改引付を被^レ見けるに、西の岡の者、昔年御輿を負けるとて、彼郷に被^レ尋に、ゆかりの者無^レ之と云々、色々相尋ければ、京に一錢剃刀して渡世の者有^レ之、彼者の先祖、昔も天神の御輿を負けるとして召出す、さて彼者來て御輿を持ければ、安々とあかりけり、上下成^二奇特思、近年北野に舞殿なかりしか、此度悉造營、次に新舞殿被^レ建、則右御輿持たりし者、爲^二禰宜、彼舞殿令^二在社、參詣貴賤最花錢を與^レ之、

此春、秀頼公疱瘡令^レ煩給時、天神御使として色々有^二吉瑞と云々、

四日、伊勢國桑名本町家屋卅餘燒亡、去々午十一日、遁^二火難一町也、六日、夜前より終日雪降、

此比、大坂秀頼公疱瘡令^レ煩給事甚危急也、西國中國衆密々有^二見廻、是被^レ禰宜家康公前^二歟、中にも福島左衛門太夫急大坂に參上と云々、

十日彼岸に入、此中日酉刻、入日殊緋して、日のまはりうきあかる様に見たり、日まいけるとて、男女拜^レ之、

を申之由、區々に歌^レ之、

駿府本丸屋形造作被^レ急に付、諸國山々木取也、中にも信濃國木曾山、紀伊國熊野山、伊豆國山也、豆州には關東衆被^二指越、去年江戸普請有^レ衆は、今年は可^レ致^二休息之由相定處、不慮之火事に付如此、

十三日、晚より終夜雨、舊冬雪は切々降けれ共、雨は及^二七八十日^一是始、駿河は冬中雪も不^レ降、雨は猶以^レ不^レ降、及^二百ヶ日^一旱魃と云々、

去年春、駿府普請之時、高麗人爲^二馳走、閏四月被^二歸城、し遠江三川兩國路次筋、懸川濱松吉田岡崎之衆、爲^二普請^一今駿河へ被^レ下、兩國にて遠所之衆は、去年八月迄普請被^二相務^一之間、當年は于^レ今無^二其沙汰^一、

十六日、夜半より十七日朝迄雨、廿三日、午刻より終夜雨、廿四日、極晚より翌朝迄大雨、此日より、天王寺龜井水留て不^レ出、前代よりかゝる儀無^レ之とて、衆徒祈念しけれ共不^レ出、

大御所爲^二鷹野、自^二駿府田中^一の御出、聽而駿府に令^二歸城^一給、二月從^二江戸爲^二使者^一青山圖書駿府に來る、爲^二普請見廻^一歟、大御所仰云、五月之比將軍駿府に可^レ有^二光臨^一と也、

廿七日夜より廿八日終日大雨、下民悅^レ之、此已前雪雨雖^レ降、徒土地しめる許也、此比迄餘寒如^レ冬、草木一圓不^レ茂、花較遅、當秋も可^レ爲^二凶年兆^一と云々、

秀頼公煩漸本復、北野天神影向有^二奇特^一と云々、十四日、駿府城屋形悉立、

水野對馬守於^二常陸國^一壹萬石拜領、さて長福主に被^レ付、此仁實人之由云々、舊冬より此儀仰なりければ、

も被^二固辭^一、雖^レ然依^レ仰終に以及^二此儀^一、中山左助同五千石、同常州にて拜領し、是も鶴丸へ仰付、

此春小人島の者也とて、於^二京都鼠戶^一を結、代を取人に見せける、縦は日本人ならば、五六歳の童部の長也、

廿九日^丁申終酉頭、日輪二在と云々、但日影雲間へ移歟、雲殊緋、

三月三日^寅夜前より雨降、及^二亥刻^一休止、駿府城内屋形何も瓦葺、但御座所は白鐵を以葺^レ之、十一日^戌未刻大御所駿府城に移徙、亥刻、俄雷動搖、風雨烈、但聽而休止、

去正月、伏見傾城名字號紛失、亭主又一相尋之、此比於肥後國、露顯、近江國大御所藏入代官下代芹澤新平と云者彼女を盗出、肥後國は小銀爲生國、間相下、遠境山里に隠居しけれども、尋常非住居として人皆不審之、終以令露顯、彼新平をば則擄取、女をも押置、男女偕下、駿河國、於府中、令籠者、此小銀形不可耻、陵蘭妾、圍基上手本因坊、自去正月、在江戶、將軍可下見象、給として、自京都、宗桂被召下、十日に十番さしける、一日に、勝負相成交成、持象基は本因坊宗桂對揚也、此比從江戶、上駿府、令逗留、卯月、關東は自年内、此比迄雨さして不降、當月中旬より雨頻降、建仁寺名物之藤花、今年不咲、人不審之、十日、基打利立下、着駿府、道石と毎日基有之、三十番内七番道石勝越けると云々、道石は本因坊令同道、六月下旬令歸洛、此比は女性に基有存知人、夜は大御所見給之と云々、大久保石見守去月佐渡國に下、銀子當年は曾不出、依之爲水流し、溝を深堀、色々被了簡ける、まぶ

のあな海の地形と對揚歟、水まぶに多して難堀と云云、諸商人欲及、餓死、如此條、盜人狼藉無止時と云々、廿一日、駿河府中風烈して、庶民家屋少々倒る、此日、美濃尾張大水、此夏麥豐年也、但關東は麥凶年、奥州南部に有金とて、金鑿共彼山に自佐渡國、相下、始は無際限、出けるか、懸而出止、又金鑿共松前、下、松前之主彼地兵糧乏間、已來飢饉兆なりとて不能許容と云々、廿三日、日輪入誰かれ時より以前、光物有之、自北通南、去月廿九日夜子刻にも光物有之、福島左衛門大夫息被相果、先年被遣し大御所め、此比武州關宿に自藝州被下、五月、伊賀國主筒井伊賀守被召下駿府、是彼臣下中坊飛驒守と有云者、彼か依、讒言、大御所甚不快、則伊賀守を被下、江戶、其子細は、自去子年、彼飛驒守掛心南部、中坊奉公かましき事を言上しける、彼取次大久保石見守依取、申知行、少々代官を仕條、駿府屋作爲、代官役、組人々作事しける、彼飛驒息子元來

繼交跡、伊賀守令奉公、飛驒此比令煩間、息子下、駿府、右可致、作事、由飛驒令下知、息子則可相下、由令支宅◎度處、伊賀守爲我家中者、間、下儀無用、由令下知、押留之事、彼是少事令、讒言と云々、彼伊賀守行跡、常に被官已下にも不、對面、隱居山中、打鹿計、依之往々不可、持家由臣下兼思儲と云々、去正月、彼伊賀守家屋に種々有、怪異、正月二日に鹿入、臺所◎害之、又金銀藏并數寄屋圍爐裡門外門中有之、同時落と云々、三川國蒔屋城主水野日向守、去年十月、かふき女名字號、出來島、隼人召連被下けるか、去月比引連令上洛、衣裝已下きらびやかにしてかふきける、内々於聚樂勸進にかふかせらるへきよし被思立けるか、不可、然由知音者頻令、諫言、間被相止、勸進法樂にかふきける、見物貴賤成、市、去年十月被連下、時、亭主の銀子參拾貫目被出、此度衣裝其外造作銀子七拾貫目入用由、京町人有、謳歌説一條、若輩者共見物せぬはなかりけり、廿日、大水、駿府中かふき女并傾城共多して、動は有、喧嘩、依之

可、拂之由大御所曰、廿四日、伊勢大神宮有、大神樂、是は大坂秀頼公乳母局有參詣、秀頼公并御袋爲、祈禱、二前被行、大神樂、廿六日、六月節也、六月三日、鞍馬開張、多聞天の尊體、縱は十歳計の童兒の長也、吉祥天母◎女の御長、毘沙門の尊體よりも耳の上ほと高し、禪西童兒之御長、毘沙門の乳のとり也、六月八日大水、洛中室町水押入家財浸、河内國攝津國堤上水越、美濃國より東はさして水不出と云々、十一日、又洪水也、去四月より今長雨、關東上方も此分也、十五日、尾州津島祭也、鹽早引故、山二つ不渡、十六日、今朝より快晴、越前國中納言秀康息女被下、江戶、今日出、國、是は毛利輝元元安藝國を始、中國十一箇國、主今は周防長門兩國主也、息男近年被在、江戶、爲被嫁、彼方也、此比、丹波國前田主膳令狂氣、家老者共令殺害、則物狂、京近江步行し、於水口、被打擲、無正體、有様也、扱伏見に召連令、籠舎、彼領分并家内自、駿河、依、仰令改易、

筒井伊賀守可有改易之由大御所依命、自江戶以使者、桑名加納佐和山、但家中侍并伊賀守財寶儀、無異儀任其人心、何地へも可遣由也、此使七月朔日、桑名本多中務加納松平飛驒守參着、則通佐和山并伊兵部少輔也、

廿四日之晚より、又日々雨、

廿五、六、七、南風烈、西國は高鹽にて、船多以破損と云、廿九日、於洛中寺町、谷出羽守息子と古蜂谷伯耆守孫子と及喧嘩、蜂谷孫子則死、

七月朔日、大雨洪水、同四日より雨不降、其後きつく炎天也、

五日、伊勢桑名美濃加納近江佐和山主出軍、同八日、伊賀國上野城に、右三人被移入數、十日に各入城、本丸松平飛驒守令居、二三九圍取にて右兩所被令居、

於駿府淺間、大御所末子^{長福}被行能、

廿日、此比より尾張國爲檢地、伊奈備前守參着、則村里被當筭、

伊賀國上野城に伊兵部相殘、飛驒守中務は可令歸國、由、從江戶飛脚、廿六日に參着間、則兩人は歸國

也、

廿八日大雨、去三日雨後は初也、廿九日、大雨影降、

此夏、關東の者として、京都に來るは、腕は次第に末程ほそく、こふしの體は猶以ほそし、其先に指た、一つ有、酒など飲時は、臂をあげ盃を臂にてはさみ飲、繩を能ないける、縦は手のある者よりも繩を速ないける、

七月、飛鳥井與松下云事有、頃年松下鞠のゆるしを出しける事不謂由、飛鳥井存分也、殊飛鳥井家の外、鞠のゆるし不可出由、信長秀吉御書付有、依之駿府に被言上間、飛鳥井理運勿論也、

八月朔日、大水、七十年已來無比類、由、古老申之、諸國堤切、村里如海、洛中の水入、人餘多流死、諸國損亡不可勝計、

此水東三川より東國にはさせる儀なし、播磨より西國は尙以水不出、

二日より快晴、九日より雨降、中にも十三日大雨、丑刻より大風洪水、十二日、金森法印^{若名五郎八}死去、

江戸將軍去十日に進發、十八日戌刻至て駿府着御、

大御所則有對面、進物此末に注之、廿日午刻、駿府殿守打鎚大工中井大和守給祿薄、錢千貫文、銀子袋八つ^{壹袋に廿枚入}太刀等也、其外諸職人之棟梁太刀折紙引出物也、右之大工大和守任諸大夫、殿守の棟に五色幣三本、何も薄板染物也、

弓二挺并矢被立、大御所并將軍坐被砌、

此殿守模様之事

元段十間 ^{但七尺間} 四方落 椽あり 二之段同

十間 十二間同間 四方有 欄干 三之段 ^{腰屋根瓦} 同十

間 十二間同間 四之段 八間十間 ^{同間 腰屋根 破風 鬼板} 何も

白鐵 懸魚銀 ひれ同 さかわ同銀 釘隠同 五之

段 六間八間 ^{腰屋根 懸魚 破風 鬼板何も白鐵} さかわ釘隠何も銀

六之段 五間六間 ^{屋根 破風 鬼板白鐵} 物見之

段 天井組入 屋根銅を以葺之 軒瓦減金 破風銅

懸魚銀 ひれ銀 筋黄金 破風之さか輪銀 釘隠

銀 鷗吻黄金 熨斗板 逆輪同黄金 鬼板拾黄金

廿二日、於將軍旅宿^{駿府二}、大御所末子^{常陸介七歲幼}能

仕給、廿五日朝、於本丸有振舞、刀行平被獻、將軍

軍に、駿府遊女共、去比は是故下々有喧嘩、間被相拂しか、此比は又町を割被渡と云々、

此比、西國大名衆、駿河に爲移徙祝儀被相下、

廿七日、於駿府淺間有能、今春太夫親子觀世實生

金剛行之、今春親太夫四番、觀世太夫翁共五番、今春

若太夫實生金剛是二人一番宛也、

九月三日、將軍秀忠公自駿府江戶へ御歸、今日清見

か關泊給、十日比より、畿内中國西國四國北國衆、移

徙爲祝儀被下駿河、進物之事、始は或は銀百

枚、或は銀二百枚に、何ぞ相添被上しか、後參之衆は

銀五百枚三百枚に、蒔繪の長持五ゑた十ゑた相添進

上也、其上各江戸に相通、將軍の出仕也、

此比駿府にて毎夜切人事甚也、被掛金可申出旨

被下知けれとも、于今無其沙汰、又日々有喧嘩、

互及死傷、

自江戸增長寺、淨土宗長老駿府へ來臨、大御所三條

血脈、三日精進齋し、十五日被行、去比より法花宗與淨土宗可有法論、由、自法花

之僧常樂院、頻被勸、京都の法花宗内々不可然由

九月十二日、大御所清須の御成あつて、彼國置目等可下知給由、自去比度々曰しか、俄今日關東へ御下、江戸には無御出、直に方々鷹野し給、將軍自江戸武藏の府中へ出合、遂面上給、

廿四日、爲勅使吉田左兵衛參詣多武峯、是去年春より大織冠木像破血出ると云々、昔年如此事有之時は、以勅使被祈念ければ平愈ありとて、任古例被及此儀と云々、廿日、下野^カ國古河の城燒亡、城主松平丹波守在江戸留守也、

十月三日、鞍馬寺毘沙門開帳也、去六月より至于今日、百ヶ日の間開帳、貴賤參詣不可勝計、開閉兩時共に令參詣、青蓮院介法之給、尊體出入之儀、當時衆徒妙壽院介借也、彼堂去年春、從秀頼公修理ありけれとも、庵相由曰、又當夏小屋をあげ、堂の柱を以漆塗、彌結構也、是依秀頼公仰に也、毘沙門御長、縦は人ならば十歳計の童の高さ也、吉祥天女は毘沙門御耳のたけほど高し、禪西童子は毘沙門御乳の通ほと也と、妙壽院被語也、

東山大佛、來年可被立として、金子を自秀頼公被出、是を大御所より被請取、又大御所より此代に被

出兵糧、其外も秀頼公より金銀材木被調、此ために黄金の千枚吹のふんとうを江戸に被下、於江戸これを板金に吹ければ、右之内卅四五枚不足と云々、尾張國當夏より被當竿、此比漸終る、此檢地始より上下の諸給人知行被押置、竿終る上、替地を可被宛行とて、先もとより奉公の衆は、古米を百石の知行に付て貳拾石、近年被相抱衆は、百石に付百拾石被下置と云々、何と分別しけるやらん、新參之衆退參之者多之、平岩主計頭甲斐國知行、去夏より被召上、替地于今不渡、下々大略逐電すと云々、

此二三年以前より、たはこと云物、南蠻船に來朝して、日本の上下專之、諸病爲此平愈と云々、然處此比咳之者、悶絶して頓死多之、又自南蠻醫師來朝して云く、此たはこ吸もの雖有發病、藥を與事如何と云々、たはこの事醫書に依無之如、此云、我朝の醫師も同之、

十日比、淺野彈正妻子江戸に被引越、江戸の内藤修理霍亂相煩、即十日に滅す、是は將軍家幼少の時奉付、此間は將軍の御前方に被付之けるか、俄如此、十一月五日、建仁寺新寺立、是は奥平美

作守信昌建立也、從美濃國加納一人夫相上令普請、此寺を號久昌院、

十一月十五日、去夏より有沙汰ける法花宗淨土宗法論之事、今日於江戸新丸可被遂一決由也、淨土宗所化衆之中、廓山と云僧を被出相手、彼廓山問云、五乘齊入之天願は、三佛同證の所説、如何是三經無得道之意趣、法花第一の常樂院屈するか、又存不相應の相手由歟、爲儀兵由存る歟、稱發病由令平臥、更に無返答、廓山進而曰、前問雖未及返答、重而下問、汝か義門舉て四十餘年未顯眞實之句に、或執て尋常頤咄宏言家之爲秘、依之令會如來之正法、破私曲之邪義、夫未顯眞實之一文は、法華使有緣機、爲令生信受、若約佛意之邊者、五時半滿所説、聊無嫌隔、故に無量義經に、法譬合説して云、井池江河、溪渠大海、水性無差別と云へり、其上汝依經之譬喻品には、我昔從佛聞如是法、見諸菩薩受記作佛と説、文句には方等教中間大乘實惠與令不殊と釋す矣、是法花以前の諸經、眞實得道之明文に非る耶、如何々々、此時も常樂院無返答、廓山重而訶曰、常樂院不叶返答者、法弟五人相寄一句導々と、再三雖責、全如啞

人、敢絶言語、故に宗論之任法義、常樂院并法弟五人之法衣請取之、明鏡被遂勝利畢、

于時慶長拾三^申十一月十五日
判者高野山遍照光院在判

右の法衣請取衆中之事

第一常樂院

弟子^{上總}連^カ源判

第三堺衆

玄聽判

第四同玉雄判

第五^{上總}琳碩判 第

六同可圓判

已上師弟六人、法衣請取者也、

土方河内守於江戸病死、日來たはこを用ける故、喉破相果と云々、是元來尾州内府信雄^{信長公}無雙の臣下也、當時江戸將軍爲進士、

十二月、バンチャア國より以使者、駿府大御所に令音信、大御所しやうぎに腰を掛、彼使者有對面、是は船着島商船往來地也、

十二月大、二日寒に入、二日、大御所江戸御立、同八日駿府に御着、去十月自下向於關東鷹野し給、白鳥一つ鶴六十取、鴈鴨は不知其數、

三河國足助山家代官三宅辰介親子三人被生害、知行成箇引負依有之、自去夏中、被押籠置けるか、今

如レ此、嫡男は大御所近年小性して近習也、美男殊心撰神妙なりき、上下輩惜レ之、

此冬、江戸永樂錢捨て、薄錢可レ用之由大御所曰、是は近年藏に置れける永樂損しけるとして如レ此と云々、永樂貯置町人已下迷惑と云々、但又以來は可レ被レ用薄錢之由、下臈謳歌と云々、

去秋松平周防守于時下野國風間城代丹波國前田主膳去秋狂氣領分令拜領相上、此事各匿笑、日來周防氣遣以下如何有けん、上下人如レ此、於ニ丹波主膳屋敷上山急被レ爲ニ普請けるか、城に成間敷として、自ニ十二月比被レ止けると也、

此寒中雨節々、降雪は兩度降、霧度々降り、寒中暖氣なり、

尾州清須古下野守自ニ關東ニ相從衆外、近年被ニ相抱ニ侍、不レ限ニ大小、悉被ニ離ニ扶持ニ間、各令ニ他國、亦于今清須に隱居族も有レ之、
自ニ關東ニ相從士に、去秋檢地付、于今知行不レ被ニ相渡ニ無足と云々、
清須小笠原和泉守、自ニ去夏ニ在ニ江戸、知行は下總國さくらにて二萬八千石拜領しけるか、下野國風間城

主松平周防守去秋丹波に上し後、在城者なかりける間、小笠原和泉守被レ遣、城領三萬石也、
於ニ江戸ニ土井大炊、安藤對馬、青山圖書浴ニ新恩、各本知行一倍也、是何も將軍秀忠公近士也、
舊冬就ニ火災、正二月方々音信無ニ披露、

三月三日 大燭臺 豊後國伊東修理大夫
一拾 中燭臺 同人
一貳拾 手燭 同人
一三拾 眞取 同人
一三つ 眞取金子 同人
三月四日 燭臺眞取共 同九州宮木 右京
一拾 蠟 同津飛 會津飛 同
一三箱 蠟 同津飛 會津飛 同
一三箱 蠟 同津飛 會津飛 同
一貳百挺 蠟燭 同 岡 半兵衛
四月六日 奏者番 比叡山正 學 院
一三卷 綬子 比叡山正 學 院
一壹束 杉原 同
一三束 杉原 比叡山横川 西塔
一壹本 末廣 同

四月十五日 御鷹決拾 上方衆多羅尾久八
一拾筋 大緒 羽柴三 千石取 左衛門 乾 平右衛門
一拾 御小袖 淺野紀伊守
四月廿二日 奏者番 西尾 丹後
一壹束 杉原 圓 光 寺
一壹端 綾 同人
一五袋 秀藁 高野文 殊 院
一五卷 純子 同衆 徒 中
一貳 同 同青 正 巖 寺
四月廿四日 奏者番 三州岡法 花 寺
一壹束 杉原 同人
一壹本 末廣 遠山民部少輔
四月廿六日 奏者番 立 榮
一五卷 大段子内純子かん長老弟子 西 堂
一五疋 白羽裏 同 旭 西 堂
一五疋 白羽裏 瑞 藏 主

一壹束 杉原 三州小松原寺
一壹本 末廣 同
一壹束 杉原 遠州安寧寺
一壹本 末廣 同
一壹束 杉原 下妻玉泉院
四月十日 奏者番 石川主殿頭
一壹下 綬子御袴 大坂衆青木民部少輔
一拾 御料理鍋 同人
一拾 錫之剪立 同人
已上 奏者番 永井 右近
四月十日 綿 淺野彈正少弼
已上 奏者 遠山民部少輔
四月十四日 御馬代銀子 淺野 彈正
一參拾枚 御小袖 同人
一四つ 御太刀一文字助吉 淺野紀伊守
一壹腰 御馬代銀子 同人
一拾 御羽織 同人
已上 奏者番 永井 右近

四月十五日 御鷹決拾 上方衆多羅尾久八
一拾筋 大緒 羽柴三 千石取 左衛門 乾 平右衛門
一拾 御小袖 淺野紀伊守
四月廿二日 奏者番 西尾 丹後
一壹束 杉原 圓 光 寺
一壹端 綾 同人
一五袋 秀藁 高野文 殊 院
一五卷 純子 同衆 徒 中
一貳 同 同青 正 巖 寺
四月廿四日 奏者番 三州岡法 花 寺
一壹束 杉原 同人
一壹本 末廣 遠山民部少輔
四月廿六日 奏者番 立 榮
一五卷 大段子内純子かん長老弟子 西 堂
一五疋 白羽裏 同 旭 西 堂
一五疋 白羽裏 瑞 藏 主

四月廿八日	已上	奏者番	石河主殿頭	同	御帷子	伯耆國主	中村伯耆守
一千枚	御馬代銀子	薩摩國主	島津陸奥守	同	御帷子	三州西	本多縫殿佐
一五拾端	段子	奥州父島津	龍白	同	御帷子	九州衆か	寺澤志摩寺
壹卷	金襴	同所島津攝津守		同	御帷子	飛驒國主	金森法印
一五端	板物	京都知	恩院	同	御帷子	養子	金森出雲守
一三拾	錫香箱	知恩院使者	榮傳	同	御帷子	京極修理	丹後侍從
一五包	金屑丸	同人		同	御帷子	美濃國主	平岡平左衛門
五月朔日	已上	奏者番	城和泉守	同	御帷子	九州衆木下	右衛門大夫
一五拾	ゑひ鎮子	大坂衆長谷川式部少輔		同	單物	美濃衆西尾	豐後守
一拾枚	紫草	同人		同	御帷子	上總衆本多	出雲守
一壹つ	盆蓋きんし	養安院		同	御帷子	此國主若狹	宰相
一貳	薰衣香	同人		同	單物	美濃衆德永	法印
五月朔日	已上	奏者番	石川主殿頭	同	御帷子	法印子德永	左馬助
一拾	御帷子	毛利藤七郎		同	御帷子	美作國羽柴	右近
一五つ	御帷子	毛利宗瑞		同	御帷子	豐前國細川	内記
一五つ	御帷子	讃岐國主	生駒讚岐守	同	御帷子	伊勢衆九鬼	長門守
一三つ	御帷子	福原越後守		同	御帷子	大和國桑山	伊賀守

河内國衆	桑山又四郎	御帷子	同	一貳つ
秋田の主	佐竹右京大夫	御帷子	同	一五つ
奥州相馬	大膳	御帷子	同	一貳つ
馬の主	成田左衛門尉	御帷子	同	一三つ
下野那須衆	相馬長門守	御帷子	同	一三つ
伊勢衆古田吉左衛門		單物	同	一三つ
上野の沼田の主	眞田伊豆守	單物	同	一三つ
大坂衆速水甲斐守		御帷子	同	一三つ
同大坂衆伊藤丹後守		御帷子	同	一三つ
同堀田圖書頭		御帷子	同	一五つ
因幡國衆龜井武藏守		單物	同	一三つ
大坂衆青木民部少輔		單物	同	一貳つ
出雲隱岐國主堀尾帶刀		御帷子	同	一拾
此出雲隱岐國の主	堀尾三之助	御帷子	同	一五つ
近江國衆	朽木兵部少輔	單物	同	一五つ
由良信濃守		御帷子	同	一貳つ
豐後衆伊東修理大夫		御帷子	同	一五つ
美濃國衆	津田孫一郎	御帷子	同	一三つ
九州衆稻葉	彦六	御帷子	同	一三つ
關東衆岡部	内膳	御帷子	同	一三つ
九州衆宮木右京進		御帷子	同	一三つ
丹波衆谷	出羽守	單物	同	一四つ
奥州南部の主	南部信濃守	御帷子	同	一三つ
奥州住元常陸衆	戸津右京進	御帷子	同	一三つ
美濃衆遠藤	但馬守	御帷子	同	一三つ
伊勢衆織田	上野介	御帷子	同	一三つ
遠州よこすかの	松平國勝	御帷子	同	一三つ
奥州米澤		單物	同	一三つ
景勝年寄	直江山城守	單物	同	一三つ
悉皆人也	薩摩國主	御帷子	同	一三つ
薩摩國主	島津陸奥守	御帷子	同	一三つ
同家中島津右馬頭		御帷子	同	一三つ
安房國主	里見安房守	御帷子	同	一三つ
大和六	本多因幡守	御帷子	同	一三つ
上野國	小笠原右衛門佐	御帷子	同	一三つ

五月十一日 一壹束一本 杉原 三河悟 眞 寺
 已上 奏者番 石川主殿頭
 五月十三日 一五つ 御筒服 中川修理大夫
 一五拾枚 御馬代銀 中川 内膳
 一拾 御帷子 同人
 五月十一日 一拾 御拾りんす 中川 内膳
 綴子有 錫剪立 高野文 殊 院
 一壹對 高野紙 行人 方
 一拾束 奏者番 西尾丹波守
 已上 奏者番 飛鳥井宰相
 五月十八日 一五つ 御帷子 同人
 一壹つ 御枕 同人
 一拾 御匂袋 同人
 一三筋 御帶 花房又七郎
 已上 奏者番 閑 齋
 五月廿三日 一五さし 御鷹決拾 針たて 靜 遠山民部少
 團 龍 庵 香
 一二本 奏者番 石河主殿頭
 已上 奏者番 土佐羽柴對馬守
 五月廿六日 一貳拾斤 人參

一貳拾五端 緋緋内^五 九州柳河豊後守
 五月廿九日 以上 奏者番 永井 右近
 一五束 那須紙 那須權太夫
 以上 奏者番 石河主殿頭
 六月二日 一五拾端 發絢 深井丹後守
 一三拾枚 革 大和衆松倉豊後守
 一五つ 燭臺 同人
 以上 奏者番 遠山民部少輔
 六月五日 一拾枚 御鷹の打板 佐久間久六
 一拾筋 御鷹大緒 佐久間左兵衛
 一拾 御鷹もとをり^{但象} 牙 同人
 以上 奏者番 石川主殿頭
 六月六日 一壹つ 御ふせこ 權 西 堂
 一壹束 杉原 文殊院 弟 宮 内 卿
 綾 同人
 六月六日 一壹端 綾 南都 五 師 衆
 一拾疋 白布 南都
 一拾挺 油煙 南都
 一五挺 油煙 同根 無 量 提 命 院 院 寺

一三疋 曬 同諸寺二十三箇寺
 一壹束壹本 杉原 同
 已上 奏者番 遠山民部少輔
 六月九日 一五つ 御筒服^{綴子も} 古田六左衛門
 一拾枚 菖蒲草 秋山左三郎
 一拾さし 御鷹ゆかけ 大坂衆長野次右衛門
 六月九日 一壹面分 碁 越前子 仙石三左衛門
 府詰衆 西尾丹後守
 以上 奏者番
 六月十一日 一壹束壹本 杉原 南都極 樂 坊
 一壹束壹本 杉原 雍州藥 師 寺
 一壹束 杉原 西京 大 寺
 一五挺 油煙 同人
 一五束 杉原 甲州身 延 山
 一壹束一本 梶原 駿河閑 能 寺
 以上 奏者番 遠山民部少輔
 六月十八日 一五枚 紫革 豐後衆竹中伊豆守
 六月十八日 一貳枚 うちつき 宗 古
 已上 奏者番 永井 右近
 同十九日 一貳拾疋 曬 杉若藤右衛門

以上 奏者番 西尾丹後守
 六月廿一日 一五つ 單物 香物 香物 同人
 一壹箱 半夏 御弓塗籠 美濃衆岡田 將監
 一貳袋 御弓塗籠 同人
 一貳張 矢筒 同人
 一壹本 御弓立 岡田 將監
 六月廿二日 一壹つ 御矢 同人
 一拾九 梶原 三州大 樹 寺
 一壹束一本 杉原 光 明 寺
 一壹束一本 以上 奏者番 石川主殿頭
 六月廿一日 一拾 單物 志摩九鬼長門守
 一壹枚 金子 同人
 以上 奏者番 遠山民部少
 六月廿五日 一拾 生絹 六條本 門 跡
 一五拾枚 銀子 同人
 六月廿五日 一五筋 大緒 宮 内 卿
 一三掛 熊障泥 少眞 法印

六月廿七日	以上	奏者番	榊原伊豆守
一五束一本	杉原	の山北	院
一貳箱	三大部	同所内	藏坊
一貳つ	御薬ふるひ	大戸壽徳庵	
一壹束	杉原	近州佐々木神主	
以上	奏者番	石川主殿頭	
七月二日	白布無類	越後國主松平越後守	
一拾卷	同	同	
一五拾卷	同	同	
一三拾枚	銀子御馬代	監物子堀 雅樂佐	
一五筋	大緒	狩野右近	
一五つ	御帷子	松平越後内堀 對馬守	
一貳百挺	蠟燭	同	
以上	奏者番	西尾丹後守	
七月五日	むりやう	南禪寺	
一壹卷	杉原	南禪寺傳	
一壹束一本	杉原	高雄上	
七月七日	杉原	高雄僧正	
一壹束一本	奏者番	永井右近	
同	御帷子	上方衆舟越五郎右衛門	

一三つ	御帷子	藤堂和泉寺
一五つ	御帷子	越中子息細川内記
以上	奏者番	西尾丹波守
七月八日	御團	浅野對馬守
一貳拾五本	紫革	中坊久三郎
一拾枚	手燭	多羅尾次郎左衛門
一貳つ	奏者番	石川主殿頭
七月九日	金子	大坂秀頼公
一拾枚	紫革	赤座内膳
一貳拾枚	包丁刀	遠州二諦坊
一貳枚	小刀	同
一貳つ	御鞍白木	イセキ
一壹口	奏者番	遠山民部少輔
以上	紅花	當時悉皆知行奉行伊奈備前守
七月十六日	蠟燭	同
一五拾斤	奏者	永井右近
同	金欄	ルスの屋形
一貳百挺	大段子	同
以上	繻子	同
七月十八日	同上	同上
一五端	同上	同上
一三端	同上	同上
一五端	同上	同上

一貳尋壹尺	猩々皮	ルスの屋形
一貳壺	イソハニヤ酒	黒酒 同
一壹端	段子	カヒタン
一五本	長蠟燭	同
一三端	臨須	同
一三つ	御手巾	ハテレン
一五つ内二盃	ビイトロ	同
一貳百斤	紅花	上總衆本田出雲守
以上	奏者番	石川主馬頭
七月十九日	チリメン	ルイス
一拾端	金欄	同
一貳端	リンス	同
一壹端	以上	遠山民部少輔
七月廿二日	蠟燭	松平下總守
一貳百挺	以上	奏者
七月廿四日	キヤウ	西尾丹後守
一壹カラケ	砂糖	カホチャの屋形
一六桶	ラウ	同
一四包	象牙	同
七月廿四日	象牙	同
一貳本	象牙	同

一壹本	キヤラ	同人弟
一三拾本	シユロ掃	伊勢松坂城古田助左衛門
一貳拾帖	もりした紙	美濃栗原右衛門
以上	奏者	遠山民部少輔
七月廿五日	銀子御馬代	和泉の岸和田
一五拾枚	御裕	同
一拾	銀子御馬代	但馬のいづし小出右京亮
一三拾枚	御帷子	同
一五つ	御帷子	同
一五つ	大緒	同
七月廿五日	御裕	江戸諸衆小出信濃守
一五拾筋	杉原	高野大徳院
一五つ	奏者番	永井右近
以上	奏者	奈良惣町中
七月廿九日	曬	遠山民部少輔
一貳拾疋	御太刀長光	秀頼公
以上	金子	同
八月朔日	曬	大坂衆羽柴左門
一壹腰	銀子	有樂子
一貳百枚	銀子	大黒屋長左衛門
一五拾疋	銀子	同
一五枚	銀子	同

一貳拾枚	銀子	銀座	中
一貳卷	大段子	中將基道	滴
一貳端	リンス	兩替彌三	右衛門
一貳斤	大白糸	平野忠五郎	右衛門
一貳斤	大白糸	萬屋一右衛門	右衛門
一壹斤	五色付糸	淀や次郎	右衛門
一五斤	丁子	御薬や道	初子
一貳卷	セテン	いとや七郎	右衛門
一貳枚	紫革	桔梗や道	圓
一壹腰	御腰物來國光	越前	少將
一壹腰	御脇指國安	越前	少將
一五百把	綿	同人	
一貳百枚	銀子	同人	
一五枚	紫革	永井	右近
一拾卷	リンス	大和衆松平	右衛門
一貳卷	ヒロウタウ	遠山民部	少輔
一五拾枚	銀子	小西長左衛門	
一五つ	御ハラリ	志摩關	長門守

一五つ	御裕	志摩關	長門守
一五つ	單物	同人	
一壹帖	日本紀	吉田	二位
一壹つ	御硯箱	神龍	院
一壹箱	論語抄	同人	
一三つ	奏者番	石川主殿頭	
一三つ	御ハラリ	豐後衆稻葉	彦六
一壹挺	蠟燭	堀	民部
一壹卷	段子	奏者番	石川主殿頭
一貳つ	御小袖	奏者番	上方衆藤堂
一拾	御裕	永井	右近
一拾	單物	御帷子	

一腰	御太刀助重	上總主	
一百枚	銀子		
一百疋	越後		
一貳百把	カナヒキ		
以上			
一五百挺	蠟燭	大久保相摸守	
一三百挺	同	右兵衛	酒井雅樂頭
一貳百挺	同	大夫	土井大炊助
一百枚	銀子	藤堂和泉守	
一三枚	金子御馬代	本多佐渡守	
以上	奏者番	西尾丹後守	
一拾	蘆取	大和衆松倉	豐後守
一貳拾枚	金子	大坂當時	片桐市正
一三拾端	リンス	出頭人	同人
以上	奏者番	石川主殿頭	
一拾	御裕	當時數	古田織部
一拾	奏者	寄之師	永井右近
一三拾把	綿	將軍近習	鳥井左門

一貳百挺	蠟燭	將軍近習	十戶田備後守
一貳百挺	同	武衛門事	高木主水佐
一貳百挺	同	主水子	倉橋内匠助
一百挺	同	江戶近習	惣三郎事
一百挺	同	同	同
一五筋	大緒	同	同
一五サシ	御ユカケ	帶刀子	同
以上	奏者番	同	同
一貳拾枚	銀子	丹波衆谷	出羽守
一五つ	御小袖	同人	
一拾枚	銀子	青木民部	少
一三つ	御蒲團	同人	
一拾枚	御筒服	朽木河内	守
一貳つ	御小袖	同人	
一三つ	蘆取	大坂衆石河	伊豆守
一貳拾本	梭欄掃	住吉屋宗	外
一五枚	毛氈	川勝信濃	守
一五枚	紫皮	東美遠	山勘九郎
一貳つ	御小袖	濃衆	小出播磨守

一壹斤	紅原	堺の宗	益
一三貝	麿香丸	大和	玄修
八月廿四日	已上	西尾丹後守	
一百挺	蠟燭	江戶衆大久保右京亮	
一拾疋	曬曬	江戶衆大久保主膳正	
一百挺	蠟燭	同右近子	
八月廿三日	蠟燭	傳八事	
一壹束	杉原	同森川金右衛門	
一壹束	段子	伊賀子板倉周防守	
一壹束一本	那須紙	増上寺	
一壹束一本	同	同所	
以上	奏者番	ケイカン	
八月廿五日	蠟燭	トシリヤウ	
一百挺	同	遠山民部少輔	
一壹束一本	杉原	將軍近習小	
以上	奏者番	左衛門事	
八月廿六日	ヒロウトウ	水野 監物	
一貳卷	杉原	同井上半九郎	
一壹束一本	奏者番	大岸寺	
同	同	石川主殿頭	
同	同	青木 法印	
同	同	大見寺	

一五つ	單物	多賀	左近
一三つ	御小袖	神保長三郎	
一五枚	銀子	古信長公弟	
一三つ	御よぎ	今在大坂	
一拾本	梭欄箒	織田民部少輔	
一壹端	段子	織田民部少輔	
一壹箱	朝倉山椒	織田民部少輔	
一貳つ	御小袖	長野 次助	
已上	奏者番	福富兵部大夫	
禁中より	同	西尾丹後守	
一御太刀	一腰		
一貳枚	金子御馬代		
一拾卷	リンス		
親王より	同		
一御太刀	一腰		
一壹枚	金子御馬代		
以上	同		
一貳つ	御小袖	公家衆廣橋大納言	
一貳つ	御小袖	同勸修寺中納言	
一壹面	ゴケ	井家攝津守	

一壹束一本	杉原	西傳寺
八月廿八日	以上	永井右近
一五拾把	綿	但馬豊岡城主杉原伯耆守
一貳拾枚	銀子	同
一拾枚	銀子	大坂衆蒔田權佐
一三つ	御小袖	同
一拾枚	銀子	九州衆宮木右京亮
一三つ	御小袖	同
八月廿八日	銀子	河内衆桑山又四郎
一拾枚	御筒服 <small>りんす</small>	同
一三つ	銀子	大坂衆伊東丹後守
一拾枚	御小袖	同
一五つ	銀子	大坂衆速水甲斐守
一拾枚	御小袖	同
一五つ	銀子	同堀田圖書
一拾枚	御小袖	同
八月廿八日	御小袖	福島兵部少輔
一三つ	同	土上イ橋右近
一貳つ	同	佐藤孫六郎

一五筋	大緒	速水右兵衛尉
一拾サシ	御鷹ユカケ	立入河内守
一三枚	皮	速水右近大夫
一五口	御鞍	湯淺右近
一五筋	大緒	亭祐法印
一五つ	足持せ	石川肥後
一拾枚	銀子	同
一貳つ	御小袖	山名伊豫守
一拾枚	紫革	大和衆鈴木越中守
一壹束	杉原	相國寺鹿苑院
一壹卷	綾	同
一貳冊	跡文	同
一貳束	杉原	知恩院
一壹端	板物	同
一三拾枚	銀子	豊後小川壹岐守
一百把	越前綿	同
一三拾枚	銀子	大和衆福島掃部助
一拾	御小袖	同
一貳冊	職原抄	當知者や
一拾	御小袖	伊勢神
一拾	御小袖	戸城主
		中院中納言入道
		柳 監物

一百枚 銀子 伊勢神一柳 監物
 以上 奏者番 戶城主 永井 右近
 九月二日 御小袖 丹波福有間玄蕃頭
 一拾 長持蒔繪 知山 同人
 一貳枝 銀子 同人
 一三三 御夜物唐織 阿波蜂須賀阿波守
 九月二日 一五 臺子 蜂須賀阿波守
 一百枚 銀子 同人
 一三枚 虎皮 讚岐國主生駒讚岐守
 一三丈四尺七寸 狸々皮 同人
 一百枚 銀子 同人
 一三三枚 越前綿 京極舍弟羽柴丹後侍從
 一百枚 銀子 同人
 一五つ 御小袖 大和諸衆小出大隅守
 以上 奏者番 神原伊豆守
 九月四日 一拾 御小袖 此國主若狹 宰相
 一拾枝 御長持 同人
 一百枚 銀子 同人
 一貳拾 御小袖 出雲隱岐の國主堀尾 帶刀

一貳百枚 銀子 出雲隱岐の國主堀尾 帶刀
 一貳つ 御夜物唐織 伯耆國主中村伯耆守
 一壹つ 錦の御蒲團 裏緋鈍子 同人
 一三枝 御長持蒔繪の覆 同人
 一百枚 銀子 同人
 一拾 御小袖 淡路脇坂淡路守
 一拾 銀子 同人
 一五拾枚 御小袖 加藤左衛門尉
 一拾 銀子 同人
 一三拾枚 美濃綿 美濃衆遠藤但馬守
 一五拾把 銀子 同人
 九月四日 一三拾枚 越前綿 美濃衆西尾豊後守
 一拾把 銀子 同人
 一三拾枚 越前綿 三州水野日向守
 一百把 越前綿 三州松平玄蕃頭
 一百把 美濃綿 三州同 主殿頭
 一五拾把 美濃綿 岡崎本多豊後守
 一貳百把 江戶綿 三州衆同 縫殿助
 江戶綿 小田原衆三戸田土佐守
 江戶綿 三州衆丹場 勘介

一五拾把 江戶綿 尾里助右衛門
 以上 奏者番 石川主殿頭
 九月五日 一五五枚 御馬代銀子 安藝國主羽柴左衛門太夫
 同 一五つ 狸々皮カッハ 同人
 一五枚 虎皮 同人
 一五つ 御小袖 筑紫衆毛利伊勢守
 一三拾枚 御馬代銀子 同人
 以上 奏者番 遠山民部少輔
 同六日 一壹つ 御香爐 道標
 一三拾さし 御鷹決拾 上杉 上條
 一五つ 片口 佐々木次郎左衛門
 一壹束一本 杉原 地藏院
 以上 奏者番 神原伊豆守
 同七日 一拾 御小袖 奥州岩手山伊達政宗事羽柴越前守
 一三三 御小袖 景 勝
 九月七日 一貳つ 御小袖 直江山城守
 一三三 御小袖 出雲堀尾 帶刀
 一三三 御小袖 同 三之助
 一貳つ 御小袖 石川 玄蕃

一三三 御小袖 此國主若狹 宰相
 一貳つ 御小袖 筑紫衆高橋 右近
 一三三 御小袖 生駒藤三郎の住唐津
 一三三 御小袖 筑紫名寺澤志摩守
 一三三 御小袖 護屋 美濃衆德永左馬助
 一貳つ 御小袖 大坂衆桑山又四郎
 一貳つ 御小袖 上野の眞田伊豆守
 一貳つ 御小袖 沼田 上總を本多出雲守
 一貳つ 御小袖 上野酒井河内守
 一三三 御小袖 安房 國主里見安房守
 一三三 御小袖 下野佐野修理大夫
 一貳つ 御小袖 毛利 藤七郎
 一三三 御小袖 京極舍弟丹後 侍從
 一三三 御小袖 志摩九鬼長門守
 一貳つ 御小袖 丹波福有間 玄蕃
 一四つ 御小袖 藝州羽柴左衛門大夫
 一四つ 御小袖 加藤肥後守
 一五つ 御小袖 阿波蜂須賀阿波守
 一貳つ 御小袖 丹波國衆谷 出羽守

九月七日
 一貳つ 御小袖 遠州掛川 今在伏見
 一貳つ 御小袖 松平河内守
 一四つ 御小袖 古田兵左衛門
 一貳つ 御小袖 越中加賀 羽柴肥前守
 一貳つ 御小袖 賀能登 伊勢 神戶 一柳 監物
 一貳つ 御小袖 豐後衆 伊東 修理
 一貳つ 御小袖 大坂衆 石川 肥後守
 一貳つ 御小袖 九州衆 稻葉 彦六
 一貳つ 御小袖 織田 上野介
 一貳つ 御小袖 美濃 西尾 豊後守
 一三つ 御小袖 島津 右馬頭
 一貳つ 御小袖 分部 左京亮
 一貳つ 御小袖 越後久太郎 羽柴 美作守
 一三つ 御小袖 美作 羽柴 右近
 一五つ 御小袖 國主 細川 内記
 一貳つ 御小袖 豐後 小川 壹岐守
 一貳つ 御小袖 美濃 衆 市橋 下總守
 以上 奏者番
 永井 右近
 石川 主殿頭

九月八日
 一貳つ 御小袖 遠州 横松 平 國
 一貳つ 御小袖 須賀 遠藤 但馬守
 一貳つ 御小袖 美濃 衆 戸澤 右京
 一貳つ 御小袖 九州 衆 南部 信濃守
 一貳つ 御小袖 奥州 南 部 伯耆守
 一貳つ 御小袖 大和 衆 本多 因幡守
 一貳つ 御小袖 信濃 衆 仙石 越前守
 一貳つ 御小袖 奥州 相馬 大膳
 一貳つ 御小袖 伊勢 關 長門守
 一三つ 御小袖 佐竹 右京大夫
 一貳つ 御小袖 美濃 德 永 法印
 一貳つ 御小袖 那須 太郎
 一五つ 御小袖 讚岐 國主 生駒 讚岐守
 一五つ 御小袖 出羽 最上 出羽守
 一貳つ 御小袖 因幡 最上 出羽守
 以上 奏者番
 西尾 丹後守
 永井 右近

九月八日
 一壹腰 御太刀 一文字 備前 國主 松平 武藏守
 一五百枚 銀子 石川 主殿頭
 一貳拾 御小袖 遠山 民部少輔
 一百把 綿 神原 伊豆守
 一百枚 銀子 同 人
 一拾 御小袖 同 人
 一五拾枚 銀子 因幡 かつと 池田 備中守
 一五つ 御小袖 同 人
 一貳百枚 銀子 中國 衆 山崎 左馬允
 一貳拾 御小袖 同 人
 一貳百枚 銀子 土佐 國主 山内 對馬守
 一三百把 綿 伊豫 衆 加藤 左馬助
 一貳つ 御夜物 段子 左馬子 加藤 式部少輔
 一壹つ 御蒲團 段子 同 人
 一百枚 銀子 美作 國主 羽柴 右近
 一貳拾 御小袖 同 人
 以上 奏者番
 西尾 丹後守

九月九日
 一五拾枚 銀子 有 樂
 一三つ 御夜物 同 人
 一壹口 御鞍 同 人
 一壹掛 御燈 同 人
 一三拾枚 銀子 美濃 衆 織田 孫一郎
 一拾 御小袖 同 人
 一百枚 銀子 出羽 國 最上 出羽守
 一五拾把 最上 綿 坂上 紀伊守
 一壹卷 白綾 近州 寺 世 尊 院
 一壹束 杉原 同 人
 一壹枚 紫草 祝 丹 波
 一貳枚 草 矢橋 喜入
 以上 奏者番
 石川 主殿頭
 九月十一日
 一拾枚 銀子 伏見 居 佐久間 久右衛門
 一三つ 御小袖 同 人
 一三つ 御小袖 平 遠江守
 一貳つ しと子 駿府 桑 山 鍋
 一三つ 御小袖 同 諸衆 島 彌 左衛門
 一壹束 杉原 宗 把

一壹束一本	以上	杉原	本泉寺	一三卷	セテン	西岡の光	明寺
十月五日	以上	奏者番	永井右近	一五拾	御弓ユカケ	青山石見守	
一壹束一本	以上	杉原	大朝	一三筋	大緒	青山左近	
一壹束一本	以上	杉原	新知恩寺	一貳つ	御小袖	筑紫唐津寺	澤志摩守
一壹束一本	以上	那須紙	仙林寺	一五十枚	銀子	同人	
一貳束	以上	大山寺八	大坊	以上	奏者番	石川主殿頭	
十月十日	以上	奏者番	西尾丹後守	十一月十四日	御ユカケ	豐後伊藤修理大夫	
一五つ	以上	御小袖	美濃衆徳永左馬助	一拾指	奏者番	遠山民部少輔	
一五拾枚	以上	銀子御馬代	同人	一貳つ	御小袖	大和衆松倉豊後守	
十月十一日	以上	奏者番	遠山民部少輔	同十六日	以上	石川主殿頭	
一百枚	以上	銀子	松平伯耆守	一貳つ	御小袖	青木法印	
一百把	以上	綿	同人	一壹つ	御茶椀	同人	
一壹束一本	以上	杉原	比叡山南光坊	一壹つ	御茶杓	同人	
十月十一日	以上	奏者番	永井右近	一壹卷	奏者番	永井右近	
一壹束一本	以上	杉原	長床坊	一壹卷	錦	伴天連	
一壹つ	以上	御筒服	稻葉彦六	一壹面	鏡南蠻	同人	
一壹つ	以上	御紙子 <small>但御筒服</small>	同人	一四十五枚	口唐紙	同人	
同十二日	以上	奏者番	永井右近	一五拾挺	南蠻らうそく	同人	
一三十枚	以上	砂金御馬代	南部信濃守	一三枚	紫皮	島田新十郎	

一三本	小刀	アカハヤシ	出羽守	一貳つ	御小袖	丹波衆谷	
一貳拾把	綿	毛利掃部	堀尾三之助	廿六日	御小袖	出雲堀尾	帶刀
一貳つ	紺フク	奏者番	武藤清兵衛	一三つ	御小袖	國主	青木民部
十二月廿一日	已上	奏者番	石川主殿頭	一貳つ	御小袖	羽柴刑部法印	
一貳つ	御小袖	羽柴對馬守	志摩九鬼長門守	一三つ	御小袖	美濃遠藤但馬守	
一三つ	奏者番	西尾丹後守	美濃徳永左馬介	一貳つ	御小袖	奥州住元	戸澤右京
一拾枚	御ハサミ箱	山岡主計頭	美濃衆高橋	一貳つ	御小袖	筑紫衆	佐久間久右衛門
一五つ	唐木綿	金森五郎八	石川玄蕃頭	一三つ	御小袖	本多因幡守	
一五端	奏者番	三郎右衛門	石川玄蕃頭	廿六日	御小袖	美作羽柴	右近
廿六日	已上	遠山民部少輔	豐後小川壹岐守	一貳つ	御小袖	國主	松平伯耆守
一三つ	御小袖	此國主若狭宰相	美濃衆	一三つ	御小袖	關長門守	
一四つ	御小袖	藝州羽柴左衛門大夫	美濃衆	一貳つ	御小袖	美濃衆	出雲
一四つ	御小袖	肥後加藤肥後守	美濃衆	一貳つ	御小袖	美濃衆	美濃衆
一五つ	御小袖	感中息細川内記	美濃衆	一三つ	御小袖	美濃衆	美濃衆
一貳つ	御小袖	豐前國主	美濃衆	一貳つ	御小袖	美濃衆	美濃衆
一貳つ	御小袖	九州宮木右京	美濃衆	一三つ	御小袖	美濃衆	美濃衆
一貳つ	御小袖	關東衆岡部内膳	美濃衆	一三つ	御小袖	美濃衆	美濃衆
一貳つ	御小袖	大坂速水甲斐守	美濃衆	一三つ	御小袖	美濃衆	美濃衆
一貳つ	御小袖	大坂伊藤丹後守	美濃衆	一三つ	御小袖	美濃衆	美濃衆

一貳つ	御小袖	平岡平右衛門
一貳つ	御小袖	豐後衆木下右衛門大夫
一貳つ	御小袖	松平丹後守
一貳つ	御小袖	元大和納言小堀遠江守
一貳つ	御小袖	衆今駿府詰衆九州寺澤志摩守
一貳つ	御小袖	生駒藤太郎
一貳つ	御小袖	桑山伊賀守
一貳つ	御小袖	桑山又四郎
一貳つ	御小袖	伊賀國衆去年より大和に住松倉豊後守
一貳つ	御小袖	津輕越中守
一貳つ	御小袖	信州眞田伊豆守
一貳つ	御小袖	美濃衆西尾豊後守
一三つ	御小袖	水谷伊勢守
一六つ	御小袖	毛利輝元是長門周防主松平長門守
一貳つ	御小袖	毛利宗瑞
一貳つ	御小袖	毛利伊豫守
一貳つ	御小袖	福原越後守
一貳つ	御小袖	來島右衛門市
一貳つ	御小袖	元九州衆今在江戸立花左近
一貳つ	御小袖	日根織部

一貳つ	御小袖	下野國衆那須權太郎
一貳つ	御小袖	今大坂石川肥後守
一貳つ	御小袖	有馬左近
一貳つ	御小袖	元美濃衆今伊勢に住能登越中加賀三ヶ國主羽柴肥前守
一五つ	御小袖	攝州衆有馬玄蕃頭
一貳つ	御小袖	小田孫市
一貳つ	御小袖	稻葉大夫
一拾	御小袖	奧州伊達政宗事羽柴越前守
一三つ	御小袖	中川修理
一貳つ	御小袖	北條大之助
一貳つ	御小袖	美濃衆市橋下總守
一貳つ	御小袖	中國衆池田備中守
一貳つ	御小袖	松平紀伊守
一貳つ	御小袖	淺野彈正少弼
一貳つ	御小袖	元常州佐竹事今秋田の主佐竹右京大夫
一三つ	御小袖	奧州衆相馬長門守
一貳つ	御小袖	奧州衆相馬大膳正

十二月廿六日
一五つ

一貳つ	御小袖	東美濃衆稻葉右近
一貳つ	御小袖	九州衆伊藤修理大夫
一貳つ	御小袖	遠州濱松住松平左馬助
一貳つ	御小袖	豐後稻葉彦六
一貳つ	御小袖	分都左京亮
一貳つ	御小袖	遠州横須賀松平國
一貳つ	御小袖	今下總國主内藤左馬助
一拾	御小袖	島津薩摩國主羽柴陸奥守
一三つ	御小袖	同家中島津右京亮
一貳つ	御小袖	藤懸美作守
一貳つ	御小袖	近州前々か崎住戸田左門
一貳つ	御小袖	上野の三州吉本多縫殿佐
一貳つ	御小袖	本多縫殿佐
一貳つ	御小袖	石川主殿頭
一貳つ	御小袖	永井右近
一貳つ	御小袖	西尾丹後守
一貳つ	御小袖	遠山民部少輔
一五つ	御小袖	奧州米澤主元越後佐渡主元景勝

以上
奏者番

一貳つ	御小袖	同家中但直江山城守
一貳つ	御小袖	悉皆也江戶衆土屋民部少イ輔
一貳つ	御小袖	美濃衆徳永法印
一貳つ	御小袖	信州小室に住仙石越前守
一貳つ	御小袖	播磨の三左衛門息今備前國主松平武藏守
一三つ	御小袖	三川水野日向守
一貳つ	御小袖	戸川肥後イ備守
一貳つ	御小袖	關東關宿の主松平甲斐守
一貳つ	御小袖	九州肥後に住今加藤主計と不相相良左兵衛
一三つ	御小袖	播磨衆龜井武藏守
一五つ	御小袖	九州筑後國主田中筑後守
一五つ	御小袖	元右馬允被官今直參になる稻垣平右衛門
一貳つ	御小袖	筑後子田中隼人
一貳つ	御小袖	三州松平玄蕃頭
一貳つ	御小袖	吉田松平玄蕃頭
一貳つ	御小袖	六郷兵庫守カ頭
一貳つ	御小袖	南部信濃守
一貳つ	御小袖	大坂衆蒔田權佐

同	一五つ	御小袖	中國衆蜂須賀阿波守
同	一貳つ	御小袖	遠州懸河松平河内守
同	一貳つ	御小袖	今近州長濱に住内藤紀伊守
同	一貳つ	御小袖	那須衆成田左衛門尉
同	一貳つ	御小袖	遠州衆久野三郎右衛門尉
同	一貳つ	御小袖	上野大畑に住牧野駿河守
同	一三つ	御小袖	房州衆里見安房守
同	一貳つ	御小袖	羽柴美作守
同	一貳つ	御小袖	近州高島但河内子朽木兵部少輔
同	一廿把	越前綿	朽木河内守
同	一貳つ	御小袖	松平將監
同	一貳つ	御小袖	永井右近
同	一貳つ	御小袖	石川主殿頭
同	一貳つ	御小袖	西尾丹後守
同	一貳つ	御小袖	遠山民部少
同	一貳つ	御小袖	伏見猪子内匠
同	一貳つ	御小袖	駿府赤井豊後守
同	一五筋	大緒	諸衆

十二月廿八日

以上 奏者番

同	一五枚	紫革	松田三郎兵衛
同	一三枚	うちつき	駿府小堀藤三郎
同	一壹つ	てふき	諸衆小倉忠右衛門
同	一壹卷	段子	駿府諸衆左兵衛
同	一五卷	しゆちん	筑紫有間修理
同	一拾さし	もろゆかけ	同人

以上 奏者番 永井右近

去慶長五年庚子已來進物、毎年大概以如此、年々之儀以之可_レ知之、

慶長拾四己酉年正月小元日甲申

元日、甲申駿河江戸士出仕如_二毎年、美濃國伊勢國先方衆、於_二駿河、無_二越年、大御所無興し給、同日、江戸品川町火事、

四日、江戸本町火事、五町程焼亡、石川玄蕃家有_二此

當代記卷五

内、子時信州府中城主也大御所爲_二鷹野、遠州に御出、其上尾州迄可_レ有_二御出_一と云々、

十三日、遠州中泉を御立、其日濱松、十四日吉田、十五日吉郎○良御通、於_二吉郎、目安を上者有、是は古下野主被官也、大御所見之給、壹人近寄て子細可_二言上_一由曰、彼士十人計刀指なから走寄ける間、大御所驚給、彼等を可_二成敗_一由曰、則退散處、歩行士共追_レ之、其中に壹人抜刀戦死ける、相殘者行方不_レ知、十五日、江戸末の町焼亡、

近日大御所清須に可_二着給_一として、清須城掃除しけるに、殿守上の段之戸不_レ明、無理に押明ければ、人有かきの手に輪違を付たを着、鍵の實を二つ砥て居たりける、偕彼者を糺問しければ、尾州内さなけ者とぞ申ける、盗人にも無_レ之間、當座に成敗もなかりしか、十四五日中に死ける、

十九日、壬寅右兵衛主大御所未子、子時十歳駿府を出被_レ上、是は大御所於_二岡崎_一出合、清須に依_レ可_二有_二同道_一也、

廿日、大御所自_二吉郎、岡崎に御着、武州關宿城焼亡、

廿三日、右兵衛主被_レ着_二岡崎_一、

廿五日、大御所右兵衛主清須に御着、清須古下野舊衆有_二知行配當_一、去年下野主被_レ爲_二加増_一ける通、或は二千石千石、或は五百石三百石分、何も此度被_レ召上、又去年秋、被_レ當_二卒時_一、高六萬石減しける分を割合、喩は六百が千石に成と云々、右衆知行所、或は五ヶ所十ヶ所、或は十五ヶ所二十ヶ所にて相渡と云々、

從_二大坂_一秀頼公爲_二使者_一、片桐市正參向、當時大坂惣奉行右兵衛主に御物大刀銀子百枚音信也、

廿七日、美濃伊勢衆、右兵衛主に被_レ遂_レ禮、銀子或は拾枚或者二拾枚也、

從_二美濃國加納_一大御所息女、勢州桑名大御所孫女清須に參向、被_レ遂_レ對面、從_二大御所_一金子五拾枚宛被_レ出、廿八日、紀伊國主淺野左京清須に參向、右兵衛主清須に入部賀し被_レ申、是は右兵衛主與_二左京女_一、縁邊依_レ有_二契約_一如_レ斯、

多武峯大織冠木像并御影、木松爲_二勅使_一吉田左兵衛被_レ爲_二參詣_一有_二祈念_一、如_レ元平愈由曰けるか、其後程なく又破ける由、普令_二風聞_一、

中國西國大名、所々城々普請丈夫相構由、於岡崎令聞給、内々不可然由曰、此比京七條に庶民産男子、喻は三歳計の如兒、顔三方面也、父則害して埋土、其比八幡祭なりけるに、或者堀無之、八幡祭に持行有、三方荒神とて鼠戸を結、代物を取てみせけるに、其價甚なりと云々、此春、東山大佛從大坂秀頼公可有建立とて有、其用意、材木自舊冬浦々にて被買取、西國同中國四國北國大名、兵糧或二萬石、或一萬石五千石二千石、秀頼公に進上、大坂に船にて運送也、伊勢太神宮、來秋從駿府大御所可有遷宮由と云々、於江戸銀師申云、去年十月より金を持來て、よなよな吹之、金を拾兩人に借、壹ヶ月に貳兩付、合拾貳兩にて返辨之、此禮不審也とて、銀師右之旨を奉行所へ言上、依之彼借金を被籠舍、二月大四日丙辰大御所清須御立、岡崎御泊、右兵衛主令同道給、五日、大御所岡崎御立、清須衆有讒者、可被改之とて、清須年寄衆駿河に被召連、從駿河小笠原和泉守于時下野國風間居、可上由被

仰遣、此以前清須儀好惡可被糺由付如斯、美濃國尾張國、去年破損堤被築給、役百石に貳人、百姓役百石壹人也、駿河近習衆給役被除、十一日、大御所駿河に着給、十九日、從大御所爲使本多上野介江戸に下、是者上方衆人質克々可被改之置と、并常陸介主へ於長福事五拾石通、於常陸國可被渡由を將軍に曰被遣、此外有密事由令風聞、去年秋冬比より至當春、關東衆被致人數揃と云云、是内々依仰將軍也、二月廿日、去年可有宗論由曰し法花宗常樂院、此度從江戸京都に被上、一昨日十八日京着、今日洛中小路々々被相渡、其上耳鼻そく、相從之法花宗上人、上總國連源、堺之玄旌、同玉雄、上總國琳碩、同可圓、此五人も被渡洛中、是は鼻計をかる、其後右之六人之衆、耳鼻をきし後被追放、彼弟子五人内、餘強鼻をかきけるにや、當座壹人死、京中廿一ヶ寺法花寺へ、大御所仰出に曰、不組常樂院、念佛無間と不申由書付て於上之者、不可懸其咎由下知し給處、法花寺上人謂云、此度法問は曾不申出、是は理不

盡御沙汰間、書付上間敷由言上、然者法花寺可有斷絶由也、常樂院洛中被渡し時、法問者不出言間無勝劣、是者以儀兵被行之間、不及是非とて、色々の吐放言と云々、此比關東衆駿河に祇候、被遂年頭禮、又九州衆も去年不參間、駿河に下、有徒移禮并年頭禮、於駿府伊達政宗進物事、金子百枚、馬二疋、脇指二腰、小夜之物唐織段子也拾、以上、其外女房衆五人に金五枚宛被出、頃年從女房衆萬事言上、男方より言上之事、大小共不成間、女房衆賄賂不可勝計、又男方之衆三四人に、銀五拾枚宛之贈物也、此度伊達政宗を松平陸奥守被改名、始の名は羽柴越前守たりしを、唯今如斯也、田中兵部、當時筑後國主、於伏見頓滅、廿六日、本多上野介從江戸歸着駿府、廿六日、井出志摩守死、日來無病氣、頓病起立所如斯、當時知行令代官出頭甚也、廿九日雨、於伏見中坊飛驒を殺害、是は去年夏、伊賀國主筒井を、於駿府令讒言者也、正爲臣下如レ此逆臣、不及是非由人皆誦之、惡まぬ者はなか

りしか、忽蒙天罰歟、逢横死、其體者伊賀守被官山中と云者、主牢人後、伊勢國九鬼長門守所居たりしか、舊友間、中坊所へ來て、及夜更まで相語、其後中坊は奥の家へ引入臥たりし、彼山中は中坊息子と一所臥たり、何者の仕態にや、中坊首を二刀切る、家中者一圓不知之、夜半に常に用藥をけるか、時過迄不言間、女房障子明見之ければ如斯、筒井伊賀守身上、此中坊依讒言相果しかは、中坊不慮相果し事、伊賀守さこそ心地よからめ、伊賀守は無足にして、當時江戸に籠居せらる、京都廿一ヶ寺法花宗、右之常樂院と不一味、念佛無間由不申旨、書付可上由、類從所司代被譴責、努々書付不可上由雖存詰、渡世習歟、昨日廿八日、如右書付を上ると云々、中坊害しける者、伏見町に札を立ける、其書に云、我は伊賀守譜代之者也、爲散主君鬱憤、中坊を伐、此後又中坊男を伐へし、さて罷出腹を可切と也、九月、伊勢太神可有遷宮とて、從御所兵糧六萬俵寄進、但五三箇年以前古米と云々、依之地盤の土を引けるに、古き柱之穴へ堀當けると也、是凶事と

て、禰宜とも如何可有と評定しけるか、又くるしか
るまじとなり、是は長祿寛正之比、榎藏掃部と云者、
國司北畠方と及干戈被_レ疵、其故は山田の從_二國司_一
役を可_レ被_レ當由付て及_二此儀_一、さて掃部云、思神慮及_二
干戈_一處、如_レ此儀頼しからすとて、神殿に火を掛燒
死、其後七箇年程經て、可有_二遷宮_一とて地盤を引け
るに、彼燒柱の穴に堀當、時國主有_二凶事_一けると也、
此禰宜衆思_レ之如云歟、

三月小朔日、當時筑前國主黒田筑州於_二駿府_一出仕、
爲_二年頭禮_一銀子百枚、去年九州衆は爲_二遠國_一間、徙移
之禮無_レ之間、此度徙移禮有_レ之、進物 金子三拾枚、
長脇拾、唐織夜物一、同小夜之物一、塗籠弓百
張、虎皮うつほ百被_レ獻、

信州淺間山、此春燒_二と影_一、往慶長元比、二三年打續
如_レ此燒る事あり、凶相たりし間、此度も下_レ薦危_レ之、
小笠原信濃守_于飯田城主_時、女を將軍養子し給、長岡越中守
_于前國主_時、男爲_二妻子_一被_レ遣、來月下旬、九州に可_レ爲_二着
船_一歟、

同朔日、駿河水降、此日關東下總國笠井水降て、家十
七八間破損、雷夥啼、右家之中一屋之人悉取て、其日

に關宿の杉の木掛ける、

三月二日、酉刻より翌三日巳刻迄雨、午刻より快晴、
四日、常陸介_{長福主事、于}能し給、黒田筑州寺澤志摩守、
同九州衆被_レ見物、

清須衆富永丹波同男、戸田加賀守、松平攝津守、同石
見守、日來無_二法度_一之由有_二讒者_一、清須を可_レ罷立_二由
大御所仰也、又古小笠原監物、近年無覺悟たりし事、
如_レ右有_二讒者_一、彼同心、殊氣相待三人被_レ行_二成敗_一、是
は自_二去々年_一播磨國へ行、憑_二池田三左衛門尉_一居た
りしか、依_二大御所仰_一被_レ殺害、如此間、清須之侍子
_レ今不_二安堵_一、

越前之古秀康逝去の時、追腹相伴したりし土屋左馬
介男知行、大御所依_レ仰、古左馬介知行被_レ召上、

三月六日、如_二冬天_一、殊風烈、里は時雨、山は雪也、惣別
此春于_レ今無_二暖氣_一、去月廿日比より、三日に一日は必
雨、翌日定つて風烈、

加藤主計頭從_二肥後國_一上る、今日伏見を立て、駿河江
戸へ下る、

十二日_甲戌刻、高野山小田原谷燒亡、寺町屋合千家計
と也、但實には七百餘宇失火と云々、

去比より奥州會津蒲生飛騨守形儀亂る、家老之者共
悉可_レ退散_二由相構_一と云々、

三月廿二三日比、羽柴肥前守居所、越中國外山城燒
亡、吉光脇指、落葉壺、かたつき火難を遁、其外財寶
悉燒失、

三月廿五日、下野國宇都宮領那須領水降て、鴈鴨青鷺
鶉雲雀已下諸鳥多死、一郷にて鴈十二拾三所もあり、
他所は此水一圓不_レ降、

廿五日_丁午刻雷數聲、同村立、當春是初雷也、山際は
霞也、

廿六日、清須年寄并小笠原和泉守事、今日又氣色甚、
是併依_二讒言_一也、和泉者去正月より、下野國風間令_二
拜領_一被_レ城居けるか、知行被_レ召上、國を可_レ被_レ拂と
也、富永加賀守、攝津守、石見等者、國は被_レ拂間鋪と
也、但知行は被_レ出間敷由仰也、藤堂和泉守_{元佐渡守、去}
府に_{去年改名}出仕、今日被_レ遂_レ禮、銀子貳百枚、小袖五進上、去
年伊賀國拜領後、始而出仕也、

小笠原和泉守、富永丹波守、松平攝津守、松平石見守、
何も清須を罷立上は、近年彼衆同心之者、同親類縁者
等、悉清須を可_レ罷立_二由被_レ仰出_一所也、依_レ之皆令_二他

國_一者多之數不_レ知、其家々戸入疊以下、如_二日來_一從_二
奉行所_一改請取と云々、

古太閤御時より、猿樂共大坂に令_二詰番_一相詰、於_二向
後_一者、大坂番を相止、駿河に可_レ相詰_二由、今日大御所
仰也、

廿九日、常陸主_{長福}主事、能せらる、藤堂和泉守爲_二見物_一
也、藤堂和泉守より常陸主に、能道具一裝束被_レ獻
_レ之、

此比駿府大御所不例、脈一度不_レ足、其上目霞給と云
云、

四月、山うは也とて、東山東福寺邊にて、鼠戸を結人
にみせける、縦は頭之毛は白く、眼之廻赤し、何物を
食すれとも一口に喰、貴賤見_レ之、能々聞、しろ子の物
狂也と云々、

卯月小二日_丑池田三左衛門妻子同息男從_二播磨_一被_レ
下、今日駿府に被_レ着、是大御所爲_二息女_一間、爲_二對
面_一也、息男江戸にも可_レ被_レ下と也、
京都鼓打幸阿彌又五郎、於_二駿府_一病死す、
此比、從_二北國_一肥前守、於_二京都_一諸道具被_レ求、中にも
武具道具急に被_レ買調と云々、

此比、荆組皮袴組として、徒者京都充滿、五月搦取之、七十餘被_レ行_レ籠舎_二令_レ糺明、此者廿人に普喧嘩を懸、後被_レ改_レ之、組頭を四五人成敗あり、殘者其非_二指科_一、只一組之知音まで之儀たる間被_レ寛_レ之、組頭の名は左門と云者也、荆組とは人に喧嘩をかくるに依て也、皮袴組とは、荆にも劣さるとの儀也、依_レ此儀_一は_レ法度_一なりと云々、
 四日卯未刻より申刻まで、白雲一筋、東西變、長さ無_レ計、さて東より先消去、天正拾一年癸未四月上旬、如_レ此之有_二天變_一、其時は北より消、十二日經て、於_二江北_一秀吉公與_二柴田_一合戰、越前衆破北、則柴田滅亡也、此夜、三州五油町悉失火、
 駿府大御所御座之間近所へ、何とも不_レ知人、水はしりの板をく_レり來、則戒見けるに、一圓のたはけものなり、非_レ可_レ有_二誅戮_一被_レ追放、去二月、清須の殿守へ來居たる者の類乎、
 薩摩國島津琉球の働、彼島平均、惣別琉球より島津方へ、毎年綾船と名付進物有しを、近年唐の相談、日本への音問不_レ入事由を、琉球之しやな達而申、島津方_レ令_二無音_一、依_レ之百餘艘を以相働也、琉球は着岸之

時、しやな帥_二人數_一、拾七島防戰す、于_レ時野郎後_レ廻責之間、しやな破北、琉球人或は討死、或は被_レ疵、則七島毒島へ打入、王城を攻破て、王を生虜と云々しやなと云は、琉球にて武者大將也、彼しやな日本を嫌て、唐に可_レ屬との企成しか、果して如_レ斯、野郎とは無_レ津被_レ官也、
 四月七日雨降、
 八日、入日殊こかる、縦は鞠程之雲、日の廻を飛散、是早の兆歟、此日殊風烈、春中より一日雨降は風烈ふて、今不_レ止、此春中餘寒甚、
 桑名本多中務知行、一男美濃守年卅六讓被_レ隱居、一兩年依_二煩氣_一如_レ斯、年六十二、
 十一日壬申刻より雨、夜中大雨也、去八日入日粧早の兆と云とも、今雨也、
 大御所不例、大方本腹し給、
 同四月、薩摩之島津百餘艘集_二兵船_一、琉球に令_二渡海_一、彼島不_レ及_二一戰_一、則内裏を責崩、王を生捕令_二歸朝_一、彼島中雖_レ令_二檢地_一、指て知行も無_レ之、漸々拾貳萬餘有_レ之と云々、
 廿八日、於_二駿府_一能あり、常陸主_八于_時三番し給、播

磨池田三左衛門息男藤松_一于_時十三番、其弟兩人同能し給、藤松は去比駿河より江戸へ被_レ下、則駿河に被_レ歸て之能也、
 翌日廿九日、今春親大夫、同子大夫、觀世、實生、金剛有_レ能、
 又翌朔日_{五月}有_レ能、是は今春若大夫、大大夫三番、子大藏大夫梅若日吉、今春新五郎、大大夫二番、子金剛龜千代、古金剛實子能あり、
 五月二日雨降、先月より早間、民此雨を悦、但未不_レ足と云々、駿河節々雨降、上方關東は旱也、
 三日、奥州會津飛騨妻女_{大御所末の女}、駿府へ着給、
 五日、播磨之池田三左衛門尉妻女、同藤松兄弟、何も立_二駿府_一被_レ上、金子貳百枚、銀千枚、綿千把引出物也、藤堂は正宗之脇指、舍弟兩人にも脇指被_レ遣、
 八日、自_二申刻_一終夜大雨、曉天休止、去二日小雨以後是初、貴賤悦_レ之、
 此比、於_二駿府_一右兵衛主常陸主を請し、及配膳本多上野介、松平右衛門佐、成瀬隼人、永井右近、安藤帶刀等也、是何も近習中年老也、
 去々年三月四日、金作之茶具失たりし時之當番落合

長作、相場勝七、岡邊藤十郎、被_レ行_二流罪_一、長作は鬼界島、勝七は隱岐島、藤十郎は伊豆大島、
 十一日、于_レ時伯耆國主中村一角_十頓滅、未無_二息子_一、遺跡可有_二如何_一と云々、
 若狹國主京極宰相病死、息男近年在_二江戸_一、父死去間、若狹被_レ上、
 十七日、於_二江戸_一藤堂和泉守所に將軍御成、去六日自_二駿府_一今春大夫召下能有、
 十八日、將軍御成爲_レ悦、在江戸衆各を、藤堂和泉有_二振舞_一、同能有、
 十九日雨、
 廿二日雨、是より長雨也、
 廿五日、駿府於_二傾城町_一有_二喧嘩_一、依_レ之阿部河邊へ遊女可_レ相移_一、由下知し給、
 廿九日、申刻雷數聲甚、美濃國加納三箇所_レ雷落、其中松田彌七郎と云者家、爲_二雷火_一燒亡、
 此日、於_二江戸_一今春大夫能あり、然急雨、三番過被_レ相止、
 五月十八日、淺野紀伊守_{紀伊國主}悉皆之用人松原内記を、左内と云_七者指殺、其故は、彼左内京都之者なりし

か、紀州へ奉公望依て可_レ下の由、傳を以松原内記方へ云送、内記則承引し、小袖以下を遣令_三招請_一處、内記戀暴甚成ける間、紀州へは不_レ出して、私に抱置令_三懇志_一、六月丹波國普請可_レ有とて、彼内記をも從_三紀州_一可_レ被_レ遣と也、彼左内事、紀州内々被_三聞及_一、有_三相見_一度被_レ思、度々内記所へ被_レ行けれとも、深く隱間、終に無_三被_レ見事_一、此度丹波國にて可_レ有_三露顯_一と思けるか、彼左内を廿日已前に、人を付京都へ上せける、さて跡より狀を以、左内方へ申贈ける者、向後内記相抱間鋪と也、左内此狀を見て、大變氣色、さて父母親類に隱、紀州へ只壹人下り、彼内記常之居間へ來る、内記轉寢して居ける所を、大脇指を以三刀に殺害す、則其身も相果る、彼左内甚美麗と云々、其後左内介法之伯父坊主、此儀を内々存る歟とて、從_三紀州_一駿府奉行中并城之女房衆へ被_三申贈_一、叔父坊主を被_三抑留_一、大御所無_三御承引_一、所司代板倉伊賀守も此事紀州の存分不_レ可_レ然由申ける、京畿の者共何も、是は紀州被_レ申間鋪事を被_レ申けると批判しけると云々、此事淺野紀州此儘打置なは、京都外聞不_レ可_レ然とて、頻駿府に訴ければ、難_三默止_一して、彼叔父坊主を、十一月

紀州手の相渡、被_三籠舎_一けると也、六月小朔日_辛駿府本丸女房局に火をつたるの間、焼上處、されともみけしける、是女人の態成とて、下女を二人あぶり被_レ害、局女房衆二人可_レ被_三遠流_一と也、
 二日、入_三八專_一、會津飛騨守妻_{大御所未女}、駿府を立て奥州に下向、引出物金二百枚、銀千枚、綿千把、最前播磨息女同前被_レ出_レ之、
 八日_戌六月節、
 九日、黒船并小黒船二艘、九州至_三長崎_一、當月朔日着船由、今日京都披露、
 十二日、三河國荊屋城辻風吹て、櫓以下吹落す、其筋在々右之風吹、他所一圓不_レ吹、
 此日同國山中下山と云所氷降、是を取て見るに、一時計は不_レ消、彼郷田島悉損亡、
 十四日_甲毎日の雨なれば、今日も同前、
 十五日、當時豊前國主長岡越中守、昨日被_レ着_三駿府_一、今日出仕、
 十六日、越中守常陸主に參上、亭主則能あり
 廿二日、今日より西風落、快晴と見たり、此中の長雨、

近國田島凶と云々、一昨日廿日土用入、

七月十日比、今春大夫自_三江戸_一駿府に上る、去五月江戸へ駿府より下し後、在江戸中兩度に三日、於_三將軍_一能有、二日は藤堂和泉守、一日伊達正宗、合六日能有_レ之、十四日從_三駿府_一京都に使者被_レ遣、是は公家衆於_三禁中_一、主上近習女房猥參會、無_三形儀_一故也、主上甚逆鱗、公家九人、近習の女房衆五人、何も可_レ被_レ行_三死罪_一と也、此中猪熊は、太閤秀吉時も如此儀有し、又此度も隨一也、從_三禁中_一駿府に聞_三宣下旨_一逐電せらる、是は織田有樂息左馬助以_三才覺_一被_三闕落_一と云云、依_レ之左馬助可_レ爲_三同罪_一かと云々、元來左馬助かぶきての第一也、

たは_三法度之事_一、彌被_レ禁と云々、
 七月下旬より、美濃國有_三檢地_一、
 七月卅日、三河岡崎鐵放藥置_レ之二階失火、
 此七月、駿府町中躍を被_レ當間、月合迄躍、
 八月、於_三江戸_一大久保次右衛門屋敷火事出來、内藤若狹守_{古修理}家及_三類火_一、財寶悉燒失、
 九日、亥刻より京都畿内大風、翌日又亥刻迄大風、江州作毛損亡、他國さして不_レ損亡、此風美濃尾張三川

は、十日午刻より亥刻迄吹、
 從_三江戸_一伏見爲_三番替_一被_レ爲_三上人數_一、松平丹波守、土岐山城守、松平丹波守、山口但馬守等也、八月十二日より城在番也、

同_八十六日、大洪水、西國東國何も同前、去年八月の水より、美濃より遠江國迄三尺程高し、關東畿内西國は、去年の水より三尺程下し、
 去年の比より、内裏稀有なること有、主上近習之女房衆、_{廣橋局}以上五人亂形、中にも此兩人主上寵愛の女性也、廣橋は則廣橋大納言息女、唐橋は中御門也足當時_之息女也、縦は傾城かふき女の如く、洛中を出行、專公家九人はに對面、酒盛最愛し、被_レ亂_三薦次_一、右九人衆と云は、猪熊、烏丸、飛鳥井兄弟、大炊中將、花山院、徳大寺、松木、齒藥師兼安か男備後と云者也、御末の女房中より此事を言上す、主上逆鱗不_レ斜、駿府に以_三勅使_一、右之公家衆局衆を可_レ被_三斬罪_一由被_レ仰下、依_レ之板倉伊賀守駿河に罷下、子細を問給、猪熊罪科に恐被_三闕落_一、
 脇坂中務於_三淡路國_一、太閤御時より三萬石拜領して被_レ居住_一けるか、此比伊豫に有_三國替_一、於_三彼地_一五萬

石拜領也、淡路居住に少給人何も同前、淡路には當座藤堂和泉守人數を被遣番手、當年雨降かちなりとて、町人年寄付之見けるに、正月より八月廿七日迄、百廿日雨降ける由、京中沙汰しける、去年永樂錢遣間鋪由、於關東被定ける、當年藏方勘定時、右定以前之勘定には、永樂錢を藏方に可有之由、目付代官衆俄永樂を調けるを、關東町々商人亦永樂を被用けると心得、永樂を調事不斜さるか、果して如去年掟、永樂錢すたりければ、此度も商人失墮不可勝計、九月初、於江戶有喧嘩、戶田半丞近江國前々か島真田城主古左門四男左馬助安房守四男切害、半丞は令逐電、西國大名等、近年大船を拵置、是自然の時催大軍可上敷之由云々、依之此舟ともを自駿府可有被却、由曰、先淡路國に可被寄と也、十六日未刻、北野天神石鳥井、無其故顛倒、伯耆國古中村一角遺跡被收公間、自江戶弓氣多源七郎、九貝久三郎を被遣、兩人共に將軍近士也、右何も大御所下知也、

公家衆亂行隨一の猪熊、於九州押取、籠輿に乗被爲上、九月十八日京着す、丹波國篠山の城、石垣普請出來之後、去六月從江戶上る普請奉行内藤金左衛門駿河へ來、大御所出行之時、於庭上欲目見處、甚無興し給、是は城普請大御所仰出しよりも丈夫にしけるに依て、出來遅々の故也、彼兩人可爲改易歟と云々、彼奉行庭上迄呼出しけること、定而本多上野介大久保石見守可爲指南とて、暫言葉懸もなかりけり、廿一日、伊勢太神内宮、今日有遷宮、貴賤群集不知其數、然處社壇鳴動と云々、廿三日夜、愛宕山本堂に盜人入、翌月西の谷に居けるを搦捕、始は物狂の爲體をして登山しけるか、果して如此、廿三日、板倉伊賀守自駿河歸京、公家衆九人西國に可被流と也、五人之局は東國に可被流と也、此比、上總守大御所未家老之者皆川山城守、本來關東皆川主上總主養父也、山田長門守以下各以目安駿府に言上、其故は、上總主行跡荒々として絶言語たり、如此儀を數ヶ條書載、則上野總主從江戶駿府

に被參上、大御所直々理を被言上、家老衆各被改易、廿七日、伊勢外宮有遷宮、去六月、九州に黒船着し砌、小黒船二艘着けるか、八月十日の大風に、舟少々破損して風に被放、行方不知出けるか、此比上總國大野浦へ吹寄、則駿府に右之旨有註進間、被下奉行、舟中の荷物、舟主共心之儘に商可致曰、廿七日、古太閤政所御方のかう藏主、今日出京、駿河に被下、古木下肥後守遺領二萬石あり、息男宰相宮内兩人令知之、政所へ可被昵近、由自駿府曰處、政所は宰相壹人に宛之、宮内には一圓に不渡間、大御所甚無興し給、若有理者可被聞とて、駿府に被召下、惣別近年政所老氣違、比與成事多しと云々、當年は彼二萬石領可被召上とて、板倉伊賀守當毛可納由曰、九月晦日、於江戶有喧嘩、縦は水野市正所、遠州濱松城主松平左馬助を招請、其座敷にて久米左平次と服部半八と云者及口論、左平次を半八一刀ついで退出、左平次則追懸處を、八大夫と云者、左平次を

前より抱、左馬丞も半八原最最なりければ、半八を爲可遁、左平次を後より被抱、左平次か云、我已被築畢、難成堪忍間、可被離由申けれとも不離、さて左平次不堪怒怒、左馬頭を一刀築條、暫時左馬被相果、半八は其場を退けるか、於相摸國大山追懸被生害、亭主市正は寺入しけるか、十月中旬に被爲切腹を、左馬遺跡被收公、依之石川主殿頭を濱松領爲可被改納、自駿府被遣、左馬家中の者共、當毛より被改易、其中山本善右衛門浦新兵衛と云者兩人は、當知行無別條、濱松左馬頭は織田有樂也、男子三人、一男七歳と云々、左馬妻子江戶へ被罷下、唐船系の賣買于今無之、何事も自駿府下知し給、依て商人徒に長崎逗留す、糸の程を被相定、十一月長崎へ重て商人を可被下との儀也、先其中は夏秋中より、于今自駿府系を京中に被爲賣、又銀を前々は吹ぬき、南鐐にして唐人は取けるか、此度は不吹して、日本之丁銀判の儘可取由、自駿府黒舟に下知し給、唐人迷惑此事也、然共先以任此儀、去々年より伏見城在番中、岡部内膳、丹波國龜山に

可_レ在城_一由、自_二江戸_一將命也、依_レ之十月五日六日此、
 彼地へ移、知行_二萬石可_レ拜領_一と也、城普請は來春可_レ
 爲_レの由と云々、
 江戸少つ、の普請、關東衆務_レ之、其中口鹿川より江
 戸の間、路次潮入て道惡かりければ、上の野山を或は
 三十尋或は二十尋堀入る、底に石多して、普請者及_二
 迷惑_一しか、十月末に出來畢、
 十月二日、於_二駿府大御所_一之於數寄_一有_二茶會_一、客は織
 田有樂入道、藤堂和泉守、西尾豊後等也、昨日可_レ有_二
 此會_一處、雨故及_二今日_一、西尾は伯耆國依_二在番_一、則翌日
 上る、
 去比より若狹國古京極宰相息男家中之者共、無_二臈
 次_一任_二雅意_一由有_二其間_一、依_レ之自_二江戸_一以_二使者_一可_レ
 被_レ改と也、彼使者は鶴殿兵庫と云者也、去月下旬に
 江戸御出、是皆駿府より依_二下知給_一也、宰相は當年
 夏、於_二駿府_一頓死、息男は在江戸成けれとも、將軍息
 女若狹國にましまし依_レ爲_レ聲、父被_二相果_一し時、則若
 狹に被_二歸國_一、
 十月三日、戸田九右門死去、是は駿府鷹師也、當時專
 鶴を被_レ爲_レ取に、此くふしの外大概無_レ他、去年中に

百三十五鶴を取けるか、百十計は此くふしにて取り
 けると也、
 十月十日、禁中五人の局、伊豆國の島に被_レ流、去二日
 に出京せられけるか、駿府には不_レ被_レ寄、直に被_レ通_二
 伊豆_一、其體何も髪を剃か、小袖を布子に替、下女貳人
 相添、五人一所に在島也、
 公家衆流罪事、花山院は幾か島、飛鳥井少將隱岐島、
 松木與_二大炊侍_一從_二薩摩_一方ゆわうか島、飛鳥井と難
 波は先駿河へ被_二召寄_一、鳥丸徳大寺は御赦免也、猪熊
 と兼安の備後兩人は、京都淨土寺常善寺にて殺戮也、
 猪熊最後の體彌露_二耻辱_一と云々、右の流罪衆、霜月可_レ
 爲_レ上旬と云々、
 十六日、水野市正於_二江戸_一生害、其故は、先度之喧嘩、
 彼於_二宿所_一有て、松平左馬頭以下横死之者多かりし
 故也、市正の外無_二行儀_一之族、多被_二成敗_一衆事、三浦
 かいほう三吉、せらた小傳次、荒尾長五、あるか忠三
 郎、をまた伊右衛門、馬宮彦九郎等也、此中彦九郎は
 欠落といへ共、妻子以下被_二召取_一間、一兩日中罷出腹
 を可_レ切と云々、同改易衆事、小斐二左衛門、小前孫四
 郎、岡部庄七、小川左太郎、藤方平九郎、津方左衛門、

戸田喜左衛門等也、是皆去々年の八月より伏見城在
 番、此八月江戸へ下出_二伏見_一、無行儀露顯之間、爲_二法
 度_一如_レ斯、
 廿二日夜入て、於_二駿府_一大久保藤十郎_{石見}家燒亡、但
 不_レ及_二他所_一、
 當秋大鷹、近年より數多出來して、大御所喜悅し給、
 大御所廿六日甲戌東に御下、今日善徳寺、彼地に一兩
 日可_レ有_二逗留_一と也、本多上野介大久保石見、此時始
 而被_レ懸_二言葉_一、
 相摸國土井山に口出けるとして、大久保石見守を被_レ
 遣、此所は大久保相摸守拜領の地也、定而已來は替
 地を可_レ被_レ遣か、
 廿七日、山田長門守松平讀岐守_{上總主}家老、自_二去比_一被_二押
 籠置_一けるか、今日被_二成敗_一、
 於_二大坂_一太閤御時より猿樂藝の能者に、一人に付或
 五十石、或は卅石被_二宛行_一間、去年迄自_二秀頼公_一不_二
 相替_一被_二出下_一、當秋被_レ止_二此儀_一、是は去春大御所仰
 に、在大坂止、駿河可_レ令_二祇候_一由日故歟、
 廿九日、美濃國大垣城主石川日向守死去、_{年七}是は去
 去年長門守死去之後、男依_レ爲_二幼稚_一、自_二關東_一被_レト

在城ありし、
 中國西國北國大名衆、何も關東に十二月下て、於_二江
 戸_一可_レ有_二越年_一催也、是併自_二駿河_一内々依_二御誼_一也、
 奈良之猿澤の池、十月十五日より水をかへ、十一月四
 日五日比、魚を一方の水のたまりに寄、主池掃除し
 て、廿二日小川の水を入る、魚共十荷計死ける、是一
 乘院依_二夢告_一也、此事不吉例と云々、昔年八十年以前
 にも、如_レ此池かへしは、天下凶、亦去永祿十年卯に
 も、此池にてたりとてかへけると也、
 翌_辰年天下大亂、是より三好_{天下}家滅亡、
 十一月五日、大御所從_二三島_一駿府に令_二歸城_一給、内々
 依_二不例_一也、江戸將軍を爲_二使者_一安藤帶刀被_レ遣、
 七日、自_二江戸_一本多佐渡年七十一、駿府に參上、大御
 所關東下向を相止、自_二三島_一令_二歸給_一間、急江戸を立
 て、今日府中に着、
 江戸將軍駿府爲_二見廻_一可_レ有_二御越_一旨、先般大御所は
 有_二内證_一、先々此度可_レ有_二延引_一由大御所曰、
 八日、_丙公家流罪衆、今日出京、親人々日來恩賞之家
 人以下、名殘を惜落涙數行と云々、鳥丸と飛鳥井二番
 目の息難波侍從は伊豆國に被_レ流、其外は如_二書付_一、

安藝國より福島左衛門大夫江戸に可被下にて、今日十日大坂に被着、

十六日、本多佐渡守自駿河、江戸に歸る、

尾州清須を名小屋に可被引として、自駿河、普請奉行牧助右衛門來て、彼地を地割、廣狹を繩張をする、

來春可有石垣普請として、此地は去天正十三酉年、織田信勝信長、彼國主たりし時、被普請しか、すな土にて土居堀崩ければ被打置、殊井水出兼るの條、上下の者不好之、今度は石垣たるへき土惡とも不苦と

也、其上去八月大水清須に夥入ければ、自然の時水責に可輒として、來年名小屋に可被移と也、

廿五日、福島左衛門大夫伏見を被立、關東に被下、路次は木曾筋也、

廿六日、大御所不例なりしか、今日快氣、大御所三川國に爲鷹野、可有出御として、中島爲作事、大工貳百人仰付、彼所代官普請相稼、三川國侍より千石役に壹人宛手傳之出、疋夫被急けるか、俄に又相止、依不例、惣別今年は何角不例のみ也、十二月大、此冬雨節々降、

去夏、黒船數艘着けれども、糸の賣買于今不止間、

京都糸同板物甚高直也、

九日、去年九州長崎之有馬修理被官共遣、明朝あま川に爲商渡海處、彼所之シンニヨロ用也、并カビタン船頭、あま川の賣買の様子、日本人知なは、重而黒船長崎に雖着船、難得、利由存、日本人三百人餘一所へ呼入、悉燒害畢、爲此相當、此船者共可討由、自駿河有馬修理曰、殊日本人燒害したりしシンニヨロカビタン來朝間、幸儀彼船を雖計呼、終不陸地間、不及了簡、船をからくり、以三千弋可討果用意あり、是を黒船唐人見知して、今日九日俄に船を出し、十二三里程漕歸ける處、風忽起て十里ほと吹返して、ゆわうと云處へ黒船上、然る處有馬修理此間からくりし船を漕寄、勢樓をわけ、黒船に漕寄、素有案内者、鹽消の有ける所へ火矢を討間、忽燒亡條、黒船沈滅却畢、前代未聞次第也、

遠江駿河兩國、常陸守主家康公末子、可被渡と也、近習輩悉常陸守に可被付、此内本多上野介は、江戸將軍に可奉付と也、

遠江國横須賀城主國丸年五、爲幼少間、安藤帶刀彼家中者を可引廻、由也、

十二日、牧野右馬丞東上野大胡、死去、年五、六七年以前より世を恨被隱居、男被讓、

十三日、小寒入、來年立春は十四日也、

此冬、暖氣如未秋、此以前、冬かゝる無様、雨雪節々降、

此五三箇年摺本と云事仕出、何の書物をも於京都摺之、當時是を判と云、未代之重寶也、

西十二月、黒船被打果し時、長谷川忠兵衛と云者、別而令計略、是は駿河より長崎に毎年着船の賣買の檢使、糸以下の事專取引、左兵衛か弟也、此忠兵衛も同使也、黒船退治の時、小船二艘もより町屋を買取て、せいろにして黒船の下へこぎ入へき謀也、先黒船に近付時、石火矢の無之方、廻、黒船之下へ我ら船を乗入、則黒船に乗移、アンジンを打取、是は黒船の主也、是は先年日本の船の者共悉殺害せしは、此アンジンか業也、

被遣、知行未無其沙汰、

遠江國濱松城十二日、は水野備後守同對馬守兄弟被移、此對馬守は自去去年、常陸主に被付依也、去る九月、松平左馬丞横死之時改易後、濱松狼藉無止時、彼被官殘者共のしわざの由風聞付、右兩人を爲置目、

美濃國大垣城主古石川長門守息號今安藝守、年二十、爲幼少間、下關東、可致在江戸、大垣は石川主殿頭大久保相、

右黒船水の上計燒、水に浸所者沈て于今有、二十五尋程沈舟の分有、以來海士共を召寄、此船に綱を付可被引上、可有計歟、銀は三千貫目程可有、印子は何程可有之も不、知、糸は少々浮上げるを取て、駿府使持參、

京都糸物俄高直、此秋糸壹つにて、銀子壹貫二三百目價なりけるか、黒船滅却後、貳貫七八百目價也、

十二月下旬、美濃三川衆爲越年、駿府に下る、清須衆も右兵衛主駿府に居給間、同駿府に下、上方衆於三江戸可有越年とて、國を被立けれとも、自江戸被上之、

今年は京都より東國は凶、西國豊年と云々、慶長十五^{庚戌}年元日^{戊寅}天赦日、正月大^寅朔日快晴、

元日、於駿府各年頭禮あり、從將軍大久保加賀守駿河に昨日着府、同今日有禮、

二日、於駿府大坂秀頼公使者^{伊藤掃部}今日有禮、

九日^{丙戌}大御所自駿府至田中爲鷹野御出、其より尾張國名護屋に御越、繩張仰付、二月より可有普請と云々、

十三日、大御所一昨日自田中桐良に御出、中泉に昨日可有御越、由被相定處、俄自桐良駿府に御歸、今日十三日夜節分也、

十九日^{申丙}大御所爲鷹野田中の御出、

三河國吉良に赤き鶴有、珍事と云々、

廿四日、大御所田中より、遠州中泉に御出、廿五日、基上手本因坊を始、何も駿河着、從去年九

月有江戸、去廿日江戸を立て、今日參着、將基さし何も于今在江戸、

二月小二日^{己酉}大御所自中泉田中に御歸、同四日駿府に御歸城也、此度鶴三十六取、鷹鴨之儀不被數、去去年二月、於相摸國中原失たりし金子茶具水指金已下出る、

廿日、將軍江戸を御出、此大雨、

廿一日、大雨、所々川水増、

播州の池田三左衛門、紀州の淺野紀伊守、四國の加藤左馬助、丹波の有馬玄蕃已下、去比國を立て駿河に下る、此大水付川を輒不^レ得^レ越、徒路次逗留、福島左衛門大夫自舊冬在江戸、此比駿河に被^レ上、廿四日立駿河被^レ上、遠州三川大水付、路次逗留、

廿三日、大雨翌朝迄雨也、

廿四日、將軍駿府に着給、此比節々雖^レ雨降、大御所任仰如^レ斯、

閏二月大二日、越後國堀監物同丹後^{兄弟但}於駿府本丸に及^レ對決、自去去年兄弟不和にして、越後守に信長小姓堀久太孫監物令^レ讒言、弟の丹後を追出す、丹後從去年令^レ在江戸、專駿府江戸相詰出頭人を企公

事捧目安、今日兩御所聞^レ之給處、監物非分と云々、又越後守^{歳十}、監物^{元の監物子也、親爲}最負被^レ上目安處、大御所只一ヶ條開給、爲^レ幼少者如^レ此儀不可^レ申、是も監物所爲由曰、則越後國被^レ召上、上總主大御所未子^{年廿二}、被^レ遣、上總主此度相^レ伴將軍在駿府間、同日立駿府被^レ歸、江戸、近々越後國に可有^レ入部^{支度なり、其以前爲一番手、信濃衆三人、小笠原兵部大石川玄蕃、深志城主、眞田伊豆守、越後被^レ遣、此越後守は伊沼田城主、去子年より領^レ遺跡、}

勢桑名本多美濃守^{中務}、聲也、去未之年、嫁大御所有^レ養子被^レ遣間、此度も從大御所迎^レを被^レ遣、越後國駿府に可^レ被^レ上となり、

同四日、迎使兩人立駿府、越後國に下る、

八日、此中駿河在府西國衆、尾張國名護屋可有^レ普請として、今日立駿府被^レ上、

十日^{丙戌}將軍爲^レ鹿狩今日駿府御立、三川國田原に被^レ趣、今夜田中城止宿也、

此度將軍御供、關東衆盡^レ美麗、其費不可^レ勝計、

十三日、大御所息女^{歳三}逝去、是者伊達政宗息に可^レ被^レ嫁契約なりしに如^レ斯事、政宗可有^レ恐怖^レ歎、

十四日、將軍至田原着給、十五日雨故無^レ狩、十六日

十七日大久保山藏王山狩場にて、鹿貳百四十七、猪十二、合貳百六十九留、三川衆人多召連被^レ出、鐵放弓無^レ際限、十八日休息、十九日將軍家御袋依^レ忌日無^レ狩、廿日、ひるわ山被^レ爲^レ狩、鹿百五十、猪二十四、合百八十四留、廿一日、雨故無^レ狩、廿二日、わかみ山ま^くさ山被^レ爲^レ狩、鹿百六十二、猪三十三、合百九十五留、廿三日、たつほね落し也、鹿五十二、猪二、合五十四留、

申刻西の端より東の果迄赤雲一道あり、半分程迄は幾筋も有、去々年も如^レ斯白雲ありし、^{此二行恐くは撥入ならん}

都合七百貳留、此内鹿六百十一、猪九十一也、

廿四日、將軍田原を立給、廿七日、將軍駿府着給、

去十七日、於^レ此狩場將軍近習輩岡部八十郎^{江戶中川}八兵衛^{美濃}、及^レ喧嘩、八兵衛を二刀切、八兵衛如何した^りけん刀不^レ得^レ拔互退、其時八兵衛郎等申云、此上は汝行八十郎を可^レ切由申付、郎等共走懸る、彼八十郎向者を切斃、一人者後より八十郎切害、さて將軍より仰付、則八兵衛成敗也、此喧嘩中、狩場衆せこなみ一圓不^レ亂、喧嘩は相手計也、日來依^レ法度堅^レ也、

羽柴下總^{元織田常心臣下、其後大關病死、}

廿日丙申刻終日蝕、
 三月小朔丁未十六日より四月節也、
 去年被召上_{古木下肥後守}大閣の遺領貳萬石、淺野彈正被下、彈正息杏紀伊守、右兵衛主依爲_{舅父}、彈正_{大御所被}及_{懇切}、但右兵衛主幼稚間、今縁邊云合迄也、
 五日、將軍駿府御立、江戸_{下向也}、從_{大御所}曰、右兵衛主常陸主儀頼思給間、大御所逝去後、別而可_被引立_{由也}、將軍哀思給歎、其日路次中落涙迄也、惣別此比、西國大名共に對面時、如_斯何もへ大御所曰、
 十日、於_{尾州名小屋普請場}、黒田甲斐守家中輩與_{平岩主計頭者}有_{喧嘩}、兩方當座死、
 十一日、勅使出京駿府_{下向}、依_之板倉伊賀守同道、是讓位儀急御宣下也、
 十二日_{戊午}今朝當_{八十八夜}、然共不_降霜、
 十三日_{己未}寅卯刻月蝕、
 十八日_{甲子}昨日より今朝迄雨降、
 十九日、常陸主有_能、已上五番、
 廿三日、細雨、

此比高野山衆徒行人聖、何も背云事、駿府に在_滞、衆徒中云事は、去々年當_{遍照光院}と_{按察使坊}との云事有_し時、_{遍照光院衆儀}有_て、_{按察使}を可_被押籠_との使を立たる間、_{按察使}則_{遍照光院}往_苑も角も可_成由_被申けるに、_{遍照光院}折節此儀を門弟衆儀談合せられけるとして留守たり、然處に此旨を弟子告來る、則_{其衆儀}衆有_{評定}、_{按察使}坊に被_{押籠}、然共指たる依_無科、長々敷置けるに、あせて駿府_下、事由_令言_上間、_{遍照光院}其外、其時の衆儀の衆を召下被_{相尋}けるに、_{按察使}不_違言_上、大御所甚有_氣色、_{遍照光院}を擲取、乗物にて國送_{高野山}へ被_遣、其上被_加誅戮、右の衆儀の門弟共被_{流罪}、其上按察_{遍照光院}に移、_{高野山}於_{云事}は、向後可_任存分_由印判_被出間、去々甲申年より以來、彼按察使成_{遍照光院}、衆徒の坊々をも任_{我意}、無罪をも追出、我氣に應ずる僧を置、傍若無人の仕置也、然間法性院の門弟共、無_過して多以被_{追出}一條、當春相下在府と云共、_{遍照}も在府、殊大御所氣色好ありければ、日出仕の間、法性院令_{言上}事不_協して、于_今駿府に_{滞留}也、又行人と聖との云事は、聖に家の高棟を可

止との儀也、聖は自前に如_斯仕來由言上也、此後大御所如何可_有下知_哉、惣別近年彼一山云事不_{斷絶}、佛法末世の今如_此儀、爲_{天魔障}碍_歎、此已後_{遍照光院}と_{法性院}有_{對決}、大御所直聞届給、去々年_{遍照光院}被_出し_{朱印}召返、法性院_被渡、法性院被_播面目、
 廿八日、駿府城召仕上_{庸女房}成敗也、是は連々金子盜事及_{度々}、事既露顯間、被_及殺害、去去年失たりし金子の茶具、此二月出たりしも、此女房のしわざかと人口也、
 當月、金剛太夫三郎_{是は}大閣の時、七つ_於堺勸進能_有之、打續雨降ければ、延引覺外也、其砌有_{落書}、今日も又能さふらうと觸ければ雨降ぬれば、こんかふ入ぬ此頃中院也足入道被_逝去、當時公家中智者也、一時人惜_之、去年息女流罪、其愁積所歎、
 四月小_丙朔日、
 九日甲申、三川國の山中日近と云所_石ふる、大さ四五寸許なる石五つ、其砌地震動して如_雷、昔寛喜二年_{庚寅}奥州芝田郡廿四里中、柑子ほと石降、十月十六日事也、如_{雨降}と云々、同年六月九日、美濃國蔭田

庄、武藏國金子里、雪交_{雨霰}降、_{是も}十六日、同月十八日、卯刻日蝕、同月十八日、時氏逝去、
 去月十七八日已後炎干、
 於_{京都}金剛三郎太夫致_{勸進能}、
 十一日、昨夜より未刻迄細雨、下民悅甚、及_晚快晴、十四日雨、十五日、於_{京都}意庵死去、當時醫者達者也、去比より於_{駿府}瘧瘧被_煩、頻に暇を被_言上_{けれ}とも、途中遠路可_有如何_とて不_被赦、病及_{危急}、無理被_歸洛、果して如_斯、
 十八日_{癸巳}天上日、及_晚雨、昨日十七日より五月節入、此比、今春若太夫七郎於_{京都}勸進能_有之、道成寺のをし拍子違、無_庸次_體也、
 十九日、於_{駿府}下手揃の_有能、大御所爲_{慰見}給之、右能遠山民部少輔_{年七十五也}、東_鱸右衛門_{年六十六也}、川國足_{許也}、池田備後守_{秀頼公衆}今等也、此備後は年四十六七、常に此道にすぎ_被能、
 今月早の様なるか、小雨折々降、三川國は一圓不_降、當月上旬比、エゾの松前駿府江戸え出仕、大御所曰、カイクジン_{海狗}と云魚調可_進、此魚を食すれば長命也と云、此魚むかふに鱈有、身に毛あり、長一尺横四

五寸と云々、ヲットセイとも云々と云々、五月小、朔日巳午刻月蝕とありけれども、曇故不見、三日、駿府は大風、家々破損、他國風不吹、此比川中島本領越後國相添上總主に被渡、是は越後國村上周防溝口伯耆兩人拾五萬石の分拜領、此通被相除故也、

七日、梅若大夫於駿府致勸進能、五日の中人多寄、今月三日大雨、昨日より八專入、木曾川別而大水、尾州名小屋の可運送賣買材木不殘流、

十四日、伊達政宗自江戸被着駿府、十五日、梅若於駿府淺間致能、大御所見給之、十八日、大雨、西美濃大水、堤不殘切、此度木曾川水不出、

廿一日、長尾景勝自江戸被着駿府、廿二日、大雨又大水、

廿三日、常陸主^{大御所未}右爲^{子九歳}兩客被爲能、翁は觀世太夫可仕大御所下知し給處、夜前觀世左近逐電行方不^レ知、是は梅若太夫を被爲愛故歎、自元身上不自由、此間別而すりきり、萬事不^レ叶心間氣違歎と云、

廿四日同五日、兩客被^下江戸、廿五日、長尾景勝伊達政宗、自駿府江戸に被歸、廿六日、三川國大水、西三川は去年八月の水より三尺下し、東三川は吉田邊は、去年の水に四尺計高し、駿遠兩國も大水也、

下旬に建部内匠死去、當月十八日より煩と云々、是大坂秀頼公近習也、刀脇指總而かな物の目聞也、江戸駿河の若き衆弟子八百人餘と云々、此小性長吉、内匠死去八日目に追腹を切、時の人不譽之云ことなし、去三月内匠駿府逗留中、與^二榜輩^一令^二逐電^一、於^二三河國吉田^一押留けるを、榜輩侍二人成敗有き、此長吉は無^二異儀^一如^二前々^一仕はれしか、此度奇特の死をしけるとて、人譽之、

此比、京都町人米屋のりうせいと云者、以^二大御所御意^一、ノビスパンに渡海、賣買任^レ心歸朝、猩々皮多持來、但金銀は及^レ聞し程はなし、雖^レ然他の國他の島より多、重而日本人渡海無用の由、ノビスパンの者堅日本人えしめず、

六月大朔日^{甲戌}二日土用入、去春より至^二于今^一疫癘不^レ絶、人多死、

三日、尾州名小屋普請、今日より根石置、北國の松平筑前、自^二春中^一被^レ寄^レ石、西付二丸を被積、其外衆何も本丸也、此中羽柴左衛門大夫正則^{備後安藝兩國主}、羽柴三左衛門^{播磨}、淺野紀伊守^{紀伊國主}、右兩三人は、去年奥丹波城被^二普請^一間、此度名小屋普請は可^レ被^レ除由、大御所曰間、其用意無^レ之處、去三月、俄名小屋普請可^レ被^レ致日付、取分被^レ急間、家中者及^二迷惑^一と云々、

名小屋普請知行役事

百三萬貳千七百石 松平筑前守^{羽柴肥前弟、今に名代}

八十萬七千五百石 羽柴三左衛門^{輝政、此中備前國嫡男松平武藏守、淡路國は去三月二男に被^レ下、播磨備前淡路合三ヶ國分也}

卅七萬四千三百石 淺野紀伊守

四拾九萬八千貳百石 羽柴左衛門大夫^{九州衆也、元龍藏寺内}

卅五萬七千石 鍋島信濃守^{筑前國主}

卅壹萬石 黒田筑前守^{筑前國主}

卅萬貳千石 田中筑後守^{父去^二年春死^一、九州衆}

卅萬石 羽柴越中守

貳拾萬石 松平長門守^{毛利輝元息、周防國長門兩國主、今在^二江戸^一}

廿萬貳千六百石 山内土佐守^{本土佐去^二年死去^一、土佐國主、是は甥、今跡目也}

拾九萬千六百石 加藤左馬頭^{伊豫平國主}

拾八萬六千七百石 蜂須賀阿波守^{阿波國主}

九萬五千石 寺澤志摩守

八萬五千九百石 生駒雅樂跡目

三萬石 木下右衛門

貳萬石 竹中伊豆守^{元美濃衆、今豐後衆}

壹萬九千石 森伊勢守^{同豐後衆}

五萬六千石 稻葉彦六^{元美濃衆、今豐後衆}

五拾貳萬石 加藤肥後守^{主計事、是は殿主一圓被^レ築、但其身所望也}

右何も太閤秀吉公の御竿の積也、

合五百五拾八萬八千五百石歟

此外中國西國の中、丹波國龜山被^レ致^二普請^一、此比、丹波國龜山普請中に、薩州島津龍白弟從^二丹波國^一頼付、伏見來病死す、是は去^二庚子之年^一、美濃國關ヶ原合對の時、兄の兵庫退散之期、手負馬離、行步不^レ任進退、死人之上に倒臥處、奇特の夢想有、彼夢に云、是より東え下、成^二木食^一可^レ送^二年月^一との告也、然間希有にして全^レ命關東へ下、如^二夢想^一令^二木食^一、經^二十箇年^一去年春、薩摩に歸國し有^レ之けれども、見知たる者もなし、漸々右之旨人に語と云とも、於^二彼合對場^一討死由披露有ける間、中々不^レ思寄^二事^一なれば、取あく

る者もなし、往々其様體を見て、相似たる所も有ければ、還俗させ見之は無_レ紛、此旨龍白同又八_レ申届條、則令_二對面_一語_二往事_一令_二落涙_一、さて所領を遣し居住の處、此度不慮相煩令_二死去_一也、
名古屋尾本丸石垣、十二日三日何も出來、此上二丸可有_二石垣積り有_一、

十二日、此中連日長雨、如_二五月雨_一、今日殊木曾川洪水、尾張國方堤數ヶ所切、上は矢那、富田前、をいり、下は加々の井等也、
今日東山大佛堂、大工新始也、

去五月より大雨洪水雖_レ及_二度々_一、京畿はさして無_二水損_一、濃尾三此二ヶ國別而大水、下民爲_レ之愁、

十三日、伊奈備前守領所代、於_二江戸_一死去、
十四日、時々晴、戌刻月二重笠様にして、其雲五色也、
十六日、今日尾張國津島祭行_レ之、昨日十五日、如_二毎年_一可有_レ祭處、五月を大と云事を、何者か云出しけん、就_レ其如_レ斯、今日十六日より快晴、

東山大佛堂に、九十本宛三重に柱立、合百八十本也、此直一本付銀子拾六貫目宛也、但自_二遠國_一運送共に此通也、佛の前八間廣き間、大木一本に付銀子百貫目

也、其外金銀入用并人足手間不可_二勝計_一、太閤の御貯の金銀、此時可有_二拂底_一と云々、去天正十六年始し大佛殿は、木食專執行也、米三萬四千石被_二宛行_一之内、六千石程餘太閤に被_二返上_一、但其時は諸大名奉加三萬石餘有_レ之と云々、此旨木食上人知音人に被_レ語けると也、

廿四日、宇都宮奧平大膳女、今日駿府着、是は兩御所依_レ命、出雲國堀尾幼息爲_レ令_二嫁也_一、是大御所彦也、
廿五日、宇都宮女出仕、大御所懇志し給、銀子五百枚被_レ出、去十三日於_二江戸_一登城時、自_二將軍_一銀子參百枚被_レ出、

七月朔日、大御所爲_二河狩_一、瀬名之谷に出發、
六日、將軍從_二江戸_一武藏府中、爲_二河狩_一出發、
十日、晚より細雨降、去月十四日の雨已後旱魃、今此滯上下人悅_レ之、

此比、從_二江戸_一爲_レ使士井大炊青山伯耆駿府に來入、子細不_レ知_レ人、
丹波國龜山普請出來、殿主は藤堂佐渡守對_二兩御所_一進上由有_レて相立る、

此比より、代官衆中銀子を可_二辨上_一由也、去年の水入

の米下直成故、上米の如くに依_レ有_二勘定_一也、

美濃國黒野主加藤左衛門尉一橋下總守伯耆國之可_レ致_二國替_一由、自_二江戸_一奉行衆書狀、今日十九日彼在所に到來、各令_二支宅_一可_レ引越_二由有_一返狀、伊勢國龜山之關長門守右同前と云々、

薩摩國島津陸奥守又八事、去_レリウキウの王令_二同道_一相上、今日廿日都を立て駿河江戸に下る、去年島津人數リウキウに令_二渡海_一、彼島の王を生捕虜歸朝して今及_二此儀_一、是よりリウキウを島津令_二押領_一、彼島田島令_二檢地_一、都合拾三萬石有_レ之と云々、琉球に付島五十

三島と云々、右十三萬石之内也、
昨日迄廿一日、申刻より大風、及_二亥刻_一休止、畿内諸國八事也、
田島損毛不可_二勝計_一、但遠江より東者さして此風不_レ強、去年之風より強吹ける間、家屋或は破損或は顛倒、其責無_レ限事歟、此風さして作毛に不當由後に聞ゆ、

此風に奈良の神木六十本倒と云々、昔年應永十貳酉年、春日神木六千枯、又永正三年寅、奈良神木七千本餘枯と也、

廿七日、美濃國加納松平攝津守元飛騨守、爲_二加増_一四萬石、於_二當國_一拜領可有_レ由、從_二江戸_一奉行申狀也、同

下總守、伊勢國龜山城領相添、五萬石拜領、同狀也、三河國作毛も依_レ爲_二本領_一無_二相違_一、是兄弟駿府大御所孫也、

去江戸衆松平越中守、土肥大炊、橋左近、丹羽五郎左衛門、各壹萬石宛拜領、此橋左近は、先年關原合對砌屬_二石田治部少輔_一、大津城責し輩、九州人也、去子年より無_レ足して令_二在江戸_一、丹羽五郎左衛門は信長公臣下、五郎左衛門子也、是も去子年亂逆敵對、加賀國小松城主也、近年在江戸也、此外伊井掃部大輔別腹兄、壹萬石、其外或者五千石、或者三千石宛拜領、但近年無_レ足の衆也、

廿九日、大久保石見守着濃州岐阜、去夏より越後國國中村里相改逗留、信州を通、直美濃國に來る、是當國去年地檢郷村知行爲_レ被_二相改_一也、
八月大朔日西癸

廿日、長岡越中守父玄旨、於_二京都_一老死、是當時俗方之智者也、年七十七、但十ヶ年以來も老耄、無_レ筋事をも時々は被_レ申けると也、江戸増上寺浄土住寺可有_レ成_二國師_一として被_レ上、是大御所嚴命也、依_レ之紫野の國師を闕、吾朝に國師二人無_レ之故也、專念之宗國師、

前代未聞、

八日、島津陸奥守^{又八}今日出仕、進物一大平布^{五十一}一段、^{子卷}一銀子^{千枚}已上大御所進上也、右兵衛主常陸介主兩所銀子百枚宛、紅糸五十斤宛也、女房衆五人銀子貳拾枚宛、段子十端宛也、島津同道琉球屋形、一兩日中駿府に可^レ被^レ着^レと也、

十四日、琉球人出仕、去十日に着^レ駿府、今日對面し給、自^レ是江戸に下る、駿府逗留中、琉球王之弟病死、十八日、島津陸奥守を召寄有^レ振舞、則常陸主能^レ給、賀茂、八島、鞍馬天狗、梅若太夫、源氏供養、老松、此時廣間豊ふるひたる由曰、年寄中折檻し給、

十九日、今日毎年於^レ豊國猿樂能行、今年者今春太夫勤^レ之、但毎年に替て弓矢の立合迄を舞、能はなし、大方春日の十一月の祭禮に似たり、廿四日、去比常陸主母儀被^レ湯治、今日可^レ被^レ歸之由にて、爲^レ迎常陸主同舍弟の鶴丸夜半被^レ出、後朝大御所聞給、夜中に門を開事曲事の由、同門番則被^レ禁獄、甚無興也、先度十八日後出頭衆未不快之所に、又此事に付而各止^レ出仕、廿五日、琉球人着^レ江戸、年十七八之小性、十四五の小

性兩人有、シヤミセンを引、十七八計の小性、名字ヲモイシラ、十四五の小性はヲモイトクと云、小うたを皆々謠^レ之、在江戸衆彼小性を呼、シヤミセンをひかせけると云々、言語は日本人と同^レ之、但少つ、は違と也、髪を頭の右にからわに結^レ之計也、上下之路次に何時も宿入之時、笙横笛鐘太鼓ひちりきにて、管絃の如して宿に付と云々、之を道行と云と也、王は彼座中へも不出、奥に有^レ之隱^レる、體也、琉球にも日本のまねをして、詩和漢連歌、又猿樂の能なとも有、宗は禪淨土聖道宗有^レ之、九月大朔日^卯

二日、豊國神主吉田二位死去、近年煩敷不行歩なりしか、此春より俄腰もたち健達也、然處如^レ頓死、年七十八、九日、去月より于^レ今長雨、今日雨間之晴也、此比名護屋普請衆縱普請不出來、共、出來たる由を駿府に令^レ言上、物主々々は可^レ被^レ歸國との内證也、さて人數は殘置、悉出來可^レ仕之由也、昨八日に羽柴三左衛門播州に可^レ被^レ歸とて、名護屋を被^レ立、今日於^レ駿府近習之衆、并年寄衆出仕、大御所面^レ少

之間出給、奥にて碁有、本因坊徳番にて利立四目勝、

又道石と門入碁有、門入勝、

此比、一夢^{當時鐵放無雙上手也、古薩摩主被^レ相抱、清須に近年住す、}有^レ駿府、大御所鐵放稽古し給、

此比、古田織部^{當時茶湯數寄者隨一也、}駿府江戸に下、將軍數寄し給間、上下馳^レ走之也、會每膳部にかはらめを用、十日比増上寺國師成就して、此比出京、路次々々人夫已下以外打擲、其外行儀夥體不可^レ勝計、在京中智恩院の長老と不快と云々、彼増上寺募^レ公儀、自他に付任^レ我意、被^レ企^レ慮外、時人惡^レまぬ之者はなかり、爲^レ此弟子宗門さへ如^レ斯、況於^レ他宗乎、

安南國^{天竺内と云々、}日本に爲^レ音信、船薩摩浦に去比著岸、進物之事、一沈香之木之柱拾貳本、^{但一本に付、四人持、}一沈香之粉柱壹本、一糖水拾壺、一沈香拾斤、^{是は上、}一象牙貳、一鸚鵡壹つ、一孔雀壹つ、一リンケイ壹つ、^{是も、}一モンノ絹貳疋、右之通書立を以注進、近日駿府に可^レ有^レ運送^レ也、是は以來商船を可^レ越^レため^レの由也、惣別日本に銀多之由、近年唐南蠻の島々に沙汰有^レ之と云々、廿七日、去七月より琉球の王、駿府江戸に出仕して、九月十四日立^レ江戸被^レ上、今日美濃國被^レ着^レ岐阜、

其上琉球に有^レ歸國、毎年御調物を可^レ被^レ上諾應にて、無事之姿たるへきかと云々、但此儀于^レ今無^レ披露、琉球は暖國にて雪不^レ降、始而日本にて雪をみる^レと話、其年琉球に被^レ歸、如^レ約束也、

廿九日、自^レ江戸土井大炊助駿府被^レ來、是より相上、上方知行代官手前相改、將軍に向後可^レ有^レ領納^レ由、自^レ大御所^レ日に依て也、十月小朔日^酉

三日、土井大炊助自^レ駿河江戸に歸下、上方知行代官中相改儀延引也、右に書代官中、手前より金銀數多被^レ召上、諸代官中相辨之儀、迷惑此事也、五日、松平攝津守自^レ駿府江戸に昨日參着、今日出仕、新知之黒印并御馬拜領、翌朝則可^レ上由、何任^レ下知^レ、

六日、將軍於^レ江戸大久保相摸守所に御成、九日辛巳、申刻駿府城火事、上臺所の梁の上、大黒柱の上より燃出る、時人天火かと疑^レ之、亦先年未の年火事以來、何者の業にや、九度火を付けると也、され其人見出し、度々に消^レ之、此度も火焼し事もなき所より燃出る事、五三日以前に火を付けるか、ふとき木

なれば俄に不燃出、日數を経て燃出るとの取沙汰也、是は偏に女の業となり、又云、三日以前に、南の方より一丈計の火飛來て、城の上にて消たるを、人皆見之と云々、兎角三日以前けふり立ける共云、右の火事、臺所并あちやの局廊架焼失、あちやの局金銀小袖諸道具焼る、此火飛て二の丸中東の方、人屋三つ四つ長藏五三十間程焼失、

十一日、建仁寺新寺久昌院に有法事、奥平美作守信昌行、之、祖父道改父牧庵石塔禪居庵に有しを、久昌院へ遷て及佛事、

十四日丙戌午刻大御所東へ下給、今日清水、

十五日、大御所從清水至善徳寺給、於路次菱食を鐵放にて被_レ打、則藤堂和泉守に被_レ下、

十六日、十七日、十八日、善徳寺御逗留、

十六日、於江戶伊達政宗所へ將軍有御成、亭主を及三盃酒、

十九日、從善徳寺至三島大御所着給、

十八日、戌刻勢州桑名の本多中務死去、彼二番目の息出雲守、去十四日江戶より桑名へ參着と云共、病者無性の間無其詮、

廿一日、大御所鷹野場至武州口口着給、此所へ將軍從江戶有光儀、被_レ遂_二面上_一、將軍は則江戶へ有歸城、大御所は自是方々有鷹野、さて江戶へ可有光儀との儀なり、

廿一日、戌刻北にあつてと、めき響有、

廿二日、夜雪降、山には此已前より雪有けれども、里は是始也、二三寸雪滿、

當秋冬は、鷹鳴關東にも不_レ多、依_レ之廿三日將軍上總國へ御越、鐵放を以彼表の鷹打給ふ、其故にや鷹鳴大御所鷹場に、此以前よりは多し、

十一月大朔日壬寅

去春、越後國主堀越後守古久太郎男、改易時、妻女本多美濃守女、于時十四歲、被_レ召上、駿府に居住、今月九州長崎有馬修理男去年の唐船燒せし修理事なり、駿府に出仕しけるか、可_レ娶之由大御所仰也、無_レ異儀承諾、則於駿府有見參、修理男伏見に上る間、美濃守女をも被_レ爲_レ上、此旨長崎に先様申下、迎船を乞けれとも、寒中海上不_レ輒して、翌春迄伏見に逗留也、父桑名美濃守、遠國に女被_レ差越_二事迷惑_一此事なり、修理息も廿三計の者也、日來妻子有て、殊三歳の男子有けれども、右之旨特命なれば、元の妻

を退及_二此儀_一、

廿七日、大御所立江戶駿河へ上給、

上方衆如何に聞けん、三川國岡崎山々にて、石場被_レ取置、

十二月大朔壬申

江戶にて將軍茶會にて、各宿所へ入御、

十日、大御所此間路次中有鷹野、今日駿府着給、

十二日、丹波國代官權田小三郎與野瀬小十郎有公事、自大御所本多上野介安藤帶刀を以、双方口上を被_レ尋、然而小三郎申事不届様曰、

十三日、大御所鷹野へ出給處、秘藏の大鷹被_レ見失、

來三月、大御所可有上洛由曰、

松前より大鷹十六居上る、此内十三落て、た、三つ殘、武州忍又遠州中泉鳥屋へ被_レ入し大鷹共多損して、鷹師共蒙_二勘當_一、

廿四日雨降、惣別此寒中雨雪節々降、寒以前は暖氣なりけるか、可_レ入_二小寒_一一兩日以前より寒き事甚、入_二大寒_一一兩日後より暖氣、小寒の冰大寒に脱とは此事歟、

廿五日、立春、

當代記卷六

美濃國伊勢國先方衆、并三河在國衆、明日明春尾州名護屋可有普請沙汰也、出羽奥州信州、并關東衆江戶可有普請と也、

當代記卷六

慶長十六辛亥正月大朔日寅快晴、

駿府各出仕如_二毎年_一、自江戶將軍、以酒井左衛門尉被_レ遂_二年禮_一、

三日、江戶奥州會津の蒲生飛驒守屋形焼亡、舊冬月迫に將軍を奉_レ入、亭主正月二日に會津へ被_レ下、於路次聞_二此事_一、播磨の國主池田三左衛門尉屋敷類火、但門は除_二火難_一、家屋は何も危相也し、

七日戊申大御所爲_二鷹野_一遠州に御出、今日田中迄出御、

九日、大御所榛原郡鷹野し給、夫より中泉に御出也、

十日、三川國御油町焼失、

十六日、雨、十七日、大御所自_二中泉_一駿河に御歸、今日口口御泊、十九日、大雨、廿一日二日より、雨打

續ふる、
 廿五日、尾張國名護屋新町百五十家焼亡、廿六日、美濃國笠町焼亡、
 二月小朔日^壬先月より子^今雨ふる、此日江戸神尾五兵衛家失火、^{是は駿府おあちや息子也}、六日、今日甚雨故、春日薪の能延引、
 九日、稻富於^{駿府}病死、^{是は當時無類の鐵放の上手也}、
 十二日、雷、當春初也、十六日、風甚寒氣如^冬、十七日、晚より終夜大雨也、十九日廿日廿一日迄風烈、寒氣如^冬、廿二日、亥刻地震、

此春、薩摩國龍白病死、兼而如^{置目}、追腹切者三十餘人、同弟兵庫頭も病死、是は今の薩摩の國守主陸奥守父也、去子の年於^{關原}合戰場より遁下て、近年隱居、三月大朔日^辛今日より江戸普請始るといゆとも、亥には六日より始る、五日、駿府大御所、今日上洛可^有之由曰處、雨故六日^丙立給、田中に今晚止宿し給、七日懸川、八日濱松、九日首田、十日岡崎、十一日名護屋に着給、翌日は彼地に逗留し給、十三日美濃國の岐阜、十四日赤坂、十五日近江國彦根、十六日長原、十七日入洛し給、十一日、未刻雷數

聲、此日氷二度ふる、
 丹波國代官權田小三郎、此一兩年野瀬と云者と山公事有、小三郎企^{雜意}に付て被^{改易}、則遂^{勘定}、代官所の引受として、金子七百枚令^{辨上}、十九日夜半、徳長左馬介宿所^京焼亡、翌夜又二條御構の近所の寺焼失、
 廿日、大坂秀頼公上洛し給、家康公對面可^有由、織田有樂を以家康公より被^遣、
 廿二日、三川國岡崎城主本多豊後守死去、去月十日比より風毒腫依^{相煩}也、
 廿三日^癸家康公參内し給、供奉の衆無^{裝束}、家康公は勸修寺亭にして裝束し給、
 廿七日、讓位儀式大概以如^{先例}、此日見物無用之由、家康公下知し給、同廿七日、秀頼公立^{大坂}淀に着給、京都より爲^迎右兵衛主^{家康公息、常陸介、家康公息、并年十二歳、年十歳}、池田三左衛門加藤肥後守淀へ參向也、秀頼公大坂を立給時、彼地虚空に光と云々、廿八日辰刻、秀頼公入洛、則家康公の御所二條に御越、家康公庭上迄出給、秀頼公慇懃禮謝し給、家康公座中に入給後、秀頼公庭上より座中へ上給、先秀頼公を御成之間に入申、

其後家康公有^{出御}、互の可^有御禮^{之旨}、家康公曰と云共、秀頼公堅有^{斟酌}、家康公を御成之間に奉^出し、秀頼公遂^{禮給}、膳部彼是美麗に出來けれ共、還而可^有隔心^かとして、た、御すい物迄也、大政所是は秀吉公の北の御方也、出給相伴し給、頓而立給、右兵衛督常陸介途中迄被^{相送}、秀頼公直に豊國に有^{參詣}、大佛を見給、伏見より舟にて其日及^{酉刻}大坂に歸着し給、大坂の上下萬民之儀者不^及申、京畿の庶民悅只此事也、此時も大坂光と云々、

此度於^{京都}家康公に秀頼公御進物之事、
 御太刀^眞御馬^黒金子三百枚、猩々皮三枚、^{色壹枚青、一枚黒、一枚緋、一枚長五間つ、}段子三十卷、此内錦十卷也、刀一腰^{異名有、脇指一腰、左文字、是は古秀次隨一道具也}、
 秀頼公より右兵衛主の進物、
 太刀一腰^光金百枚也、
 常陸主にも右同前也、
 女房衆の遺物、
 あちや かめ かち、此三局に金一人に三十枚つ、
 家康公近習の衆へ、秀頼公より被^下物之事、

本多上野介、大久保石見守、板倉伊賀守、^{京都此三人に一人に付金三十枚つ、}安藤帶刀、村越茂助、成瀬隼人、米津清右衛門、是四人に一人に付金廿枚宛也、永井右近、大澤、西尾丹後、城和泉、榊原伊豆、此五人に一人に付銀子百枚つ、也、
 扱惣の女房衆へ金子三百枚、其外藥師臺所人の被^下物、銀子卷物等也、豊國大明神へ銀子三百枚、於^大佛^{大工}大和に銀子二百枚被^下、
 家康公より秀頼公へ被^進物、
 御刀一腰、^{大左文字、御脇指一腰、鍋と、御鷹三居、何も鳥屋之大鷹也}、御馬十疋也、
 卯月小朔^辛未^{二日}、右兵衛主常陸主、大坂秀頼公に爲^{禮謝}被^{相下}、
 右之進物之事、
 銀子千枚 御太刀一腰^{但遺太刀也} 御馬一疋
 右之分家康公より秀頼公の御進物也、
 銀子二百枚 綿三百把
 右之通秀頼公の御袋様に家康公より御進物也、
 銀子百枚 綿二百把 紅三百斤
 右之三色御姫様に家康公より被^進、是は江戸將軍

の御息女、秀頼公の妃也、

御太刀宗國銀子二百枚、

右兵衛主より秀頼公に御進物、

同 同

常陸主より秀頼公に御進物、

銀子百枚 綿二百把 紅三百斤

御袋様に右兵衛主よりの進物 常陸主右同前の御進

物也、

銀子百枚 綿二百把 紅三百斤

御姫様に右兵衛主よりの進物 常陸主同此通也、

秀頼公より右兵衛主に被_レ進物、

御脇指吉高木刀真宗段子百卷 かりたの小鼓の是は右だう兵衛主

小鼓をすき給、御小袖 同はをり

故也、皮共に、御小袖 同はをり

秀頼公より常陸主に被_レ進物、

刀二字脇指まつら段子百卷 ま、ねの小鼓のはだうかは

ともに 能の装束是は常陸主能すき給に依て也、小袖

供の衆に秀頼公より被_レ下物の事、

年寄衆へ刀一つ宛 猿樂十八人、何も小袖同、ばうへ

同、さて其日伏見へ舟にて被_レ上、

三日、大御所伏見へ御越、此以前置給萬物御覽あり、

此日、下野國上野國氷村々にふる、宵の酉の刻より翌朝迄ふる所も有、然者其所は二尺あまりたまりけると也、狐狸鳥皆以死、

五日、家康公從_二伏見_一歸京し給、六日、淺野彈正近年

在江戶、死去、下野國鹽原に湯治之處、彼湯にて二三

日不例、不慮にして如此、十一日、於_二京都_一常陸主

能し給、此日夜半より翌朝已刻迄雨ふる、三月五日の

雨以後是始也、庶民悦事無限、

十二日御即位、家康公忍にて見物し給、今上十九歳と

云々、

同十二日、戌刻、月の輪赤青雲、二重笠のことくにあ

り、

十四日、二條御構にて能有、家康公是を見給、翁、高

砂、柏崎、今春太夫仕_レ之、千手、重衡、うたう、少進

法印_レ之、是は本願寺の衆也、猿樂共には何も小袖被_レ下、別の

被_レ下物なし、

十五日雨、去十二日の雨不足の處如此、民悦_レ之、

十七日、大御所知恩院に佛詣し給、十八日、大御所

出京下給、此日永原、十九日彦根、廿日朝雨、及_レ晚休止

之間、柏原迄御出、廿一日岐阜、其夜鶴飼見物し給、鶴

數百二十集けれ共、鮎はちいさき茶碗の蓋に一つも

とらず、廿二日、家康公加納に御成、其日名護屋迄

御出、廿三日、大御所名護屋御立、熱田宮より舟に

て下給、其日東風烈吹て、舟不_レ任進退、希有にして

野間邊によせけるか、言語道斷不自由さ無_二云計_一、廿

四日、今日も又東風、ちたの郡に御舟をよす、廿五

日、三河國むろに舟をよせ、俄の事なりければ、人馬

もなくして不自由也、下々の女房などは、歩行にして

吉田に行けると也、御供の上下男女舟に不_レ酔はな

し、大御所索醉不_レ給、右兵衛主常陸主もさして醉不

給となり、

此比小黑舟鎌倉の三浦へ着、

淺野紀伊守父の葬禮を、於_二高野_一執行、盡_レ美、當時無

類の孝行者也、

五月小朔日庚子 四日、五日兩日共に雨ふる、

去三月より、江戸子_レ今普請いづもきぶく急給間、此

度は猶以其通と云々、依_レ之御用を多取ける間、關東

の下民設_二錢貨_一と云々、

十九日雨、此時大和は洪水にて、長谷川夥出けるか、

三輪近邊の田畠一萬石餘損毛と云々、

江戸普請最中也、伊達政宗町場破損二百間、是を各に

配分して普請有、

六月小朔日己未 今日より尾張國名護屋爲_二普請_一、美濃伊

勢兩國先方の衆參着、去年彼地普請被_レ致、大名千石

に一人つゝ、人夫を名護屋に被_レ出、舟入をほる、諸國

より内裏の普請を被_レ行、築地一間に付て、八尺間銀

貳貫五百目の作料以務_レ之、取分關東衆依_レ爲_二遠國_一

銀を相上、此銀板倉伊賀守大工大和守相請取、京の町

人賃にて行_レ之、

唐より小船共多來朝、糸澤山に來、

十七日、出雲國堀尾帶刀死去、昨朝より霍亂、俄以如

此、廿四日、肥後國加藤肥後守元の名死去、

北國の前田肥前、去春より被_二相煩_一、福島左衛門太夫、

去春より被_レ煩、存命不定の間、繼目判形依_二所望_一、息

男駿河江戸に被_レ下、

七月大朔日戊辰 三日、江戸井伊兵部少輔屋敷より火

出、榊原遠江屋敷及_二類火_一、

八日、美濃國高巢住徳長石見入道法印死去、五三ヶ年

以前より腰拔、座敷中も不_二行歩_一也、遺物金九百枚有

之云々、十日比、江戸普請出來、但依_二手前_一未出來も

有之、

八月小朔日^辰二日より八月節、

廿一日、奥州會津邊大地震、石垣悉崩、屏櫓以下悉落、殿守破傾、瓦以下落、人馬多死、近邊山崩川の流を留、依之知行二萬石餘湖水となる、他國此地震無之、中にも柳津本堂倒、在家多ころひ山崩、是は偏飛驒守佛神を蔑如にし任我意、其天罰の謂と云々、

九月大朔日^酉

五日、江戸將軍息女^{十一}出御、是は越前の古秀康息男、今號^三少將、當月廿八日、於^三彼國^一依^レ可^レ有^三祝言^一如此、十一日、將軍姫君至^三駿府^一着給、

此比、をもき咳氣諸國に煩、上下人不^レ免^レ之、

十五日、於^三駿府^一能有、姫君に見せ申さるへき爲也、一昨日可^レ有^レを、姫君咳氣し給に依て及^三今日^一、十六日、姫君駿府を可^三立給^一處、咳氣以外也、

此日、八せんに入、又土用にも入、

十八日、姫君咳氣有^三本腹^一、今日駿府を立給、廿五日

^辛雷數聲時雨ふる、

此秋、中國西國は凶年、五畿内も不^レ宜、近江より東國は豊年也、但信州下野上野奥州は凶也、

十月小朔日^卯三日、戌刻小地震、晚より翌四日夜中迄雨、

六日^壬大御所爲^三鷹野^一關東に御下、此度は右兵衛主常陸主無^三同道^一、翌日善得寺にをいて、鶴鐵放にて自打給、九日、大御所至^三小田原^一御着、翌十日朝中原へ御返、

十日、午刻小田原城主大久保相摸守男加賀守死去、去年春中より煩、終以如此^{十二}、

於^三江戸^一浴^三新恩^一衆四五人、松平丹波、山口但馬等也、是伏見在番不^レ亂^三法度^一相務故也、下野國皆川舊領を以配當なり、

十六日、大御所江戸に御着、

去夏肥後國主加藤主計死去の後、息男從^三江戸^一去七月九州に被^三遣返^一、爲^三幼少^一間、爲^三置目^一藤堂和泉守被^レ遣、今日十六日勢州津を立、肥後に被^レ越、從^三江戸^一目付の衆、牟禮江右衛門、小津瀨兵衛此兩人被^レ遣、

廿二日、於^三江戸^一能有、今春太夫并少進法印行之、翌日も同能有、去月下旬に今春太夫着^三江戸^一しか、大久保加賀守死去する事、將軍哀傷し給故、至^三于今^一延引の處、大御所より依^レ仰此能有^レ之、

廿六日、大御所爲^三鷹野^一江戸を出給、今日戸田着給、今春太夫罷上之間、將軍より引出物被^レ下、銀子百枚、御服二重、^{何も唐織、縫座中の猿樂共、何も御服被^レ下、}

其中に春藤^わ大藏長右衛門、同助藏、幸の清五郎、鷺

伊右衛門^狂山科彌右衛門、今春彦九郎、狂言徳右衛

門、此等之者共には、或は金一枚或は銀十枚つ、被^レ出、大藏太夫にも御服一重、銀十枚也、少進法印唐

織二卷、銀百枚也、

大御所於^三江戸^一、徳川の先祖の位牌所を被^レ尋、年老の百姓申けるは、瀬羅田の近所に其寺の舊跡有と申間、

使を遣し地を見せられける、瓦石佛已下掘出す、則江戸増長寺今國師越給、一寺を可^レ有^三建立^一之由曰、

十一月大朔日^申

來春、江戸石垣普請可^レ有^レ之とて、西國衆人數を遣、於^三伊豆山^一石を被^レ聚、

此比、諸國水涸、南都猿澤の池水絶間かへて、水を町人運送し入る、池に刀一有、水かゆる者取上る、

九日、於^三駿府^一右兵衛主痘瘡令^レ煩給、

十七日、未刻伏見新町より火出、兩替町焼、其より大名衆屋敷廿計及^三類火^一、但去夏よりこほし殘の家共

也、十七日夜半より風甚、翌十八日終日猶以風甚、入^レ夜大雪なり、

嵯峨の角の藏了以、以^三才覺^一川を堀、大坂船京の三條迄入、依^レ之京都自由にして、米薪已下直なり、京都町人悦^レ之、

廿三日、大御所從^三東至^一駿府^一御歸城、右兵衛主煩本復、依^レ之御氣色快然と云々、

東山大佛殿漸出來、瓦を上揃なは柱破るへきかと云云、其故は、皆はぎ柱也、此比はしくと噂の由人誦

之、其上軒短くして、佛の膝に雨ふりかゝるとなん、十二月大朔日^酉 二日、夜に入霧、寒甚、三日、終日

大雪、四日五日迄、以上三日之間甚寒、六日、小寒に入、今朝より快晴、暖氣也、七日、終日雨、翌八日風

大烈、

新庄駿河、於^三下總國法度所^一鷹を遣、鳥見の者江戸へ令^三言上^一、依^レ之駿河父子退散、

十一日夜半より翌十二日終日雨、十七日夜より十八日雨、寒中に如此雨節々ふること稀也、來年大水

可^レ出かの由人誦^レ之、去霜月中旬の比より、京中

井の水乏、少あるも渴て用事不^レ成、廿三四年以前如此有けるとなり、極月は雨節々ふりける間、後には

井水出たり、廿二日、終夜雨、五日以前より暖氣也、廿七日、未刻より夜中雨、此年五穀豐年、

當代記卷七

慶長十七壬午年正月大、元日快晴、

朔日酉駿河江戸諸人出仕如例年、

二日、入夜雪二三寸積、

此比、江戸將軍の二番若君疱瘡し給、但頓而本腹也、

三日、舊冬晦日より甚寒、寒中は暖氣成し、

四日、平岩主計頭、去朔日晚に於名古屋二九死去、

今日大御所聞給、於病重は犬山へ移、於彼地可相果を、於名古屋一死る事不謂の由曰、甚無興し給、

六日、立春、

七日、大御所遠三尾可有鷹野とて、今日駿府を御立、藤枝に一日逗留し給、九日相良、十日横須賀、十一

日、入夜雨、翌朝休止、去月廿四日雨後は始、十一日、將軍江戸を御出、駿河に御上、十二日、山々雪見ゆる、去月當月甚寒、麥毛凶、此比ばてれん宗に日本人成事堅被禁、小笠原權之丞、榊原加兵衛、原主水、此外五三輩被改易、至自今以後は、十人組に諸奉公人をなして、若其中の者於成彼派は、則可申出との義也、

三月大朔日未

十日、入夜雨、翌朝休止、去月廿四日雨後は始、

十一日、將軍江戸を御出、駿河に御上、

十二日、山々雪見ゆる、去月當月甚寒、麥毛凶、

此比ばてれん宗に日本人成事堅被禁、小笠原權之丞、榊原加兵衛、原主水、此外五三輩被改易、至自今以後は、十人組に諸奉公人をなして、若其中の者於成彼派は、則可申出との義也、

十九日、將軍至駿府着御、

土屋民部於江戸病死、

廿三日、岡本大八と云者有、親は在江戸す、彼大八九州長崎の有馬修理儀を於駿府取持者也、從修理方金銀を於指越は、各年寄衆并女房衆遣之、彼取成を以、九州鍋島知行中を三部申請可出之由偽て申條、真と心得、金銀を大八方に渡す、素爲謀計間、不及何沙汰、得金銀を大八令私領、此旨修理令言上間、廿三日於阿部川原火炙に被成、

廿五日、駿府能有、少進法印今春太夫行之、常陸主も能し給、此内遠山民部、鈴木久右衛門、池田備後一番つ、行之、兩御所笑給、廿六日、能有、仍如昨日、

日中泉、十二日濱名、十二日彼地逗留御、十四日吉田、十五日吉良へ着給、

八日、戌刻より九日夜迄雨、十日、風烈、入夜雪六寸積、十一日十二日毎夜雪、十三日快晴、

十五日雨、今日大御所吉良に御着、

十八日、近年絶て久き左儀長、今日卯刻於内裡被

行、

廿日、大御所岡崎へ御越、此中於吉良鶴鷹鷹令物

數、

廿三日雨、廿七日、大御所岡崎より至名古屋着

給、古平岩主計家に宿給、但新殿造作出來御座所と

す、廿九日、大御所從名古屋岡崎に御歸、

從去年、諸國多分江戸將軍に被相納、但美濃伊勢兩

國は駿府に納、駿河遠江尾州是三ヶ國は、右兵衛主常

陸主分國也、於近江二十三萬石駿府へ同納、

二月小朔日寅

二日、大御所今日岡崎を御立下給、三日、大御所雨

故今日吉田御逗留、

十三日、及晚細雨、入夜風雨、翌朝休止、廿日の夜寅

刻地震、廿二日雨、廿四日雨、

松平下總守に大御所より、石火矢十二丁大鐵放十二

丁、其外鐵放三百丁、鎗弓番具足已下數百被下、

從將軍各へ御服、或十或五被下、

廿七日、大御所に爲茶會、將軍御越、なげづきんと抹

茶入を被遣、是當時の名物、價千金の上と云々、

廿九日、藤堂和泉守所へ將軍御成、銀二百枚小袖三十

和泉守令拜領、少進今春大夫能有、從亭主將軍に

長光の太刀、并脇指進上、常陸主右兵衛主へも脇指

令進献、

大八被行罪科一砌、大八申云、從大御所長崎唐船

の糸、彼是の使被遣、長谷左兵衛を修理暗打に可仕

の由、大八に申合候つる由を白狀致候間、修理爲口

人として、被預大久保石見、其後甲斐國被遣、郡

内、息左兵衛は不可懸此科の由曰、本領令安堵、

如前々長崎居住、

卯月大朔今日肥後國加藤主計幼息大御所出仕、進

物金子百枚、卷物三十、むくくの裕十、將軍へは、

於江戸可有出仕の由也、

二日、大御所と將軍對談及數刻、他人不聞之、

八日、又能有、九日、同能有、兩日共に少進今春仕、

其間々に常陸主能し給、從將軍少進并今春、其外座中の猿樂共、去年如於江戶被下物、銀御服なり、十日、將軍駿河を御立、江戶へ下給、

十六日雨、今月三日の細雨の後は始、下民悦之、廿日、亥刻、三川國吉田玄蕃氣相惡き由にて、則無言、子刻死去、去年父玄蕃頭如此頓死體なり、可謂奇特、

廿二日、能有、大御所賢慮の外の猿樂千歳を舞けるとて、當座に叱給、依之舞臺に並居ける猿樂共、周章不斜、又一度式三番を仕、扱脇の能過、大御所本丸へ御歸の間、能は空止たり、希代の曲事也、

廿三日、昨今雷數聲、當春可謂初雷、周防國有恠異、民家に道行と覺て宿を借、臺所方膳部用意す、彼是下人に云付る聲は聞わけれども、人體不見、不審に覺て地頭方へ令注進、則來て見ければ右之通也、さらは地頭振舞をして見んとて、招ければ則來、膳部耐酒已下常の人の如食事也、然其姿は曾て不見、是は如何様恠物成と心得て、犬の逸物共を十疋計取、中へ入戸を立ければ、犬共戰栗してかみけり、さて犬を見ければ、殊外に擊碎しける體也、其

座敷に犬を打ける杖とも幾等も在之、其後客云、我等をは狐狸の類と被心得候歟、不謂被成様の由申、さて元の宿へ歸、其上振舞の爲禮謝、錫を片に送、甚美酒也、人多集て吞けれ共、此錫の酒不盡と云、

美濃國岩佐云所の近所に、百姓一人女子有之、今は歲十六計と也、此比彼女子口より小蛇出て、座中に徘徊して、又口へ入、彼小蛇從口出し時は、女子無性なり、如此の事人皆をそろしき事に耳云ければ、父彼女子を害けると云々、希代の不思議也、

五月小朔日未
四日、從晚五日雨、自是露に入、

七日、上總守大御所息、江戶屋敷夜半燒亡、家不殘、但他所不及類火、有馬修理九州長崎主、去月より甲斐國都留郡をかる、可致殺害の由大御所命也、

九日、五月節、十三日、奥州會津主蒲生飛驒病死、常に大酒、諸事無行儀放埒と云々、彼小性本山主膳、岡佐右衛門、右之兩人自殺、

廿六日、辰の刻小半時俄風甚、夜前より大雨、

廿七日、大水、

五月中、六月七日八日比迄、關東は旱魃、

六月小朔日、去月廿八日より當月三日迄快晴、四日より又雨、此以前の如露長雨なり、

今日朔日夜半過、江戸土井大炊屋形不殘燒亡、但不及他所、

六日、此間九州加藏肥後息^{十二}、出雲國主堀尾山城守^{十四}、在江戸、今日將軍彼兩人有振舞、則本國に可上之由暇を給、依之八日江戸を立上、

十日、六月節、十二日、從今日快晴、去月四日より昨日十一日迄長雨也、十五日、晚甚夕立、此比無比類、廿一日、未刻より大雨、

廿二日、大水、朝東風甚烈、午刻より申の終迄大風、但此大風伊勢美濃尾張三箇國強々吹、東はさして不吹、此時の風に、伊勢尾張海にて破船三三十艘、又伊勢海より大坂へ兵糧賣舟、熊野浦にて七八十艘破船と云々、三川遠江浦々にて二百艘破船と云々、中國西國の浦々も數多破船と云々、奥州會津も大風、同大水

なり、關東は旱也、廿三日土用に入、

廿六日、美濃尾張大水、鹽田の堤切、津島表に水入、美濃國外濱の堤も切、去月四日より長雨、但間々に二三日つ、天氣の日も有けれども、大方は雨也、從今日快晴、近江より上方西國も夕立は有けれども、多分早、

於江戸徒者集り、人を切事無斷絶、柴山孫作^上奉公^口也、彼者共を一人成敗しける處に、彼黨類孫作所にも奉公して有けるか、我類を被切けるとて、則主の孫作を切殺、江戸中にも彼徒者三百程有けると云々、諸國に奉公して居ける者共、合三千人と云々、此中江戸にて有穿鑿、九十人程搦捕籠に被入、彼孫作切候者は、小者にて候つるを取立、侍にして懇切しけるに、

忘三重恩主の頭を切、不及是非次第也、則彼者を生捕、類を被尋けるに、大將分は大鳥居いつ兵衛、大風嵐の介、大橋すりの介、風吹はちり右衛門、天狗郷右衛門など、云名也、則彼任白狀被相尋、悉搦取被行成敗、さて京都に有下知、大坂堺其外國々を彼一類成敗可有由也、依之無縁の者には、此比宿を借事なし、旅人爲之迷惑す、彼いつ兵衛すまうをも

能取、兵法をも能つかう間、若衆かふきとはしらす近
 付けるを、被_レ行_ニ罪科、國々に被_レ遣、
 穂坂長四郎越後衆被_レ預、村上周防、坂部金太夫同越後衆、溝口伯耆被_レ預、岡部藤
 次奥州被_レ預、米津勘十郎同奥州被_レ預、津輕、佐平次、佐渡被_レ流、
 彼かふき共の傍輩、徒者と不_レ知して別而近付ける者
 に、かふき者の中、去五月喧嘩して死けるを葬んと
 て、無_ニ等閑_ニ傍輩に其事とは不_レ云、無縁の者死ける
 間、結縁のため代物少合力候へとして様々云ける間、
 無_ニ何心_ニ代物少出しけるを、號_ニ其一類_ニして被_レ成
 敗、此者共無_レ罪して死をかうむる、迷惑なりし事共
 なり、
 下野國笠間の城、二三箇年以前より無_ニ城代_ニ、今松平
 丹波守古河の城主被_レ爲_ニ相移_ニ、さて古河は小笠原左衛門
 佐、古酒井左衛門尉男、信州松尾掃部大夫養子して、先年國替の時より、武藏國本庄にて一萬石拜領、
 古河へは可_ニ相移_ニの旨將軍下知し給、笠間は城領三
 萬石、古河は二萬石なり、
 七月大朔癸巳日、
 五日、近江より西は風甚、但去月廿二日の風程はな
 し、此時も熊野浦にて破船、
 去月廿六日より十一日迄きふく早、

十二日より如_ニ夕立_ニ、十八日迄日々雨降、從_ニ十九日_ニ
 快晴、
 廿四日、江州長濱の内藤豊前死去、歳七
 廿八日、戌刻より同廿九日細雨、去十八日夕立の後始
 之、下民悦_レ之、此日子の刻より、大久保石見守俄大
 中風相煩、
 廿九日、同雨、卅日、未刻より終夜大雨、
 此七月、奥州下野國なと下民多死、石田治部少た、り
 とて、奥州米澤より送_レ之、會津よりも又送_レ之、
 八月小朔癸巳日、雨、昨今の雨に今朝大水、美濃國曾禰
 堤切大垣へ水入、大垣の下の堤も切たる間、翌日大垣
 水漸引、
 二日甲子夜前丑刻より雨休止、
 四日、細雨及_レ晚、雷當_ニ山方_ニ一聲、翌五日より快晴、
 九日、去五日より至_ニ今日_ニ暑氣甚、惣別此夏中同、土
 用中もさしてあつきことなし、
 十二日、八月節、
 十三日、大御所爲_ニ三川狩_ニ瀬名へ御出、及_ニ晚_ニに御歸、
 十四日、從_ニ今日_ニ又雨、
 當月始、黒船至_ニ長崎_ニ着、去々年來朝黒船、悉被_ニ打

果の間、自_レ是以後、來朝不實の由人みな思設處、長
 崎の住僧彼國人たるに依て、此一兩年依_ニ相調_ニ來朝
 云々、其外小船共多著岸、狸々皮毛氈卷物糸如山來
 と云々、
 廿五日、洛中大水、新舟入の屋形堤以下浸水、見_ニ懲
 之_ニ歎_ニ、此以前家可_レ作と思立ける者も止けると也、
 廿八日、此度黒船の唐人駿河へ參着、
 此度來朝の唐船共の内、フランゲ國より來る仁、鳩の
 比なる鳥一、大鳥一、何も生鳥を駿府江戸へ進上すへ
 きとて京都迄上る、右の小鳥は人の云事を聞て則如_ニ
 其言_ニ、大鳥は頭は鶴に似たり、背の毛は猪の脊の毛に
 似たり、
 九月小朔壬辰日、羽柴三左衛門駿河江戸へ可_レ被_ニ相下_ニ
 とて、近日伏見へ被_ニ相上_ニ、今日江州野洲迄被_レ着、
 二日、夜前丑刻より大風、今日至_ニ未刻_ニ西返殊強、則
 休止、但水は不_レ出、從_ニ去月_ニ長雨、于_レ今不_レ止、近江
 伊勢美濃尾張は、此風強吹、從_ニ遠州_ニ東は少吹、伊賀
 國上野城古の殿守をこほち、新殿守を立けるか、五重
 の上の重計葺、惣は未_レ堀も不_レ出來_ニに、右之西の風
 に倒、大工并手傳の者百八十八人倒死、此外手負も少々

有とかや、美作國此時大水出、城近邊にて三千程人
 死、其外彼國中にて二千餘、都合五千程死と云々、同
 牛馬同前、洛中はさして不_レ吹、さして草木に何の國
 も不_レ當と云々、
 十二日雨、此比迄去夏中より雨打續、上下迷惑也、殊
 當月二日の大風に倒伏田島、此長雨に付不_レ農也、諸國
 大方此分也、但從_ニ駿河_ニ東は大風不_レ吹、夏中も今も
 長雨なし、
 十三日、播磨國池田三左衛門、一昨日着_ニ駿河_ニ、今日
 有_ニ出仕_ニ、大御所則對面し給、
 同日戌刻、東山黒谷の堂焼亡、法然の御影同失火、
 十五日、池田三左衛門於_ニ本丸_ニ有_ニ振舞_ニ、從_ニ其直_ニ江
 戸へ被_レ下、
 廿六日、長雨今朝迄降、但其間或は一日、或は二日三
 日旱時も有、從_ニ今晚_ニ快晴に成、
 此比會津の古蒲生飛驒守息男家康公孫子、歳十歳、駿府に
 大御所對面し給、五三日在府、さて奥州へ被_レ歸、
 十月大朔辛酉日、四日甲子入_レ夜戌刻より雨、六日、雨
 不_レ降、
 福島左衛門大夫駿府江戸爲_ニ出仕_ニ被_レ下、口口駿府に

着府、
 越前國古三川守秀康、去慶長十二丁年卒給砌、家中年寄七人して金子隠取と云々、此事去年人公事申事付、右の七人の内岡部伊與と云者、江戸へ下事由を可_レ言上旨相催、美濃國大垣迄下處、か程の儀達上聞事如何の由、當三川主并家中の年寄人を遣、從大垣彼伊與を呼返、然共至當年彼公事無_レ落著間、彼伊與江戸へ下、牧主殿と云者も、右の七人の内たるか、岡部と同道し、江戸へ下の由を申けるか、如何思けん、高野の直に令_レ登山と云々、
 十九日、右七人内久世但馬と云者被_レ生害、息子加賀國に有けるか、此之事の見廻來て、但馬と一所にして死、同但馬聲、是も見廻に來て同死、其外以上但馬於屋敷待分百五十人死、中間小者は悉十八日晚出けるとかや、寄手先本多伊豆也、是も右の七人の内なり、先當座被_レ宥、三川主より人質を被_レ遣、伊豆居城府中に彼人質を置、伊豆は北の庄參令_レ先登、伊豆人數能者共、當座に廿八人死、手負四十人餘と云々、其外寄手多賀屋者共始、惣而二百計保死すと云々、
 同廿日、弓木左衛門_{右の七人の内}生害、於_レ此屋敷も寄手三

十人計死、右是は古三川主の時、知行方專一の用人也、同日、上田隼人也、是は_{同右七人の内}寄手の理を云送、其身計腹を切、被官共をは出ける、然處寄手心易、屋敷の内へ入ける處、隼人内の侍五六人留居て、寄手と戦ける間、爲_レ之寄手討死す、
 今村掃部口口兵庫右理爲_レ可_レ言上、廿五六日比に北庄を立東國下、
 此比、上總主_{大御所息男}駿府へ來給、去比久無_レ出仕の由、大御所曰付如此、則有_レ對面、江戸へ下給、
 此比、南部東臺寺衆徒三人擲取、此外一人同宿、以上四人也、其故は、六七年以前勅封藏の忍入、敷板を切抜、寶物の内金作鷄同孟を搜取て折々京都へ持上、令_レ兩替刷_二私用、今年彼孟を其儘にて可_レ兩替_一の由令_レ相談、亭主見_レ之非尋常物、殊昔の年號有ける間、如何様、是は勅物歟御物歟、存_レ不審由、此旨を彼僧に申、僧及_レ難義、往々此事亭主口より可_レ漏と思取、別宿亭主を振舞、飼_レ鳩毒_一間則死畢、妻女頓板倉伊賀守所へ行て言_レ上此旨、從_レ伊賀守_一奈良代官の相届間、彼僧二人并同宿一人擲て京都上せける、伊賀守事の由を直被_レ尋ければ、有_レの儘に令_レ白狀、さて南都へ

下置東國の言上、來年二月、薪の能見物集貴賤に相見之、其上可有_レ成敗_一など風聞也、猿澤の池邊籠構入_レ之、貴賤見_レ物之_一、
 閏十月小朔_{辛卯日、十六日霜の節}、
 二日、大御所駿府より東へ下給、内々去月廿四日可_レ下給_一由、同處種物氣付、至_レ于今延引、一昨日と曰しか依_レ雨及_レ今日、今日も依_レ雨江尻迄出張、
 三日、今春太夫其外猿樂共、從_レ駿河_一上、去春叱申、此中在府しけるか先以如此、
 十二日、大御所江戸着給、路次中依_レ鷹遣給_一也、十八日、大御所於_レ江戸_一從_レ新城_一本丸へ入御、廿日、大御所爲_レ鷹野_一從_レ江戸_一御出、
 越前國公事達_二上聞、本多伊豆守清水丹後江戸へ被_レ下寄_一、
 大御所關東方々鷹野し給、鶴鷹取事無_レ際限、中にも於_レ忍白鳥を鷹取之間快氣し給、將軍は鴻巢にて鷹野し給、
 十一月大朔_{壬申日}、
 十二三日比の事、三川吉田を松平主殿助_{是は先年於_レ伏見討死せられし主殿助}拜領也、松平主殿此間の在所西郡にをいて五

千石、古松平玄蕃弟庄次郎拜領、
 十三日、未刻地震、
 十七日、寒に入、昨日甚寒して、入_レ夜雪るふ、
 廿一日從_レ辰刻_一廿三日迄晝夜雨ふる、廿三日朝風烈、
 廿六日、申刻雷_二聲、寒中の雷珍事歟、
 同廿六日、大御所關東中鷹野し給、今日江戸迄御歸、
 廿八日、於_レ江戸_一新城、越前國年寄本多伊豆守と今村掃部清水丹後_{何れも傍輩}及_レ對決、兩御所直に聞_レ之給、追而從_レ將軍_一理非の旨急度可_レ仰出_一と也、
 十二月大朔_{庚寅日}、從_レ夜前_一今朝甚寒、酉刻終より終夜雪降、近年大雪也、二日の及_レ卯刻_一雪止、此日大寒入、
 同二日、大御所江戸御立、駿河の歸路し給、
 六日、去從_レ二日_一今日迄、打續雪降、
 越前國家老之事、去月廿八日兩御所聞給し、此比、從_レ將軍_一仰出云、今村掃部頭清水丹後守爲_レ非分の間、掃部は一僕にて伊達政宗に被_レ預、丹後は岩木の被_レ預、鳥居左京助、本多伊豆利運成て、越前國の儀悉皆可_レ爲_レ彼異見_一の由仰出なり、
 十一日、從_レ晚終夜雨、十二日同雨、

今日庚子禁中作事始、右の儀式、貴賤令見物、十四日、丑刻、駿府町火事、本町米町通町等也、十五日、未刻、大御所駿府歸城し給、十七日、立春、戌亥兩刻雨降、中國西國大名、多以駿府にて越年也、此冬、信濃國諏訪湖不氷の間、水上人馬不通、廿五日雨降、廿八日、又雨降、今年は夏秋冬雨しげき事、近年無比類、寒中も甚暖氣、偏に如春、三川國水野日向守後藤德乘丸壺抹茶被取、價判金二百枚也、此外北礪墨跡、釜已下數寄道具多以被取、何も一色に付直或は判金廿枚或は三十枚と云々、此年、五穀不熟、

當代記卷八

慶長十八癸丑年正月大庚申日

年中從諸國進物儀、慶長十三戊申年之所に書載

之、大略毎年此通也、中國四國西國大名、於駿府越年、三日に立駿河江戶へ被下、元日二日は駿府は雨降、他國は不降、五日、大御所山鷹遣給、勢に不殘可出之由日間、皆以所出也、六日、終日雨、從元日此日迄甚寒、七日、今日大御所爲鷹野田中へ出給、從其遠州へ可有鷹野之由曰しか、暖氣故無鳥延引也、八日、山口但馬於江戶將軍家より改易也、故は古石川長門守女但馬男に嫁、從二三箇年已前長門存生之時、無斯儀之由曰、長門男被押籠處、依娶之如此也、十一日より翌朝迄大雨水出、江戶は災也、十五日山口但馬就目安之儀、大久保相摸守腹立甚、相摸息男兩人、翌日出仕、十七日雨、終夜同雨、十八日二月節、十九日晚より廿日雨、廿二日大水、廿五日、申刻播磨之三左衛門尉死去、昨日從辰刻俄發病、吐血中風と云々、二月小朔庚寅日、去年冬從高麗駿府へ進上の大鷹羽十一

此比至九州參着、何も若鷹也、二日大坂火事出來、三の丸長屋米石多以失火、風横に火を吹切て、自餘の丸へ不移、羽三左死去付、從江戶駿府に爲使士井大炊參上、播磨へは山岡五郎作爲使被指遣、十八日九日大雨、翌朝大水、從去年于今雨降事重、重、青山播磨守元藤右衛門尉死去、是は將軍幼少之時、悉皆の年寄也、三月大朔己日、今日土用に入、於大坂小出播磨守死去、五日、駿府於三九、常陸主能し給、五番常陸主、翁脇の能末の祝言觀世大夫仕之、今春大夫二番仕、合九番也、此觀世大夫は慶長十五年戊蒙勸當去年召直、駿府に祇候、廿八日より九日迄兩日、駿府又能有、常陸主四番、今春六番、少進四番、觀世三番、梅若一番、合兩日十八番、碁打の本因坊依召院參、碁之儀色色有院宣、中にも仙人の打し碁作物、直に院作有て、本因被爲見、此時院宣に、碁に有別知と云事は、三家祿と云書物に有之、酒に別腸有と云不知と也、

和云、是は賓退の祿と云書物に有之と承、此書物さかの妙知院に有之、又月合の比、利玄依召院參、是へも右之作物同前なり、則利玄仕之、奇特之由有宣下、利玄院中象碁を被遊、本因利玄依爲出家也、何も法花宗也、さて右之兩人何も駿府へ下、院は中象碁天下と思召、四月小朔癸丑日、二日、上總主從江戶駿府へ來儀、暫逗留、五日六日、駿府能有、初日少進本願寺門徒、下妻黨也、今春大夫立合、後日今春息子兩人并梅若大夫、又藤堂和泉小姓等能つかまつり、此比富田信濃守今伊豫國住、從坂崎對馬守知行在、今石見國、在江戶、日比彼人不行儀、又去庚子年亂逆之砌已來之義を以、目安將軍へ令言上、依之青山圖書爲使、者駿府へ文カ被得父意、則飛脚を以信濃守を召に被遣、肥後國古主計跡目、家中有公事、家老之もの共、從去月駿河在府、越前國家中、去年之云事再發歟、家老者從去月令在江戶、